
夢も希望も絶望すらない現実（デッドエンド）

らいなあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢も希望も絶望すらない現実^{デジタル}

【Nコード】

N3186U

【作者名】

らいなあ

【あらすじ】

俺は過去にただならぬ事を体験したとは言え、普通の人間だと思っていた。しかしそれは、人を喰らい同族を増やすゾンビの発生によって脆くも崩れ去る。

親友と家族、生き残っていく上で出会った仲間。そいつらを守るためだったら、俺は悪逆非道の化け物にだってなってる。

拳と武器と銃器を駆使し、群がるゾンビと変異種を薙ぎ倒す。

生き残ってやる。絶対に！ みんなで！！

登場人物のマネはしないでください。ほぼ主人公視点です。
現在、一話から加筆修正しています。

第1話 世界が終わる日……の前の日！（前書き）

おはにちは！らいなあです！

今作は僕がハマりにハマったゾンビものです！通算3作目！

文章の起伏が激しいかもしれませんがストーリーに変化は無いはず
です。今回の1話目は普通の日常回！

ギャグありシリアスありのサバイバルホラーという初挑戦のジャン
ルなんです、気合で頑張ってみます！

これからも記憶の片隅にらいなあと言つ名前を覚えていただければ
幸いです！

それでは1話目をどうぞ！

第1話 世界が終わる日……の前の日！

俺はある日現実を知った。

何でも出来ると思っていた。何でも手に入ると思っていた。全力で頑張れば全てが出来るし全てが手に入ると思っていた。だが、その幻想は脆くも崩れ去った。

まるで某上条さんの幻 殺し（イマ ンブレイカー）を食らったかのように。

俺は前原良祐^{まきはらりょうすけ}。

何も出来ない、何も手に入れることの出来ない、誰も救うことの出来ないただの高校生だ。

『夢も希望も絶望すらない現実^{デッドエンド}』

ある朝の日。俺は目を覚ました。眠たい眼をこすりながら体を起こし、顔を洗うためベッドから下りる。フラフラとした足取りで部屋の出入り口まで行く。ドアノブに手を掛け、引き戸の扉を開けた瞬間、何か途轍^{とてつ}も無く嫌な予感がした。

「おっはよ〜」

「へぐしっ!?!」

予感的中。扉を開けて待っていたのは、下から来る女性の頭突きだった。何の警戒もしてなかった俺は当然の如く食らってしまう。

顎にクリーンヒット。視界がブラックアウトしそうだったが何とか耐え、完全に目が覚めた眼光で女性を睨む。正しくいつも通りの朝だった。

「何すんだよっ！馬鹿か!？」

「馬鹿とは酷いわねえ。良ちゃんの大好きなお姉さんがこうして毎朝スキンシップに来てあげてるのに」

「誰が大好きかつ!!?」

「えっ?大好きだ?」

「耳鼻科行つて来い!!」

栗色の髪を伸ばすだけ伸ばして纏めもしていない彼女は俺の姉貴だ。姉貴はピンク色のTシャツを着ているが下は下着しか着けていない。だからまあ……その………ピンク色の逆三角形が見えている。俺は慣れたけどな。

姉貴は悪気も何も無い表情で俺を見ていた。その表情が俺のイライラを掻き立てまくっている。

そう、これが前原一家　　というより俺の日常だ。とてつもなく不毛なこの会話を毎朝毎朝するのがだ。少しの楽しみと大半のムカつきが俺の思考を占領する中、姉貴のすました表情が俺の怒りを助長させる。故に悪態の一つもつきたくなるものだ。例えばそれが相手の傷を抉つても。

つたく、俺と遊んでいる暇があったら彼氏んところでも行ってる。俺がそう言おうとした瞬間、

「つたく、俺と……ふがつ!？」

素早い素早すぎる!こんな動き見たこと無い!!—ぐらいの速さで姉貴は俺の口を塞ぐ。

「良ちゃん？それは言っちゃ駄・目…………分かった？」

「（コクコクコクコクコク！）」

俺は首が千切れるんじゃないかというほど勢い良く首を縦に振る。だつてやべえよ？姉貴の顔めつさ怖えよ？アニメとか漫画じゃないのに顔の半分が真つ暗で見えないぜ？

下手なこと言ったら食い殺される！ここは頷いとくのが懸命だ。

「よろしい」

良好な俺の態度に、姉貴はそう言つて開放してくれた。なんていう奴だ！前原さん家の姉貴は化け物か！！？（赤い彗星かつ！！）……………一人でボケて一人でつつこんでしまった。ちよつと恥ずかしかつたりする。

しかし、何故姉貴は俺のモノローグが分かつたんだろう？俺がそう聞く前に、

「お姉さんは良ちゃんのことなら何でも分かるのだ！」

「……………」

……………だそうだ。底知れず恐ろしい奴だ。

俺は極力覚られないようなことを考えつつ、一階の洗面所に行こうとする。しかしまたしても、

「よゝし！それじゃ、良ちゃんの筆筒の中にある服の下の本みたいなことしようよ」

「何故それをつー！！」

「言つたでしょ？良ちゃんのことなら何でも分かるのだ！」

高速で振り返り目を見開く。

まさかまさかまさかまさかまさか！アレがばれただど！？いや
まてまてまて。嘘だ。当てずっぽうに違いない。落ち着け俺。冷静
になれ俺。姉貴の手の上で踊ってたまるかっ！それにあれには服を
捲っただけじゃ分らない仕掛けが……

「凄いね！あれって上げ底ってやつ？服の下に板敷いてその下に隠
すなんて！！」

ばあああれええエとおおおるうううっ！！

完っっっ壁にバレとる！！アレの隠し場所バレとる！！バ力なっ
っ！！

「ほんとだよ」

追い討ちかけられたあ！！？

「合計12冊。頑張って集めたね」

本数までバレとるっ！アレが見つかってしまったああああああ
……。

ん？アレって何かって？決まっているだろう！分からないのか？
「アレ」。ああ？分からない？そんなもんっ！！

EROHON

に決まっているだろ！つて、俺は何を宣言してるんだ！！？
俺は絶望と恥ずかしさからorz状態になる。

「もう終わりだ……世界の終わりだ……」

「それより良ちゃん。あの本みたいなことしょ〜」
「ん？あの本みたいなことって……………！！！」

俺は即行で顔を上げ後ずさる。そうしても姉貴はどんどん距離を詰めてくる。

「やめろ…………やめるんだ…………」

「ぬふふふ」

「正気に戻るんだ」

「お姉さんは正気だよ〜？」

「嘘だつつつつつつ！！！」

「ひらしネタは駄目だよ〜」

さりげなくツツコミを入れる優しさはあるんだ…………。

それよりもお姉さんの顔が怖い。笑っているのに笑ってない。あれは獲物を狩るハンターの眼だ。

俺はついに壁際まで追い込まれてしまった。背中に壁の感触がする。しかし姉貴はなおも歩みを止めない。

「ぬふふ」

「来るな…………来るんじゃない…………！！」

「いゝただ〜きま〜す」

「来るなあああああ！！！」

「え〜い」

「ぎゃあああああ！！おかああああさあああああんつつつつ！！！」

その後、なんとか事態になるのは防いだが、俺のEROHONの居場所を突き止められた。

俺は掛け替えの無いものを失った。まあ別にアレは俺のじゃない

しいいんだけどね。友達クラスメイトから無理やり押し付けられたやつだし。

1時間後。朝の惨劇を回避した俺は、洗面所にいつて顔洗ったり朝食を食ったりした後、少しの休憩をとってから制服に着替え、今は学校の道のりを歩いている。横には上機嫌でスキップしながら歩く、姉貴の姿もあった。ああそうそう。姉貴の名前言ってなかったな。

俺の姉貴 名前は前原美鈴まえはらみすず。彼女は俺の右隣をスキップしているが、その姿はともスキップには向かない姿をしている。

紺色のスーツを着て、さっきは着けてなかった青色のフレームの眼鏡をつけていた。栗色の髪も後ろで纏めてポニーテールにして、ハイヒールを履き、書類が入るバッグを右肩に掛けている。

この姿で分かった人もいるかもしれないが、俺の姉貴の職業は教師。OLかと思った？

俺が通う東海林市立林名高校しゅうかいりんしりつはやしなこうこうの科学教師兼保険医。ほとんど保健室に居るから養護教師じゃないかと思うが、一応科学教師だ。

「スキップすんなよ恥ずかしい」

「え〜」

「え〜じゃないえ〜じゃ」

「じゃあ、お〜」

「何に驚いた!?!」

「そ、そりゃ……………」

「何故俺の下半身を顔を赤らめて見る!見たことねえだろ!?!ていつか見るな!?!」

「見たことはあるよ…………良ちゃんが寝てるときに」

「何勝手に部屋入ってんだよ！勝手に服を脱がすな！！このド変態がっ！！」

そこまで言うと、姉貴は俯いて肩を震わせてしまった。
やべっ言い過ぎたか？と思っただが、

「……………いい」

「はっ？」

「いいっ！！」

「はあああああああ？」

姉貴は唐突に顔を上げると、頬に両手をついて光悦の表情をし始めた。

「血の繋がった弟にド変態と罵られてお姉さん嬉しい！！」（早口）
「……………」

何を言ってるんだこいつは…………？俺は軽蔑の視線を送ってみる。

「ああ…………良ちゃんが軽蔑と侮蔑とともに冷ややかな視線を送ってくるうううう〜」（早口）

「いや…………軽蔑と侮蔑は一緒だろ」

「お姉さん感じちゃう〜」（早口）

「……………」

朝の、ましてや通勤登校時間で人通りも少くないのに、何言っ
てんだこいつ？

関わらないでおこう。俺は即座にそう決め、学校に走って行った。

昼休み。いつも通り姉貴と昼飯を食いに姉貴の居る保健室に行く、そこには先客がいたようだ。

「冬紀。理奈。来てたのか」

「良祐がそうそうにどっか行ったからね。ここに来るだろうし」

なんか爽やかな雰囲気をかもし出すあいつは、宮下冬紀。

顔はそこそこイケメンで剣道部所属。かなりの腕前と聞いたことがある。冬紀は俺と同じクラスで親友だ。雰囲気的に文武両道のスーパーマンかと思いきや、実は勉強は下の上。剣道を極めるあまり、勉強をし忘れたという天然なところもある。

容姿は黒髪を眼に掛からないところまで伸ばしている。剣道の邪魔にならない程度の長さだ。もみ上げは邪魔との事で極力短い。性格は見た目通り爽やか。

そんな冬紀はニッコリ笑いながら俺を見ている。俺は嘆息しつつ呟く。

「次の授業の手伝いさせられてたんだよ」

「あ、そついやあんた日直だっけ」

「じゃなきゃ手伝いなんかしねーよ」

「ははっ、言ってる」

今話していた少女は、緋達理奈。

俺たちのクラスじゃ結構有名で、顔は良いけど口調がな……と噂されている。部活動には入ってないが、運動神経は抜群に良い。色んな部活から引っ張りだこだそうだ。

理奈も俺と冬紀と同じクラス。勉強は中の中。赤みがかった髪を肩口まで切った髪型に、前髪の右側をわけているペアピンが特徴的だ。性格は若干威圧系。

理奈はこれから飯だつてのにカロリーメイト（チョコレート味）をむさぼっている。

「カロリーメイト食って飯食えんのか？」

「馬鹿言うなよ。アタシを誰だと思っているんだ？」

俺は間を空けることなく即答した。

「ルールブレイカー 緋色の反則王」

まさかの冬紀とハモった。理奈は赤みがかった髪を逆立て立ち上がる。

「アタシをその名前で呼ぶな！！」

物凄く髪が逆立っている。怒髪天を突くつて本当だったんだな。

まあともかく、「ルールブレイカー 緋色の反則王」とは、理奈が体育祭やテストなどなどの事に対し、反則ギリギリか反則で全てが決まることから自然と名づけられた。彼女はこの名前を嫌っているらしい。

理奈は次から次へと抗議の声を上げる。

「反則なんかして……はくないけど！ちゃんとやろうとしたらそうなたただけだつて！！」

「ちゃんとやって反則ギリギリって駄目じゃん」

「言つな良祐。これが彼女のスペックなんだつて」

俺、冬紀が問題点を指摘すると、理奈は急に勢いをなくした。

「た、たしかにそうかもしれないけど……!!」

「……けど?」

しかし、理奈は切り札があると言わんばかりに勢いを取り戻した。

「アタシは女だ!せめて姫と呼んでくれ!!」

瞬間、

「……」

痛いほどの静寂が場を支配する。その突然の空気に、理奈はおどおどして俯いた。

この後数分間、空気が変わることは無かった。

「……で姉貴は?」

ようやく再始動した俺たちは、さっきの話題を忘れて別の話題に持っていこうとする。俺はこの場に居るであろう人物が居ないことに気づき、二人に所在を聞いてみる。

「ト、トイ……しだっ……て」

「僕もそう聞いている」

二人は矢継ぎ早に行方を語ってくれた。

理奈は泣きそうな様子で俯いている。さすがに俺と冬紀はバツが悪くなり、明後日の方向を向いていた。

そう理奈の弱点の一つだ。彼女は虐めには強いが、無言の空気など自分では対処できない事態に陥った時、最近の内閣の支持率みたいに涙が簡単に落ちてしまうのだ。

口調があれだから理奈は有る意味残念なのだが、泣いている彼女は最高だ。萌える。俺の支持率もガンガン落ちている気がするが、んなこたあどうでもいい。

見れば冬紀も同じ考えなのか、萌えながらも葛藤していた。

すると、俺の後ろから扉が開く音がする。あら〜とか言ってるから姉貴が帰ってきたようだ。

「……………!!!」

姉貴は泣きかけている理奈を見た瞬間、少女漫画の驚愕した人みたいな顔で固まってしまった。

あ、姉貴？と呼びかけてみると、表情を戻し俺と冬紀に光悦の表情で迫ってくる。

「あなた達……………」

「な、なんだよ……………」

「な、なんでしよう……………」

後ろに仰け反りながら俺たち二人は姉貴に聞く。姉貴は頬を真っ赤に染め今日一番の光悦の顔で言った。

「ついに理奈ちゃんをパキューンしたの!!!？」

「してねえよ!!!」

「してません!!!」

「されてません!!!」

理奈まで加わって大八モリ大会だった。

「なぐんだ残念」

「残念じゃねえよ残念じゃ」

事態を説明し終えた俺たちに、姉貴が言った最初の言葉がそれだった。

第1話 世界が終わる日……の前の日！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回から物語は急展開を見せます！ゾンビの出現と共に地獄絵図が
繰り広げる町で主人公の1団は生き残ることが出来るのか？

次回の前書きにでも主人公たちの紹介でも書きましようかね。では
次回、また会いましょう！

第2話 そろって日常は壊された(前書き)

おはにちはー！らいなあです！

これからちよこちよここと紹介を書かせていただきます。手始めに主人公からです。書き方は僕の尊敬する作者の書き方を真似させていただきます。(勝手に申し訳ありません！)

【前原 良祐】

年齢：16歳

職業：高校生(二年)

誕生：9月27日

知識

体力

攻撃性

俊敏性

統率力

機転性

ギャグ

主人公。役割は主にボケ。ゲームやアニメを良く見ているがオタクではない。一人称は俺。

容姿は栗色の髪を眼にちよつと掛かるくらいに伸ばし、凜々しい顔立ちをしている。詰襟の学生服を着崩し、右腕に耐ショックの腕時計をしている。

東海林市立林名高校（とうかいりんしりつはやしなこうこう）の生徒。二年A組。

両親共に健在。父親は世界中を飛び回って遺跡を研究する学者で現在行方知れず。母親は専業主婦。

小学校のときは明るく、クラスの人気者的存在。しかし中学校のと

きに何かあったのか、今はあまり目立たない存在。

過去の事柄をあまり話そうとせず、少々ひねくれた性格はそのことからきていると思われる。

母親を名前で呼ぶ変わった少年で、1人いる姉は姉貴と呼んでいる。

頭の回転が速く、成績も上の下。趣味はゲームとアニメ観賞。

成り行きからみんなに指示を出すリーダー的立場になる。

第2話 そうつして日常は壊された

朝。俺、前原良祐は、いつもの通学路を走りながら右腕につけた腕時計を見る。

8時24分。

「くそつ。ギリギリ間に合うか？」

俺は焦りながらも長距離走れるペースで走り続けた。

8時24分36秒。ここから歩きで20分かかるが、走れば間に合うかもしれない。体力が持てばの話だが。俺は運動は苦手でもない。どっちかといえば得意なほうだと思う。そんな俺でもいけるかどうか。

「円さんも起こしてくれよな……！」

円さんとは母親である。俺と姉貴の母親で専業主婦。

昔は色々していたらしいが、今は世界中飛び回っている親父の仕送りと姉貴の給料で十分足りるから、円さんが働かなくてもいいのだ。何故俺が円さんを母さんと呼ばないのかというと、……ただ照れくさいだけだ。色々あったんだよ色々。

今日は姉貴が会議で朝早くからいないから、円さんに起こしてもらおうかと思っただけだ。

「あら？まだ時間じゃ……あらら？時計が30分ほど遅れてたみたい」

だそうだ。某上条さんじゃないけど不幸だあああああ……！

俺は間に合うか疑問に思い、ちよつと早く走る。

「そーだ！近道……？」

と、学校へ近道できる人通りが皆無の薄暗いわき道に入ると、一瞬空気が異様なものになる。

俺は不審に思いつつも、わき道を走ってすり抜けようとする。しかし、

「なんだ、あれ？」

視線をわき道の奥に向けると、変な格好の人が立っていた。

見た目から推測するに30代の女。オレンジ色の……スーツ？を着て、首元に「赤い布」を巻いている。顔は見えないが、所々露出している手や足の肌の質から見て、年齢は間違っていないはず。

彼女は有り得ないほどの内股で、両腕を無気力に垂れさせている。その左手には、白いバッグを持っていた。

「暑さで頂垂れてる？それとも酒か？」

俺は少しビビッたが、安全を確認すると女の脇を通り抜ける。女は反応して俺を捕まえようと両腕を伸ばしたが、動きが鈍くて簡単に避けられた。彼氏にフラれて男でも探してんのか？と思って、その女に振り向かずに行った。

「俺は高校生だから相手にすんな〜」

まだ余力の残っている俺は、そのままスピードを上げる。

ただ少し疑問もある。俺が通り抜けようとした時、あの女の周りで変な臭いがした。顔は良く見えなかったが、皮膚が爛れた感じがあったこと。あの不自然な歩き方のこと。

俺は少し頭をめぐらせたが、疲労のせいでうまく考えられない。
無駄なことはやめて早く急ぐ。

「間に合え〜」

息も絶え絶えで、俺は学校に向かった。

『キーンコーンカーンコーン』

古い音だな。新しいの買えよ。そう思いながら、俺は少々不機嫌に左手で頬杖をついていた。

昼休み。開始と同時にクラスみんながバラける。購買に飯を買いに行く奴。食堂に飯を食いに行く奴。弁当を持ってきた奴。人それぞれだが俺は弁当派だ。それに今動きたくないし。

俺が体勢を変えることなくクラスの方を見ていると、後ろから二つの声が聞こえる。

「おやおやこれは……朝大遅刻してきた良氏じょうしではないか」

「からかうのやめなって理奈」

俺が視線だけをずらすと、そこには弁当を持った冬紀ふゆきと理奈りながいた。

そう、俺は結局間に合わなかった。走りすぎて途中で止まってしまったのだ。そのせいで歩くスピードは落ちるわ、喉渇くわ最悪だったぜ。

「なんだバカめっ」

俺がある意味でも口癖のその言葉を発すると、理奈が突っかかってきた。

「それはお前だろうババババカめっ」

今のはさすがにカチンときたよ〜？

俺は立ち上がり理奈を睨み付ける。理奈も睨み返してくるが、俺には効かないぜ。睨み付けられるのは慣れてるからな。……………ちよつと悲しくなった。

「やる気？」

「駄目だって良祐も理奈も」

冬紀が仲裁に入ろうとするが全く変化なし。俺はたった一言告げた。

「お前は、俺には、勝てない」

「なんだとお……………！」

良い感じに理奈が怒ってきてる。俺は睨み付けている理奈の右側に回り、耳に息を吹きかけた。すると、

「ひにゃあああああああ……………」

と言って、理奈は床に崩れ落ちた。俺は左手を制服のポケットに入れると、カバンの中から弁当を取り出して理奈に背を向け言った。

「また俺の勝ちだな」

俺はそのまま教室の外に向けて歩き出す。後ろで卑怯だぞ〜！！とか言っていたが、戦略と言って欲しいね。

「……………」

飯を食った俺は、授業をボイコットして屋上で寝ている。屋上は立ち入り禁止なんだけどね
立ち入り禁止とは書いてあるけど鍵ぐらひは閉めるよ、とか思っ
てみたり。

「眠い……」

じゃあ寝ればいいじゃん。と言われても寝れないわけがある。一度寝たら何時起きるか分からないだろ！
というのは冗談だ。すぐに教室に戻るためだ。少し気になることがあって屋上に来た。俺は立ち上がり、数歩歩いて柵に手をかけた。遠くの町のほうに視線を向ける。

「騒がしいな……」

町の方がほんの少しうるさい。本当に小さい音なので、屋内じゃ聞こえないかもしれない。

「何もなければ……」

良いんだが、と言おうとした瞬間、

「なんだっ!!!?」

視線をさらに遠くの山に移した時、そこにはとてつもない量の爆煙が見えた。何かが発火したのだろうか？さすがにこれだと屋内でも異変に気づくかもしれない。

俺は視線を落として帰ろうとする。その途中で、学校近くの商店街が眼に入った。

「……………!!!?」

俺は言葉を失う。商店街にいたのは大量の人と、大量の化け物だったからだ。その人の形をした化け物は、人間にゆっくりと迫り、そして捕まえて　　噛み付いた。尋常じゃない顎の力で、噛み付いた腕を食い干切りそうなほど強く噛んでいる。大量の鮮血が舞い、薄っすらとだが、白い　　骨みたいなものまで見える（遠すぎてよく分からないが）。

噛まれた人は俺の耳に届くほどの奇声を上げ、数秒すると突然途切れる。その人をよく見ると、大量の化け物に囲まれて、体中のいたる所を同じように噛まれていた。そしてきっかり30秒で、その人は不自然に起き上がった。

いや、人じゃない　　化け物だ。噛まれた人は化け物の仲間になり、同じように人を襲う。俺はあれを知っている。あれは、

「……………ゾンビだ」

あるいは「奴ら」。

俺は目を見開きながらも、冷静に事態を考えていた。

俺の頭に入っている情報が確かなら、ここもいずれ危険になる。

最悪なことに、町は屋上からじゃないと見えない。学校の周りに植えた木々が結構な高さで、ここ林名高校はやしなこうこうは1〜5階までがほとんど木で視界が遮られる。つまり、この事態を知っているのはせいぜい俺だけだ。

気づけば、商店街の生きている人間が、最初は300人ぐらいなのに、もう100人を切っている。それに反比例して、ゾンビの数は100程度から300ぐらいに増えていた。

しかも生きている人間（ここでは生存者と仮定する）は学校を指しているのか、どんどんこっちに来ている。

「おいおいマジかよ……！」

生存者がこっちにきたらゾンビも来るわけで、タイムリミット制限時間がどんどん無くなる。

「くそっ……！」

死ぬなら死ぬで俺たちを巻き込まないでくれっ……！！

そう思いつつも、俺は下に下りる階段向かって駆け出した。

「二年の教室は3階か……！」

全力疾走で走る俺は、一目散に俺のクラスへ走っている。理奈と冬紀にこの事態を知らせなければ。

時々人とすれ違ふかと思っただが、授業中のせいで誰もいない。俺は好都合と階段を一目散に駆け下りる。

「3階にはついたが……！」

ようやく3階にたどり着いたが、俺のクラスは中程にあるのでまだ走らなければならない。

俺はスピードを緩めることなく右に曲がり、俺のクラスへ向かう。視界をあげると、俺のクラスの札が見えた。あと、もう少し。眼を外に向けて、まだゾンビが来てないのを確認し、さらにスピードを上げる。

「つい……た……」

俺のクラスの手前で急ブレーキをかけ、扉の前でピタシに止まる。どうやら教卓側の扉じゃなく、ロッカー側の扉の前のような。俺は休憩するのも忘れ、一気に俺のクラスの扉を開けた。バアン！という大きな音とともに扉が開き、クラス全員の視線が俺に注がれる。

俺は臆することなく、窓側の一番後ろにいた冬紀と、丁度真ん中ぐらいにいた理奈を視界に捕らえ、歩き出す。

「おい前原っ！授業妨害か？」

俺の雰囲気を感じ取り、数学教師が俺に近づいてくる。俺はガン無視で理奈の隣まで行く。

「な、なんだ良ウチっ？」

俺の剣幕に理奈も圧倒されているが、今そんなことを気にしている場合ではない。

俺は理奈の右手を掴み立ち上がらせた。

「なんだよ！おい、いきなり何を……！」
「説明は後だっ！死にたくなきゃ俺について来いっ！！」
「……………！」

いきなり怒鳴った俺に、理奈は二の言葉が出なくなる。
事情を説明するだけの時間が惜しいので、俺は理奈の手を引っ張って冬紀の元へ向かう。

「冬紀お前もだ。行くぞ」

簡潔にそれだけを述べて、冬紀の右手を残った左手で掴んだ。しかし冬紀はその場を動こうとせず、代わりに口を開いた。

「僕は行けない」

「どうして!?!」

「理由も無しに授業を抜けることは出来ない」

冬紀は凜とした態度で俺を見ている。

「理由ならある！だから行くぞ！」

「ならその理由を教えてくれ」

「そんな時間は……！」

無いと言う前に、冬紀は俺を睨み付けてきた。その眼差しは冷たく、一瞬言葉が出なくなってしまう。

俺は熱くなった頭を一回落着かせ、しょうがないといった様子で説明を始めた。

「化け物が出た」

「化け……物？」

「ああ。多分ゾンビだ」
「良、頭大丈夫か？」

冬紀もこの言葉は想定してなかったのかポカンとしている。理奈は俺の頭まで疑ってやがるし。まあしょうがないけどな。クラスのみんなも大爆笑してやがる。俺にはそれにいちいち構ってやれるほどの余裕はないのでガン無視だ。

とそこで、俺は窓の外に異様な雰囲気を感じ、窓の外に視線を向ける。

「来た……」

「えっ？」

小さく呟く俺を見てから、冬紀と理奈は視線を窓の外に向けた。しかしそこには校門があるだけで何もいない。俺はゆっくりと、クラスのみんなに聞こえる音量で言った。

「ゾンビだ……！」

次の瞬間、校門の陰から、生きている人間1人とゾンビが10数体流れ込んでくる。だがみんなは遠くて良く見えないのか、ゾンビを動きがおかしな人間のように見ている。

あれ普通の人だろ？クラスのの中からそんな声が上がった時、クラスのみんなどは息を呑んだ。

生きている人間をゾンビが食っている様を目撃してしまっただ。

首に噛み付き、動脈を噛み千切り、大量の血液が数メートルぐらい空を飛んで、それでも終わらずに足や腹、顔などその人が見えな

くなるぐらいまでゾンビが覆いかぶさって、その人が死んでも肉に噛み付き続ける。そしてまたきっかり30秒で噛み付かれた人は起き上がる。……ゾンビとして。

無音が教室を支配して数十秒経った時、ようやく誰か1人が動きをはじめた。悲鳴という形で。

「……………」

もう何を言ってるのかも分からないが、その悲鳴でクラスのみんなが動きを開始する。

「何だよアレ!!」

「ゾンビか!!?」

「殺される殺される殺される!!」

「食われるじゃねえ!!?」

「どっちでもいいよどっちでも!!」

「死にたくないよ!!」

「逃げるぞ!!」

「うわああああああ!!」

「落ち着けみんな!!」

「落ち着けるわけねえだろ!!?」

大パニック。さながら地獄絵図だな。俺は一度見ているからまだ落ち着けている。冬紀と理奈も信じられないものを見た様子で立ち尽くしていた。俺は冬紀と理奈に言った。

「俺の言葉は信じなくてもいいから俺だけは信じる」

「……………」

放心状態だった理奈と冬紀も、その言葉で正気を取り戻し頷く。

「わかった。良祐に従おう」

「アタシもしょうがないから従うよ。疑って悪かったな」

「ありがとう」

俺は二人の手を離し、右ポケットからケータイを取り出す。

「これからどうすんだ？」

理奈は窓の外を見ながら俺に聞いてくる。

「まず武器になるものを用具室に取りに行こう。階段のすぐ近くだし。その後で姉貴に合流して保健室で作戦会議だ」

「了解」

「わかった」

俺はケータイの時刻を確認して、アドレス帳からあ行の一番上、姉貴を選択する。

1時37分。姉貴は保健室に居るはずだ。

コール音が数回鳴ってようやく繋がった。

「姉貴！無事か！！？」

「おおおお姉さんは！ア、アネーキーじゃないです！！」

あんの馬鹿。パニックになりすぎて意味不明なこと言ってやがる。

「馬鹿なこと言ってんじゃねえ！！それより今保健室か！？」

「はは、はい！！」

「なら保健室の鍵を全部閉める！！俺たちが行くまで絶対に開けるんじゃねえ！！」

「わ、わかりましたあー!!」

聞き届けてから通話終了のボタンを乱暴に押す。だいたい何だよアネーキーって。ぐちぐち言いながら頭をフル回転させて保健室に行った後を考える。とその前に……。

「姉貴はやっぱり保健室だ。保健室に行こう」

二人は頷いて俺たちは走り出す。

そうして俺たちの日常は壊された。掛け替えの無い安息と共に……。

第2話 そうして日常は壊された（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回も紹介を書きたいと思えます。

御意見御感想お待ちしております！

第3話 武器を手に入れて・・・えぐっと撲殺だあ！（前書き）

おはにちは！らいなあです！
書くことありません！紹介に移ります！

【緋達ひたち 理奈りな】

年齢：17歳

職業：高校生（二年）

誕生：6月3日

知識
体力
攻撃性
俊敏性
統率力
機転性
ギャグ

良祐の友人。役割はポケ時々ツツコミ。一人称はアタシ。
容姿は赤みがかった髪を肩口で切った髪型に、前髪の右側をわけて
いるヘアピンが特徴的。セーラータイプの制服をきっちり着ている。
可愛らしい顔立ちでモテそうだが、男らしい口調のせいで色々損し
ている。

東海林市立林名高校の生徒。二年A組。

天才的な運動神経の持ち主で、体を使うことに関しては神がかって
いる。

両親は理奈が5歳のときに交通事故で他界。それから親戚に引き取
られ、現在は1人暮らしをしている。

亡くなった両親の記憶を大事にしており、最近両親との記憶が薄れ

ていくことに悲しみを感じている。

口調からがさつな印象があるが、意外としつかりしていて、家事全般が出来る。性格は若干威圧的だが優しさを持っていて、手に負えない空気が流れると泣きそうになるなど、可愛い一面もある。

成績は中の中。趣味はスポーツと漫画観賞。

主人公の集団のポケ要員&ムードメーカー。持ち前の運動神経を用いて前線に立つ。

第3話 武器を手に入れて・・・え〜っと撲殺だあ！

「用具室はやっぱ鍵掛かってるか・・・」

「まあ当然だよな」

「そんなもん壊しちまえ〜！」

用具室の前までやってきた俺たちは鍵が掛かった扉を見て言い合っている。

「駄目だつて壊したら」

「確かに俺も壊すのには反対だな」

「じゃあどうすんだよ？」

「だけど・・・それは非常事態じゃない時の話だ」

俺は扉を思いつきり蹴る。すると簡単に鍵が壊れ扉が吹っ飛んだ。

「えっ？」

「おお〜男だな！」

冬紀と理奈が別々の反応を示す中、俺は用具室へと足を踏み入れた。電気をつけて辺りを見回す。

用具室の中は掃除用具やその他備品、木材やハードル、高飛びの棒など多岐にわたる物品があった。

俺はすぐに目に付いた金属バットを手に取り軽く素振りしてみる。

「ふんっ！・・・ふんっ！・・・いいなこれ」

すぐに金属バットの魅力にハマリ俺の装備が決定する。

なるほど、某学園黙示録とかでもゾンビの襲撃に金属バットが重宝

する理由がなんとなく分かった。これほど使いやすく威力のある物はなかなかないな。俺の装備けつてくい。

後ろに振り返ると冬紀が申し訳無さそうに木材あたりを漁っている。さらに視線を右に移すと理奈が何かを持っている。

それは柄の長い鍛冶鍛錬とかに使われるハンマーだった。

「お前・・・それ・・・」

何でそんなものかと思いつながら理奈に話しかけると、理奈はニコニコしながら簡潔に話す。

「鍵ついでる棚の中にあつた」

「・・・・・・・・」

良く見ると理奈の後ろの棚が半壊していた。ていうか学校側も何に使うつもりだったんだ？そして理奈はどうやって鍵を・・・気にしないでおこう。

これで俺と理奈は決まった。後は冬紀なんだが・・・と思ったとき冬紀がいた木材のほうからバキッっていう音がした。

俺と理奈が視線を冬紀に向けると木材を叩き折っている冬紀の姿があつた。

「お前も何だかんだ言いながら乗り気じゃねえか」

「僕だってまだ死にたくはないからね」

「見直したぜ冬紀！」

冬紀は丁度いい長さに折った木材を構える。どうやらあいつは得意な剣道で戦うようだ。

こうして俺たちの装備は・・・俺が金属バット、冬紀が木材、理奈がハンマーになった。

とそこで校内放送が流れる。

『キーンコーンカーンコーン』

「「「！！！！！！！！！！」」」

俺たちは校内放送を聞き逃さないように耳に意識をむけた。

『現在校内に多数の不審者が侵入した模様です！！生徒は近くの教師の指示に従って避難して下さい！！！！繰り返します・・・』

「そろそろやばくなってきたな」

「急いだほうが良いかもしれない」

「なら急ぐぞ」

俺たちは無言で頷きあい用具室を飛び出す。

「保健室は5階か！！」

「どうしてこの学校は保健室が5階にあるんだろっ？」

「なんでもいいじゃん」

俺たち三人は一路5階の保健室へ走って向かった。

「「「！！！！！！！！！！」」」

4階へと上がると大量の生徒がこちらに向かってくる。正確には俺たちが今来た階段を目指して全力疾走だ。

「わかつてはいたけど・・・！」

「4階の一年生は全クラスで200人を超えているからね・・・！」
「階段が二つしかないのも問題って事かよ・・・！」

100人近くの人波が一気に階段へ押し寄せてくるから、前に進めないどころか後ろへ押し戻される勢いだ。

俺たちは何とか隙間を縫って波の外に出る。

「押されただけで疲れた・・・」

「しょうがないさ。生きるか死ぬかなんだから・・・」

「ん？おい、あれって・・・！」

突然理奈が生徒たちが逃げてきた方向を指差した。俺と冬紀は視線を指差された方向へ向ける。すると・・・

「あれは・・・！」

「ゾンビか・・・あるいは奴らか。どちらにしろお敵さんだ・・・」

4体ほどのゾンビがこちらに向かって歩いてくる。どいつも服はボロボロで噛まれた場所らしきところは真っ赤に染まっていた。皮膚も爛れていて、いかにも屍です・・・といった風貌だった。

4体とも動きがノロマなのでまだまだ危険ではない。しかし逃げ遅れた生徒が1人ゾンビに襲われそうだ。

俺は視線だけを二人に送ると、二人は全て分かっているとわんばかりに頷いた。

「見捨てられるわけ無いだろ？」

「良だつてすぐに走れるように足に力を入れてんじゃねえか。助けてえんだろ？」

り下ろす。ゾンビの頭に直撃したそれは、理奈ほどの派手さは無いが確実にゾンビを行動不能にした。視線に気づいた冬紀もスマイルで返してくる。

「……理奈のスマイルはいいが冬紀のスマイルはキモイな。イケメンなんてみんな死ねばいいんだ。俺が邪念を込めながら金属バットを構えると、最後のゾンビが俺に襲い掛かってくる。」

俺は冷静に金属バットを突き出すと、ゾンビの顔面に直撃してゾンビは一瞬怯む。

「残念だったな」

(バキューン×3) 野郎……!」

俺はそのまま右に1回転して、遠心力の命ずるまま金属バットをゾンビの側頭部にかました。ゾンビは壁に叩きつけられて崩れ落ちる。まあこんなもんだろ。ゾンビの全滅を確認して俺は呟いた。後ろで
「……と冬紀と理奈が呟いていたが。」

「大丈夫か?」

振り返って生徒を見ると、生徒はひいひいひいとか言って逃げ去るように走っていった。

「んだよ感謝もなしかよ……。」

「しょうがないよ。ゾンビとはいえ元は人間を撲殺したんだから……。」

「気にいらねえな、まったく……。」

俺を慰めるかのごとく言う二人に心で感謝しとこう。ともかく目の前の障害を排除した俺たちはすぐその保健室に向かう。

「姉貴!!!良祐だ!!!開けてくれ!!!」

保健室の扉を軽く叩き姉貴を呼ぶ。扉の向こうから良ちゃん!? 待ってて〜!!と震える声が聞こえた。俺はなんとなく申し訳ない気持ちになり、次に何を言おうか迷う。しかし数秒で諦め、ナチュラル&ラフで行くことにした。もう数秒すると扉が開き、震えてはいるが姉貴の姿が視界に移る。

「あね・・・うおっ!?!」

「良ちゃんっ!!!」

次の瞬間姉貴が抱きついてきて、その表情を見たとき俺は何も言えなくなる。理奈と冬紀は温かく見守ってくれているが、いかんせん恥ずかしい。

俺は姉貴を宥めつつ保健室に入ることにした。続いて冬紀と理奈も入る。理奈が鍵を閉めるのを目視して俺たちは一時の安息を得た。本当に一時だけの・・・な。

「・・・状況を整理しよう」

保健室の真ん中に1メートルぐらいの円形の机を置き、その周りを囲むように置かれた4つの椅子にそれぞれ座った状態から、俺が満を持して口を開く。

「現在、ゾンビ・・・または奴らは校内およびこの町に大量にいると思われる」

次に右隣の冬紀が続く。

「発生は良祐の情報から22分前。なおゾンビに噛まれた者はゾンビになる」

続いて俺の左隣の理奈だ。

「ゾンビの弱点は今んとこ頭。脳を確実に潰せばOKだったよな」

俺の目の前の姉貴はポカンとしている。

「何でみんなこんな口調なの？」

「馬鹿・・・！雰囲気だよ雰囲気！！」

空気を読めよ空気を。まあ姉貴のおかげで雰囲気がなくなったので、丁度いい機会だし口調を元に戻そう。

「ともかくあまり時間も無いしこれからの事を考えよう」

俺がそう言つと冬紀が頷く。

「いずれここにもゾンビの大群が雪崩れ込んでくるだろうしね」

冬紀の言葉に理奈は反抗的な態度を示す。

「え〜！んなもん、ぶつつぶしゃいいじゃねえか！！」

「何言つてんだ馬鹿めっ！」

「馬鹿いうな〜！！」

俺と理奈のいつもの漫才が保健室に響くのを聞いていると、生と死の狭間に居るとはとうてい思えないな。実際は外にうようよゾンビ

がいるってのにな。

その様子を見ていた姉貴は……

「やっぱり二人は付き合って……」

「打つべしっ」

「あうっ」

右手の人差し指で姉貴の額をド突く。変なことを言った罰だ！
笑っていた冬紀はふと思いついたようにケータイを取り出す。

「どうしたの冬紀君？」

ド突かれてた姉貴は視線だけを向けて聞く。

冬紀は苦笑して……

「家族が無事かなと思ひまして……」

と言った。俺は補足として……

「お前って市外から通ってるんだっけ？」

と聞くと冬紀は頷く。

「隣の夏海市から電車だね」

「ふ〜ん」

すると理奈は俯いてしまった。俺と冬紀は自分たちの失言に冷や汗を垂らす。

そついや理奈の家族は早くに他界したんだったなど。理奈の両親は理奈が5歳の時に交通事故で亡くなったと聞いたことがある。それ

から俺たちの間ではある意味禁句になっていたのだ。
俺と冬紀の様子に気づいた理奈は無理やり笑顔を作る。

「あついや……気にしないでくれ」

「……………」

俺はしばらく考え抜いた末に……

「一旦俺の家に行かないか？」

「……………」

という結論をだす。三人とも不思議な顔をしていたが俺は補足を説明していく。

家族と再会するため。その前に色々と準備をするため。それに何より円まじかさんが心配だから。

全てを説明し終えて三人の反応を窺うと、みんなしてしようがないなといった様子で笑う。

「それでいいんじゃないか？他にやることもないだろうし」

「アタシもそれでいいと思う。もういないアタシの家族の事でぐち言ってもしょうがないし、今生きている人の事を考えたほうがいいしな」

「お姉さんもさんせい」

俺は素晴らしい友人＋の同意を受け、これからの詳細なプランを脳内で書き上げる。数分で書き終わった俺は立ち上がり、保健室を漁る。

「何してるの良ちゃん？」

姉貴は俺の行動を不審に思ったのか声をかける。俺は作業を続けながら一言言った。

「使えるもの探し」

すると三人とも立ち上がり同じように漁る。俺は傷薬に包帯、そして棚から果物ナイフを見つけ、真ん中の円形テーブルの上に置く。俺はもう一度周囲を漁りだした。

結局見つかったのは俺が見つけた傷薬、包帯、果物ナイフ、ライター、
ー、東海林市の地図。

理奈が見つけたモップ、箸、鍋、鉄パイプ。

姉貴が見つけた救急箱、スポーツ飲料2本、カロリーメイト5箱。

冬紀が見つけたノートパソコン、木刀、リュック、マッチ。

決定した事項は姉貴がリュックを背負い、俺と理奈と冬紀が前衛で戦うことになった。

「リュックの中に救急箱とスポーツ飲料2本とカロリーメイト2箱とノートパソコンと地図を入れて、俺が傷薬と包帯とライターと果物ナイフ」

「僕が木刀とマッチ」

「アタシが箸と鉄パイプ」

「お姉さんがリュック背負ってモップね」

もちろん鍋は却下。俺は傷薬と包帯を胸の内ポケットに入れ、ライターを左のポケット、果物ナイフを腰のベルトに挿して右手で金属バットを握りこむ。他の三人も各々準備を終え、これで準備は万端

だ。

「じゃ、行くか」

「了解だ」

「おう」

「はい」

俺は扉の近くにゾンビがいないことを確認し、保健室の扉を開けた。足音をたてずに外に出てあたりを見回す。ゾンビがいないことを目視して三人を手招きした。

三人は頷いて保健室を出、扉を閉める。俺たちは元来たルートを辿るように階段を目指した。しかし……

「あれ……どう思う？」

俺がおずおずと視線の先に指を向けると、三人とも分かっていたことだと言わんばかりの視線を送ってくる。

俺たちの視線の先には10を軽く超えるゾンビの大群が歩いてきていた。ならば引き返せばいいと後ろに振り向くと、後ろからも10を超えるゾンビの大群が……。

「ひょっとしてこれ……？ 絶体絶命？」

理奈の言葉がむなしく廊下に響き渡った。

第3話 武器を手に入れて・・・え〜っ と撲殺だあ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回の紹介は宮下冬紀を予定しています。

絶体絶命の主人公たち！はたして無事に脱出できるのか？
それでは次回会いましょう！

第4話 アクション映画も真つ青だな（前書き）

おはにちは！らいなあです！

前書きって何でこんなに書くこと無いんでしょう？

と言うわけで今回の紹介は冬紀です！

【宮下 みやした 冬紀 ふゆき】

年齢：16歳

職業：高校生（二年）

誕生：1月15日

知識

体力

攻撃性

俊敏性

統率力

機転性

ギャグ

良祐の友人。役割は大体ツツコミ。一人称は僕。

容姿は黒髪を眼に掛からないところまで伸ばし、邪魔にならない程度に髪を短くしている。もみ上げは極力短い。顔はそこそこイケメンで爽やかな雰囲気似合う少年に仕上がっている。詰襟の学生服をピシッと着て、愛用の腕時計をしている。

東海林市立林名高校の生徒。二年A組。

性格は爽やかで曲がったことは嫌い。剣道部に所属し、エースになるほどの腕前を持つ。

見た目的に文武両道のスーパーマンかと思うが、実は勉強はあまり出来ない。小さいときから剣道一筋で、剣道を極めるあまり勉強を

し忘れたという天然な一面も持つ。

父親は健在だが、母親は冬紀が中学生のときに亡くなった。父親とは市外でもに住んでいる。電車通学生徒。上に兄が1人と下に妹が2人いる。

厳しい父親で、冬紀に剣道を教えたのは父親。頑固な性格の父親で冬紀と同じく曲がったことが嫌い。

母親の一件で何かがあったらしく、そのせいで父親とはるくに話をしない。

成績は下の上。趣味は剣道。

主人公の集団のまとめ役。貧乏くじを引かされることもしばしば。サブリーダーのようなポジション。

第4話 アクション映画も真つ青だな

保健室を出た俺たちを手厚く出迎えてくれたゾンビたち。俺たち絶体絶命！

「さて、このゾンビの群れどうする？」

「現実逃避してないか？」

「どちらにしろ突破しないと死ぬだけみたいだね」

「お姉さんはまだ死にたくないよ！」

「それはみんな同じだ姉貴」

絶体絶命の状況なのに軽口を叩き合う余裕がある俺たち。なんで余裕なんだろうね？

俺はともかく三人に確認する。

「じゃあルートを変えずに強行突破で」

「「「さんせい」」」

即答だった。それならと両手でバットを持ち、右側に下ろして引きずるように歩き始める。

「突撃い！！！！」

「「了解っ！！！！」」

「はい」

俺を先頭に、右に冬紀、左に理奈、後ろに姉貴という編成で前方のゾンビに突貫を仕掛けた。

走る勢いそのままに、先頭ゾンビの頭目掛けてバットを突き出す。踏ん張ることが出来ないゾンビは後ろに仰け反り、背中から他のゾ

ゾンビを巻き込んで床に倒れた。俺は左に回転して勢いのついたバットで、巻き込まれなかった近くの2体のゾンビの頭を弾き飛ばす。と最初に攻撃したゾンビが体勢を戻して、俺の足に噛み付こうとする。俺は右足を振り上げ、ゾンビの脳天に叩き込む。ゾンビは呻きながら、自分の頭を踏みつけている足を掴もうとするが、その前に俺が思いっきりゾンビの頭を踏み潰した。それきりもう、ゾンビは動くことは無かった。

「身の程を知れ、カスが……!!!」

後ろの姉貴が、悪役みたいだよ良ちゃんって言っていたがガン無視。今はそれどころではないのだ。左右の理奈と冬紀も楽々ゾンビを倒す。

「急ごう良祐！」

「たらたらすんな！」

「してねえよ！」

途中、倒れたゾンビが起き上がるうとしたから、蹴りを入れて走り出す。後ろを見ると、姉貴もしっかりついてきているようだ。

俺たちは陣形を崩さず、走って階段を目指す。

「極力ゾンビとは戦わないようにしましょう！」

冬紀の言に従い、体力消費を極限まで減らす努力をする。

しばらく走ると、下へ降りる階段へたどり着いた。幸いなことにゾンビはちらほらとしかいないので、ゾンビの隙間を縫って走り、戦闘は出来るだけ避ける。向かってくるゾンビは危険と判断した奴だけバットで倒し、他の三人の進行を妨げないようにした。

「いい仕事すんじゃない良
「ありがとよ……！」

何故だか馬鹿にされた感じがして心証がよくない。まあそれよりゾンビをかき分けていくのに神経使っているから、あれこれ言わずに生返事で返す。

「やっと3階に着いたようね〜」

俺は後ろから聞こえる姉貴の言葉で、俺たちが3階に着いたことを知った。それならもう少しだ。と一瞬気を抜きかけた時……

「おいおい……数多くねえか？」

良く見ると、階を降りていくことにゾンビの数が増えていく気がする。ゾンビの服を見れば制服を着た奴らが大半だ。生徒の半分以上はゾンビになったと見て間違いは無いだろう。

2階にたどり着いたとき、戦闘無しには階段を降りられないほどのゾンビが階段を塞ぐ。俺はすぐそこに音楽室があるのに気づいた。しめたぞ！思ってた次には言葉を発する。

「音楽室に入れ！！！非常階段を使っぞ！！！！！」

言葉を理解した面々から順に音楽室に入る。まず理奈、次に冬紀、そして姉貴が音楽室に入ったのを確認してから、俺は最後に音楽室に入った。

「鍵をつ……！」

「ああっ……！」

冬紀は俺が入ったのを皮切りに音楽室の扉を閉め、急いで鍵を閉めた。刹那、ドガンっ！！！！と扉にゾンビが殺到する。扉は奮闘してくれているが、今にも壊れそうだ。

「壊れる前に非常階段へ行きましょう！！！」

「いつもは鈍い姉貴が積極的じゃねえか」

「死にたくないんです！！！」

姉貴は我先にとベランダのドアノブをひねる。すると・・・

「きゃあああああ！！！！！！！」

「姉貴！！！！！」

扉の裏にゾンビが潜んでいて、今にも姉貴に噛み付こうとする。俺はバットをノーモーションでブン投げた。バットは吸い込まれるようにゾンビの頭に直撃して、一瞬の隙を作る。

「理奈！！！！！」

「わかってら！！！！！」

一番近くにいた理奈に指示するが、その前に理奈は走り出していた。理奈はハンマーを振り上げて、バランスを崩したゾンビの脳天に叩き落す。

ぐちゅっ！！！！という嫌な音とともにゾンビはベランダから滑り落ちた。下からも人が潰れた嫌な音がする。俺は尻餅をついている姉貴の元に走った。

「死ぬ気か馬鹿！！！！モップ使えよ！！！！！」

「だって・・・」

姉貴は涙目で俺を見上げてくるが知ったことか！

「だってじゃない！！心配をかけるな！！！！」

すると姉貴は驚いた表情になった。

「良ちゃん・・・心配してくれたの？」

その眼は信じられないものを見たように見開かれている。俺は失言に気づきながらも視線を逸らして言葉を続ける。

「当然だ！！！姉貴の代わりなんていないんだぞ！！！！」

「良ちゃん・・・」

俺はバツが悪くなりさくつとバットを拾って告げた。

「行くぞみんな」

温かい眼で見ていた冬紀と理奈も頷いて、俺たちはベランダへ飛び出した。ベランダにはゾンビがちらほらとしかいなかった。これ幸いと一気に非常階段を駆け下りる。

地上までたどり着いた俺たちは手分けして辺りを見回す。すると俺の視界にドアの開けっ放しの車があった。車種はタント、メーカーはダイハツってところか。

「姉貴は運転できたよな？」

俺が聞くと姉貴は頷いた。

「車の？免許は持っているけど・・・」

そっぴゃあまり車運転しないんだっただな。俺はまあいいとタントの近くまで小走りする。

辺りに危険が無いことを確認して車の中を覗き込む。見たところ鍵はつけっぱなしで燃料も問題ない。俺は姉貴を手招きして運転席に座らせた。

「どうだ？出来そうか？」

姉貴はうーんと唸って機器の動作を確認して頷く。

「これなら出来そう」

「ならこれで脱出しよう」

近くまで来ていた冬紀と理奈を呼び、車で脱出する経緯を話した後部座席のドアを開けた。

「俺は助手席に回るから二人は後部座席な」

「わかった」

「ういゝっす」

二人は後部座席に乗り込み、それを目視して俺はドアを閉めた。俺は回り込み助手席のドアを開ける。乗り込もうとしたとき、校舎の陰からゾンビと動きがおかしなゾンビが1体歩いてくる。

「ん？あれは・・・」

「私も乗せてええええええっつ！！！！！！」

動きがおかしなゾンビかと思ったら生存者だ。青みがかったシヨ―

トヘアに幼い顔立ちの少女。左手には弓に矢が、右手には鉄パイプが握られている。制服についた真っ赤な血は全て返り血のようだ。彼女は手を振りながら後続のゾンビの集団から必死に逃げていた。俺はすぐに頭を巡らせ言葉を発する。

「姉貴！……！……！……！……！……！」

「ええっ！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！」

「いいから早く……！……！……！……！」

「は、はいい……！……！……！」

「ちよつと……！……！……！……！……！……！……！」

俺は乗り込んだが、ドアを開けっ放しでバットを車内に置く。姉貴は鍵を回しエンジンを始動させる。後部座席の冬紀から見捨てるのか！……？と抗議の声が飛び出す。そんな気はさらさらねえよ。アクセルを踏み出し急発進したタントは、前方の車にぶつかりそうになるが、何とか右に回避して走り出す。

「姉貴！あの子の横をバックで通り抜ける……！」

「バックでえ……！……！……！……！……！……！……！」

「やれ……！……！……！……！」

「う……！……！……！……！……！……！……！」（良ちゃんゾンビが出てから人使い荒いなあ……！）

俺が指示したとおりに姉貴は車体を回転させて、高速バックで少女に近づく。少女はビビって足を止めそうになるが、後ろにゾンビが迫ってるから走り続ける。

俺はドアを背に、少し車外に身を乗り出した。そして少女に叫ぶ。

「手を伸ばせ……！……！」

「ええ……！……！」

「死にたいのか!!!」

「うううわかったわ!!!」

少女は鉄パイプを左手に持ち直し、俺に右手を伸ばした。俺も少女に手を伸ばして姉貴に一言。

「あの子を回収しだいハンドルを左に切れ」

「・・・・・・・・へっ?」

「じゃよろしく」

「ええええええええ!!!???」

後ろで冬紀も滝汗をダラダラ流してシートベルトを締めた。何かを唱えている。

理奈はジェットコースターみてえだな!と面白がってはいるがちやっかりシートベルトをしていた。

そしてスピードを緩めることなくバツクで疾走して少女に近づく。

「今だ!飛べっ!!!」

「・・・・・・・・!!」

ジャンプした少女の手を、俺はギリギリ掴み、自分のもとへ引き寄せた。なんとか成功……。後は……

「姉貴!!!!!!」

「ああもう!!!!!!」

俺は衝撃に備え、少女を抱えて身構えた。次の瞬間……

「ぐう!!!!!!??」

「うああ!!!!!!??」

「にははは！！！」

「・・・・っ！！」

「どうなってるんのおおおおおお！！！！！！？」

車が右に半回転して、遠心力で体が外に持つて行かれそうになる。しかしそれで少女の後を追っていたゾンビの大半が吹き飛んだ。

「アクセル！」

何とか耐えた俺は次の指示を即座に出しドアを閉める。

「人使いが荒い〜！」

姉貴は壊れそうな勢いでアクセルを踏み込み、またもや車は急発進した。

「そんな強く踏み込まなくて・・・・ぐうえ！？」

膝の上に抱えた少女の肘が顎にクリティカルヒットして意識が飛びそうになる。意識をとりあえず保てた俺は、視線をフロントに向けると、姉貴の荒い運転でゾンビがなぎ倒されていく様を見た。

そしてそのままのスピードで校門を飛び出し、俺たちが乗るタントは一路俺の家へ向かった。

第4話 アクション映画も真っ青だな（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回の紹介は前原美鈴を予定しています。

脱出に成功した主人公たち！はたして彼らに未来はあるのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第5話 許してくれ、爆発は漢（おとこ）の性なんだ（前書き）

おはにちはー！らいなあです！

最近レッドデッドリデンプションっていうゲームをしたんですけど、あれはなかなか面白いですね！

一回間違えて関係ない人撃っちゃって、手配されました。現金で解決しましたけど。

Z指定ですから18歳以上じゃないと買えないですけど、興味が湧いた方はPS3ゲームなのでぜひプレイしてみてください！

さて本題に移りましょう。今回のプロフィールは前原美鈴です！

【前原 美鈴】

年齢：23歳

職業：科学教師兼保険医

誕生：3月27日

知識

体力

攻撃性

俊敏性

統率力

機転性

ギャグ

良祐の姉。役割は主に集団の空気を変える癒し要員。一人称はお姉さん。本人は否定しているがドがつくほどのM。（良祐に対してのみ）

容姿は栗色の髪を背中まで伸ばしたロングヘア。良祐と同じく凛々しい顔立ちをしているため、綺麗な大人の女性という雰囲気がある

が、言動のせいで子供っぽく見える。

仕事に行くときだけ青色のフレームの眼鏡をして、髪を後ろで纏めたポニーテールにしている。紺のスーツを着崩し、（学校では）白衣を着ている。

東海林市立林名高校の科学教師兼保険医。担当クラスはなし。

生まれも育ちも東海林市で、林名高校の出身。

その容姿のせいで大学時代に犯罪に巻き込まれ、長期間の人間不信になる。その後身内の献身的な協力と、犯人たちが半殺し状態で警察署に放置される事を受けて、なんとか人間不信を克服した。（犯人たちを半殺しにした者は不明）

その際に一番貢献した良祐にただならない思いを持っている。普段の良祐ラヴは弟だからという理由と、他の男性を心から信用できないためである。

理奈と冬紀は心を開いている数少ない友達。

母親と仲良しではあるが、良祐が関わるといつもバトルを繰り広げている。父親とも仲良し。

性格は天然だが、やるときはやる。

かなりの秀才で小学校のときからトップを取り続けている。しかし小中高とテニス部に所属していたため、体力だけは高め（テニスは大して上手くなかった）。高校時の最終成績は上の上。趣味は弟の誘惑とシヨッピング。

保険医という立場と戦えるだけの運動神経が無かったため、戦闘時には荷物持ち係として後方で待機している。

（両親の記述は前原良祐を参照）

第5話 許してくれ、爆発は漢（おとこ）の性なんだ

「ちよっ！姉貴、右！！右！！！」

「あううううう！！！！」

「逆！！逆！！！」

「言わないで〜！！！！！」

結果的に言えば姉貴の運転は荒いどころじゃなかった。パニックも手伝って蛇行運転してやがる。

後部座席に座った冬紀も激しい乗り物酔いに侵されている。理奈は絶叫マシンの一種だと思っているのかひゃっほおおおおううううう！！！！とか言ってるやがっているし、俺の膝上の少女は大パニックだ。

「運転荒すぎない！？酔いそうなんだけど！！！」

「俺に言われても困る！！！」

ただウヨウヨいるゾンビを奇跡的に回避しまくって車体のダメージは全然ないようだ。俺は荒すぎる運転を鎮めようと、使いたくなかった手を使う。

「姉貴！！！」

「なああああにiiiiiiii！！！！？」

俺は意を決して言った。

「落ち着けど変態！！！！！」

ついでに軽い平手打ちも付け加えて。姉貴はあうっ！といって目を

見開く。

後ろでまさか・・・と二人が息を呑む様子が手に取るように分かる。俺の膝上の少女は？マークを頭に浮かべて先生？と聞いていたが。すると運転が蛇行から通常運転に戻る。そして姉貴は・・・

「・・・弟に打たれた！！お父さんにも殴られたこと無いのに打たれた！！だからこそいい！！」（早口）

表情を光悦なものに変え、ド変態モード起動。運転が通常運転のままゾンビの垣根をひよいひよい避けていく。さっきとあまり変わらないはずなのにあら不思議、揺れが全然無いんですもの。さすが姉貴だ・・・ド変態パワーは伊達じゃねえな・・・！俺は感心しながらふと気づく。

「そっぴやお前、名前は？」

俺の膝上の少女はあっ・・・とこぼした後、みんなに聞こえるように言った。

「小林早織こばやし せあきよ。早織でいいわ。短い付き合いかもしれないけど覚えておいて」

威圧的。その言葉しか出てこなかった。酷いこと言うよな、まったく。もっと優しくしてよ。でもその言葉が俺以外の胸を抉っている様子だった。俺は平気だけぞ。

「前原良祐まえはら りょうすけだ。それはお互い様だからな」

俺の動じない様子に早織は感心したようだ。

それはそうと、心を回復した面々から口が開かれる。

「僕は宮下冬紀みやしたふゆきです。お好きなように呼んでください。あなたの名前覚えておきますよ」

「覚え続けられるといいわね」

相も変わらず毒舌だな。興味すら湧いてきたぞ。

冬紀は苦笑して善処しますと言っていた。理奈は心証が良くないのかぶすつとしている。

「緋達理奈ひたちりなだ。ぜってー覚えてやる」

「頑張ってね」

んだとお！と理奈は突っ掛かるが冬樹に止められる。熱くなるな熱くなるな。

やっと落ち着いた姉貴は運転しながら告げる。

まえはらみさず

「前原美鈴ですう。よろしくね沙織ちゃん」

「前原？」

あつ。そういや他の生徒は俺と姉貴が家族だって知らないんだっとな。俺は補足に口を開く。

「ああ。俺と姉貴は姉弟だ」

「そういえば面影が・・・」

小林はふうんと呟くと分かったわと理解してくれた。

俺は視線を窓の外に向けると、俺の家の近くのコンビニが眼に入る。もう少しか・・・そう思ったとき・・・

「良祐！あれ・・・！」

「何だ冬紀？」

冬紀が指差す方向にみんなが視線を向ける。そこにあったものは俺たちの想像を遥かに超えていた。

「なんだ・・・あれ・・・！？」

と言ったのは理奈。

「お姉さんはあれには対処出来ないよ？」

と言ったのは姉貴。

「多いわね・・・！」

と言ったのは早織。

「百は超えるだろ・・・？あの数」

俺が最後に言っつてようやく事態が飲み込める。前方に百は軽く超えそうなほどのゾンビの大群が道を塞いでいたのだ。

あともうちょっとなのに・・・！俺は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「どうするの良ちゃん？」

一旦車を止めて俺に聞いてくる姉貴。

俺は頭をフル回転させて、良好策のいくつかを紡ぎ出す。しかしそのどれもが決定的に何か足りない。

すると早織が堂々と口を出す。

「回り道すればいいじゃない」

「・・・・・・・・・・」

何も分かってないなこの女は・・・。

「そんなもんとつくに考え付いたわ！」

「な、なによ・・・」

俺は早織に決定的な過ちを教えてやる。

「回り道出来る道なんてねえよ！」

「・・・・・・・・・・」

あれだね。それ以前の問題だよ。回り道出来る道がないっていう。つたく、時間を食わせるんじゃないやねえって・・・・・・・・ん？おお、良い事思いついた！

「一つ思いついたぞ！」

「「おおっ！」「」

「どうせ・・・」

俺は早織に笑いかける。

「お前の考えで閃いた。ありがとな」

「うう・・・・・・・・」

何か若干引いてないか？可愛くねえな・・・。
ともかく俺はみんなに考えを披露する！

つっていた鉄パイプを座席とアクセルに掛け渡す。

すると車は徐々に走行をはじめ、ゾンビの群れに向かっていく。俺は早織から預かった弓矢を見た。

出来るのか？俺に？という疑問が頭にわく。早織から使い方を知っているが、俺はまだ初心者だ。しかし俺は頭を振り、考えを振り払う。

やるしかないんだ・・・！あらかじめ紙などで包み、救急箱に入っていたアルコールを矢尻に浸した矢に、ライターで火をつける。

ボウと矢尻を包むように火が燃え上がる。俺はそれを弓に番え・・・。

「逃げちゃ駄目だ・・・！逃げちゃ駄目だ・・・！逃げちゃ駄目だ・・・！」

「（シ ジ君かつ！！！！）」

冬紀のツツコミが聞こえた気がした。

車はゾンビの注意を引きながら群れに向かう。車がゾンビの垣をかき分けて進んでいくのを確認して、俺は射撃体勢に入った。

3・・・矢を引き。

2・・・狙いを定め。

1・・・一息に・・・矢を放す！

「・・・・・・・・！」

矢が手を離れ、一直線に開きっぱなしのドアの中へ向かう。矢が風を切って、物凄い音が鳴る。

火矢はゾンビを越え、車の中に吸い込まれた！瞬間・・・

地を揺るがすような爆音と共に、前方のゾンビの群れが一気に弾け飛ぶ！

「いやっほおおおおおおおっつ！！！！！！！！！！」

ついつい叫んでしまった俺。許してくれ、爆発は漢おんの性なんだ。

俺は冷静になつて視線を下に下げる。黒煙を撒き散らせる車の辺りは、血と肉と金属片が散らばり、所々に火が点いていた。

そして音のせいか火の点いた車に向かうゾンビは、近づいてって体に火が燃え移り、五感が封じられて辺りをウヨウヨしだす。

どうやら耳元で火が鳴るから聴覚での索敵が出来ないようだ。

「イエス！」

作戦成功！俺は喜んで飛び回っていると、なんとなく気づいた。ゾンビこつち来てない？

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・さつき叫んでたああああ！！！！！！」

弓矢を左手に持ち直し、そばに置いていた金属バットを右手で持つ。俺はそのまま全力で逃走を開始した！

「家どつちだっけ！？あ、あつちか・・・」

もう既にみんなは家に向かったようだ。残ったのは俺1人。猛ダッシュで塀に乗り、塀伝いにゾンビの群れを疾走する。

学校の体育の時間ですら見せたことの無いような、素晴らしいバランス感覚で、厚さ10cmぐらいしか無い塀をダッシュする。

「俺なんで走れてるの？俺なんで？」

最早意味不明を究めた感じだった。俺は左の曲がり角の塀を、スपीドを落とさずに左に曲がる。

「何で曲がれるの？何で？何で？」

俺自身ですら意味が分からない。でも、確か眼を上げればすぐそこに家が・・・

「無理！上げられる訳が無い！！」

走行に全神経を使っているから眼を上げたら塀から落ちる！しかしすぐそこに・・・

「あっ・・・」

と、一瞬気を緩めたのがいけなかった。俺の右足が塀の段差にぶつかり、俺は左側に落ちてしまう。

その時に右手に持ったバットを放してしまい、俺とは逆方向に落ちてしまった。俺近接武器手放しちゃったんだけど・・・。

俺が落ちたのはどこかの家の敷地内で、目の前にゾンビが・・・。

「（しまったああああああっ！！！！！！）」

ゾンビが俺に迫る。俺はあたふたしながら、解決策が無いか探る。しかし何も出ない！

俺絶体絶命！？と諦めかけた刹那、俺に神が降臨する。

「（だあああらっしやあ！！！！）」

腰から果物ナイフを抜き放ち、迫るゾンビの脳天にぶっ刺した！ゾ

ゾンビはうめき声を上げながら、その場に倒れて動かなくなる。助かったかと思っただが、俺を追っていたゾンビは？と思いつき辺りを探った。

「あつ」

塀をよじ登って道路のほうを見ると、大量のゾンビが金属バットに群がっていた。

どうやら金属だったのが幸いして、道路に落ちたときに甲高い音を発生させ、俺よりもそっちに引かれたようだ。

九死に一生を得たわけだな。俺は辺りを見回し、そして気づく。

「ここ俺ん家の隣だ」

案の定塀を登って横を見ると、俺の家と庭にみんなの姿があった。俺は帰ってこれたわけだ。我が家に。

「（早く来い良！）」

「（ゾンビに気づかれないようにね）」

「（お姉さんお腹すいちゃった）」

「（馬鹿みたいよ）」

みんなが小声で俺を呼ぶ。俺は塀を登りきり、音を立てずに俺の家の庭に下りた。

やっと帰ってこれたんだ、俺の家に。

「ただいま」

俺はそう告げるとみんなの元へ向かう。

これで一時の安息が出来る。俺たちは疲れた体を気だるそうに引き

ずって家に入った。

【損失】

- 1：タント（誰かの車）
- 2：ガスボンベ（人の家の）
- 3：弓道部からくすねた矢（早織が）
- 4：金属バット（用具室の）
- 5：果物ナイフ（保健室の）
- 6：鉄パイプ（保健室の）

俺の損害プライスレス（笑）

第5話 許してくれ、爆発は漢（おとこ）の性なんだ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回の紹介は小林早織を予定しています。

一時の安息を手に入れた主人公たち！死が闊歩する町で彼らは生き続けることが出来るのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第6話 幻想殺して幻想壊しじゃだめなのか？（前書き）

おはにちは！らいなあです！

僕が最近ハマった言葉は、来いよベネット！武器なんか捨ててかかって来い！です。

レッドデッドリデンプションをやってる最中でも銃撃戦の中、来いよベネット！武器なんか捨ててかかって来い！って言ってました。客観的に見た時、僕は危ない人なんじゃないかと思うほどに言っていました。・・・自分で言ってる自分で凹みました。

うう・・・本題に移りましょう・・・。今回のプロフィールは小林早織です！

【小林^{こはやし} 早織^{さおり}】

年齢：15歳

職業：高校生（一年）

誕生：10月21日

知識

体力

攻撃性

俊敏性

統率力

機転性

ギャグ

学校脱出の際、ゾンビの大群から逃げてきた少女。面識なし。

役割は冷静にバサッと切り捨てるようなツツコミ要員。一人称は私。容姿は青みがかかった髪を短く切ったショートヘア。幼さが抜けない顔立ちが特徴。目つきは悪い。

制服をある程度着崩した風貌が特徴的だ。ちなみに眼鏡はしてないがコンタクト着用。

東海林市立林名高校の生徒。一年C組。

性格は冷やややか。常に冷静に物事を見据えて、事実のみを的確に言う。

かなりの頭脳の持ち主で、テストの順位は一年では学年トップ。全学年総合順位もトップ5にはかならず入る。

典型的な委員長タイプかと思うが、授業態度は不真面目。教師だろうが関係なく事実のみを言い当てるので、学校内では結構な人数から恨まれている。

弓道部所属だが、腕前は壊滅的に下手。ゾンビ出現時は授業をボイコットして弓道場で練習をしていた。

両親は早織が中学に入ったときに離婚し、その後母親に引き取られる。行方知れずの父親を心配しており、いつも気にかけているが、母親は父親のことを恨んでいるため言い出せないでいる。

母親は大企業の社長秘書で、父親は別会社の社長。一番社会の闇が鮮明に映る職業のため、身近にいた早織に反映された。そのため性格が捻くれたものと思われる。

本当は優しさを持っているのだが、他人に心を開いていないため、つい上から目線で話しかけてしまう。

自分と大事な人のためなら、どんな冷酷なこともするという思いを持っている。

知識はあるが、それを実生活で応用するスキルがあまりないため、サバイバルには向かないタイプ。成績は文句なしの上の上。趣味は弓道と勉強。

ゾンビ出現時に弓道場にいたため、何かの役に立つと思い、弓と矢3本を弓道場から持ち出す。（本数が少ないのと、上手く扱えないために鉄パイプを使っていた）

類まれなる知識と情報収集能力を生かして、主人公の集団の頭脳のような立場になる。（前線には立たない）

第6話 幻想殺しって幻想壊しじゃだめなのか？

何とか俺の家に到着した俺たちは、俺を先頭に玄関を潜る。

「^{まじか}円さん！円さん！」

俺は安否を心配して円さんと呼ぶ。早織は誰？と聞いてくる。

「母親だ。俺は名前で呼んでいる」

振り返らずに小さく呟いた。早織は母親を名前で呼ぶとか・・・なんて言っていたが。

ほっとけ・・・そう思いながら暫く待つと、奥からパタパタとスリッパの足音が聞こえてくる。

「良祐さん！良祐さん！！」

「円さん！・・・大丈夫だったか・・・」

廊下の陰から、栗色の髪を右サイドで纏めている・・・いわゆるサイドテールの女性が歩いてきた。

彼女は前原^{まえはら}円。俺と姉貴の母親だ。

俺は円さんの無事を確認し、安堵する。円さんは目に涙を溜めて俺を見ていた。

そりゃそうだよな。いきなり外に大量のゾンビが出てきて、それをたった1人で・・・

「外に沢山の人があります！デモ行進ですか？」

「・・・あれ？」

ひょっとして円さん、アレがゾンビの大群って気づいてない？
良く見ると円さんは、目をキラキラさせて熱く語る。あれ？嬉し泣
き！？

「私、デモ行進って初めて見ました！デモ行進ってアレですよ？
それは横暴だ！とか、アレを安くしろ！とか言って、みんなで街中
を歩き回るやつですよ？」

「円さん！落ち着いて落ち着いて！！！」

「ちよつと私、デモ行進に参加してきます！」

「ちよつと待てそれは駄目だ！みんなも見てないで円さんを止める
のを手伝え！！！」

何言ってるんだこの馬鹿は！

俺だけじゃなくみんなも手伝って、ゾンビの大群に向かって走り出
す円さんを何とか止める。俺はみんなを一旦リビングまで通すと、
円さんの説得を開始する。

みんなの方は姉貴に任せておこう。今はこいつをどうにかしないと
な。

「えっ！？あの人たちはゾンビなんですか！？」

「だからそう言ってるだろ！」

説得すること数分。ようやく理解してくれたか・・・

「ところでゾンビって何ですか？」

「……………」

もう駄目だ。円さんに何を言っても無駄だな。
俺は諦めて、みんながいるリビングへ向かう。

「お母さんは？」

「駄目だ。ゾンビの件が理解してない」

リビングに入った時、キッチンにいた姉貴が聞いてくる。俺はさらに姉貴に聞き返した。

「そんなところで何やってんだ？」

すると姉貴は冷蔵庫にスポーツ飲料を入れてるのよ、と言う。俺は・

「一本くれ」

と姉貴に言った。姉貴はスポーツ飲料を一本、持ってきてくれる。

「はい良ちゃん」

「あんがと姉貴」

どう致しまして、と言って姉貴は、2階の自分の部屋に行くために階段を上ろうとする。

俺は姉貴が視界からいなくなる前に忠告しとく。

暗くても電気を点けないこと。

ゾンビは音に惹かれるみたいだからテレビ等を見るときは注意すること。

窓にはあまり近づかないこと。

俺がそれを告げると、姉貴は頭に？マークを浮かべる。

「ゾンビは分かるけど、電気と窓は何で？」

そう問われた俺は事情を説明してやる。

窓は生存者に姿を見られないため。

電気は生存者を近づかせないため。

生存者がこの家に近づいてくるってことは、ゾンビを引き連れてくることに等しい。

つまりは、俺たちが生き残るために他の生存者を見捨てるということ。

それを聞いた姉貴は血相を変える。

「お姉さんたちが生きるために他の人は見捨てるの！？」

すると突然大声を出したもんだから他のみんながぞろぞろ出てきた。

「しょうがないだろ。俺たちが生き残るためには必要なことだ」

「でも……！」

俺は姉貴が間違えているたった一つの事実を言ってやる。

「自分たちのことで精一杯なのに他人なんて救えるか！」

『……………！』

俺の言葉は予想以上に効果覿面だったらしく、姉貴だけじゃなく他のみんなも押し黙った。早織はさも当然の様に腕を組んでいやがるが。

姉貴は早織を見て思いついたように口を出す。

「でも、早織ちゃんは助けたよ!!」

「まだその時は余裕があったからだ!!」

俺はみんなに視線を向け、この際だから今現在の実情を語った。

「いいか!? 助け合いの世の中は終わった! 今日からは自分のことを考えて行動しないと・・・!」

一閃開けて、俺は外に向けて指を指す。

「外にうるついている化け物の仲間になるだけだ!!」

『!』

瞬間、痛いほどの静寂がその場を襲う。昨日理奈が、せめて姫と呼んでくれ! と言った時とは比べ物にならないほどの静寂が。

俺は熱くなった頭が冷えていくのを感じて、さすがにちよつと言い過ぎたことを実感する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめん」

そう告げて俺は、姉貴を通り過ぎて2階の俺の部屋に向かった。

こんなことになっても、俺は冷静に物事を考えていたと思っていたが・・・

少々狂っていたのかもしれない。

いや・・・俺の頭はとっくのとうに・・・

気づくと俺の部屋の前まで来ていた。俺は頭を振って、くだらない

考えを否定する。

寝るぞ寝るぞ！扉を開いて俺はベッドへ飛び込んだ。すぐに意識が闇に引きずり込まれる。

そついや・・・今日は色々・・・ありすぎた・・・な・・・。

それきり俺は何も考えられなくなった。

「なあサクラ。君は将来どうするんだ？」

紺色のブレザータイプの制服を着た少年が、学校らしき建物を背に少女に問いかけた。

問いかけられた少女は、黒い髪を腰ぐらいまで伸ばし、とても可愛らしい顔立ちをしている。黒い髪が風になびいて、少女を少し大人に見せた。

ブレザータイプの制服の胸ポケットに、今までしていた眼鏡をしまいい、少女は微笑みながら答える。

「サクラはお医者さんになるのかな」

その答えに少年は驚いた様子を見せた。

「医者か。てつきり君の事だからケーキ屋かと思ったよ」

少女は少し怒って、少年に抗議する。

「偏見だよ！」

「ごめんごめん」

少年は笑って謝罪する。二人は仲良く笑って楽しげだ。少女は笑いながらも真剣な様子で語る。

「サクラはみんなを守ることは出来ないけど、せめて助けてあげたいの」

笑っていた少年は一転して、思い出したように口を開いた。

「君のお父さんのように・・・かい？」

すると少女は悲しげに頷く。しかしすぐに笑顔になると、今度は逆に問いかける。

「良祐君は？」

少年は暫く考えた後、一つの結論を出した。

「正義の味方・・・」

「えっ？」

ちゃんと言つ前に、少年は恥ずかしさから言葉が濁す。

「いやなんでもない!」

すぐに否定するが少女の耳には届いていたようで、少女は一番の笑顔で少年を見せた。

「いいね!」

「へっ？」

予想外の言葉に、少年は奇妙な声を出してしまう。
だが少女は気にせずには笑いかけた。

「良祐君が正義の味方でみんなを守って、サクラが医者で良祐君を助けるの！」

「……………」

意外すぎる言葉に、少年は口を開けたまま呆然としている。馬鹿にされると思っていたのだろうか？

しかし暫くすると、少年は声を上げて笑い出し、少女はいきなりの大笑いにあたふたしだす。

「なに？なに？」

「いや…………君は面白いな」

「そうかな？」

少年は決心したように頷くと、少女に向けて笑って告げた。

「よし！そうしよう！僕が守って、君が助ける！！！」

その言葉を聞いた瞬間、少女は嬉し涙を零しそうになる。しかし、ぐっと堪えると、少女は少年と同じように言った。

「うん！約束だよ！！！」

「もちろん約束だよ！」

二人は笑いあい、この時間は永遠に続くと思われた。

…………いや、二人は少なくとも思っていたはずだった。

あの事件が起こるまでは……。

「付き合ってください……!」

「えっ? いや……あの……」めっ……」

少女は逃げるように走り去っていく。少年はそれを絶望の表情で見ていた。

「サクラ! ……! ……!」

「良祐君!? これは……何でもないの! ……」

暗がりの体育倉庫。その中に半裸の少女と、制服を着た不良のような少年が血まみれで倒れている。

扉の前で眼を見開く少年は、二の言葉が出ないようだ。

「しょうがないの! 無理やりにしようとしたから身を守るために……! ……」

「だからって半殺しにすることはないじゃないか! ……」

廊下の真ん中で少年と少女は言い争いをしている。二人はもうお互いの言葉が耳に入っていない。

「良祐君？良祐君！？良祐君！！？」
「なんで・・・こんな・・・」

夜の公園。雨の中少年は血まみれで地面に倒れている。
少女は返り血らしきもので染まった両手を見て、この世の終わりのような顔をしていた。

「サク・・・ラ？」

「近寄らないで！貴方なんて大嫌い！！」

昼の教室。他の女子に混じって少女は少年を拒絶する。
少年の机には「死ね！」「くんじゃねえ！」「気持ち悪い！」などと書かれたノートが散らばっていた。

「誰か・・・誰か助けてくれよ・・・！！」

夕方の校庭。土砂降りの雨の中、少年の手に握られた手紙にたった一言書いてある。

さよつなら。少年は曇った空に叫ぶ。助けてくれ・・・と。

「・・・・・・・・」

下駄箱を開けた瞬間、ゴミが中からなだれ落ちる。少年は何回目だろつと言おうとしてやめた。

「・・・・・・・・お」

昼の校舎裏。ボコボコにされたのが、少年は血まみれで壁に寄りかかっている。

その眼には光がない。表情もへらへらしていて気味の悪い雰囲気だ。

「俺は・・・・・・・・」

・・・・・・・・何でも出来ると思っていた。何でも手に入ると思っていた。

全力で頑張れば全てが出来ると思っていた。だが、その幻想は脆くも崩れ去った。

だから俺は夢を見るのをやめた。だから俺は希望を持つのをやめた。だから俺は絶望するのをやめた。

全てはあの時から・・・・・・・・

「・・・・・・・・すけ！・・・・良祐！！」

「・・・・・・・・！！」

俺は目蓋を開けた。視界には青みがかつた髪の少女が映る。

ショートヘアで幼い顔立ちの少女は、俺の目蓋が開いたのを確認すると、少し離れて体を起こすのを催促した。

「早織・・・？」

「それ以外に何が見えるのよ？」

俺は体を起こして少女をまじまじと見る。間違いない、早織だ。

しかし服装が制服からタンクトップとショートパンツになっている。

「それは・・・？」

早織は右手に持ったアイスを舐めながら、俺の質問に簡潔に語った。

「ああこれ？お風呂に入ったから着替えたのよ。タンクトップはあんたの。パンツは前原先生からね」

なるほど、だからか。俺は1人納得し、頷く。

「ちょ、あんた大丈夫？」

「何が？」

いきなり早織があたふたしだした。俺は訳も分からずに首を傾げる。すると早織は俺の目に指を差し、不思議そうに言った。

「あんた・・・泣いてるわよ」

「えっ？」

言われて頬を触ると、若干・・・いやかなり濡れていた。

俺は袖でゴシゴシ拭う。早織に泣いてるところ見られた！うわゝハズカシ！

ベッドから降りて立ち上がると、他に誰もいないことを確認して早織に呟く。

「誰にも言つなよ」

「それはいいけど・・・それよりあんた私の姿に泣いたの？」

「んなわけあるかつ！！タイミング的には完璧だったが、お前のタンクトップとショートパンツ姿で泣くわけねえだろ！！」

何言つてんだこいつ？自意識過剰も甚だしいわ！

早織はじゃあ何ですよ？と聞いてきやがった。聞くなよまったく・・・

。まあ別に聞かれても問題ないからいいんだけどね。

俺はため息一つで話し始める。

「夢で昔の出来事を見ていたからだ。多分」

「昔？」

早織はなおもアイスを舐めながら、訳が分からなさそうに首を傾げた。

「中学の・・・最悪な思い出だ」

俺は今、物凄く悲しそうな顔をしているに違いない。

それで察したのが、早織はそう・・・と呟いて・・・

「どんな思い出？」

あつ、察してねえこいつ。うつとうしいなあ。

俺はさくつと終わらせようと簡潔に話す。

「中学のときに女にフラれて、クラスのほぼ全員からイジメられた
思い出」

「うつわつ、重つ」

「お前が聞いてきたんだろうが！！」

やべえこいつ殴りてえ！人の傷口に塩塗りたくって痛そうとか言っ
てんじゃねえよ！（例の話です）
俺がイライラしていると、早織はでも・・・と口を開いた。

「あんななら気にし無さそうね。ゾンビに平気で殴りこむあんな
ら・・・」

そう早織が言った瞬間、俺の中で何かが弾けた。

「！」

「がはっ!?!」

気がつく俺は早織の首を右手で握り、彼女を強く睨む。

「お前に俺の何が分かる・・・!俺のこと何も知らないくせに気に
し無さそうね、何て言ってるじゃねえよ!!--」

「・・・!!」

早織は信じられないものを見たような表情で凍りつく。

俺はつい熱くなってしまったことに反省して、一旦心を落ち着かせ
て首から手を放す。

「・・・ごめん。悪かった」

「っは!・・・いえ、私も・・・言い過ぎたわ」

二人の間に気まずい空気が流れる。

俺が天井を仰ぎ、早織が床を見るといふ何とも言えない空気。誰か
この空気を変えてくれ!

すると早織が唐突に語り始める。

「今日は助かったわ」

「えっ？あつ、お、おう……」

そついや色々してたな。ゾンビの群れから助けたり、ゾンビの群れを吹っ飛ばしたり。

あれ？後者は違くない？間接的にしかしてないよ？

その節を伝えると、早織はそれでもよ、と微妙に微笑んだ。

「下に下りなさい。夕食があるはずよ」

「あれ？今何時？」

「7時よ。午後7時」

「あれ！？俺が寝たのが2時半ぐらいだから……」

「4時間半ね」

「マ・ジ・か・よ！……まあいいや」

どうやら4時間半も寝てしまっていたようだ。よほど疲れが溜まっていたのか？

まあいいんだけどね。俺はしわくちゃになった制服を整えて、ケータイを枕もとの充電器に挿した。

早織はじゃあねと言って扉を開く。

「あつそうそう」

「なんだ？」

扉を開いた姿勢のまま早織は体を捻って振り返る。

彼女は言いづらそうに（らしくもなく）もじもじすると、意を決して言った。

「ありがとう……かつこよかったわよ」

「・・・・・・・・」

そう言うと早織は部屋を出て扉を閉めた。

いや、まさか早織からそんな言葉が聞けるとは……。会って数時間だけど。・・・・いいもん聞けたな。

俺は窓の外を見る。まだ夕焼け空とはいえないが、かなり日が落ちていた。

「さて、明日からどうするかな」

このとき俺はすっかり夢のことを忘れていた。それよりも今は、この世界でどう生きていくか？その方が大事だし。

先を見据えて、生き残るために。俺は暫く頭を巡らせていた。

第6話 幻想殺しって幻想壊しじゃだめなのか？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回で紹介は暫くおやすみですね。ご要望とあれば前原円のプロフィールも掲載しますけど・・・。

まあともかく、今回で良祐君の過去が（ちょっと）明らかに！

このあとどうなるのでしょうか？

事実を突きつけられた主人公たち！彼らはいったいどうするのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第7話 新たなる希望（前書き）

おはにちは！らいなあです！

どうも最近小説を書いているときに、このストーリーで大丈夫かな？とか、この表現で良かったらどうか？と思うときが増えてい気がします。

色々迷った挙句に、これでどーだ！みたいな感じで小説を投稿していたりしますしね。

僕は学生なので、まだ良く分からないときもありますから、どうぞ生暖かい眼で見守っていただければ幸いです。

今回の紹介は前原円さんです。

やるうかどうか迷ったんですけど、一応メインキャラっぽいので紹介します。

【前原まえはら円まどか】

年齢：秘密です

職業：専業主婦

誕生：3月1日

知識

体力

攻撃性

俊敏性

統率力

機転性

ギャグ

良祐と美鈴の母。役割はほとんどボケ。一人称は私。優雅な雰囲気漂う大人の女性。

容姿は栗色の長髪を右側頭部で結ぶサイドテールに、ほわわんとした雰囲気の顔立ち。いつも笑顔でいて、笑顔を崩したところは家族ですら、全然見たことが無い。かなり見た目が若く、娘と歩いていと姉妹に間違われる。

花柄のワンピースにピンク色のエプロンが特徴的。結婚指輪を指に着けず、首にネックレスのようにかけている。

性格は朗らか。誰にでも優しくみんなのお母さんのような空気を持っている。

知識はあまり持っていないが、昔スポーツをやっていたとかで体力はありえないほどある。

腕っ節も強く、美鈴が高校のとき、男たちが美鈴に乱暴をしようとした事件があったが、そのとき偶然通りがかった円が、男たちを半殺しにして美鈴を助けたと言う逸話がある。

夫である前原良太郎まえはらりょうたろうとは、彼女の高校のアメリカ留学中に、旅をしていた彼と出会い、円の一目惚れが始まりで、猛アタックをしかけた。

1年掛かってようやく良太郎と結ばれた円は、同じ時期に高校を卒業したこともあって、彼の生まれ故郷である東海林市に身をおく。しかし良祐が6歳の時に良太郎は旅に出て、連絡はくるが帰ってこなくなつた。

円の父親はすでに死去していて、母親が故郷の北海道で1人暮らししている。

見た目も若いし、腕っ節も強いし、何でも出来るしと、三拍子揃つた最強チートママ。趣味はお世話と創作料理。

最初はゾンビをただのデモ行進だと思っていた。しかし説得されてそれがゾンビだと知る。

一応後衛だが、たまに前衛にも加わったりする。主人公の集団の最年長で精神的支柱を兼ねたみんなのお母さんの立場。

第7話 新たなる希望

平成24年。西暦に直すと2012年。その年の8月の初め。つまり8月1日。

整理すると2012年8月1日。その日に俺たちの日常は180度変わってしまった。

俺たちが住む東海林市に大量の化け物が発生したのだ。

その化け物は人を襲い、食らい、そして同類に変える。いわゆる「ゾンビ」だ。

誰もは一回聞いたことがある名前だろう。そのゾンビは人を食らっていく、同じゾンビが増えていく。

そうして東海林市は、一日足らずで死者の楽園と化したのだ。

俺、まえはらりょうすけ前原良祐と親友のみやしたふゆき宮下冬紀、同じく親友のひたちりな緋達理奈、そして俺の姉のまえはらみずす前原美鈴は、学校にいた際にゾンビの大量発生に出くわした。

俺たちは生きるために戦い、命からがら学校からの脱出に成功した。その際、後輩にあたる一年のこばやしあかり小林早織を救出する。

そのまま俺たちは俺の家に向かい、色々ありながらも全員無事に到着する。

そして……

2012年8月2日。ゾンビ大量発生の翌日。

「・・・・・・・・朝か・・・・・・・・」

俺は自分の部屋のベランダで、毛布を被りつつしゃがんでいた。出来るだけ物音を立てずに、外の様子を探っている。

わかったかもしれないけど、俺がしているのは見張りだ。

こんな世の中、おちおち安心して寝てられねえからな。誰かがこうして見張ってねえと他の奴が寝られねえだろ？

幸い昨日は、ゾンビは俺たちを見失って、パチパチと燃え続ける車のほうに誘われていった。(ちなみにこれも俺の作戦だった)
そのおかげでゾンビが襲撃してくることも無く、生存者も来ずに一夜を明けることが出来た。

意外と凄いことしたんじゃない？俺SUGEEEEEEEE!!

・・・・・・・・・・・・・・・・悲しくなったからやめよう。っと・・・

俺はそろそろか・・・と右腕につけた腕時計を見る。5時59分。確か6時に冬紀と交代だったな。

あゝ腹減った。さつさと交代して飯食いてえな。

ついでに大きな欠伸を一つ。俺は部屋の中に入って、それから立ち上がった。と同時に部屋の扉が開き、奥から冬紀が部屋に入る。

「タイミングばっちりかな？」

「おう。お前のことだからピツタシに来ると思っていたぜ」

毛布と双眼鏡を冬紀に渡し、俺は大きく伸びをする。

「お疲れ様。朝食下にあるよ」

「りよゝかい。んじゃ、後は任せた」

「任されたよ」

冬紀はしゃがんで、さっきまで俺がいたベランダに出ていった。俺は見届けた後、扉を開けて下に下りる。

「あつ、良ちゃんおはよ〜」

「おはようさん」

下りてすぐに、姉貴がキッチンでうるちよろしていた。

「ん？ああ、良か。おはよー」

「おはよーさん、理奈」

見れば理奈が姉貴と一緒にキッチンにいる。そっぴや理奈は料理が出来たんだっとな。

俺は二人の邪魔にならないようにキッチンに入り、冷蔵庫から飲みかけのスポーツ飲料を出す。

これは昨日、なんやかんやあつて結局飲み忘れたスポーツ飲料の残りだ。一度寝て、起きた後に少し飲んだまま冷蔵庫に入れっぱなしだったのだ。キャップを開け、少し口に含む。大丈夫。まだウマイ。

そしてリビングに行き、ソファに座る。スポーツ飲料をテーブルに置き、同じくテーブルからテレビのリモコンを手を取った。

電源を入れて、音量を何とか聞き取れる程度に小さくする。

「ニュースニュース」

俺はチャンネルを5に合わせ、リモコンをテーブルに置いた。

『・・・少して、震災から1年と4ヶ月経とうとしています、復

興は遅々として進んでおらず、政府の対応の遅さに非難が……」

やっぱりか……。険しい目つきで思慮深く考える。

昨日もテレビをつけて気づいたのだが、いくらチャンネルを回してもゾンビの話題が欠片も出てこない。

1〜12チャンネル、ケータイ検索、その他もろもろ、いくらやってもゾンビ（らしきもの）が出たという情報が流れないのだ。

いつも通りに普通のニュースを流し、いつも通りにバラエティなんかをやっている。

俺が見てきた某学園黙示録やなんかは、ゾンビ発生は世界規模で起こっていた。それならテレビの全チャンネルは、当然ゾンビの話題や討論で埋め尽くされて、テレビをつけた誰もがゾンビの存在を認知出来ていた。

しかしそれが出ないと言うのは、いくら馬鹿でも気づくだろう。何かがおかしい。

だから俺は考えた。事実のみを再構成しなおして、一つの結論に到達する。

東海林市にしか、ゾンビはいないのではないか？と……。

これは早織も姉貴もすぐに気づいた。ゾンビ大量発生は東海林市だけの出来事だと。

そして俺たちは一つの希望を手にした。

東海林市を脱出すれば平和な日常が戻ってくる！

（何度も引き合いに出して悪いが）某学園黙示録だとゾンビ発生は世界規模だから、軍なんかに匿われでもしない限り、安息の地は無かったのだ。

しかしゾンビ発生が東海林市だけの出来事だとしたら？東海林市を

出たらゾンビがいなかったら？

それ即ち、生と死の狭間から脱出できる！

希望が持てたとたん、みんながやる気を出し始めた。

昨日のうちに準備を済まし、俺たちは8月2日の8時に家を出る計画を立てた。

ここを脱出するんだ！その共通の目的のために、俺たちは今まで以上のチームワークで準備を終えた。

そして今日、8月2日午前8時ピツタシに、俺たちはまた戦いに行く。

今回は生き残るためだけじゃない。平和な日常を取り戻すために。

俺はニツと笑って立ち上がる。

まあ希望が持てたのはいいが、その前に飯だな。そう思ってキッチンに向かう。

「飯は？」

顔だけキッチンに出して理奈に聞く。姉貴はどうやらないみたいだ。

「そのカウンターにあるやつ」

食器を洗っていた理奈は一旦洗うのをやめ、キッチンに併設されたカウンターの upper を指差す。

指差した先には皿いっぱい野菜炒めと豆腐の味噌汁と空の茶碗があった。

俺はカウンターに回りこんで、三つあるイスの真ん中に座る。空茶

碗を理奈に渡して普通盛りで。と言った。

「普通盛りで足りんのか？」

「うっせ。お前じゃねえんだ、そんなバクバク食えねえよ」

「そんなに食ってるつもりは無いんだけどな・・・」

お前マジか。米を茶碗（大盛りで）4杯いったやつがそれを言うか？
理奈は、そんなに食ってないんだけどな・・・とか言いながら、空
の茶碗に米を盛る。

昨日は大変だった。理奈が4杯いったから米が足りなくなって、結
局俺は米の代わりにインスタントのラーメンを食う羽目になったし
な。

ああそうそう、昨日の事と言えば、冬紀の天然が垣間見れたな。

「冬紀。そう言えばお前、家族に電話は？」

「あ・・・」

理奈のことがあったからすっかり忘れていたらしい。

冬紀はケータイを取り出すと、家に電話を掛けた。俺はしばらく待
つ。

「・・・おかしいな」

「どうした？」

俺が聞くと、冬紀はうん・・・と言ってケータイを耳に当てたまま
俺を見る。

「電話に誰も出ないんだ……」

俺は頭に？マークを浮かべて首をかしげた。

「出かけてるんだろ？まあいいじゃないか、ここを脱出すれば会えるわ」

「……そうだね」

冬紀は通話終了ボタンを押してケータイを閉じた。

……何てことがあってさ。冬紀は天然だね。

「ほい普通盛り」

「おっ、絶妙な普通盛り」

気づけば理奈が茶碗を差し出していた。俺は受け取って、そばの箸立てから箸を一組取り出す。

「（富士山の）頂増す」

「くだらねえことやってねえでさつさと食べえ！」

「へいへい」

「へいは10回！」

「へいへいへいへいへいへいへいへいへい……って生徒会の存か！！」

「さつさと食べ」

「俺アウエー!?!」

理奈が冷たい……。俺は半ベソで一心不乱に飯をかき込んだ。

しばらくすると階段から早織が降りてくる。

「おう早織っ！見張りが終わったのか！」

「ちよっやめてよ。米を飛ばさないで」

「すまんすまん」

早織は俺と同時刻に見張りについていた。姉貴の部屋からな。

彼女は俺の左隣に座ると、小盛りで・・・と言った。理奈は皿にのつた野菜炒めと、お椀に入った味噌汁、そして小盛りの米が入った茶碗を持つてくる。

「ほい、見張りご苦労さん」

「ありがとう」

ちよつと待て、俺には労いの言葉は無かったぞ。あゝでもいいや。今は飯、飯。

野菜炒めを口に放り込んで、飲み込む前に米をかき込む。あゝうまつ。飯食つてると生きてる感じがするな。

今の状況に合わせて表現するなら・・・かゆつま・・・か？

・・・ちよつと違うねえか？まあどーでもいいや。

俺が至福の時を堪能していると、横に座った早織が口を開く。

「あんたって本当に美味しそうに食べるわね」

「ん？」

見ると早織は俺の顔をガン見していた。俺ってそんなに分かりやすいのか？

「顔が幸せそうなもの」

「そういえば、円さんと姉貴が俺の食べるときの顔は可愛いわって言うってたな」

「可愛いかどうかはともかく、出会ってから一番良い笑顔を見た気がするわ」

そうなのか。初めて知った。

でもなあ……

「お前だつて食つてるとき良い顔してるぜ？」

すると早織は鳩が豆鉄砲を食ったような表情になる。

「……そう……自分の食べている時の表情なんて誰も知らないから分からなかったわ」

「そうなのか？」

早織は一転して悲しそうな表情になり、俯いて小さく呟いた。

「誰も……私には近づかないもの」

「……」

その顔には暗い影が落とされて、早織をより一層悲しく見せる。理奈もつい耳に入ったのか、対処に困って明後日の方向を見ていた。そんな中、俺はじゃあ……と少し笑う。

「俺が初めて早織の食っている時の良い表情を見たわけか」

「……」

何気なく言った一言で早織は凍りついたように固まる。俺……何

かマズイこと言った？

1、2、3秒後。早織は突然笑い出した。

「そうね、そうかもしれないわ」

何故笑う？そしてお前、昨日お前が後輩だつて聞いてから思ったんだが、先輩に敬意を払いなさいよ敬意を。まあいいんだけどね。俺はつられて笑い、理奈は言った。

「6時半過ぎたぞ」

それを聞いた途端、俺と早織は大急ぎで飯を食らった。

なんで急ぐのかつて？8時出発だけど色々準備せなアカンやないか！7時に最終ミーティングだし。

・・・午前7時。俺含め6人が、リビングに集結する。

リビングの壁に寄りかかる俺に、ソファに座る姉貴、円さん、早織、テーブルを挟んで俺の対面に冬紀、ソファの対面にあるテレビの前に理奈があぐらをかいている。テーブルの上には、東海林市の地図が広げられていた。

俺が最初に口を開く。

「で、まず聞きたいんだが、行きたいところはあるか？」

「シヨツピングモール」

「肉片にしてやるうか姉貴」

「ごめんなさい」

ふざけてんじやねえよ馬鹿めっ！

俺が冷静にボケを処理すると、早織が珍しく申し訳無さそうに言った。

「あの・・・一度家に帰りたいたいんだけど」

「わかった家族か」

理奈が確信したように口を開いた。おまっ、自分で禁句を・・・。

「ええ、母親が・・・」

「そつか。じゃあ一度帰らないとな！」

「「「「「「「「「「「「」

俺と冬紀と姉貴が硬直する。

まさか理奈がそんなこと言うとは・・・。いや、理奈だからこそ言ったのかもな。失った悲しみを知っている理奈だからこそ。

俺は承認して頷く。

「んじや、早織ん家決定でいいよな？」

『異議なし』

全員一致で早織の家けつてい。

俺は早織から家の場所を聞いて、地図にマーカーをつける。俺ん家から結構離れてんな。

マーカーをつけ終わると、もう一度みんなに問う。

「じゃ他、行きたいところは？」

するとみんなシーンと黙った。

おいおいみんな無いのか？と言うと・・・

「アタシは家族いないし」

と理奈が言った。

「僕の家族は市外にいるから」

と冬紀が言った。

「お姉さんの家族はここにいるし」

と姉貴が言った。

「私は嫁いできたから」

と円さんが言った。

行く行かない以前の問題だったんだな。俺はため息を吐いて現在の決定事項を確認する。

「じゃあ、早織ん家行って脱出。ってことでいいか？」

『意義なし』

ということでの件終了。

俺は早織ん家にたどり着ける様々なルートを地図に書き記す。合計三つってところか。

三つぐらいルートを確定した俺はみんなに配って、出来るだけ頭ん中にルートを刻み込んで、と言った。

何で？という声も上がったが、早織がタイムラグを無くすためでしょ？まさかゾンビの真っ只中で地図を広げるの？と言うとみんな納

得してルート暗記を始めた。

最後の1人がルート暗記を終えたところで、次の案件に移る。

「次は今分かっているゾンビの特性について」

冬紀がノートを干切った紙切れを読み上げる。

特性1 ゾンビは食欲を満たすためか人を食べる。

特性2 ゾンビに噛まれるときつかり30秒でゾンビになる。

特性3 ゾンビは脳によるリミッターが効いてないのか物凄く力が強い。

特性4 ゾンビの動きは鈍く走ることはしない。

特性5 ゾンビに視覚、嗅覚、痛覚は無い模様。

特性6 ゾンビは聴覚で人を探す。

特性7 ゾンビの聴覚は異常発達しているらしく、ゾンビの足音と人の足音が聞き分けられる。

特性8 ゾンビに自我は無いため物を避けるといった動作はしない。

「次に今分かっているゾンビの弱点について」

冬紀は視線を紙切れの下のほうに向ける。

弱点1 聴覚でしか人を追えない為、別の音源をおけばそこに向かう。

弱点2 頭を燃やせば聴覚が使えなくなる為、人を見失う。

弱点3 人の足音は聞き分けられるが、他の音を聞き分けることが出来ない。

弱点4 脳を破壊すれば行動を停止する。

「以上がゾンビに関する今分かっている情報です」

うゝんゾンビについて色々分かってきたな。これ纏めたのほとんど俺なんだけどね。

ちなみにお気づきですか皆さん。このミーティングに円さんがいることを！（最初に言ったじゃんてのは無しね）
まあぶっちゃけ、円さんだけ置いていくことは出来ないし、じゃあ連れてけば？的なノリで円さんに事情を説明して（2時間かかったけど）、ようやく理解を得られたわけよ。

俺今、何か言ったか？何故か悪寒がする。

「どうしたんですか良祐さん？」

「・・・いや、なんでもない」

円さんが俺の不自然な様子に気づいて声を掛けてくれる。いや、ありがたいね。

視線を早織に移すと、早織は頷いて口を開く。

「次に物資だけ・・・」

みんなは聞き逃さないように耳を傾ける。

スポーツ飲料500ml5本。

オレンジ、アップル、グレープジュース1リットル各1本。計3本。

ウーロン茶2リットル2本。

麦茶1リットル1本。

飲料水2リットル3本。

カロリーメイト5箱。

インスタントラーメン8袋。
食材5食分。

金属バット(家にあつたやつ) 1本。

鉄パイプ1本。

木材1本。

細身の角材(家にあつたやつ) 1本。

木刀(家にあつたやつ) 1本。

モップ1本。

箒(1本は家にあつたやつ) 2本。

鉈(家にあつたやつ) 1本。

包丁(もちろん家にあつたやつ) 3本。

果物ナイフ(上に同じ) 2本。

短刀(家に何故があつたやつ) 1本。

ハンマー1本。

弓1本と矢2本。

ノートパソコンと予備バッテリー2個。

東海林市の地図(マーカー有り無し)。

救急箱(一つは家にあつたやつ) 2箱。

治療道具一式。

調理用カセットコンロ(家にあつたやつ) 1つ。

カセットボンベ(家に・・・あつた) 3本。

調理用包丁(家の・・・) 2本。

まな板(家・・・) 2枚。

フライパン(・・・同文) 2つ。

鍋の大型(＃) 1つ

クーラーボックス大型(みんな分かってるだろ?) 2つ

「・・・ってところかしら」

早織がふうと一息ついている間に、俺は頭の中でのいるものといらないものに分ける。

「オレンジ、アップル、グレープジュースはいらないな」

え〜と言う声が早織を除く女性陣から上がるが、現地調達と言ってバツサリ切り捨てる。

「飲み水はいいとして、食料だな・・・」

カロリーメイトやインスタントラーメンはいいんだが、食材が何ともいえない。早く食わないと傷むだろ。

最悪みんなで一気食いだな。俺は勝手に決定する。

「武器だけどうする?」

俺が聞くと各々が要望を出す。

「僕は木刀と木材かな」

「アタシはハンマーと鉄パイプでいいや」

「私は前衛には向かないわ。でも念の為モップでいい」

「お姉さんは第2本で〜」

「私はですね良祐さん。角材あたりがいいです」

「へいへい」

え〜と、みんなが矢継ぎ早に言うから整理できねえじゃねえか。何だっけ・・・?ああそうそう、だからつまり・・・

冬紀が木刀と木材

承認。

理奈がハンマーと鉄パイプ 承認。
早織がモップ（待てよ？） 保留。
姉貴が箒2本（・・・？） 保留。
円さんが角材（おっ！） 保留。

いいこと思いついた。とりあえず冬紀と理奈は良いとして。
他三人の武器に一手間加えてやろう。

「なあ円さん。ガムテープとか、とりあえずテープ類なかったっけ？」

「えっ？ありますよ？」

「悪いけど持ってきて。あとついでにタオルをありったけと、紐類もたくさん。みんなも武器類は一旦保留で、他の準備をしていくれ」

みんな頭に？マークをつけていたが、俺が言ったとおりに各々準備する。

しばらくして円さんが言われた材料を大量に持ってきて、俺は作業を開始した。

「出来た！」

俺が唐突に大声を上げると、準備していたみんなが俺のほうを向く。

『おおっ！』

みんなは俺の手元にある4つの武器に驚愕の声を上げた。俺はにし

しと笑う。

「まず早織が要望していたモップだけど、柄の先端に鉋をつけて殺傷能力を上げた」

俺は早織の手に、完成したスラッシュモップ（俺命名）を持たせる。

「どうだ？」

「いいわね。重さも申し分ない。ありがとう」

「どういたしまして」

早織は笑って、スラッシュモップを軽く振ってみる。
気に入ってくれたのか、しきりに頷いていた。

「次に姉貴の箒だけど、これまた柄の先端に包丁をつけてみたぜ」

俺はホウキセイバー（やっぱり俺命名）×2を姉貴に手渡す。

「二刀流ってな」

「良ちゃんが・・・お姉さんのためだけに・・・」

「おゝい、早織の分も作ったよ」

ありがとうおおおお！とか言って姉貴は抱きついてくる。やめろ！
恥ずかしい・・・って言いたいところだけど、危ない危ない！！
俺は姉貴から脱出して、最後の武器を持ってくる。

「最後に円さん要望の角材だけど、やっぱり先端に包丁をつけてパワーアップした上に、握りやすいようタオルを紐で巻いてある」

俺は円さんの手にしっかりと角材刃矛（かくざいじんむ）。命名は当

然ながら俺）を握らせた。

「まるで矛盾だな」

「良祐さんが・・・私だけのために・・・武器を!!!?」

「だから早織と姉貴の分も作ったって! 母娘揃ってこれかよ!!」

円さんは笑顔で、そりやもうキモイぐらいの笑顔で、角材刃矛に抱きついている。家の家族は・・・!

それより・・・と俺は武器製作で遅れた準備を急いでする。

「みんな準備できたのか?」

そう聞くとみんなは揃って・・・

『当然!!』

と言った。早いなあみんな。

俺は残った武器の短刀を腰のベルトに挿し、左腕に巻きつけた包丁の鞘に果物ナイフを入れ、同じく右足に巻きつけた包丁の鞘に同じ果物ナイフを差し込んだ。包丁が落ちないように紐をかける。

ケータイを右ポケットに入れて、カロリーメイトを左ポケットに入れて、胸ポケットにライターを放り込んで、右腕に巻いた腕時計を見る。

7時58分。

確認して、俺はすぐそこに置いていたバッグを持ち、みんなを連れてリビングを出る。

みんなは各々のバッグを持って、俺の後を歩いている。

「ところでリーダーは？」

俺の真後ろを歩く、姉貴が言う。

「んなもんいらねえだろ」

俺が言うと、三つ後ろを歩いている早織が反論する。

「そんなことないわよ。リーダーがいるのといないのでは天と地ほどの差があるわ」

すると、みんな肯定的な意見を示した。俺が、でもそうだと誰がやるんだ？と言うと、全員一致で・・・

「良祐じゃないかな」

「良だろ」

「良ちゃんよね」

「良祐さんでしょう」

「あんたがやんのよ」

と言いやがった。俺は早織がやればいいじゃんと言ったら・・・

「私はリーダーには向かないわ」

即答でした。俺はしばらく考え・・・

「わかったよ。そのかわり指示にはちゃんと従えよ」

みんなが首肯したのを確認して、俺は靴を履く。

「物資は？」

玄関の鍵を開けて、扉を開きながら言う。

「全部車に積んでありますよ良祐さん」

円さんが靴を履きながら言った。

俺はそうか・・・と呟いて、玄関先に立てかけられてあった金属バットを右手で持つ。

靴が履き終わった面々も、己の武器を手にした。

「頑張れよ運転手」

と言つて姉貴の肩を叩く。

「頑張ります！」

姉貴はより一層意気込んだ。

しばらくすると、全員準備が出来たのか俺のほうを見て、なにか言葉を待っている様子だった。

しようがねえか。俺はゆっくりと口を開く。

「んじゃ」

「あゝ、鍵閉め忘れちゃった」

「・・・・・・・・」

円さんが玄関で鍵を閉めるのを目視して、今度こそと口を開く。

「よっじゃ・・・」

「ハックション！」
「……………」

冬紀が小さくくしゃみをしてやがる。つくづく不幸だ。
でも…………

制服をピツシリ着ている冬紀がいる。

制服を着崩している早織がいる。

制服をちゃんと着ている理奈がいる。

スーツをだらしなく着ている姉貴がいる。

ワンピースの上にエプロンを着けた円さんがいる。

こんな沢山の仲間（家族交じり）に囲まれる俺は実は幸福なんじゃないだろうか？
俺は小さく笑う。

じゃあ、この幸福を無くさない為にもしっかりとリーダー努めますか！

「…………行くぜー！」

「ああ！」

「おうつ！」

「は〜い！」

「ええ！」

「はい！」

俺たちは歩みを進める。この先にどんな脅威があるうとも。生き残るために。みんなで生き続けるために。

俺はバットを担いで歩き出す。

まずは早織ん家だ！

第7話 新たなる希望（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回で正真正銘、紹介は暫くお休みなりますね。

いや、それにしてもいい展開です！わくわくしませんか？僕はこういうのを見ると、やってやらあ！って感じになりますけど。

新たなる希望を手にした主人公たち！彼らの前に敵はない！

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第8話 死亡フラグは叩き折るもんだ。普通のフラグが折れようと（前書き）

おはにちは！らいなあです！

活動報告って何に使うんでしょう？

とりあえず書いてはいますけど誰も読んでいないような気が・・・。

まあ閲覧回数が表示されないからわからないんですけどね。

出来れば皆様、活動報告も多少でいいので読んであげてください。

活動報告がかわいそうです。まあ僕もあまり見てないんですけどね。

今回の紹介は予定通りありません！やったね僕！

・・・悲しくなりました。

今回の現実デレタエン下は前回到引き続き新展開！

タイトルも気になるでしょう？

メインキャラたちの楽しげな会話を見ていけば、いずれ分かるかもしれない！

では、どうぞ！

第8話 死亡フラグは叩き折るもんだ。普通のフラグが折れようと

住宅地を悠々といった感じで走るシルバーカラーの車があった。メーカーはホンダ、車種はフリード。その運転席にいる姉貴は言った。

「ゾンビあまりいないから走りやすいね〜」

隣の助手席に座っている俺も生返事で頷く。

「そうだな・・・」

俺は地図を見てこれからのことを考える。

車で移動できるのは幸이었다。歩きだとのくらい掛かるか分かったもんじゃないし、みんなが疲弊しているところにゾンビでも来たら全滅だったな。

このままこいつで行きたいところだけど、早織ん家にこいつで行くにはかなり遠回りしなければならぬぞ。そんな余裕は無いし・・・でも歩きだしたら早くつけるんだよな・・・。

難しいところだ。

と俺の後ろの席に座る理奈が、なあ良！とテンション高く運転席と助手席の間から顔を出す。

「なんだ？」

そう聞くと理奈は遊園地に連れてきてもらった子供のように、はしやぎだした。

「楽しいなあ！家族でピクニック来たみたいで！！」

はは・・・確かに楽しかったかもしれない・・・

「外にあんなのがうようよ居なかったらな・・・」

視線を外のゾンビどもに向ける。数は少ないが、車で移動しているのに絶えず視界に入ってくるほどの量はいた。

ゾンビのもれなく全員が血だらけで服はボロボロで皮膚は爛れて肌色が土のような色だった。

「確かにいなかったら天国だったかもね」

姉貴の後ろの席に座っている冬紀が苦笑のような笑顔を浮かべる。それに理奈は憤怒の表情を浮かべ、歩く屍にけんか腰でぎよあぎよあ叫ぶ。

「この野郎！馬鹿野郎！死ね！お前らなんか死んでしまえ！！」

いやもう死んでますから。俺と冬紀は同時につっこんだ。

でも確かにいなければ楽しかっただろうな。俺は小さく笑って前を向く。

「なあ理奈」

「ん？」

理奈の顔を見ずに、俺は笑って言った。

「東海林市から脱出したらどこか行こうぜ」

「えっ？」

「・・・まゝ良ちゃん」

「良祐・・・それは死亡フラグだ」

「フラグなんて叩き折ってやればいいんだ！」

ん？みんなの反応がおかしいぞ？

俺変なこと言ったか？ああ分かったぞ！言葉が足りなかったんだな！俺は足りない言葉を補うため、口を開いた。

「温泉なんかどうだ！」

『・・・・・・・・・・』

なんだろう？この無言の重圧。理奈はともかくとして他の奴らから向けられる圧倒的無の視線！

俺何かしたか？理奈は理奈でそれってつまり・・・みたいな感じでおかしな世界に行ってるし。

何故だろう？冷や汗が止まらない。

・・・分かった！みんなは理奈だけを誘っているように聞こえたから、除け者にされたって思ってるんだ！

なんだみんな可愛いところあんじゃねえか。まったく、俺がそんな空気の読めない男だと思ってるのか？ちゃんと分かってるさ！

俺だって最初から「東海林市から脱出したら（みんなまで）どこか行こうぜ」って言ってたじゃないか！（作者の声：言ってますん）

よっしゃ、分かってないようだからちゃんと言ってやっか！
俺はちゃんと1からみんなに分かるように言った。

「大丈夫だって、東海林市からは無事に脱出できる！そしたら温泉にでも行こうぜ！“みんなで”！」

「みんな……で……？」

「おう！」

「……そ、そうだよな！みんなで行くんだよな！」

何言っただ理奈は？当然のことを今更……

と次の瞬間。みんなからの圧倒的無言の重圧と視線がさらに増した！

なんで？なんで！？俺本当に何かした！！？

何故か悲しそうな理奈に同情するように、俺に向けられるみんなの視線に殺気すらもっているぜ！

円さんと姉貴ですら乙女の純情を……！見たいな眼で睨み付けてくる！！

唯一早織だけが、本当にフラグを叩き折ったのね、みたいな視線で俺を見ていた。

俺は思う。言動には気をつけよう。

「……で、問題のここなんだが……」

「話を逸らさないでちゃんと聞いてください！」
「わかったから、今はこつち！」

俺たちが乗る車は、階段の階下で草むらに隠れるように止めてあった。

階段を上ると上にそこそこ大きな公園があるらしい。

ていうか、さっきから円さんが一方的にさっきのことについてぐち言ってくるが意味分からん！

やれ乙女の純情だの、やれフラグを立てて自分で折るだの、意味分からんことばかり言ってきやがる。

はっきり言っておくが、俺は乙女の純情をどうこうした覚えもないし、フラグを立てた覚えもない！

俺は早々に円さんとの話を打ち切ると、重要な案件に戻る。

「早織ん家行くルートなんだが、車で行くルートと歩きで行くルートがあるんだがどうする？」

すると一番後ろの席に座った円さんが不満そうにも口を開いた。

「車で行ったほうが楽じゃないですか」

まあ普通はそうだろうな。でも両ルートにはそれぞれデメリットがある。

俺はみんなに両ルートのメリットとデメリットを告げる。

車で行くルート（普通に道路を走行）

・メリット

ゾンビと戦わずに済む。
体力消費が最低限になる。

・デメリット

車の燃料がかなり減る。

早織の家までおよそ30分掛かる。

徒歩で行くルート（公園を横切り近道する）

・メリット

早織の家まで10分と掛からない。

車の燃料をかなり温存できる。

・デメリット

ゾンビと戦わなければならない可能性大。

体力をかなり消費する。

武器の消費値が上がる。（ようは壊れやすくなる）

「あとは・・・徒歩で行くルートのメリット、経験値が上がる」

「馬鹿にしてるの？」

「すいませんでした」

即行で謝罪する。早織は冷たいな。

俺はそんなところか・・・と言つてみんなに意見を募る。

みんなとても悩んでいる様子で暫く考えていた。

数秒して早織が最初の意見を述べる。

「私は徒歩を推奨するわ。車は大事だからね」

すると次々に意見が述べられた。

「僕は車かな出来ればあまり戦いたくはないし」

「アタシは徒歩だ。ゾンビが来ようとぶつつぶしゃいい!」

「お姉さんは車かな?ゾンビに会いたくないし」

「私はですね、徒歩がいいと思います。大事な愛車を壊したくはないので・・・」

これで俺以外の意見が出揃ったわけだ。統計すつと車：2、徒歩：3か。

みんなは俺の意見を待っているようだった。しょうがねえな。

俺は結果を発表する。

「徒歩だな。徒歩で行こう」

みんなは各々で様々な反応を示したが、最終的には従ってくれた。俺は出発前の号令を掛ける。

「みなさん。準備はいいですか?」

『はい!』

早織以外の全員が手を上げて返答する。

「早織さんの家までの道のりは覚えましたか?」

『はい!』

やはり早織以外の全員が手を上げて返答する。

「武器は持ちましたか?」

『はい!』

言わずとも分かるが、早織以外の全員が手を上げて返答する。

「じゃあ行くぜお前ら!!」

『おうつ!!』

「おうつ……」

今回は小さい声ながらも早織も返答してくれた。

近くにゾンビがないことを確認して俺たちは車から飛び降りる。最後に姉貴が車の鍵を閉めて、準備完了。

俺たちは静かに公園へと向かう階段を上っていった。

「上の公園そこそこ大きいって言うけど、どんぐらい大きいんだ？」

左後ろを走る理奈が、その後ろの早織に聞く。

「そこそこ大きいと言ってもあまり大きくないわ。そうね、ただ言えることは……」

その言葉が出る前に先頭の俺は階段を上りきった。公園が視界に……俺の思考はフリーズする。

みんなも階段を上りきって公園を視界に映した途端、瞬間凍結する。唯一見慣れている早織は普通に二の言葉を紡ぐ。

「学校のグラウンドの2倍以上はあるかしら」

視界一杯に公園……いや、もはや一つの遊園地が映った。

俺たちは木が生い茂った公園（笑）の中を静かに歩く。
幸い、ゾンビにはまだ遭遇していない。

「どこが公園だよ。もはや木が生い茂った遊園地じゃねえか」

これを公園と呼べるわけが無い。しかしここに公園と呼んでいる奴がいる。

早織・・・お前はあれですか？どこかのお嬢様ですか？

「そうかしら？私の家の庭の半分くらいしかないけど・・・」

はい出ましたお嬢様発言。この野郎、普通の一般市民の庭なめんなよ。この公園の8分の1もねえんだぞ！

あれ？つてことは早織の家の庭は一般市民の16倍以上！？

・・・一回殴っていいかな？

「良祐・・・何故あんたは金属バットを振り上げているの？」

「はっ！？しまったしまった。いやなんでもない」

ついつい早織を殴打するところだった。危ない危ない。

バットを肩に担ぎ直し、視線を前に向ける。

「ん？」

すると視線の50メートル先にうら若い20〜30歳ぐらいの女性が俯いて立っていた。

ゾンビか？と思ったが、ゾンビにしては様子が変だ。普通にすぎ

ている。

「良祐さん、あの人は・・・」

「生存者じゃないか？良祐」

・
・
円さんと冬紀が生存者だと思って、女性に近づこうとする。しかし・

「待て、様子がおかしい」

しかもどこかで・・・見たことがある気がする。

特徴はオレンジ色のスーツを着て、首元に赤い布を巻いている。顔は見えないけど肌年齢で多分2〜30代。

そして左手には白いバッグを持っている。どこかで見たような・・・
そして俺は気づく、彼女は昨日見た。

学校に行く途中、遅刻しそうだった俺は近道と称して、人通りが皆無の薄暗いわき道に入った。

その時に見た様子のおかしな女性、そいつと同じ格好をしている。
昨日は彼氏にフラれて男でも探してんのか？と思ったが、今なら分かる。

彼女は昨日出会った時点でゾンビだったんだ。ゾンビは午後に発生したんじゃない。午前の時点でゾンビは発生していたんだ。

そして首元の布は元から赤いんじゃない。彼女の血で赤く染まっていたんだ。

もしかしたらあれが・・・「始まりのゾンビ」かもしれない。

「……………」

その始まりのゾンビは、ふらふらと歩きながらこっちに近づいてくる。

俺は瞬間的に悟る。こいつはやばい。今までの奴とは違う。

予想でしかなかったが、俺の本能が告げる。こいつは他のゾンビとは違う。

本能を肯定するように俺の直感が告げる。こいつは他のゾンビとは違い、呼ぶ。

直感を肯定するように俺の理性が叫ぶ。逃げる。こいつは……

俺はほぼ無意識にみんなに叫ぶ！

「逃げる！車に戻れ！！こいつは“食う”ゾンビじゃない！！……」

みんなは突然大声を出した俺に驚いたが、瞬間的に緊急事態だと悟ったようだ。

そして俺は叫ぶ。

こいつは……こいつは……

「……………呼ぶ”ゾンビだ！！」
……………「呼ぶ”ゾンビだ！！」

刹那……

【-----!】

始まりのゾンビは超音波の如き声を発して、血の涙を流す。

「ぐう!?!」

「にやああああ!?!」

「うわっ!?!」

「きゃあ!?!」

「なに!?!」

「何ですか何ですか!?!」

全員して耳を塞ぐ。地を揺るがしてる感覚すら覚えるほどの大声量に、俺たちは思わずしゃがみ込む。

この大声量の中逃げるのは難しいだろう。そう思っていたとき……

「おいおい……嘘だろ……」

始まりのゾンビの後ろから、大量の……今までとは比べ物にならないほどに大量のゾンビが、今までより速い……歩きから早歩きぐらいのスピードでこっちに向かってくる。

みんなも大量のゾンビに気づいたようで、顔を青く染めた。

「今度こそ本当に絶体絶命?」

大声量の中、理奈がそう言った気がした。

第8話 死亡フラグは叩き折るもんだ。普通のフラグが折れようと（後書き）

いかがでしたでしょうか？

良祐たち絶体絶命ですね。今までに無いくらいの。

そして新ゾンビ！これは龍が如くの最新作に確か出てきたような気がします。

まあこの新ゾンビはその最新作からヒントを貰いました。

最悪のゾンビと出会った主人公たち！やっぱり彼らの前に敵はある？
それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

・・・ああそうでした！皆さんはオリジナルについてどう思います？
実はいずれ銃火器を出そうと思うんですけど、なにぶん銃火器には疎くて・・・。

オリジナルの会社とかオリジナルの拳銃とかって皆さんは有りですか？無しですか？

御意見をお願いします！（知識に）恵まれない僕に救いの手を！

第9話 お前の死亡フラグはオリハルコン製（前書き）

おはにちは！らいなあです！

最近歯医者に行って来たんですが、麻酔ってあるじゃないですか。

あまり好きにはなれませぬね。地味に痛いんですよ。

しかもその後にガリガリ削られるし。好きな人っているんですかね？

というわけで某県某市にある家でぐちぐち前書きに書き込んでいる僕でした。

紹介はありません。キャラいないですから。

というかタイトルのオリハルコン製の死亡フラグってなんでしょう？折れないんですかね？

ちなみにオリハルコンは伝説上の金属で最硬度の硬さを持っているらしいです。よくは知らないんですけどね。

こんなふざけたタイトルですけど内容は結構まともです。多分。

第9話 お前の死亡フラグはオリハルコン製

「今度こそ本当に絶体絶命？」

大声量の中、理奈がそう言った気がした。

やばいな。でかすぎる音に耳がほとんど使えない。

あの始まりのゾンビでも倒さない限りキツイかもしれないな。でもまあそれより前に・・・

俺はポケットからケータイを取り出し、メモ帳を起動して即行で一言書いて、みんなに見せる。

『逃げるぞ』

それを見たみんなは頷いて、バランスを取りつつ立ち上がった。

一番後ろにいた円さんと姉貴が後退し、次に早織、そして冬紀と理奈が後に続く。

俺は視線を前方のゾンビ群から外し、後ろを振り向いて全力で逃げた。

くそ〜こんなことなら対策作っとくんだっただな。もう後の祭りだけど。

俺はゾンビが何処まで来てるのか確認するために軽く振り向く。

げっ！？始まりのゾンビ（ハーメルンと呼ばう。もち俺命名）がそこそこの速さで追いかけてきやがる！

追いつかれる心配は無いが、振り切れる自信もねえぞ！って言うか、奇声発しながら走んじゃねえよ！！

しかも普通のゾンビどもに囲まれてやがるから手出しできねえ！

でもこのままだと全滅は必至だ！

俺は意を決し、ケータイに『車に走って逃げる。時間は俺が稼ぐ。戻ってこなくていい』と書くと、一番近くの冬紀に渡す。

そして反論が出る前に足を止め、俺1人だけ右に行く。よし、ハーメルンがこっちに来たから他のゾンビも全部こっちに来たぞ。

冬紀は何か言ってるように見えたが、ハーメルンの大奇声のせいで何も聞こえなかった。

さて問題はこれからどうするかなんだが・・・

公園を疾走する俺は考える。でも・・・

いい案が浮かばない。かといって死ぬ気も無い。じゃあどうすればいいんだ？

俺はずっと走りながら考える。考える。考える。無理だな。浮かばない。

1人三文芝居をしてみるが、やはり神が降りてこない。

まあ落ち着け俺。いきなり対策を考えようとするから浮かばないんだ。逆にゾンビの特性を思い出してみよう。

特性1 ゾンビは食欲を満たすためか人を食べる。

特性2 ゾンビに噛まれるときつかり30秒でゾンビになる。

特性3 ゾンビは脳によるリミッターが効いてないのか物凄く力が強い。

特性4 ゾンビの動きは鈍く走ることはいらない。

特性5 ゾンビに視覚、嗅覚、痛覚は無い模様。

特性6 ゾンビは聴覚で人を探す。

特性7 ゾンビの聴覚は異常発達しているらしく、ゾンビの足音と人の足音が聞き分けられる。

特性8 ゾンビに自我は無いため物を避けるといった動作はしない。

で、次に弱点を思い出すか。

弱点1 聴覚でしか人を追えない為、別の音源をおけばそこに向かう。

弱点2 頭を燃やせば聴覚が使えなくなる為、人を見失う。

弱点3 人の足音は聞き分けられるが、他の音を聞き分けることが出来ない。

弱点4 脳を破壊すれば行動を停止する。

それで、現在使い物にならないのと、使えるやつを分別してみようか。

特性1 ゾンビは食欲を満たすためか人を食べる。

これはまあ当然。

特性2 ゾンビに噛まれるときつかり30秒でゾンビになる。

いや俺噛まれる気ねえし。

特性3 ゾンビは脳によるリミッターが効いてないのか物凄く力が強い。

ほうほう捕まったら終わりだな。

特性4 ヴンビの動きは鈍く走ることはしない。

早歩きしてますけど。

特性5 ヴンビに視覚、嗅覚、痛覚は無い模様。

ん？だとしたらハーメルンは何で俺たちを認識したんだ？声は出したけどあの距離じゃ聞こえないはず。

特性6 ヴンビは聴覚で人を探す。

ハーメルンは聴覚が異常発達した固体？でもそれだと自分の声で聞こえないはずだ。

特性7 ヴンビの聴覚は異常発達しているらしく、ゾンビの足音と人の足音が聞き分けられる。

だとしてもあの大声量の中じゃ聞き取れるはずが無い。

特性8 ヴンビに自我は無いため物を避けるといった動作はしない。

でもそれは人を見つけた場合は論外だ。人の足音についていく。ん？ついていく？

まてよ………そうか！

普通のゾンビはハーメルンについて行ってるだけだ！ハーメルンが大声量で呼ぶかわりにゾンビの聴覚が使えなくなる！

つまり今俺を追っているゾンビはハーメルンに導かれて俺を追っているだけで、ハーメルンが俺を見失えば逃げ切れる！

ハーメルンはゾンビを呼ぶ存在であると同時に、ゾンビの指揮官みたいな奴なんだ！

そしてどうやって逃げるかだが、ハーメルンは聴覚で追っているわけじゃないんだろ？・・・まさか嗅覚？いや、死体に囲まれて鼻が利くはずがねえ。となれば最後は・・・

・・・視覚か！！

もちろん、人を感じ取れるとか、人が出す少量の電磁波を読み取るとか、そんな馬鹿げた認識方法じゃない限りはだけどな。

じゃあハーメルンのことが少し分かったところで、攻略法に移ろう。俺は公園の十字路をまっすぐ進む。

弱点に参考になりそうなやつあったけ？とりあえず思い出してみよう。

弱点1、聴覚でしか人を追えない為、別の音源をおけばそこに向かう。

論外だな。

弱点2、頭を燃やせば聴覚が使えなくなる為、人を見失う。

これはハーメルンにも有効だな。眼を燃やせば認識できなくなる。

弱点3、人の足音は聞き分けられるが、他の音を聞き分けることが出来ない。

音関係はハーメルンには効かないな。

弱点4、脳を破壊すれば行動を停止する。

ハーメルンも脳を破壊すれば死ぬのか（もう死んでるけどな）？でもどちらにしる無理だ。あの中を掻い潜カクレカクレって行くのは不可能だな。飛び道具でもあれば話は別だが。

どうする？どうする？どうする？考えろ、生き残るために！

武器は全然ねえんだ。公園にあるものを使え。今持っているものを使え！

頭を最大限に回せ！限界を超えるまで捻り出せ！限界を超えても捻り出すんだ！

俺は気持ちの高ぶりを感じるのに、冷静に思考できるといふ不思議な状態になる。

まずは道具を認識しろ。何かあるか頭に叩き込め！

視線を上にな下に右に左に動かす。視界に移った物から順に頭のリストに登録する。

1：大きな池。

2：ブランコ。

3：砂場。

4：シーソー。

5：滑り台。

6：アスレチック。

7：大きな噴水。

8：小高い丘。

9：ベンチ。

10：ゴミ箱。

- 11：街灯。
- 12：タイヤ。
- 13：公園中央の大鐘。
- 14：大鐘に続く階段。
- 15：屋台（アイス屋）。
- 16：トンネル。
- 17：自販機。
- 18：木の枝。
- 19：横転した黒い車。
- 20：生い茂った木々。
- 21：小さな観覧車。
- 22：公園に併設した店。
- 23：ビンの容器。

これであらかた公園のものは終わった。
俺は走りながら自分の持ち物を確認する。

- 24：短刀。
- 25：果物ナイフ×2。
- 26：ケータイ。
- 27：カロリーメイト。
- 28：ライター。
- 29：耐ショック腕時計。
- 30：金属バット。

よし、これで全部だな。あとはこん中から……!?!?
走りすぎた上に頭もフル回転だから疲労も困憊。俺は崩れかけた体
を持ち直して、後ろのゾンビの軍団を見る。

「ぶっ潰してやるハーメルン！」

ハーメルンを指を差し、俺にさえ聞こえないはずの声を投げかけた。体を前に戻し、乱れかけた呼吸のリズムを元に戻して頭を働かす。頭を最初からフル回転で、俺は最良の策を考える。

ゾンビを倒す必要はないから、ハーメルンを倒すか、ハーメルンの元まで行ける様にしなきゃいけないわけか。

俺は木の枝とビンの容器を手に取り、暫く考える。念のために確保したけど、どうすっかな……。と、視界に池が再び移る。池には脆弱そうな木の橋が架け渡されており、そのそばに街灯があるのが見える。

・・・閃いたぜ！

俺はスピードを上げて、横転している黒い車のそばまで行く。確かここら辺に……。あつた！ガソリンだ！ゾンビが来る前に、急いでガソリンをビンの容器に入れる。

あとは・・・

そして俺は池のそばまで行き、後ろを振り向く。ゾンビがわらわらと来てますねえ。

ゆっくりと池に渡されている橋の元まで行き、ゾンビを待つ。2〜30メートルぐらいまで近づいたところで、俺は橋を一気に渡り、振り向きざまにガソリンが入ったビンが橋に投げつける。ピンはパリンと割れて、中身のガソリンを橋に撒き散らした。奥からゾンビがいい感じに来てます。来てます。

さつき拾った木の枝に、ライターでしっかり火を点けて、ゾンビをひたすら待つ。

最初のゾンビが橋に差し掛かった時、俺は火の点いた木の枝を、ガソリンが撒き散らされた辺りに放り投げた。

「まずは先頭ゾンビ。You Are Dead」

瞬間、小さいながらも橋を吹き飛ばすほどの爆発がおき、先頭のゾンビは弾け飛んで肉片になった。

後続のゾンビも少しながらダメージを負ったようだ。さらに橋が落ちて関係無しに池を渡るゾンビたち。

いい心がけだ。うん。俺はそばにあった街灯のメンテナンス口辺りを金属バットで殴打し、外装を剥がす。あつたあつた。これこれ。

メンテナンス口を覗くと、奥のほうに目的の物があった。俺はそれを注意して握り、思いつきり外す。

「たらららつたらら　電源コード」

某国民的ネコ型ロボットの真似をしながら、俺はそれを引っ張り出す。池に視線を向けると、ハーメルンもいい感じに入浴中のようだ。

「Go To Heaven!」

天国にでも行つとけバーカと言いながら俺は電源コードを池に放った。

これまた刹那、池全体を青白い光が埋め尽くす。すんげえバリバリ
いってない？聞こえてないけど。

ていうかぎゃあああああ！めっさ光ってるううううう！！俺、
輝いてない？感電の光で輝いてない？

俺が1人で遊んでいる時にも、関係無しにゾンビは襲ってくるわけ
で。気づけば後ろにゾンビがあああああ。

「増援か。たかだか1体でどうする？」

ゾンビは俺に向かって両腕を突き出して早歩きで来るが・・・

「ひょいっと。ほら、落ちちゃっつよ？感電しちゃっつよ？あつ落
ちた」

簡単に避けて、ゾンビは池に落ちそうになって何とか止まるが、俺
が金属バットで押すと耐え切れずに落ちてしまった。

そのまま視線をハーメルンに移すと、ハーメルンは未だに死なずに
(死んでるけど)耐えていた。

「これで終わると思っただけよ？」

俺は池から少し距離をあけてハーメルンを待つ。

ハーメルン遅いなあ。ゆっくりとしか歩いてないぜ？

ゾンビを倒しながら暫く経った時、ようやくハーメルンが池から出
てきた。

「待ちかねたぞハーメルン」

ハーメルンは（当然だが）何も言わずに（常に声出してるからな）、俺に向かって歩いてくる。

ノーリアクションですか。そーですか。良いんですけどね。俺と君の関係は所詮その程度さ。

……このキャラ気持ち悪いな。俺がやったんだけど。

しょうがないなど、俺は金属バットを振り上げて待つ。

ハーメルンはそれでもなお歩き続けて、ついには距離が10メートルを切ったところで、ハーメルンに異変が生じる。

何だ？ 様子がおかしい。

見るとハーメルンは声を出すのを止め、項垂れている。
なんだあ？ 弾切れか？ と思った矢先……

ハーメルンが顔を上げ、有り得ないほど口を大きくあけて声を出した。

「ぐぐぐ……うおっ！？ ってえ！！？」

一瞬だけしか声を出していないのに、俺の体が浮き上がり、後ろの街灯に叩きつけられたのだ。

油断していたとはいえ、この力は凄まじい。

「マジかよ……こんな切り札持ってやがったか……」

街灯に叩きつけられた俺の体は、バットを手放してしまった上に、疲れも相まって動かなくなる。限界だな……

ゆっくりと迫るハーメルン。死期が近づいてるぜ！

そしてハーメルンは俺の真横に歩いてきて、ゆっくりとしゃがんだ。ああ・・・本当に死ぬんだなと思った。最期の言葉は何がいいだろう？

まだハーメルンが叫んでいるんじゃないかと思えるぐらいにキーンとする耳をつつとうしく思いながらも、俺は最期の言葉を考える。

俺に構わず先に行け！・・・そんな展開はない。

俺、帰ったら結婚するんだ！・・・今死ぬのに？

ん？結婚か・・・。今俺は誰の顔を一番に思い出したでしょう？正解は・・・言うのをやめておこう。言ってもしょうがないしな。

つと、ハーメルンが俺を食うらしいぜ。ていうかハーメルンも人食うんだ？まあゾンビだしな。

ハーメルンは口を大きく開けて俺の首筋に近づく。

俺はハーメルンが俺を食おうとする様を見ていよつと思つ。何故かつて？それは・・・

「逃げたくないんだよ」

じゃあ生きることからも逃げるなよ！！

「！！？」

そんな言葉が聞こえた気がした。俺は発作的にハーメルンを蹴り飛ばす！

瞬間・・・

「突っ込めー!!」

という言葉と同時にシルバーカラーの車が、左からハーメルンを轢き飛ばした。ハーメルンはゴロゴロと転がって、しばらく動かなくなる。車はそのまま横滑りで止まった。

突っ込んできた車は、メーカーがホンダ、車種がフリードの見たことのある車。・・・理奈たちだ。

「理奈!? みんな!? どうしてここに・・・!!」

するとみんなは言い方は違うけど助けに来たと言ってくれる。

俺は視線を助手席の理奈に向ける。

「お前!」

「はい!?!」

すると理奈はとても悲しそうな表情になって俯く。

「勝手に・・・死ぬなよ・・・。これ以上・・・知り合いが死んで欲しくないんだよ」

「・・・」

俺は何て馬鹿なことを選択しかけたんだろう。死ぬなんて有っちゃいけないのに。選択したらいけないかったのに!!

理奈にどう謝罪したらいいだろう? 土下座? 違う、その前に・・・

「大丈夫だ理奈。もう何でもない」

俺が生き続ける意志があることを証明しなければ謝罪すらさせて貰えないからな!

限界を迎えた体に鞭打ち、ボロボロながらも俺は立ち上がる。
ハーマルンもまだ死んでいないようで、ゆっくりと立ち上がり始める。

「悪いがハーマルン。理奈のために死んでくれ（もう死んでいる。
本日三度目）」

俺は限界を迎えてなお、それを超えて脚を動かす。走らせる。あいつの元へ。ハーマルンの元へ。
腰から右手で短刀を抜き放つ！それを逆手に持ち直し、強く握り締めた！

「いつけえええええ！りよおおおおおお！！」

理奈の応援を受け、俺はさらに加速して短刀を持った右手を引く。完全に立ち上がったハーマルンは、さっきの衝撃波を出そうとしているのか、口を大きく開けて俺を見据えた。

「お前の死亡フラグはとつくのとうに立っている！ハーマルン！！」

ハーマルンが衝撃波を出そうとした瞬間、俺は短刀を思いっきりハーマルンの口に食らわせる！！

「ぐぐぐぐ・・・！！」

ハーマルンの衝撃波と相まって、短刀の刃がやつつの口にもうちよつとつてところで止まってしまった。

しかし俺はそれでも諦めず、さらに強く押し込む。衝撃波が勝つか、俺の右腕が勝つか。

勝敗は……

「折ろうとしたって！お前のフラグはオリハルコン製だあ！！」

ハーメルンの口の境目に短刀を押し込み、口の境目から体と頭を分離させる。ハーメルンの頭がポトツと地面に落ちたとき、ハーメルンの体から大量の血液が噴出す。
そしてやつのは、静かに地面に崩れ去った。

……俺が勝った。

「きたねえ噴水だな」

短刀についた血を振り払うと、腰の鞘に仕舞う。
俺は振り返り、理奈に報告する。

「ごめん理奈。んで、勝ったぜ！」

第9話 お前の死亡フラグはオリハルコン製（後書き）

いかがでしたでしょうか？

あれ？意外とまともじゃない？

真面目なバトルのはずなのに所々ギャグが・・・。

良祐今回出すぎですね。次回は出番減らしましょうか？

そして何より死ぬ間際！彼は誰を思ったんでしょう？

勘のいい人ならあいつだと分かっってしまうかもしれません！

しかし、あえて・・・みたいなこともあるかも・・・。どうなるんでしょうか？

ちなみに良祐が呼んでいた「始まりのゾンビ：ハーメルン」はご存知の方も多いでしょうが、ハーメルンの笛吹き男から抜粋しました。女性のゾンビだったんですね。

一説によると笛吹き男は魔術師という記述もあります。ウイ ペデア
イア調べですけど。

何とか生き残った主人公！今度こそ本当に小林邸へ？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

前回に続き告知。

オリジナルの銃火器についてはいつでも御意見をお待ちしています！

感想、メッセージ、活動報告欄のコメント、いずれの方法でも構いません！

（知識に）恵まれない作者に救いの手を！

第10話 法律に免許は必要だが運転に免許は必要ない(前書き)

おはにちはーらいなあです！

僕は学生ですので学校に行くんですが、最近体がだるくて家の外に出たくなくなるんですよ。

でも行かないや単位取れないし……。

しょうがないから行くんですけどね。

僕としては将来の夢がニートなんで一日中家にいたいんですけど。

そんなこと言っちゃ駄目ですよ。頑張ります。

紹介はありません。紹介するキャラいないんですけどね。

今回はギャグ回かもしれませぬ。

第10話 法律に免許は必要だが運転に免許は必要ない

「あゝ無理。体が動かない」

俺たちの足である車の後部座席一番後ろのシートに横たわっている俺が唸る。

すると前のシートの右側に座る冬紀がしょうがないさと言った。

「10分くらい走り続けて、ハーメルンの衝撃波を受けたんだから冬紀の言葉を証明するように、俺の体はピクリとも動かない。唯一、頭だけが動かせる状態だった。」

「あの後大変だったんだぞ？」

前のシート左側に座っている理奈がまったくよと顔をしかめる。結局その後、理奈に許してもらったことは出来たが、直後に気絶するという事態に直面した(らしい)。体を酷使しすぎたんだねそして冬紀(だけ?)が俺の体を担いで、今いるこの一番後ろのシートに寝かせた(らしい)。

暫くして眼が覚めた俺は、事の顛末をみんなに説明し現在に至る。

「はゝありがたや、ありがたや」

「放り出してやろうか？」

「すみませんでした」

開口一番のボケが理奈によって冷たくあしらわれる。ひどいな。ちなみに現在、俺たちは早織ん家に向かう前に、一番近くのガソリンスタンドでフリードに飯を食わせていた。外には姉貴と早織が見

える。

理奈と冬紀は体力温存のためにフリード内で待機。早織は姉貴が燃料補給している間の見張り役だ。それで円さんかというと・・・

「はい良祐さん。あ〜ん」

「結構です！」

俺の頭の下に座っている。つまりは俺を膝枕していた。あれ？なんでこうなったんだっけ？確か・・・

姉貴が世話係がどうの言い出して・・・
お姉さんがやる〜って姉貴が言つて・・・
みんなが運転しろって言つた時に・・・
円さんがじゃあ私がやります〜とか言い出したんだよな。

うん。思い出した。姉貴のせいだ。間違いない。

俺は膝枕を回避しようとするが、頭しか動かさずに断念する。

「懲りない子ですね〜。早く体を完治させるために動かないで下さいって言つたじゃないですか？」

円さんに、唯一動く頭すらガシツと驚づかみにされ、いよいよ動かせるのが目線だけになったぞ。

「円さん？顔が怖いですよ？あいたつ！強く掴まないで！割れる割れるう〜！駄目！駄目！あああああああああ！！」

「変な声出すなよ気持ち悪い」

理奈が早織張りの冷静なツッコミを入れるの最後に、俺の視界はブ

ラックアウトした

ああ〜やばい。体が重てえ〜。まるで何かに乗っかってるみてえだ。マジ死ぬ。やばすぎる。横綱でも上に乗ってんのか？俺はうなりながらゆっくりと目蓋を開いた。

「眼が覚めたのか？体は大丈夫か良祐？」

視界に冬紀が映る。やつの体は俺のほうに向かって置かれており、下半身と思しき場所が視界の左側に消えて・・・は？

俺は背筋が凍るのを感じる。何故ならそれは紛う方ない膝枕だったからだ。

「ぎゃあああああああ！！何で冬紀が膝枕してんだ！？冬紀はアレか！？ボーイズ ブ系の人だったのか！！？」

「人聞きの悪いこと言うなよ！！僕はいたって普通だ！！」

怒鳴る冬紀をガン無視して俺は体を起こそうとする。しかし・・・

「おもおおおおおおおおおおおおおおい！！！！」

そっぴや重たいからって眼を覚ましたんだよな。俺は視線だけを自分の体に向ける。

「アタシはそんなに重くなあああああああいい！！！！」

見ると理奈が俺の上に座ってやがった。理奈は大絶叫すると思いつ

きり体重を掛ける。

「重い！重い！重すぎる！！何だお前ら！怪我人を甚振って何が楽しい！！！」

「僕までその括りなのか！？」

なんか冬紀が言っていたがそれどころではない！重すぎる！！

俺の体がミシミシと嫌な音をたて始めた（多分）。

理奈は理奈でアタシは重くない！訂正しろ！とか言っていてやがるが、自分で体重掛けといて何言っていてやがる！

「訂正してやるから、まずどけるおおおお！怪我人は労われっ！！！」

二眠りしたおかげで少し体が動くようになったが、上に理奈が乗っているせいで実質足ぐらいしか動けない。

足をバタバタさせるも効果は皆無で、理奈は今すぐ訂正しろ！とかぬかしやがる！

ここは素直に訂正しとくのが正解か。俺は直感し、即行で口を開いた。

「訂正します。理奈は重くありません」（棒読み）

「棒読みだから却下」（早口）

てええええええええええめえええええええええええ！！

訂正したろうが！棒読みは駄目だなんて聞いてねえぞ！！

俺は心の中で大絶叫し、ひたすら理奈への不満を（心の中で）吐露すると、冷静になって今度こそと意気込む。

「全然重たくないさ。理奈は天使の羽のように軽いよ」

「じゃあ問題ないな。ていうか口調キモいぞ」

理iiiiiiiiiiiiiiiiiiii奈aaaaaaaあ
あああああああああ！

この　　女があああああ！この　　！！お前なんか

で　　で　　だあああああ！！

放送禁止用語を惜しげもなく（心の中で）大量投与する俺は、怒りから現在枕になっている膝に後頭部で頭突きをかましまくる。

痛い痛い！良祐やめろお！！と馬鹿な冬紀が叫びまくるが、完全に無視。今はBL小僧に興味は無いのだ！

俺は八つ当たりをしまくり、何とか落ち着いた頭で冷静に考える。

理奈に何を言っても無駄だろう。ならば頭を使えばいいだけのこと。俺は視界に映る理奈が、“俺の上”に乗っている事を確認すると、二カツと笑って口を開く。

「理奈、どうしても良いけどこれはマズイ」

どうしても良くねえよ！と理奈は反論するが、もちガン無視。

出来るだけ真剣な表情で、俺は目線で理奈を誘導しながら言い放つ。

「位置関係が絶妙だ」

「？」

俺の視線は理奈が座っている辺りを指し示し、俺の体のどこに理奈が座っているかを彼女自身に確認させた。

つられた冬紀も視線を向けて、二人は気づいたようだ。

理奈は、俺の……（言ったら負けだ）の辺りに（あくまで辺りに！）座っていたのだ！

「きゃああああああああああああああああ！！！！？」

「一本取られたね理奈（笑）」

おっ！理奈のことだからぎゃあああああって言うのかと思ったけど、意外と可愛い悲鳴じゃないか。

冬紀にいたっては大笑してるぜ。はっはっはっ。それ見たことか！

しかし俺は一つ計算間違いをしていた。それは理奈が暴力的だということ。

「死ね！馬鹿！！！」

「あたああああああ！！！！？」

理奈は腕を振り上げ、俺の顔面真ん中に思いっきり振り下ろした！顔が割れるうううううう！！

「んで？他のみんなは？」

助手席に座った俺が不機嫌で聞くと、後部座席一列目に座る理奈と冬紀は申し訳無さそうに理由を語る。

「偵察に出ているよ。ここは早織さんの家の近くなんだ」

「護衛には姉さんがついて行っている」

「円さんか。なら問題ないな」

俺は一転して頷く。なるほど、円さんならゾンビなんかには遅れは取らないだろう。

ちなみに理奈は円さんのことを姉さんと呼んでいる。多分、円さんが強いからじゃねえか？
ん？ていつか・・・

「お前らは何で行かなかつたんだ？」

二人を代表して冬紀が簡潔に述べる。

「君と・・・先生の護衛」

冬紀は俺を指差した後、運転席で眠っていた姉貴を指差した。
いたのか・・・。気づかなかつた。

・・・助手席にいるのに。まあ寝てるしな。存在感なさ過ぎなんだよ。

そうか、寝ていて動けない俺と姉貴を守るのには、そこそこ実力の
ある二人が最適だったわけだ。

撃退より防衛の方が難しいからな。

しかしなんで姉貴起きねえんだ？あれだけ大声出してたのに？

あーなるほど。よくよく考えれば寝ているのにも無理はない、朝か
らずっと運転尽くめだったからな。・・・ありがとう姉貴。

心でそう呟くと、俺は制服の上着を姉貴に掛けてやる。お疲れさん。

「ところでハーメルン撃退からどのくらい経ったんだ？」

「一時間つてとこだろ？変なことしてなけりやもうちょっと速く着
いていたかもな」

そうか・・・そういやそうなんだよな。
俺があの時徒歩を選択せずにフリードで行けば、もう少し早く早織
ん家に着けたんだよな。

あれは完全に俺のミスだ。ここにはただのゾンビしかいないと思っ
て、油断していたんだ。

俺の常識で選択してしまった。常識は捨てなければならぬのに。
この世界に常識で挑めばほぼ必ず死ぬ。俺のは運が良かっただけだ。
あの時はみんなが生き残ったが次は無いかもしれない。もつと視野
を広く持たなければ。リーダーとして。

「次は間違えない」

「えっ？」

唐突な俺の言葉に、二人は困惑の様相を見せる。

「何でもない。生き残るぞ、絶対」

これまた唐突な発言だったはずなのだが、二人は全く意に介さず言
い放った。

「当然！」

いい答えだ。俄然やる気が出てきた。

俺は暇を持て余したし、次の目的地でも選んどきますか。
鼻歌交じりに地図を取り出した。二人も参加して、三人で思考を巡
らす。

「警察署は？」

「当てにならないだろう。銃声が聞こえないし、とつくのとうに逃げたか全滅だろ」

警察署にはゾンビ発生の初期にゾンビが向かってつた場所だろう。ゾンビを見た人は大体、守ってもらおうと警察署とかに行くからな。昨日のうちに署員は全滅したか、あるいは逃げたか。どちらにしる警察のシステムは崩壊、何の役にもたたねえ。そして何より、ゾンビが出たら警察署は壊滅するのがお決まりってな。・・・ゲームとかの話だ。

「なあなあ良。シヨッピングモールとかは？」

「立て籠もる気か？それにまだ遠い。車で3〜4区を越えなきゃなんねえんだぞ？」

車を使って5〜6時間。とてもじゃねえが次の目的地にはむかええ。それに行った所で、救助が来る見込みもねえ状態でどのくらい待って？武器はともかくとしても、食料が尽きたらおしまいだ。

それだつたら多少無理してでも東海林市を脱出した方が、まだ希望がある。

だが・・・

ゾンビにハーメルン。食うゾンビに呼ぶゾンビがいたんだ、もしかしたらさらに厄介な奴が出るかもしれない。

これで選択をまた間違えたら・・・。

俺は1人で唸る。それを見ていた冬紀と理奈は・・・

「1人で抱え込むなよ良祐」

「仲間なんだから頼ってくれてもいいんだぞ！」

「お前ら……馬鹿めっ！」

突然罵倒された二人は、はあ？といった表情で俺を見ている。そして俺は……

「だが、あんがとよ」

まったく、今日はよく人に助けられる日だ。……だが、悪くはねえな。

二人はニヤニヤニヤニヤ気持ち悪い笑顔を浮かべ出した。うわっ！
気持ちわるっ！

「良祐から感謝されるなんて……」

「明日は核弾頭でも降って来るんじゃないか？」

2秒で後悔した。言わなきゃ良かったぜ。

俺が感謝したことを激しく後悔していると、俺のケータイが突然震えだす。

「なんだ？」

右ポケットからケータイを取り出すと、液晶には早織と書かれていた。

ちなみに俺たち六人はそれぞれのケータイ番号を交換している。何かあった時に素早くやり取りできる様だ。

俺は通話ボタンを押して耳に当てた。

「ハロー！ジユディ」

『複雑骨折しろ！』

「ひでえ！？」

電話口の向こうから早織の悪態が聞こえる。第一声がこれかよ。俺はどう言い返してやるうかと思っていると、ふと早織の不自然な様子に気づく。

「早織お前、走っているのか？」

そう問いかけると早織はそうよ！と返答する。声大きいよ、落ち着け。だが、どうやら異常事態のようだな。

ボケを一旦封印し、冷静に事情を聞きだそうとする。

「んで、何があった？」

『私の家の近くまで着いたんだけど、玄関の前に2〜300を超えているゾンビが・・・！』

わおっ！なんちゆうこった！一筋縄じゃいかないやないの！

「追われているのか？」

『ええ！今、前原さんと東に逃げているわ！』

「東か！」

俺は地図を読み取り、早織の家から東方面を見る。

俺たちが今いるのがここで、早織がいるところは多分ここ。あまり遠くは無いが、フリードでも数分は掛かるな！

もし早織たちが東に逃げ続けたら、着く場所は・・・河川敷か！そこなら最短で行ける！

「何とか逃げ切って河川敷まで行け！俺たちもそこに向かう！」

『わ、わかったわ！』

俺は通話終了ボタンを乱暴に叩き、ケータイをポケットに放り込む。

「起きろ姉貴！起きろ〜！」

「むにゃむにゃ。良ちゃんそんな乱暴にしないで〜壊れちゃう〜」

こんのくそ姉貴め！起きやしねえじゃねえか！ていうか何の夢見てやがるこのやろう！

「どうした良祐！？何があった？」

冬紀があわてた様子で事態の説明を求めてくる。俺は二人に言いつつ助手席の扉を開けた。

「早織たちがゾンビに追われているらしい！これから河川敷に向かつて二人を回収する！」

扉を閉めて運転席側に回り、運転席の扉を開けて姉貴をお姫様だっこで運び出す。
重い……。

二人に手伝わせ、後部座席に姉貴を寝かせた。

「フリードで向かうのか？誰が運転すんだよ？」

理奈の疑問に、俺は運転席に座って扉を閉めつつ答えた。

「俺だけど？」

「えっ？」

理奈と冬紀の大絶叫が聞こえた気がした。

運転なら姉貴のやつを見た！大丈夫だ！問題ない！……これ死亡フラグじゃなかったっけ？

俺はキーを回し、フリードに息を吹かせる。諸機器の異常がないことを確認しつつ、ギア、アクセル、ブレーキ、ハンドル等々の正常を確認して、満面の笑みで二人に言った。

「ナビゲートよろ（笑）」

声にならない悲鳴を上げて、二人はこの世の終わりみたいな表情で悶絶しかけてた。

第10話 法律に免許は必要だが運転に免許は必要ない（後書き）

いかがでしたでしょうか？

やっぱり良祐の視点ですから結果的に出番が多くなってしまいました。
た。

どうやって良祐以外の出番を出すか……それが問題なんですよ
ね。

足りない頭で一生懸命考えている作者です。

早織と円がピンチ！まさかまさかの主人公が運転？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

オリジナルの件は未だに募集してます。

有り無しはもちろんの事、銃火器のアイデアもOKです。

読者様一人一人のために全力な作者でした。

第11話 気分はちょっとしたDEAD OR DIE（前書き）

おはにちは！らいなあです！

ギャグが多い！それがここまで書いてきて思ったことです。

ゾンビってホラーですよ？事実人が噛み殺される描写だってありましたし、大量のゾンビに囲まれて死に掛けたこともありましたが、しかし大量のギャグによって、まったく怖さを感じません。

これは良いことなのか、良くないことなのか……。不思議ですね。ちなみに投稿はほぼ毎日しているのですが、書き溜めていたものを毎日投稿しているわけじゃありません。

毎日毎日、1から書いて投稿してるんですよ。数時間で書き終わりますから。

でも、たまに行き詰って投稿が遅れるかもしれません。

その時は生暖かい眼で見守っててください。お願いします。

紹介はありません。当然だね！……すいませんでした。

今回のタイトルはデッドオアダイと読みます。簡単にすると死か死、みたいな感じです。お楽しみください。

第11話 気分はちょっとしたDEAD OR DIE

「ぬおおおおおお〜体が〜」

「そんな体で運転しようとするからだよ」

俺たちは早織からのSOSコールを受けて河川敷に向かおうとしたが、運転手である姉貴が寝ていて起きないという事態に直面、代わりに俺が運転しようとしたのだが……

「運転する前に先生抱えただけで体が悲鳴あげてんじゃねえか」

「言つなよ理奈……」

運転席で背もたれに寄りかかったまま、体の苦痛に眉をひそめている俺がいた。

病み上がりで無理しすぎたか……。体が痛い……。(泣)。くそお体が〜。

俺は気合で痛みを抑え、ハンドルを握って前を見据える。

「気合だ〜!!」

「アニル浜口さんか!」

理奈と冬紀に同時につつこまれた。いいねえ。……って、それどころじゃないつつの!

俺は運転の仕方を思い出しつつ、冷静に手順を踏んでいく。

確か……。ブレーキを踏んで、サイドブレーキを倒し、ギアを入れる。

んで、ブレーキを踏むのを止め、少しずつアクセルだったな。

難しいことは分からんがこれ覚えとけば大丈夫だろ。

俺は思い出した手順を実行しながら、シートベルトをしつかり締めた。

これで準備はOK。焦らず急げば間に合うはずだ。

「シートベルト締めとけよ。暴れるぜ（比喻じゃなくマジで）」

二人は顔を青く染めながらもシートベルトを締める。姉貴をしつかり掴んで落ちないようにもして。

全員の準備が完了したのを確認して、俺はブレーキから足を放し、少しずつアクセルを踏み込む。

ゆっくりと俺たちが乗るフリードが、少しずつ歩を進めた。

よし。出だしは好調。

のろのろと隠れ蓑にしていた駐車場から車道に出た。ハンドルを左に切って東に車体を向ける。

そして……

「何かに掴まっとけよ」

「「!?!?」」

前方の進路に何も無いことを視認して、俺はアクセルを少し強く踏み込んだ。

「あああああああああああああああああああああああ!?!?!」

突然加速するフリード。俺はハンドルを操りつつ、アクセルとブレ

「キの調整に全神経を使う。
以外に難しいぞこれ・・・！前方に見える景色が我先にと後方に遠ざかっていく。」

河川敷までのルートは、ほぼ直線。最後に右に曲がるだけだ。

「冬紀！理奈！姉貴落とすなよ！！」

「わかってるよ！」

「わかってらあ！」

速度メーターを見ると、50を通り過ぎる瞬間だった。あっ、55を超えた。

制限速度ガン無視だな。まあ関係ないけど。

視線を車道に戻す。そこにはゾンビが何体か歩いていた。

「ひき殺せ！ヤーーーーーハーーーーっ！！」

「ヤバイ人がいるよう。ヤバイ人がいるよう」

理奈がなんか言ってるが俺は無視で（余裕が無かっただけ）、進路上のゾンビをひき殺しまくる！

ゾンビって轢きたかっただよねえ！・・・嘘です。避けるだけの技量が無かっただけです。はい。

人を（ゾンビだけど）轢く衝撃が車体に伝わってくるのが分かる。ドツカンドツカンいってるし。

さて、そろそろ曲がり角だが、減速しようかな？・・・
いっっちゃえ〜！！

「つつかまれ〜！」

「ひひひひひひひひひひ！！！！」

速度をほとんど落とさず、俺は思いっきりハンドルを右に切った（限度はするよ?）。

瞬間、フリードがアクション映画さながらのダイナミックな曲がり方をして、曲がりきれずに電柱に車体を掠める。

しかし次の瞬間には加速。アクセルを踏み込んでフリードは急発進した。

「武器を取れ！次の瞬間には戦場だぞ！」（カタコト）

「何でカタコトの日本語喋る外人傭兵みたいになっているんだ！」

冬紀のツッコミもスルーする……。……。らしくもなくダジャレ何か言うんじゃなかった。

数秒すると視線の先に土手が見えた。上りの斜面は無いのか……。

「突撃！正面の河川敷！！」

「やめろおおおおお！！?」

「死ぬ、死ぬ、死ぬううううううう！！?」

急速に近づく斜面に、俺は言っちゃった！

「俺は！東海林市の前原さんだあ！！」

「言う必要ないだろ！！」

「冬紀に同意いいいいいいいい！！」

次には斜面に特攻。車体を滑らせながらも、フリードは土手をどんどん上って行く！

そして……

「ひゃっほおおおおおおお！！！」

「飛んでる！アタシ飛んでる！！！」

「理奈！戻って来い！理奈ああああああ！！！」

土手を上りきって、河川敷に向け車体は跳躍した！

すぐに俺は衝撃&方向転換の準備をする。一瞬開けた後、物凄い衝撃が車体に襲い掛かる。

「ぐうう！！！」

直感的にハンドルを右に切りつつ、アクセルを放してブレーキを強く踏み込んだ。

ギィィィィィという強烈なブレーキ音と、土を踏み込む音が折り重なって、やがてフリードは緊急停止した。

視線を上げると早織と円さんが呆けた顔でこっちを見ていた。

よかった！何とか間に合った！二人の無事を確認して抜きかける気押し戻し、俺は冬紀と理奈に指示を出す。

「冬紀！理奈！ゴー！！！」

人使いが荒いんだよ！とか言いながらも、二人はドアを開けて外に飛び出す。

早織と円さんがフリードに向かって走り出し、後を追うゾンビを冬紀と理奈が蹴散らす形を保つ。

後もう少しでフリードに着く、というところで後部座席のドアの前

パニックになりすぎて何言ってるのか分からん。でもアリエツティって聞こえるのは俺だけか？
強く刺されたゾンビは吹っ飛んで、こっちに向かっていた早織たちの方に落ちかける。

「邪魔ですね〜。切り捨てましょう」

早織の隣の円さんがそう言ったのを聞いた瞬間、背筋が凍るのを感じた。

円さんは一瞬だけ加速して、落ちてくるゾンビを俺が作った角材刃かくさいじ矛むで……

……一閃した。

ゾンビの脳に位置する場所が上と下にわかれ、俺はそこで初めてのゾンビの頭が横に一閃されたことを知った。
さすが円さん。チートママの名は伊達じゃないな。

そして早織、円さん、冬紀、理奈の順に開いているドアに飛び込み、最後の理奈がドアを閉めたのを視認して俺はアクセルを踏み込んだ。フリードが音をたてて走り始める。

「ちょっと！何であんたが運転してるの!？」

当然のように叫ぶ早織に、俺はやさしく言ってやった。

「成・り・行・き・さ」

ミラー越しに早織の顔が真っ青になっていくのが分かった。

俺は来るときと同じように斜面を上ろうとするが、ふと思い出す。

向こうはアスファルトか。人数も増えたし、結構急だったし、上るのはやめたほうがいいかもしれない。

そう思い、一転してハンドルを左に切る。しかし斜面を回避できずに、フリードの右半分が斜面に乗ってしまった。

悲鳴が車内にこだまする中、俺は斜面を利用しゾンビの群れを大回りで回避することに成功する。

そしてそのまま、ゾンビの垣根を越えて逃亡に成功したのだった。

「あ~~~~。死ぬかと思っただ」

『こつちが（な：ね）！！』

早織、冬紀、理奈のツッコミを完全スルーしている俺は現在、助手席に座りなおして背もたれに寄りかかっていた。

無理をしすぎたんだな。これが。運転し終わってハンドルから手を放したら、体がばっきばき。あちこち痛いなのって・・・。しょうがないから休憩ついでに姉貴に運転をバトンタッチだよな。

あゝ疲れた。

ちなみに今は、ゾンビがいない河川敷で昼飯準備。その後川沿いに河川敷を西行したのち、橋の下でこうして静かに休憩しているわけだ。

昼食を作っているのは理奈、助手に冬紀が手伝っている。他のみんな

なはダウン（俺も含めて）。

早織と円さんは偵察した上にゾンビから逃げるために走ったからな。当然だろう。

姉貴は運転し続け、疲労困憊。

俺はハーメルンの撃退、さらに無茶な運転。後者は自業自得だが。

つまり満足に動けるのは理奈と冬紀ぐらいしかいないのだ。

まずいなあ。とてもまずい。

こんなんゾンビが大量に襲撃してきたら全滅だぞ……。しかも今日中に東海林市を脱出するのは不可能。ここは東海林市のほぼ中心だからな。

つまりは東海林市で一夜を明けなければならないわけで。みんなが安心して寝られる場所も必要だ。

問題が山積みだぞ。うわあああ。

やはりみんなの生死を司る大事な問題、俺一人で抱え込むのは駄目だな。後で相談しよう。

だがその前に飯、飯。腹減ったよ。おつかさん。

「だれがおつかさんだ！」

「理奈、お前今の分かったのか・・・」

「そうゆう顔をしていた」

おつかさんの顔ってどんな顔だよ！見てみたいわ！

心の中でつつこんでおこう。今は体力を消耗したくない。べ、別にめんどくさかった訳じゃないんだからね！

「ツンデレは止めた方がいいわ」

「早織、お前までか・・・」
「そうゆう顔をしていたわよ」

ついでに気持ち悪かったわ、と真後ろのシートに座る早織が呟く。
だからどんな顔だったの！おっかさんの顔とかツンデレの顔とか意
味分からんわ！

・・・疲れた。心の中でつつこんでもつかれるんだな。初めて
知ったよ。

俺は開けっ放しのドアから空を見上げる。

まるで何も無かったかのように澄み渡る青空が憎らしい。まったく、
何でこんなことになったんだ？

・・・ん？そういやゾンビ発生の起源って俺たち知らねえぞ？まさ
か自然発生なわけないし・・・。

犯人がいるのか？こんなことをした奇天烈ド畜生が？・・・チ
ヤゲ& スカじゃないけど殴りに行こうかな。

円さんに殴り方教えてもらおう。巨漢すら一撃でノックアウトに出
来る強烈なやつを。

やりたい事が出来たな。益々生き残らなければ。俺は固く誓う。こ
んなことしたド畜生をぶん殴るぞ。と・・・。

「飯出来たぞ」

同時にそんな声が俺の耳に届く。やっとか馬鹿野郎と呟きながら、
視線を飯を持ってきた冬紀に移す。

「飯は何ですか？馬鹿野郎」

「炊き込みご飯具材たっぷりめですよ、この野郎」

冬紀は笑顔のまま言い返す。くそう冷静に対処されてしまった。俺は悔しい思いに駆られながら、冬紀から炊き込みご飯の乗った皿を受け取る。

「美味そうだな。冬紀はどこら辺を手伝ったんだ？」

「食材を切っただけだよ」

「じゃあ後は全部理奈が？すげー。」

皿に添えられたスプーンを手に取り、ご飯をすくって口に運ぶ。

「美味い。さすが理奈だ」

「そうだね。理奈は良いお嫁さんになる」

フリードに寄りかかって、俺と同じく飯を食う冬紀の言葉に、俺は強く反論する。

「そうか？あの性格はともかくとして……。あの乱暴さと口調を直さないと貰い手なんていねえだろ」

冬紀は苦笑しながらもそんなこと無いさと口を開いた。

「理奈はあんな口調だったりするけど根は優しく可愛い子だよ」

「冬紀……お前……」

確かにそうかもしれないな。だけとお前……

「Mなのか？」

「何でそうなる」

いやだつてお前、まるで理奈のこと好きって言ってるようなもんじやねえか。乱暴娘が好きってようはMだろ？
その節を冬紀に伝えると、またも冬紀は苦笑する。

「どうなんだろうね。僕も・・・分からない」

自分の気持ちも分からないってお前は不思議君か。どんだけよ。しつかしまあ、冬紀がねえ・・・。

「聞きましたよ〜」

「聞いたよ〜」

「「どおうわっ!!!」「」

気づけば俺と冬紀の隣に円さんと姉貴がいた。その顔は不自然にニヤケている。

「いきなり出るなよ!」

「驚かせないでください!」

俺と冬紀が同時に叫ぶ。円さんと姉貴はなおもニヤケて俺たちに迫る。

「そんなことはどうでもいいの」

「どうでもよくないから」

俺のツッコミをガン無視で姉貴は冬紀の手を握って頷いた。

「冬紀君。あなたの恋、お姉さんは応援する。(私から良ちゃんを

寝取る)あの子を落としましょう!」

「は、はあ」

何か途中で物凄いこと言っただか?・・・気のせいか。

姉貴の普段見れない豹変振りに、冬紀は戸惑って冷や汗をたらしている。

しようがないから手助けしてやるか。

「落ち着け姉貴。七回ほど川で顔洗って来い」

「良ちゃん・・・そんなに顔にーーーーー」

「は?」

ちよつと待て。こいつはあれか?ただの馬鹿か?それとも天才的な馬鹿か?

今、とてつもなく聞いちゃいけないことを聞きかけたぞ?聞く前に俺の脳内信号がレッドに変わったから、耳に入ってきた言葉を自動的にシャットダウンしたが。

見れば円さんと冬紀、さらには助手席の後ろの早織まで顔を青く染めている。

ああ、間違いない。この馬鹿野郎は今、18禁もしくはZ指定の言葉を言ったんだろうな。

「姉貴・・・」

「なあに?良ちゃん?」

「肉片にしてやるうか」

「ごめんなさい」

マジトーンで姉貴に告げると即行で土下座を返してくれた。ボケかなら許す。

第11話 気分はちょっとしたDEAD OR DIE（後書き）

いかがでしたでしょうか！

読み終わってふと思ったんですけど、この作品ってちょいエロギヤグって入ってますよね？本当にちょっとですけど。

今回も最後で弱いやつがきましたし。まあそれは良いとしても。

今、やばいです。とても行き詰ってます。

オリジナル銃火器は良いんですけど、現存する銃火器が難しい！

ウィキ ディアで調べてもよく詳しく書かれてるのはいいんです。

ただ、詳しくすぎて何書いているのかわかりません！

誰か教えてくれませんかね・・・？はあ。

これからも勉強します。全力で。出来るだけ細かく書くために。

ちなみに今、気になっている銃はベレッタM92FとFN P90

です。

仲間を守るために走り抜けた主人公！これから彼らはどうするのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第12話 金持ちの家って大体こんな感じだよな（前書き）

おはにちは！らいなあです！

今回はギャグも少ない真面目回！なんですけど、バトルも無いですからあまり面白く感じないかもしれません。

僕としては結構楽しかったですけど。それは置いていて。

最近銃器の勉強をしているのですが、肝心の書籍がないんですよ。エアガンとかガスガンとかは本があるんですけど、本物の銃器に関する細やかな知識がのった本が無いんです。

日本で入手しやすい銃器とか警察組織で使用されている拳銃とか、そんなことが分かる本とかってないんですかね？

小説書いている人たちが銃器に詳しい時があるんですけど、そんな方々はどうやって調べているのでしょうか？気になるところですね。

第12話 金持ちの家って大体こんな感じだよな

「んで、このまま裏の早織ん家までみんなで行こうかと思う」

俺は川原の大きな石に腰掛け、同じように座るみんなに提案する。

「いいんじゃないか？もとより行くつもりだったんだし」

と言ったのは俺の正面の冬紀。あいつは頷くと、右隣の円さんを見た。

「そうですね。出来れば今日中に行きたい所です」

円さんが言うことも尤もだ。今日中に早織ん家行つて早織の母親と会うことが出来れば、何か知恵を貸してくれるかもしれないし。

「お姉さんは早く休みたいから賛成〜！」

姉貴の能天気な声に全員が拍子抜けして、のほほんとした空気が場に漂う。その空気に早織が口を開く。

「人の生死が掛かっているって言うのに・・・」

頭を押さえてため息を吐く早織。それに理奈が笑いつつ語る。

「いいじゃねえか。必要以上に緊張してやらかすよりかはいいだろ？」

それもそうねと早織が同意したのを見て、仲良いなあと思った俺。

良いことだ。

俺たちはあれから数分の後、全員が飯を食い終わってからこれに至る。

今はみんなこれからどうするのか相談しているところだ。

「んじゃ、これから早織の家へ直行で」

『異議なし』

というわけで、俺たちはみんな早織ん家に行くことになった。

「よつと」

理奈が2メートル以上ある塀を楽々登っている。俺はその様子を塀の下で見っていた。

「理奈って本当に身軽だな」

「だろ？？だろ？？」

めっちゃドヤ顔で俺に手を伸ばしてくる。何かなく。まるで猿みてえだ。

「だれが猿か」

「……また顔か？」

「いや、勘だ」

お前はいつたい何なんだよ！超能力者かよ！

俺は理奈の手を取って塀を登る。心の中でつつこむのを忘れない。

「まったく、ほら冬紀」

俺は姿勢を整えて冬紀に手を伸ばす。冬紀は手を取って塀を乗り越えた。

「大丈夫。反対側には今のところゾンビはいないよ」

向こう側に降りた冬紀はゾンビがないことを確認すると、背中に帯刀する木刀を抜き放つ。

「よし、さくつと終わらせるぞ」

「おつ」

それを聞き届け、俺と理奈はそれぞれ早織と姉貴を引き上げた。そして最後に円さんを引き上げて反対側に降ろすと、俺たちも反対側に降りる。

「早織ん家の敷地に潜入」

「普通だったら犯罪よ？人の家の庭なんだから」

でも今は普通じゃないもの。早織に俺は言っちゃった。

こうして俺たちは早織ん家の敷地内に潜入したのだ。犯罪じゃないよ。メタルギア リッドだよ。

自分の意見を正当化しつつ、木が生い茂った庭……庭？を見る。

「庭じゃなくね？」

そこにあつた庭（笑）は昼間の公園の倍、公園で早織が言ったとお

りだ。でけ〜。

みんなが呆けてる中、早織は無表情で現在地を確認していた。

「ここは屋敷の北西ぐらいかしら」

屋敷で！北西で！何その表現！俺、使ったこと無いんだけど！早織はやっぱりお嬢様だったのか！

「先導するわ。静かに着いて来て」

早織が返答も待たずに歩いていく。俺が全員に行くぞと言うと、呆けていたみんなも頷いて早織に着いてく俺の後ろに回った。俺はふと考えて早織に問いかける。

「なあ早織」

「何？」

「早織は朝、母親と会いたいって言ったけど父親は？」

なにそんなこと？と早織はケロツとした表情で答えを述べた。

「離婚したのよ。父親は行方不明。だから母親よ」

「・・・ん、悪い」

「いいのよ」

聞いちゃいけないこと聞いちゃまったかな。

俺はバツが悪くなり無意識に明後日の方向を向く。まあ、早織の性格はそのことに関係してるのかもな。

しかし木が多すぎだろ。まるで森の中だ。薄暗いったらありゃしない。

「あとどのくらいで着くんだ？」

「こんなのが後数十分とか続いたら泣くぞ？」

「心配ないわ。そろそろ・・・」

と言ったところで、前方の森が開けて光が差し込む。光の先には赤茶色のレンガ様式の建物があった。

大きさは目視できるだけで普通の一軒家の三倍はある。

「ここが私の家よ」

早織の言葉にみんなの眼が点になる。しかし俺はふとした疑問を早織にぶつけた。

「庭に比べて家が小さくねえか？」

その言葉に早織は違うわと言って言を返す。

この家は敷地内にある数ある建物の中の一つよ。

ここは一号館。いわゆる本館ね。私と母親と父親しか住んでいなかったからこの大きさで十分なのよ。今は父親はいないけど。

あと二号館と三号館と四号館があるわ。

二号館はすぐそこ。メイドや執事といったこの家に仕える人たちが寝泊りする場所ね。

三号館は少し遠いけど割りと近くのほうだわ。そこは倉庫の役割をしているの。

四号館は簡単に言えばコレクションルーム。母親しか行ってはいけない場所で世界中の宝石、絵画、外車などがあるらしいわ。四号館は端の方だから歩きだと10分掛かるかもしれない。

他にも色々とあるけれど、主だった建物はそのくらいね。

「とうわけよ。本当にメンドクサイ造りにしてくれたものだわ」
「そ、そうかもな・・・」

やっぱり早織ってお嬢様・・・しかもかなり凄いやつだ。
俺は一步前に歩み出て、ゾンビがいないことを確認した。

「ゾンビはいない。居ない内に行くぞ」

全員が頷いたのを視認して、早織の誘導で一号館の玄関に向かう。

「開いてるか？」

玄関のドアノブを捻る早織に聞くが、彼女は力なく首を横に振るだけ
で何も言わない。

「チャイムを鳴らして待ったほうがいいかもな。くれぐれも大声は
出すなよ」

「わかったわ」

早織はチャイムのボタンを押す。ブーという音が鳴り、しばらくし
てガチャと誰かがインターホンに出た音がした。

「どちら様でしょうか？」

声からして初老の男性。優しげな声質が特徴的だ。

早織はその人物を知っている様子なので、多分執事だろう。

「田代さん！無事だったのね！」

「その声は……！お嬢様！ご無事でしたか！」

どうやら執事の男性の名前は田代たしろというらしい。

田代さんは喜びの声音でお待ちくださいというのと、再びガチャとインターホンが切られる音がした。

数秒して玄関の鍵が開く音が何回か聞こえた後、重厚そうな大きな扉はゆつくりとその重い体を動かした。

「お嬢様！」

「田代さん！」

早織はやっと自分の知っている人に会えたのが嬉しいのか、満面の笑顔で田代という男性と語らっていた。

田代さんは俺の予想通りの初老の男性で、白髪 of 髪に髭、金色がかった眼鏡をしている。

彼は俺たちの存在に気づくが、何かを察したのか何も言わずに中に引き入れてくれた。

「中へどうぞ。外は物騒ですので」

さすが、話が分かるねえ。ていうか執事ってはじめで見たよ。

俺たち六人は田代さんの導きで、早織ん家一号館に入った。全員が入った後で田代さんが玄関の扉と鍵を閉める。

4個ぐらい鍵あんじゃね？ぐらいにガチャガチャガチャガチャやっていた。

視線を中に移すと、そこはテレビで見たようなシャンデリアに大きな階段、さらには高級そうな家具や壁に掛けられた絵画など、テレビで見たまんまがそこにはあった。

「ひれくなく」

「そうね、良ちゃん」

「私たちの家も広ければよかったですけど……」

前原一家がそんな感想を洩らす中、冬紀と理奈は人があまりいないみたいと言っていた。

「それは……こんなご時世ですから」

田代さんが言った言葉にその場にいた全員が沈黙する。察しれば良かった。

重たい空気が流れ始めた時、階段の上から誰かが降りてくる。

「早織？無事だったの？」

声がしたほうを見ると、美しい女性がそこに立っていた。よく見れば早織と面影がある。

「お母様……」

あの方が早織の母親……。顔立ちはそのままに、青みがかった髪を長く伸ばしているところが大人の女性という感じだな。彼女は赤いドレスを着て、キリツと視線を鋭くさせている。

「無事で何よりよ。……そちらの方々は？」

「学校で私を助けてくれた……。ーです……」

最後のほうは聞き取れなかったが何て言ったんだ？

しかしそれを聞いた早織の母親はそうと呟くと、階段の階下に降り

た。

「私は早織の母で香澄かすみといます。彼はこの家の執事長の田代。他にも沢山の人が仕えていたのだけど、ほとんど……」

ゾンビの被害は何処までもだな。最悪だよ。……つたく。ただ色々考えても仕方が無い。自己紹介されたんだから返さないと。

「俺は前原良祐まえはらりゆうすけです。早織さんと同じ高校に通う二年で、リーダーみたいなことをやっています。お仕えしていた方々にお悔やみ申し上げます」

他のみんなも続いて一様に返す。

「僕は宮下冬紀みやしたふゆきです。同じ高校の二年で良祐とは同級生です」

「アタシは緋達理奈ひたちりな。同じく二年の同級生っス」

「前原美鈴まえはらみすずです。林名高校の科学教師です」

「前原円まえはらまどかです。良祐さんと美鈴ちゃんの母親です」

全員が自己紹介を終えたところで香澄かすみさんは田代さんに言いつける。

「田代。彼らを居間に。客人ですよ、粗相の無いように」

田代さんが一礼すると、香澄さんは奥の扉に消えていった。なんつうか……。

「冷たい人だったでしょう?」

俺の心を見透かしたように早織が呟く。まあ、否定はしないけどさ。

「・・・あまり、得意ではないな」

得意な人なんていないわよ、あんな人。そう言って早織は左側の扉を開けて中に進む。どうやら早織が向かったのは居間のようだ。

田代さんも苦笑しながら早織の後を追うように歩く。俺たちは複雑な感情を抱いたまま、早織と田代さんの後を追った。

第12話 金持ちの家って大体こんな感じだよな（後書き）

いかがでしたでしょうか？

文字数も少ないですし、ギャグも少ないですし、真面目にしすぎましたかね？

それはそうと、ついに早織の母親登場！香澄さんです！

彼女はこれからの重要なキャラにしようかと思えます！多分！

そしてこれから数話で銃器でも……。げへへへへ。

ついに小林邸に辿り着いた主人公たち！この先に何が待つ？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第13話 よしわかった！まったくわからねえ！（前書き）

おはにちはーらいなあです！

書くことありませんね……。

紹介はありません。香澄さんはメインキャラとはなりえないです
か。

第13話 よしわかった！まったくわからねえ！

「では、御用が御座いましたらお呼びください」
「ありがとうございます」

田代さんは一礼して居間から出て行く。現在、俺たちは居間に案内されてそれぞれで休息を取っていた。

「あゝ息苦しかった〜」
「そうだね」

ソファに座る理奈と冬紀の意見に同意だな。この家にはただならない雰囲気があるぞ。

「大体こんなものよ」

窓際に佇む早織はため息を吐いて、力なく首を横に振る。

「そうなんですか」

壁際のイスに座った円さんはポーッと相槌を打つ。それに隣の姉貴はうんうんと頷いた。

「昼ドラとかに良くあるよね〜」

いや、昼ドラと現実を一緒にするなよ。とりあえずつつこんでおこう。

しかし本調子じゃないから、俺の体調が悪い。ツッコミに切れが無い。最悪だ。

俺は居間の扉を開けて外に出ようとする。

「何処行くのよ?」

早織がそのことに気づき声を掛ける。振り返らずに俺は簡潔に述べた。

「気分悪いからテキトーに散歩」

そう、あまりうるちよろしないでよと聞いた俺は、小さく頷いてその場を後にする。

とてもじゃないがやってられるかよ。息が詰まるって。疲れたし、かすみ香澄さんに事情でも説明しに行くか?……無理だな。

「有言実行ってことで、ぶらぶらしますか」

俺はぶらぶらと玄関ホールまでやってきた。ふと窓の外を見ると、雨が降っている。

あぶねえ。もう少しで雨に濡れるところだった。ラッキー。

「前原君……よね?」

「はい?」

呼ばれた感じがして声の方へ視線を向ける。そこにいたのは赤いドレスを着た香澄さんだった。

「どつしたんですか?」

俺が問いかけると香澄さんは、値踏みするような瞳で俺を直視し始める。ある程度経った時、一度頷いて唐突に口を開いた。

「着いてきて……」

ただならない雰囲気ですうとだけ告げると、彼女は振り向いて歩き出してしまった。

何を考えているんだ？ちっ！そんなんじゃ断りづれえじゃねえか！……しょうがない、着いていくか。

俺は香澄さんの後を着いて行く。ストーカーじゃないよ？了承は得ているよ？

彼女は2階へ上がる階段を上って行く。俺もその後を着いて階段を上ると、予想以上の高さに少々驚いた。

何これ？たっか！無駄じゃね？この高さ無駄じゃね？どんだけよ！

「何か？」

「何でもありません」（早口）

やべえ、ちょっとやりすぎたか。反省しよう。……よし反省した

！2階たっか！（反省してませんでした）

一通り驚いた後、視線を香澄さんに戻すと、彼女は正面の扉を開けてどんどん進む。

……… いったい何なんだよ。何処まで行くんだって。あつ、この感じ早織に似てる。早織の性格は遺伝だったのか。

変なことを考えながらしばらく着いて行くと、ある扉の前で香澄さんは止まった。ここは……

重厚な木の扉であり装飾はされておらず、一言で表すならただの木の間。金持ちの家にある扉とは思えなかった。

「夫の部屋だった場所よ」

俺の考えていることを悟ったのか、彼女はそう言つとその扉を開

けた。

「入って」

部屋の中に入ることを促す香澄さん。……諦めるしかないか。

「失礼します」

ゆつくりと部屋の中へ歩みを進める。部屋は書斎だろうか？本棚に本が沢山並べられ、中心にデカイ机が一つ置いてある。

それは書斎であるのは間違いないだろう。しかし何かがおかしい。何か……埃っぽい。

さつき香澄さんはここを夫の「書斎」と言わずに、「部屋」と言った。だけどベッドもソファもイスも何も無い。あるのは壁を覆いつくほどの本と、中央の―際デカイ机ぐらいだ。

早織の両親が離婚してからそのままなのか？それだと3年ぐらいほったらかしか。

「奥へ」

考えることを許さないとばかりに、香澄さんは所々で声を掛けてくるな。俺の考えてることが分かるのか？

しょうがないから言われたとおりに奥へ歩く。中央の机のところでは歩みを止めて、右ポケットのケータイでICレコーダーを起動した。

昔アニメでこんなシーンがあった気がする。念のためにICレコーダーを起動させといて、後々に役に立ったってアニメが。

そのマネだよな。念のためさ念のため。べ、別にこんなことがやってみたかった訳じゃないんだからね！

それよりも、まずは彼女の目的でも聞き出してみますか。

「何の御用ですか？」

ゆつくりと俺の周りを歩く香澄さんは、何か……いやな目で俺を見ている。彼女は一通り俺の周りを歩くと、机を挟んだ反対側で止まった。

「貴方があの人たちのリーダーなのでしょう？」

口調が変わった？ いや、優しくなった？ どちらにしるさつきと打って変わって、人間らしくなったな。

「はい」

俺の返答に彼女は不思議な笑みを口元に浮かべた。興味……かな？ 彼女の表情にはそんな感じが宿っている気がする。

「大人が二人もいる中で、何故貴方がリーダーになったのかしら？ 強さ？ 賢さ？」

この聞き方……俺に聞いてない？ 違うな、自分で推理しているんだ。俺の返答を元に考える気だ。

なら、その流儀に乗ってやるか。俺流の答えで。

「……………夢を持っていないから」

「夢？」

そう夢。俺以外の冬紀、理奈、姉貴、円さん、早織にあって俺にないもの。

冬紀は剣道を極めたいらしい。出会って初めの頃に訊いたことが

ある。

理奈はお嫁さんになりたいらしい。冬紀が部活の時に下校途中で訊いたことがある。

姉貴はみんなから慕われる教師になりたいらしい。教師になりたての頃に訊いたことがある。

円さんは親父……夫と再会したいらしい。昔小さい時に訊いたことがある。

早織は父親と会って話がしたいらしい。車で移動中に訊いたことがある。

俺には何も無い。だからなのかもしれない。

あるいは……

「……………希望を持っていないから」

「希望？」

希望。俺以外の五人にあって俺にないもの。

みんなはここを脱出して日常を取り戻したいそうだ。脱出したら日常があるという希望を持っている。

だが俺はあまり希望を持ってない。ここを脱出できたところで完全に元通りにはならないことを知っているから。

「……………希望を持っていないから」

「絶望？」

絶望。現在、俺以外の全員が持っているもの。

こんな事態になっても俺には絶望の一片も宿ってはいない。みんなはゾンビに食われればゾンビの仲間になるという絶望を持っている。

だが俺は絶望を持ってない。過去の事柄のせいで絶望しつくしてしまっただけだから。

「……………現実だけを持っているから」
「現実だけを？」

現実。俺たち六人の中で俺だけが持っているもの。

全てのことを現実だけしか見ていない俺には、全員が助かる確率は5%にも満たないことを知っているから。

現実だけを見ている俺だからこそ見えている世界がある。そしてそのおかげでみんなを守れたかもしれないだろう。

でも、俺にしか見えていない世界とは、見方を変えればそれは異常でしかない。しかしそれを異常であることを、みんなはまだ知らない。

「だから俺はリーダーに選ばれたんです」

全てを語り終えて香澄さんを見ると、彼女は驚いた表情で固まっていた。

「貴方……………面白いわね」

そりゃどーも。面白い私でございます。しかしまあ、彼女は今の何かを得たようだ。いい顔してやがるよ。惚れそうだ。

彼女は机の引き出しから何かを取り出すと、俺の前に突き出す。

それは……………

「こ、これ……………」

そこにあつたのは黒光りする……………“拳銃”だった。

俺は始めてみる本物に驚愕し、後ずさりする。偽者という可能性もあるが、なんとなく本物だと分かった。

空気？それもある。見た目？それもある。だけどそれを本物とする確証は無い。無い……けど………

「本物を見るのは初めて？」

当然だ。一般家庭の高校生が本物を手にする機会なんて無いからな。見たのはこれが初めてだ。

初めてだが、直感か？……分らないが、あれは本物だと思うし。

「これを見せてどうするんですか？」

こんなものを見せてどうするつもりだ？俺でも撃ち殺すのか？……はは、こんな状況でも震えだつてしねえ。どうなつてんだ？香澄さんはこうするのよと言って拳銃を構えて、俺の眉間に当てる。

「殺しますか？」

「……………どうしようかな？」

何て可愛い笑みを浮かべるんだよ貴女は、こんな状況で。全く動じない様子から見ても、彼女は撃ち慣れてるな。人はどうだろう？案外そつちも慣れてたり。

俺も俺だつて。何で震えないんだよ、俺。何で堂々と出来るんだよ。

しかし香澄さんは構えた拳銃を下ろすと、突然笑い出す。

「……………冗談よ。これは貴方を撃つために出したわけではないわ」

やっぱり？だろうと思つたんだよね。やべ、ちょっと汗出てきた。くそ、何がしたいんだよ。

「これは……」

俺がモヤモヤして不機嫌になっていた時に、彼女が持ち手……グリップを俺の方に向けて続きを言い放った。

「貴方に譲るために出したのよ」

「……………は？」

はあああああああああ！？と（心の中で）大絶叫した俺だった。

「はあ……」

あれから五時間。振り分けられた部屋で、ベッドに横たわって譲られた拳銃を見る。そして反対の手に持った黒い手帳を開いた。

《何を見てこれを買おうと思ったのかは覚えていない》

《ただ、その何かでこの拳銃を見た時、運命なものを感じたんだ》

《そして次には買いに走っていた》

《買いに走ったと言っても、色々調べたりしただけけどね》

《でも、そのフォルムを見た瞬間、僕は出会った気がしたんだ》

《僕が望む何かに……》

「分からん」

この黒い手帳は拳銃と一緒に香澄さんから渡されたものだ。何で

もこの拳銃の持ち主の手記らしい。

俺はふと思ひ出す。拳銃と手記を渡された時の彼女の言葉を。

少し昔話をしましょう。早織の父親……私の夫とは、私は別に仲が悪かったわけじゃないの。

でも何故か別れてしまつてね。そこら辺はあまり聞かないで。そして私と夫は別れてからも仲良く連絡を取っていた。

しかしある時に異変は起こつた。夫と連絡が取れなくなつてしまつたのよ。

私はあらゆる手を使って夫を探したわ。でも見つからなかつた。その時は色々切羽詰っていたのもあるのでしょうかね。

冷静な考えが持てなかつたの。その様子を早織に見られてしまつたのよ。だから仲が悪いと思われてしまつたのかも。

それから早織は変わつてしまつた。そう、今のあの子にね。そして誰も信じられなくなつた。

何があの子をそう思わせてしまつたのかは分からないわ。でもこれだけは分かる。

あの子には仲間が必要なのよ。自分から胸を張って自慢できるほどの仲間が。

この拳銃と手記を貴方に譲るわ。これで早織を守つてあげて。

早織には母親として何も出来なかつたから。せめて「さいご」「ぐ

らいは彼女のために母親らしくある。そのためのこれよ。

どんなことがあっても守ってあげてね。貴方が……。

そしてありがとう早織。生まれてきてくれて。幸せになるのよ。

………香澄さんはICレコーダーに気づいてるみたいだった。
何て人だよまったく。

そして彼女が言った「さいご」という言葉。畜生、モヤモヤする
じゃねえか。

俺はもう一度拳銃を見る。その黒光りする銃身は綺麗に手入れし
てあり、3年もほったらかしにしているとは思えなかった。

「分からん分からん分からん！」

何がしたい！何が言いたい！香澄さんは何を伝えたかったんだ！
くそっ！

俺が今日分かったことは、せいぜいこの銃の名前がH&K社のU
SPということだけだった。

第13話 よしわかった！まったくわからねえ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

良く分からない話でしたね。

そして拳銃！今回はH&K社製USPにしてみました！

香澄から真実を聞かされた主人公！香澄は何を伝えたかったのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第14話 ライオットガンこそ正義（前書き）

おはにちは！らいなあです！

難しいですね銃器つて。奥が深い……当たり前ですか！

紹介はありません！以上です！

書くことはありませんし。

第14話 ライオットガンこそ正義

「……………結局全然眠れなかった」

3〜4時間しか眠れずに反応が鈍い体をベッドから降ろし、すぐそのテーブルまで歩く。

テーブルの上にあったケータイを右ポケットにしまい、もう一つ……拳銃を手取る。

この拳銃はH&K社製USPという名前で、マガジン弾倉の中に15発とチェンバー薬室の中に1発の計16発撃てる仕様らしい。

使用弾薬は9mmパラベラム弾。プラスチック製のフレームとマガジンが特徴の一つ（らしい）。

これがあの手記に書いてあったこの拳銃のスペックだった。あの手記は最後まで読んでないけど。

一般的に知られる安全装置セーフティをかけ、俺は腰のベルトにそれを突っ込んだ。

腕時計を見ると朝の7時過ぎ。そろそろ朝飯の時間だ（と田代さんが言っていた）。

「行くか……………」

気だるい体を引きずるように歩きながら、ふと考える。香澄さんの言葉のこと。手記のこと。早織のこと。そして、ゾンビのこと。しかし答えが出るわけでもなく、無駄なことに頭を使っちゃったことで余計に体がだるくなるのだ。くそ、最悪だ。

重い腕で部屋の扉を開けて外に出ると、そこには早織が立っていた。

「ああ、早織か。おはよう」

彼女はおはようと返しただけで何をするわけでもなく、唐突に沈黙する。

何だ何だ？穏やかじゃないぞ？何で俺を睨み付けるんだ？

「あつ、いえ、ごめんなさい。どうゆう顔をすればいいのか分からなくて」

俺の思考を察したのか、早織はそう言って出来るだけ普通な顔をしようとしている。

普通にして普通にして普通にして………逆にキモくなった。

「ぶつ、ははっ。お前……顔………キモ………！」

ツボ入った。大爆笑する俺。早織は怒っていた。当然だろうな。だが、しばらくしない内に早織は表情を緩和させて、一緒になつて笑い出す。どういう変化だ？

俺たちは一頻り笑った後、食堂へ向けて肩を並べて歩き出した。歩き出して数秒ぐらいで、突然早織が真剣な表情で口を開く。

「あんた、昨日お母様と話していたようじゃない」

なるほど、それが本題か。

「まあ、話したな」

嘘言つてもしょうがないし。次の展開は何を話していたの？だらう。

「お父様のことを話したの？」

おお〜っと。ストレートかと思ったら変化球でした〜。……………
そうきたか。真実を言うべきか？言わざるべきか？

「当たり前障りの無い程度に」

このぐらいなら良いだろ。どうなっても対処できる範囲で。

「嘘ね」

「NANDATO?また変化球か〜。ちっ、どうする?とりあえず
慎重にいくか。」

「嘘じゃねえよ」

本当に嘘は言ってないよ?正確には意味が分からなかったただけだ
けど。

「嘘だっつつつつ!!」

あれ?ひ らし?びっくりしたあ〜。結構迫力あったな。足止め
ちゃったよ。

「何故?」

早織は何を考えているんだ?

「何となくよ」

へえ、珍しいな。早織が何となくで論理を展開するなんて。

「何となくか……」

しかしまあ、いよいよまづくなってきたぞ。……………ま、いつか。

「話した。話したけど、それほど深くは話してない」

香澄さんに口止めもされてないし、誰しも真実を知る権利がある。

「どの程度？」

ん〜あ〜どんくらいだ？え〜っと〜。

「実は仲が良かったんですよ〜ってくらい」

嘘は言っていないよな？な？な？よし、お〜。

「そう……なのね」

あら？意外な反応。てつきりもつと驚くかと思っていたんだが…

…。

「薄々気づいていたから」

追加補足とばかりに言うね〜。ったく、とんだタヌキだ。

「あとは知らない。父親の行方不明も本当。俺が聞いたのはそれで全部だ」

そう言っって歩みを再開する。あとは早織が判断することだ。俺が

口を挟むことじゃない。

俺の後ろ数メートルぐらいをついてくる早織は、しばらく俯いて何かを考えていた。

「なあ、姉貴」

「なに？良ちゃん」

「暇だな〜」

「暇だね〜」

朝食後。それぞれで自由な時間を楽しむ中、俺と姉貴は暇すぎてソファに座ってボーっとしていた。

何にもやる事が無い。暇だ。暇すぎる。

冬紀は剣道の練習。理奈は武器の整理。円さんは荷物の確認。早織は自分の部屋でなんかしていた。

今述べた面々にはそれぞれやる事があるが、俺と姉貴にはやる事がない。

いや、俺には一応やっておくべき事があるのだが、今はしたい気分じゃないんだ。

「暇だな〜」

「暇だね〜」

最初に戻ってしまった。さっきからこればかり言っている気がする。

「でしたら、少し手伝っていただけませんか？」

と田代さんが何かの準備をしながら言った。俺と姉貴はアイコンタクトで意思を疎通させる。

意見がまとまったところで俺が田代さんに問いかけた。

「何をするんですか？」

すると田代さんは振り向き様にニヤツと笑う。

「狩りです」

「「はい？」」

アホみたいな顔の俺と姉貴がそんな田代さんを凝視していた。狩り？はあ？どゆこと？野ウサギでも出んの？しかし二の言葉は予想以上に衝撃的だった。

「外にいる不届き者を」

それって何？ZOMBIEですか？それとも違うどなたか？
……………そんなわけで。

「わお！僕こんなもの初めてみたさ〜！」

「奇遇ね！お姉さんもよ〜！」

田代さんの後をハイテンションで着いて行く。

その途中で隠し扉をくぐった時のリアクションがさっきのだった。本当に初めて見た。隠し扉とか現実には無いものだとばかり……………。

「ここは非常時しか入ることは出来ないところある倉庫です」
「倉庫？」

しかも非常時つて……。嫌な予感がする。

田代さんを先頭に隠し扉を越えて、さらに奥の鉄製の扉へ向かう。そして田代さんが扉に備え付けられた鍵穴に特殊な鍵を差し込んだ。

さっきの鍵、めっちゃゴツゴツしてなかった？突起が10〜20ぐらいあった気が……。

「下がっていてください」

言われ俺と姉貴は後退する。少し経った後、ガチャという音と共に鉄製の扉は重い体を動かした。

「「おお〜」「

何か感動的だ。あんな扉でもちゃんと動くんだな。

視線を扉の奥に向けると、先は真っ暗で何も見えなかった。でも、何故か異様な雰囲気がある。

歩を進める田代さんに着いて行き、俺たちも扉の奥へ進行した。しかし暗いな。何も見えねえ。

ある程度入ったところで、田代さんが壁の電気をつけた。俺と姉貴は壁を見て驚愕する。

「マジかよ……」

「本物……？」

なぜなら前方の壁一面にありえないほど大量の銃器が掛けられていたからだ。えっ？なに？武器屋でもやんの？

「全部本物ですよ」

姉貴の疑問に田代さんが答える。彼は電気をつけた後に壁の銃器を一つ手に取った。

それを俺のほうへ放る。わつとと！あぶねえ！……ふう。ちゃんとキヤッチできたぜ！しかし重いな。

「これは？」

ベネリM3。装弾数7発で12ゲージ弾を使用。ポンプアクション方式の散弾銃ショットガンです。

田代さんはそう言うてにこやかに笑った。いや、笑う要素ありませんから。ん？待てよ、この形状どこかで……。

もう一度そのショットガンを見る。真っ黒な銃身のそのショットガンは昔、モニターの向こう側で見たぞ……。

「あつ！ライオットガンだ！」

俺は思い出した。そのショットガンはバイハザード4に出てきたライオットガンというショットガンに似ていた。

いや、そのものだったのだ。すげーライオットガンだ！

俺が眼をキラキラさせながらそのM3を見ていると、姉貴がひゃああああ！とか大声をだした。

どうした？と姉貴のほうへ視線を向けると、姉貴はライオットガンより小さめの黒い銃身の銃器を手に複雑な表情をしていた。

「それは？」

MPS AA-12。箱型弾倉ボックスマガジンとドラムマガジンが使えるショット

ガンで、ボックスマガジンが8発、ドラムマガジンが20発装填可能。弾薬はM3と同じく12ゲージ弾。フルオート射撃が可能ですが、反動はあまり大きくありません。そのかわり重たいですが……

…。
と、また田代さんは笑って言った。いやだから笑う要素ないです
から。

「で、こんな物騒なもの持ってどこへ行くんですか？」

まだ本題を聞かせてもらってない俺は、田代さんに問いかける。

「買い物です」

はあ？買い物だと？これ持ってたか？

「物資が少ないもので……」

なるほど。みんなのために外へ行っちゃう訳ね。ならいい。

「わかりました。手伝います」

そんなこと言われたら断れないだろ。姉貴は？
そう聞くと、姉貴はブンブンと首を縦に振った。

「行く！良ちゃんが行くなら行く！」

どんだけよ。俺が行くなら行くとか。はあ、姉貴らしいけど。

「ありがとうございます。ではこれを持って行って下さい」

田代さんは俺と姉貴に弾薬が詰まったポーチをくれた。俺のは1
2ゲージ弾が……30発か。

横の姉貴のポーチを見ると、ボックスマガジンが5つにドラムマ

マガジンが1つ入っていた。合計で60発か。……少なくともったら貰おう。

ん？自分のポーチに視線を戻すと、そこには小さなマガジン3つが入っていた。

これ……！9mmパラベラム弾じゃないか！USPのマガジンだし！

驚きの眼差しで田代さんを見る。彼は人差し指を口元で立てた。内緒ってか？さっすが。食えないねえ。

そして田代さんも銃器とポーチを持つと、出口へ向かって歩き出す。

ちなみに田代さんの銃器はウィンチェスターM1300というシヨットガンらしい。俺には違いなんて分からないけど。

「行きましょう」

「はい！」

というわけで急遽、俺と姉貴は外に行くことになりました。

第14話 ライオットガンこそ正義（後書き）

いかがでしたでしょうか？

僕が出す銃器ってパソコン調べなんですよね。

実物見たわけじゃないから描写に不安が……。

あ、読者様は僕の作品に詳細な描写は求めてないか。

自分で言ってる悲しくなりました。

急遽、物資調達にかり出される主人公たち！戦わずにすむのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第15話 開けたら閉める！PSYRENで学んだことだ！（前書き）

おはにちはー！らいなあです！

まずは投稿が遅れたことを謝罪します。

投稿しようとしたらエラーが起きてしまったせいです。

数時間開けてこうして投稿したしだいなんですけどね。

3000〜6000文字という微妙な文字数で投稿して申し訳ないです。

毎日投稿だとそのくらいの文字数が妥当なんですよ。

申し訳ないです……。

紹介はありません。

第15話 開けたら閉める！PSYRENで学んだことだ！

「スタンバイ……」

「スタンバイする要素ないよ良ちゃん」

姉貴につっこまれてしまった。馬鹿めっ！こういうのは雰囲気
大事なんだよ！

という言葉が胸にしまつて、冷ややかな視線でも送っておこつ。

案の定、久しぶりの冷ややかな視線……！とかアホなこと言っ
てるが無視だな。

「これから死地に赴くというのに面白い方々ですね」

ホッホッホといういかにも初老の紳士といった笑い声で、田代さ
んは俺と姉貴を先導する。

今、俺たちは一号館の玄関ホールまで来ていた。扉の前でたむろ
っている様子に不自然さは無いが、それはショットガンを持ってい
なかつた場合だ。

「それでドコに？」

「まず二号館へ行きましょう」

使える物でも探しに行くのか？おっただけど。姉貴は？

姉貴を見ると、すぐさま頷いた。ちょ、首振り過ぎ！首取れるん
じゃねえか？

「わかりました」

視線を田代さんに戻して了解の意を示す。彼はそれを聞き届ける

と、素人とは思えない動きで外を警戒しだした。

あれ？田代さんってひよっとして、ただならない職業のご出身？
そう彼に聞くと、田代さんはホッホッホと笑い出した。

ごまかしたな。きっと田代さんはミ^{サージェント}リルの軍曹ばりのところに
居たに違いない。

それはともかくとして、姉貴に一応言っておこう。

「敷地内での発砲は極力避けたほうがいい。わかったな姉貴？」

姉貴は何で？という表情をしていた。あつ、馬鹿だこいつ。俺は
姉貴に諸々の理由を説明してやる。

「ゾンビは音で察知するんだぞ？銃声でゾンビを引き寄せるだけだ」

つまりはゾンビに見つかった場合ぐらいいしか発砲は厳禁、撃つた
らたちまちゾンビがやってくるってことだ。

姉貴は全ての説明を聞き終わると、あつと馬鹿丸出しの理解の
仕方でも納得した。23歳だろ。気づけよ。

「お若いのにしっかりなされてますね」

その様子を見ていた田代さんは感心したような表情で俺に言った。
俺はしょうがないですよと諦めたように語ると、外にゾンビがい
ないことを確認して玄関扉を開け放った。

「なるしかない世界になりましたから」

彼は驚いたように沈黙する。しかしすぐに表情を戻して笑った。

「……行きましよう御一方」

俺と姉貴は無言で頷いて外へ飛び出した。幸いゾンビは周辺にはおらず、俺は警戒をレッドからイエローに変える。

ゾンビはいらっしやらないのか……………好都合だが。弾薬を無駄にはしたくないしな。

田代さんが玄関扉を閉めて、鍵を掛ける。これでバッチリだ！

俺はライオットガン（ベネリM3）の銃口を地面に下ろした。確か通常時はこうするはず……………。

「こちらです」

田代さんを先頭に、脇の森の中を静かに移動する。一応警戒はしているのだが、ゾンビいねえな。まあ良いことなただけ。

そんなことを思いながら2〜3分経ったとき、前方の先に建物が見えた。あれが二号館か？

一号館とは違い、木造の洋風建築仕様だが、一号館に負けず劣らずの大きさだ。でけーなあ。

「玄関は少々危険です。裏口に回りましょう」

俺は頷き、ライオットガンを左肩に掛けて腰からUSP……………ではなく、短刀を抜き放った。

撃つたら気づかれるべき。それに屋内じゃ、引き金を引くアクションがある銃器は不利だからな。

接近戦の場合は銃器よりナイフの方が役に立つんだぜ！……………って誰かが言ってた気がする。

「良ちゃん。あれ……………」

姉貴が怯えた声音でそう呼びかけるもんだから、俺は考えるのを

一旦やめて姉貴が指差した方向を見る。

二号館の玄関が視界に映るが、ついでにゾンビも十体くらい映ってしまった。

距離がかなりあるから問題ないが、あの数と戦うことになったら銃器の使用は免れないだろう。田代さんがいてくれて助かったぜ。

俺たちは音をたてずに裏口に回り、扉の前で一時停止する。扉の脇に張り付き、俺はゆっくりと扉を開けた。

田代さんがウィンチェスターM1300を構えて屋内に入っている、姉貴を次に行かせて俺が殿を務めた。

後ろにも注意を払い、ゆっくりと二号館に入る。ゾンビは居ないな。よし、扉をクローズ！ゾンビ入ってきたら困るしね！

扉を閉め終わると、右手に持った短刀を構えてゆっくりと辺りを探索する。

「(うわ……ひでえ……)」

どうやらここは調理場のようだが、悲惨すぎる光景に息を呑む。

何があったのか壁一面に血が飛び散り、白かったはずの壁は真っ赤に染まり、まだ凝固してないその血は床へと滴り落ちていた。

その血を追って視線を床に下ろすと、そこには三人ほどの死体が無造作に倒れている。

仰向けの死体の顔は判別不可能なほどに破壊されて、うっすらと骨らしきものまで見えた。多分ゾンビに食い荒らされたんだろう。

ゾンビにならないくらいに食い荒らすって……。脳も食ったのか？

もうリアルバイオザードじゃねえか。あつ、ここ洋館か。さらにバイオだ……。クリーチャーとか出んじゃね？

死体の山を避けて歩き、俺は調理場を出る。出口の所で田代さん

と姉貴が立ち止まっていた。

「（大丈夫か姉貴？）」

「（だ、大丈夫……）」

見ると姉貴の顔色が真つ青になっている。当然か。悲惨な光景は今までも見てきたが、これは群を抜いて悲惨すぎる。

俺でも鳥肌が治まんねえ。くそっ！最悪だ！外に居るゾンビをライオットガンで殲滅してやりたいぜ！

昂る感情を必死で押さえ込み、冷静に思考が回るようにする。

こんな状態の姉貴を連れて行きたくはないが、今一人にするわけにもいかない。姉貴には我慢してもらおうしか……ない。

姉貴はそんな俺の様子を見て、青ざめた顔のまま気丈に振舞う。その表情はお姉さんなんだから！みたいな顔だった。

自分に言い聞かせながらもあいつは笑った。受け止め切れてないその頭でおお。………こんな時だけ姉ぶりやがって。………つたく。

「（俺がついてる。大丈夫だ）」

姉貴に笑いかけて落ち着かせる。次にはニヤニヤしだした姉貴を見てすぐに後悔したが。言うんじゃないかった。

「（ホッホッホ。これぞ正に姉弟愛）」

田代さん。愛は訂正してください。お願いします。

本当に言うんじゃないかった！俺の周りにはこんな人しかいないのか！？

落ち着いた姉貴を真ん中に、田代さんを殿に、俺が先頭を歩く形で二号館をゆっくりと進む。

田代さん曰く、目的地は三階の執事長室（田代さんの部屋）らしい。何取りに行くんだ？

……聞かなくてもいずれ分かるからいいか。

俺は思考を中断して、前方の階段手前で一度止まる。辺りを警戒し、異常が無いことを確認してそーっと壁から顔を出した。

うおっ！ビックリした〜！ゾンビか……。気づいてないようだな。階段の前にゾンビが一体いたが、俺たちには気づいていないようだろうちよろしていた。

これ幸いと一気に飛び出し、短刀でゾンビの眼を下から突き刺す。脳に届いた刃先がゾンビの動きを奪い、程なくしてゾンビは崩れ去った。

短刀についた血を振り払う。きつちゃね〜も〜。

ちなみにさつき眼を刺したのには理由がある。眼は柔らかいから脳天ぶっ刺すより刃物への負担が少なくてすむんだ。さらに少し腐っていることもあってスムーズに刺せたぜ。

俺は姉貴と田代さんに安全確保を伝えたと、二階へ上がる階段を上る。

三階へ上がる階段を見つけると、姉貴たちを伴ってゆっくりと三階へ上がった。

三階は扉が一つしかなく、他に道も扉も見当たらなかった。

「（三階は執事長室しかありませんから）」

田代さんが説明してくれるが、嫌味にしか聞こえない。えっ？なに？ワンフロア自慢ですか？

………反省しよう。すいませんでした。

全員が三階に辿り着いた時、田代さんが一番前に来て扉の前に立つ。

俺は短刀を構えて扉が開くのを待った。鍵を挿し、捻り、ドアノブを持つ。

田代さんが扉を開けると同時に、俺は部屋の中に飛び込んでゾンビを警戒した。

………いないか。まあ鍵かかってたしな。良き哉良き哉。

安全を確認して、俺は短刀を鞘に収めた。あゝ、肩凝った。

しかし執事長室広いな。フットサルぐらいなら出来んじゃない？俺と姉貴が驚く中、田代さんは棚から何かの鍵二つと大きめの買い物袋を三つ手に取り、ベッドの方へ歩いていく。

何すんだ？と俺が首を傾げていると、彼はベッドの下からかなりデカイ銀色のケースを取り出した。

でっか！めっさでっか！ていうか細長！

田代さんは、そのケースにさっきの鍵を一つ差し込むと、ゆっくり捻った。ガチャといってケースが開く。

「おお！」

そのケースの中身は、一つの拳銃と一つの銃器、さらにその弾薬が入っていた。

第15話 開けたら閉める！PSYRENで学んだことだ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

引いて終わりました。次回が楽しみな僕です。

書いてるのも僕なんですけど。1人コントしてしまいました。

二号館に辿り着いた主人公たち！田代氏のケースの銃器とは？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちします！

第16話 一発いつとく?ライオットG!(CMじゃないよ!)(前書き)

おはにちは!らいなあです!

まずは謝罪を。少し行き詰ってしまいました。

投稿が遅れてしまって申し訳ありません!

最近寝不足もたたったんでしょう。起きたら物凄い時間でした。

紹介はありません。ではどうぞ!

第16話 一発いつとく？ライオットG！（CMじゃないよ！）

そのケースに入っていたのは、ダークブラウンに染まった拳銃と同じくダークブラウンに染まった銃器だった。

「それは？」

好奇心から田代さんにそう問いかけると、彼はやはり興味がありますかといった表情で返答した。

田代さんいわく、拳銃のほうはFN ブローニング・ハイパワーという拳銃を自分好みに改良した（言うなれば）田代モデルらしい。現在、世界で多く用いられる9mmパラベラム弾をメジャーにした拳銃で、開発当初は珍しかった（皆無と言って良い）拳銃の複列^{ダブルカラ}マガジン^{マガジン}弾倉を採用した銃だ。

装弾数は当時では多い13発。田代モデルは16+1発の計17発となっている。

さらには全体を夜間と森林で効果を発揮する特殊色のダークブラウンでコーティング。マガジンと照門^{リアサイト}にかけて灰色のカラーを横断させたのが特徴だ。

他にも色々改良したらしい。どこかは分からないけど。

ちなみに偉そうに語ったけど、全部田代さんの受け売りだった。

「私はこれに何回も命を助けていただいたものです。初めて出会ったのはベトナムですぐに虜になりました。それからというもの、いくつかの戦場を渡り歩いてきたのです。100メートル先の目標をヘッドショットした時は身震いしました。ああ、私もまだまだ……」

何か過去語りに入りましたぞ。ていうか戦場って言ってるし。ベト

ナムて！ヘッドショットて！

間違いないな。田代さんは傭兵だ。特殊部隊とかじゃねえ。

その様子を見ていた姉貴は、頭に？マークを三つ四つ浮かべていたが無視しよう。

とりあえず田代さんの過去語りを中断させようかな。

しかし、USPと手記のせいで銃器のことがほんの少し分かってしまった。楽しいけど。

「もう一つのそれは？」

中断半分、好奇心半分で俺は聞いた。田代さんは嫌な顔一つせず、にこやかに説明してくれる。

「AF VW03」それがこの銃器の名称。AF社製のVW（バ―チャルウエポン。仮想的武器の意）シリーズの最新作なのだが、まだ発売されていない試作段階なので開発コードX-7の名でも呼ばれることがある。

一般的にサブマシンガンと言われる系統に似ているが、ライフルに似た性能を併せ持つのが特徴。

アサルトライフルに近いが、よりサブマシンガンらしく、よりライフルらしくしたのがこのX-7だ。単発、連射も当然の如く切り替え可能。

近々中距離ではサブマシンガンとしてフルオートで弾丸をばら撒き、遠距離では精密射撃を実現している。

しかしその欠点として機構の複雑化、それに伴う重量増加、などなどのデメリットはあるが、動作不良は確認されていない。

装弾数は35発。専用の弾薬「VAB弾」を使用。田代モデルとしてライフル性能の向上（それに伴うサブマシンガン性能の低下）、倍率スコープ装備、反動軽減機構キャンセラーなどが付いている。

またまた田代さんの受け売りだ。田代さんって実はすげえ？
だって何で試作銃を持っているんですか？と聞いたら……

「知り合いから頼まれましたな」

と言っていたし。銃器メーカーの知り合いってなに？試作運営を
任せられているような重役が知り合いってなに？

田代さん……只者じゃねえぜ！聞けばハイパワーを田代モデルに
改造したのもその人らしい。……………おいおい。

田代さんはハイパワーとX-7の弾倉に弾を込めると、ポーチに
付いてるガンホルダー（俺はさつき気づいた）でハイパワーを保持
する。

ポーチにハイパワーとX-7の弾薬を入れて、ウインチェスター
M1300を左肩に掛けると、X-7を右手で持つ。

「そんなに持っていくんですか？」

ふとした疑問に田代さんはホッホッホと笑った。

「置いていくわけにはいかないでしょう。それに徒歩の場合は邪魔
でしょうが、車なら問題ありますまい」

「車？」

「そう、車です」

俺と姉貴は首を傾げていた。

「これは車ですか？」

「はい、軍用の高機動車です」

確かに車だけでも。車だけでも！どこの世界に高機動車を所有する家がありますか！……………この家なんだけどさ！

俺たちは二号館の地下車庫に来ていた。田代さんが取った二つの鍵のうちの一つは車のキーだったようだ。

「ちなみに私の私物です」

「まさかの仰天です！」

姉貴ですらあんな調子だぞ？度肝どころか魂抜かれたわ！

田代さんの私物だと！何で高機動車なんか……………必要になるかもしれない。田代さんの経歴やばそうだし。

「乗ってください。私が運転しましょう」

色々疑問が湧かないでもないが、俺と姉貴は言われたとおりに後部座席に乗り込む。

うわ〜すげ〜。高機動車なんて初めて乗った！天井が開くのか！某学園黙示録みてえだな！

俺が少しはしゃいでいると、姉貴がふうとため息をもらす。

「どうした？」

若干心配になり、口を開いて姉貴を見据える。

「ちょっと、落ち着いただけ。疲れちゃったのかも」

さすがに無理をさせすぎたか？俺はそう思ったが、姉貴は大丈夫と言ってそうそうに話題を切り上げてしまった。

こいつは……！少しくらいは休みたいですって言えないのか！よし、決めた！姉貴の出番を奪ってやるぜ！

姉貴の出番略奪作戦を立案している間に田代さんが運転席に乗り込んでいた。そろそろか……。

よっしゃ、行くぜ！買い物だ！俺が心の中で意気込んだと同時に、田代さんがエンジンをかけ、ハンドルを握ってニヤツと笑った。

「行くぜ……！」

「降ろして下さい今すぐに！！」

あつ、田代さんってハンドル握ると性格変わるタイプだ。彼は冗談ですよと言っていたが、信用ならない。絶対に運転が危ない。

しかし、論争むなしく高機動車は音をたてて走り出してしまった。うーわー……。……って。

「以外に安全運転……」

「荒い運転してもしようがないですから」

ボケたのかよ……。食えない人だ。

舗装された敷地内を走る高機動車っていうのもおかしい感じだな。

……普通か？

などと思っていた時、ふと気づく。ゾンビがいないことに。

「あれ？そっぴやゾンビはどこ行った？」

そっぴえば……と姉貴も窓の外を見て、異変に気づいた。田代さんは目を鋭くさせて索敵をしている。

そのまま走り続けたが一向にゾンビは姿を現さない。消えた……

わけじゃないよな。どこ行っただ？

天井を開き、車体から顔を出して辺りを搜索する。いねえな。しばらく走って、敷地内を出る門の辺りまで来たところで、前方に何かが大量に居るのが見えた。

「わっお」

ゾンビさんでした。はい。

「ゾンビがいらっしやいました」

俺は二人にそう告げる。それを聞いた田代さんが門の所にたむろって居るゾンビを視認すると、突然ブレーキをかけた。

「……せめて先に言ってください」

身構えてなかったから腰を強打してしまった。いてえ。

田代さんはすいませんと謝った後、窓を開けた。X-7を右手に構えてもう一度アクセルを踏む。

「手伝っていただけますか？」

「はい」「はい」

どうやら実力行使で正面突破が作戦らしい。作戦じゃないけど。ならばと俺は車内からライオットガンを取り出し、完全に上半身を車外へ出す。

姉貴も窓を下ろし、MPSを構えた。準備は完了だ。今回は出番。どのの以前に手伝ってもらっしか無さそう。次回にしよう。

「揺れますよ」

田代さんの声が耳に届いた瞬間、物凄い横揺れで体が持っていられそうになる。

どうやらハンドルを切ったようだ。車体が左に4分の1回転して、ゾンビに胴体をさらす。

距離は数メートルしかない。ぎりぎりだよ。すげえテクニクだ。

「FIRE!」

聞いたか？ファイアだってよ。田代さんやっぱ戦争帰りだ。

心の中で呟くと同時に、田代さんがX-7の引き金を引いた。トリガー

独特の銃声と共にフルオートでVAB弾をばら撒く。適当に撃っているかと思っただが、そのほとんどがゾンビの頭に直撃していた。マジか片手で？

姉貴と一緒に呆然とその様子を見ていたが、俺は迫るゾンビを見てやべえとライオットガンを構えた。

撃つたことねえからな。さっき田代さんから教えてもらったけどいけるか？

不安に狩られつつ教えてもらった構え方で照準を合わせろ。サイト

あらかじめ弾薬は装填してるし、構え方も間違っていないはず。

後はサイトを……………どこだっけ？

やべえ、初めて銃器を撃とうとしてるから興奮しすぎて弱点忘れた。えーっと……………そうだ。

某学園黙示録で素人は胸部を狙えって誰かが言っていた。それでいっつ。トシロ

俺はゾンビの胸部へサイトを合わせて息を吐く。一回息を吸い、少し息を吐いてサイトの奥のゾンビを見据えた。

「12ゲージの12は24の半分だ！」

意味不明なことを言いつつ、ライオットガンのトリガーを引いた！

結構来る反動に銃口を上に向きかけてしまう。しかし、気合で押さえ込んでなんとか吸収できた。

落ち着いたところで狙ったゾンビを見ると、後ろに居た数体のゾンビを巻き込んでぶっ飛んでいた。一気に大量キルだぜ！

「ひゃふう〜！強すぎますう〜！」

何て言いながら先台フォアエンド（グリップを持った手の反対の手で持つ部分）を手前に引き、元の位置へ押し戻して次弾を装填する。

もう一度ゾンビの胸部を狙って〜……………はいドーン！一度撃つたおかげで今回は簡単に反動を吸収できた。

撃ったゾンビはまた数体巻き込んで吹っ飛んでいた。最高！病み付きになりそうだぜ！

次弾を装填している時、姉貴が反動に四苦八苦しているのが見えた。

何やってるんだよと言うと、姉貴はパニックになりながら口を開く。

「だってお姉さん銃なんて撃ったこと無いよ〜！」

俺だって同じだが簡単に出来たぞ！ましてや反動はMPSの方が小さいはずだ！しかも、田代氏に教えてもらったじゃないか！

それでもパニックから、姉貴はMPSをアッチにやったりコッチにやったりしていた。お〜い、そっちじゃないよ馬鹿めっ！

しょうがないから姉貴をどうにかするか。ゾンビは田代さんに任せよう。

「落ち着け姉貴。構えはこう、撃つ時は眼をつぶらずにしっかり見据えて」

一旦車内に戻り、姉貴の後ろから覆いかぶさってちゃんとした構え方に直す。姉貴の手の上からフォアエンドとグリップを握り、サイトをゾンビの胸部に合わせて一回トリガーを引く。

さっきと同じように、ゾンビは後ろの数体を巻き込んで吹っ飛んでいった。確かにライオットガンに比べて反動が少ないな。

「わかったな？」

姉貴は挙動不審な様子で頷くと、俺が言ったとおりの手順でゾンビを吹っ飛ばした。

何だ？姉貴の割に珍しく無口じゃないか。いつもは良ちゃんが抱きついてるゝとか言うのにな。変なの。

俺は姉貴から離れて、さっきと同じポジションに戻る。ライオットガンを構えて、ゾンビを大量キルった。

「お前らの未来は死だ！（もう死んでるけど）」

順当にゾンビを大量キルっていると、田代さんがX-7からウィンチエスターM1300に持ち替えてアクセルを踏んだ。

「突破！」

田代さん口調口調。俺は車体にしがみついて揺れを耐える。

田代さんはハンドルを切って、門へ車体を向けた。本当に突破す

るんだ？

向かってくるゾンビをウィンチェスターでふっ飛ばしながら、彼はアクセルを踏み込んだ。ショットガンを片手で操りますか。

左手で巧みにハンドルを操り、田代さんは進行を邪魔するゾンビを轢きまくった。

俺も邪魔なゾンビをライオットガンで蹴散らす。姉貴も同様に。

そして俺たちは、ゾンビの垣根を越えることに成功した。やったね！

遠ざかるゾンビたちを見ながら、ふと出た言葉が……

「一発いつとく？ライオットG！」

誰もが知っているCMのフレーズをマネながら、俺は一番近くのゾンビへ向けてトリガーを引いた。

第16話 一発いつとく？ライオットG！（CMじゃないよ！）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

祝！初発砲！とオリジナル銃器の登場です！

AF社とVWは考えました。難しかったです。

これからもオリジナルをボチボチ登場させます！

ようやく買い物に出かけた主人公たち！無事買い物できるのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第17話 美鈴に手を出す腐れ外道の末路はデッドエンド(前書き)

おはにちはーらいなあです！

疲れが溜まっています。もの凄く疲れが溜まっています。

……………以上です。

紹介はありません！当然ですか？

第17話 美鈴に手を出す腐れ外道の末路はデッドエンド

「ん？弾切れか」

弾薬が尽きた俺は、車内に戻って天井を閉めた。弾薬を補給せねばならん。

銃の下部にある装填口に、ポーチから出した12ゲージ弾を詰め込んでいく。7発……こんなもんで良いか。

7発詰め込んだ後、フォアエンドをチューブラー・マガジンに合わせて往復させる。これでリロード終了だ。

見れば姉貴も、ボックス・マガジンの弾薬が尽きたようで、マガジンを外して次のマガジンを装填していた。

ドラム・マガジンは使わないようだ。重たいだろうからさっさと使えば良いのに。

視線を田代さんに移すと、彼は片手で器用にリロード&次弾装填していた。手馴れてますね。

装填しながらも、ハンドルを操る彼の手腕はただ事じゃない。普通の人には先ず無理だ。

しかも、その状態でギアチェンジまでやり遂げる。それなのに車内の揺れはほぼ皆無だ。

すげえ〜な〜田代さん。そんな関心事を呟きつつ、ふとした興味で声を掛ける。

「田代さんってどうして執事に？」

そういえばそうなんだ。田代さんほどの腕があれば、歳関係なく今でも傭兵でいけるだろう。

「ただ今では小林家で執事長として身を置いている。どういことだ？」

彼はしばし沈黙を貫いていたが、決心が付いた様子で口を開いた。

「結婚したからです」

「……………田代さんって結婚してたんだ？知らなかった。」

軽い衝撃が俺を一瞬硬直させてしまった。横の姉貴も同様に硬直している。

「もう亡くなってしまいました……………」

「あつ、これやべえ話題だ。触れちゃいけない気がする。」

田代さんの言葉で我に返った俺は、気まずさから車外へ視線を逸らした。

「ひゅ〜ひゅ〜、俺は何も知らないよ……………最低だな俺。」

「そして妻の親戚である小林家に執事として仕えたのです」

彼自身、あまり触れたくない話題なのか、そうそうに切り上げた。気まず過ぎる。

その気まずい雰囲気察した姉貴は、空気を変えようと何かを議論んでいる様子だった。

「何するんだ？そう思ったのも束の間……………」

「ニヤ〜！」

何をやっているんだ姉貴……………。彼女は両腕を上げて、万歳の様な

ポーズでニヤーと言った。

俺は頭を押さえてため息を吐く。唐突過ぎるだろ、馬鹿めっ！

こりゃ田代さんもさすがに怒るんじゃないか？しかし彼はホッホッホと笑うと、突然車を止める。

「ありがとうございます美鈴様」

振り返って笑う彼は、何かを思い出したような表情で姉貴を見ていた。

姉貴も上手くいったのが嬉しいのか、はたまた別の理由か、満面の笑みで笑い返していた。

へえ、姉貴もたまにはやるじゃないか。少し見直したよ。

車内に良い空気が流れる中、それを邪魔する不躰な輩が高機動車に向かってくる。

しょうがない。俺は裏方に徹するか。

ライオットガン片手に、天井を開けて身を乗り出す。

「良い雰囲気邪魔する奴は12ゲージに撃たれて死んじゃえ！」

馬に蹴られて死んじまえ！的なノリでライオットガンのトリガーを引いた。

一番手前のゾンビが後ろのゾンビを巻き込んで吹っ飛んでいく。いわゆる将棋倒しってやつか？

フォアエンドを往復させて次弾をチェンバーに装填し、近くのゾンビへ銃口を向ける。

一息にトリガーを引き、ゾンビを吹っ飛ばす。

良いねえ。次は60%だ。と、いきたいところだが、そろそろ出発かな？

次弾を装填させ、車内へ戻る。あー楽しかった。満足満足。戻ってくると車内の空気は元に戻っていた。空気が良いって最高！

田代さんは俺が戻るのを確認すると、アクセルを踏んで車を走らせる。

「申し訳ありません。お1人で戦わせてしまつて……」

「いいんです。俺がそうしただけですから」

間違つたことは言つてない。俺が自分からやつただけだ。

ありがとうね良ちゃん。なんて姉貴が言ってくるが、むず痒いな。

素直に感謝されることには慣れていないんだよ。くそ〜ハズイ。

俺が身もだえしている中、田代さんがもうそろそろですよと言ってきた。

姿勢を正し、ちゃんとシートに座つて窓の外を見る。

外には結構大きなスーパーがあつた。どうやらここが目的地らしい。

田代さんは出入り口の近くの駐車場に高機動車を停車させた。

「準備は入念に」

俺と姉貴は頷き、各種装備の点検などを済ませる。

ちなみに俺のライオットガンもUSPも短刀も何も問題は無かつた。良いことだ。

誰の装備も問題無かつたとゆうことで、俺たちは車から出たいと

ころなんだが……。

「外にはゾンビがうるちよろしてるよ？」

「どうやって出るの？と言わんばかりの顔で、姉貴は俺の顔を凝視してきた。そんな顔で見るなよ……。」

しかし田代さんは既に考えがあるようで、任せてくださいと自信満々に笑う。

「私が囿になりましたよ？」

「「えっ!?!」」

彼は衝撃的な考えを発表しだした！な、なんだって！

でも！と俺が反論する前に、田代さんはドアを開けて飛び出して行ってしまった。

いくら田代さんでも数が多すぎる。X-7とブローニング・ハイパワーとウインチェスターM1300だけじゃ無理だ!……!けど。

「田代さん!」

姉貴がドアを開けて飛び出していることとするのを俺は阻止する。

「何するの！良ちゃん!」

「どうやら姉貴は物凄く錯乱しているようだ。しょうがないけどな。」

「落ち着け姉貴」

田代さんの頑張りを無駄にする気か？そう言ったら姉貴は火が消えたように大人しくなる。

もう出て行ったものはしょうがない。なら俺たちはやるべきことをやるだけだ。

次々正論を言って、姉貴を抑え付ける。そうでもしないと俺が飛び出していきそうだったからだ。

くそっ！いつもこんな役回りだ！表面上冷静を装いつつ、俺は静かに外を探る。

近くにゾンビはいないようだ。さすが田代さん。

俺は姉貴を説得し、伴って車から出た。さつきも言ったけど無駄には出来ないからな。

ゾンビが居ないことを確認し、誘き寄せないように静かにスーパーに入る。ここまではOK。

中にゾンビは居ないのか、まるで気配を感じない。好都合だ。

索敵ついでに視線を巡らすと、薄暗いのも相まって異様な静けさがスーパー内に充満していた。

俺はライオットガンを構えて、薄暗いスーパー内を進んでいく。

後ろの姉貴には後方も注意しとくように言っておいた。信用しておこう。

ある程度進んだところで、外から銃声が響いてきた。田代さん頑張ってたな。俺も頑張るか。

意気込みしばらくすると、眼が暗さにも慣れてきて、段々と物の凹凸や位置取りが分かるようになってきた。

前方にレジが見える。とりあえずそこまで行こう。

数メートル先に見えたレジへ歩いていくと、台の上に何かがある。これは……バール？

嫌な予感がして後ろを振り向く。そこには居るはずの姉貴がいな

かった。

「（姉貴！？どこ行つた！）」

大声を出さずに姉貴を呼ぶが、返答は返ってこない。

「（姉貴！！）」

やはり返答は返ってこない。そこにはただ静寂があるだけだ。
何が起こっているんだ？俺はそう思う前に……

「がっ……！！？」

後頭部を何かで殴られたのかもしれないな。俺はそれっきり何も考えられなくなった。

次に俺が眼を覚ましたのは誰か女性の悲鳴を聞いた時だった。
それと共に誰か男たちの気持ち悪い笑い声が聞こえてくる。うわ
っキモ。

ゆっくりと目蓋を開くと、視界に太った男の背中が見えた。うん、
後姿キメ工。

俺は体を動かさずに視線だけを動かす（頭いてえけど）。すると
太った奴の他に男が3人見えた。さらに……

「やめてください！！」

太った男の足元には、栗色の髪的女性……姉貴が地面を這いずっ

ていた。

姉貴！！？と叫びそうになるが、彼女の姿を見て俺は言葉を出せなくなる。

姉貴はYシャツの胸元を破かれ、自他共に認めるその巨乳がブラと共にあらわになっていたからだ。

それだけで俺は全てを察した。こんの腐れ外道たちのせいか！

さつき頭を殴ったのもコイツらか！姉貴の姿が見えなくなったのも！

俺は湧き上がる怒りを隠しもせず、ゆっくりと立ち上がる。

「お、親分！このガキ起きてやがった！」

「ん〜？」

俺の姿を視認した男の1人が太った男にそう告げると、太った男は振り返って俺を見た。

今時、親分て！そんなツッコミさえ思いつかないほどに俺の頭は怒りで一杯だった。

ぜってー許さねえ！！皆殺しにしてやる！！

「動くなよ！撃つぞ！」

さつきとは別の男1人が、俺に向けてMPSを構えてくる。姉貴の武器……奪われたのか。

ふと俺の手元を見るが、持っていたはずのライオットガンが無い。武器は奪われたか……。

視線を男たちに戻し、ライオットガンを探すと、MPSを持っている奴とは別の奴が持っていた。

「良ちゃんー！」

俺に気づいた姉貴は俺の名前を呼ぶが、太った男に殴られて言葉を
出せなくなる。

この……！！あのデブには地獄を与えてやるう！！
しかしMPSとライオットガンを俺に向けられては何も出来ない。
動けば俺が死ぬだけだ。

その時俺は気づいた。誰もUSPを持っていないことに。
薄暗い中、気づかれないように腰へ手を回すと、USPと短刀が
ベルトに挿さったままだった。

キタこの馬鹿めっ！ボディチェックぐらいしとけつての！！

これならハツタリも出来る！俺は右ポケットから「ケータイ」を
取り出すと、男たちには良く見えないように持ち直した。

「別に撃つても構わないが、そんなことしたら全員死ぬぞ？」

奴らは頭に？マークを浮かべていたが、俺の次の言葉に戦慄を覚
えることだろう。

「俺は今、手榴弾を手に持っている」
『……？』

予想通りに全員が硬直した。男の1人がそんなもの持っているわ
け………と言うところを遮って、俺はさらに追い討ちを掛ける。

「何でただの学生が銃器を持っていると思ってるんだ？手榴弾も
入手済みだ」

そう言うだけで男たちは簡単に信じてしまった。楽勝楽勝。

冷静に物事を考えるが、頭の大半を占める怒りが「今すぐアイツらを殺せ！」と命じてくる。

焦るなよ俺。コイツらには後でたっぷり地獄を見せてやるんだからよ！！

「さつさと撃てよ。俺を撃ってみろよ。全員まとめて吹き飛ばしてやるよ！」

鬼気迫る俺の様子に、男たちはもれなくたじろぐ。

しかし、銃器を持っていない男が出来ないだろ！と俺に叫んできた。

「そんなことしたら、お前もこの女も死ぬぞ！！」

当たり前のようにそんな言葉を出したが、何言ってるんだコイツは？

俺はたった一言、言葉を笑って言う。

「やむなし」

それだけで男たちは死んだような眼で俺を凝視していた。ハハハっ！！簡単だなこの馬鹿ども！！

もう少ししていたいのもう止めよう。コイツらには、俺の家族に手を出した罰を今すぐにも償わせてやらないとな。

「何だ？撃たないのか？じゃあいいや、みんな死ねよ」

俺は飽きたように右手の「ケータイ」を男たちに放った。

悲鳴を上げて男たちは俺から視線を逸らす。今だっ！

腰から短刀を抜き放って、MPSを持った男へ走る。ゼロ距離まで迫ると、男の鳩尾へ短刀の柄頭を叩き込んだ！

男はぐあっ！？と言って崩れ落ち、MPSを落とした。俺はMPSを拾い上げ、ライオットガンを持った男へ向ける。

胴体を撃とうと思ったが、直前で足にサイトを向けてトリガーを引いた。

ぎゃあああああっ！！？と醜い悲鳴を上げて、ライオットガンを持つ男は使えなくなつた両足から地面に崩れ落ちた。当然の如くライオットガンを手から取り落として。

しかし、手榴弾を偽者だと気づいた何も持っていない男は、勇敢にも俺へ殴りかかってきた。

俺が短刀で男の足を切りつけると、男はいてえええええ！！？と言つて俺の足元に倒れる。

また反抗してこられても面倒だから、俺は男の胸を思いつきり踏みつけた。

最後の1人と思つてデブの方へ視線を向けたが、そこにはライオットガンを持ったデブが姉貴を盾に立っていた。

人質かよ。やっぱ最悪だなこのデブ。

さつき落ちたライオットガンを拾いやがってるし。それは俺のだ！

「武器を捨てる！この女を撃つぞ！」

ありきたりなセリフで俺を脅せると思つているのか？しかし、あえて俺はその要求に応じる。

短刀とMPSを遠くに放り、俺はゆっくりと男に向けて歩き出す。

「動くな！」

「片手で銃を撃つのは難しい。近くに行つてやるからちゃんと狙え」

そう言つとデブは姉貴に銃口を向けたまま静かに待つ。良い馬鹿だ。今すぐ近くへ行つてやろつ。

ん？確か某学園黙示録でもこんなシーン無かつたっけ？その時はガソリンスタンドだった気がするけど。

なら次の行動はアレだな。デブの近くまで歩いていった俺は気づかれないように右手を腰に回す。

「死ね！！」

デブは銃口を姉貴から俺の顔面に向けて、トリガーを……………引く。

俺はそれを予想していたので、顔を逸らせつつ左手でライオットガンの銃口をハジいた。

あらぬ方向へ12ゲージをめり込ませたデブは、再度俺へ銃口を向けようとするが、その前に腰から抜き放つたUSPをデブの肩へ向けた。

「お前がな」

刹那、USPの9mmパラベラム弾がデブの肩を貫き、姉貴の拘束が解ける。

「良ちゃん！！」

姉貴を俺の方へ引き寄せ、デブの脳天にUSPを突きつけた。

「いてえよ！いてええ！！」

デブは肩を押さえたまま動きを止める。痛さのせいで自然にあふれ出る涙で顔をグショグショにしながら、俺に無様に命乞いをしてきやがった。

やれ助けてくれ！だの、やれ見逃してくれだの。ハッハッハ、面白いこと言っなあこのデブ。

「ふざけんなよっ！！」

USPをデブの脳天にグリグリ押し付けて、今までに溜まりに溜まった怒りをぶちまけた。

「俺の家族に手を出しといて助けてくれだど？無理だなっ！死んで償え腐れ外道！！」

俺がUSPのトリガーを引こうとすると、姉貴が待つて！と割って入ってきた。

何で！？と聞くと、姉貴は悲しそうな瞳で首を振る。

「良ちゃんの手が穢れちゃうよ」

そう言われちゃ、やるわけにはいかないだろう。勢いも無くなっ
たし。

しょうがないからデブの脳天からUSPを外す。デブ、ライオットガンで撃とうとしてるのバレバレだぞ。

ここで反省していたのなら許してやるうかと思ったが、反省無し
ということ許さな〜い。

俺はUSPでデブの両足を撃ち、クソツタレの動きを封じた。

「ぐぎゃあ!!」

キメエ声だ。俺はUSPを腰に差し戻すと、ライオットガンを奪い返す。

「お前たちにはラストチャンスをやろう」

まだ死んでいない全員に生き残るチャンスを与える俺、カッコいい!!………ちよつと脳内がフィーバーしていただけだ。

ゆつくりと短刀とMPSを回収し、全員に聞こえるように語つてやる。

「その使えない足でゾンビから逃げ切つたら許してやるよ」

瞬間、起きているであろう奴らは絶望的な表情で凍りついた。ひやつひやつひゃ、いい表情だ。

俺は近くにあつた紐で全員の足を縛ると、姉貴を引き連れて出口まで向かう。

「待ってくれ!無理だつて!助けてくれえ!!」

デブが気持ち悪い声で醜く命乞いをしている様は、酷く俺を不快にする。

俺は出口の所で止まって一言。

「美鈴に手を出した奴はぜつてえ許さねえ!!」

そして俺は姉貴の手を引いてその場を後にした。

MPSとUSPを使つちまったからな。銃声に誘き寄せられたゾンビがいずれここにもやつてくるだろう。

その前に作業を終わらせなきゃな。

俺たちはスーパー内を歩いていった。

第17話 美鈴に手を出す腐れ外道の末路はデッドエンド（後書き）

いかがでしたでしょうか？

波乱でしたね……。そして本当の良祐が出た回でもありました。

ボケたりツッコミ入れたりして、何か面白い奴みたいなのがポジションの良祐ですが、あれが良祐の本心、あるいは本当の彼です。

危機を脱した主人公たち！任務を遂行できるのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第18話 物資調達で5話目に突入て！（前書き）

おはにちは！らいなあです！

頭痛い……大して無い頭を酷使しすぎました。

一区切り付いたらしばらく休憩しようかな……。

紹介はありません！何故ならそれは自然の摂理。……調子乗りまし
た。

第18話 物資調達で5話目に突入て！

ある程度歩いて気づいたが、どうやらさっきまで居た場所は事務所のような所だったようだ。

だから出口があつたのか。なるへそなるへそ。

ちなみに今、俺たちは惣菜コーナーの辺りを歩いていた。あんな所に居続けたくは無いからな。

周囲の安全を確認した壁際に姉貴を一旦座らせた。俺も休憩しないと……っ！

「頭いてえ……」

さっきは怒りで痛覚が麻痺していたが、終わった途端痛みがぶり返してきやがった。おもつくそ殴りやがってアイツら！

とりあえず俺は大丈夫だな。今は姉貴のほうが心配だ。

「大丈夫か？」

「う、うん……」

心ここに在らずってやつか？姉貴は青ざめた顔であらぬ方向へ視線を向けていた。

やり……過ぎた？あの時は脳内麻薬が大量に分泌されてたせいで、アイツらを殺すことだけを考えたからな。

しかし、姉貴は俺の思考を悟ったのか首を横に振って否定する。

「違つの、良ちゃんのせいじゃないよ」

そう言ってくれるのは嬉しいが、少なからず影響を与えているように見えて仕方が無い。

俺のせいだ。スーパーに人が居る可能性を考慮してなかった。ましてやこんな極限状態で、あんな頭のイカれた連中が出ることをアニメとかで見っていた俺は、もう少し注意を払うべきだった。現実には無いフィクションでも学ぶことはあっただろうに！くそがっ！

壁を叩いてみるがこの複雑な感情が晴れることは無い。

重い空気が場に漂うのを感じる。姉貴も固く口を閉ざしたまま何もアクションを起こさない。

どうするか？このままここに居るのは得策じゃない。でもなあ……。

空気を変えたいのは俺だけじゃなく姉貴も同様のようで、何かを呟いて俺に声を掛けてきた。

「ねえ、さっきの銃は……？」

「ん？」

USPのことか？そっぴやUSPのことは姉貴に話してなかったな。

俺は昨日の香澄さんとの会話を鮮明に語る。姉貴は最後まで何も言わずに聞いてくれた。

全てを聞き終えた姉貴は、そうなんだ……と呟くと俯いてしまう。

何かヤバイこと言ったか？彼女は俯いていて表情が見えない。

俺がそわそわとしていると、姉貴は懐かしむような声音で問いかけてきた。

「覚えてる？」

「えっ？」

顔を上げ、天井を仰ぐ姉貴の顔は、嬉しそうでもあり、悲しそうでもある。

「2年前のこと……」

「……………ああ」

2年前。それは忌まわしい事件があった年。

当時、姉貴が大学に入って2年目の頃。大学が終わり、家への帰路についていた時に事件は起こった。

帰宅路の人通りが少ない路地で、姉貴は三人組の男たちに誘拐されてしまったのだ。

容姿やスタイルのせいか？はたまた金か？理由は分からないが、誘拐犯は車で逃亡。

しかしその様子を目撃されていたおかげで、直ぐに東海林市内に警戒網が敷かれた。

そして犯人は市内を出ることも叶わず、どこかへ身を隠したのだ。警察は搜索を続けたがなかなか見つからず、硬直状態で夜が明けた時に事態は急展開を見せた。

犯人が身代金を要求してきたのだ。およそ1000万円。

もちろんそんな金を直ぐに用意できるわけでもなく、交渉は決裂するかに見えた。

だが、犯人はミスを犯し、警察に逆探知されたのだ。警察は現場に急行。犯人たちを追い詰めることに成功した。

しかし寸での所で取り逃がし、それきり犯人は霧のように消えた。行方をくらましたのだ。

かなり切羽詰っていたせい、犯人は姉貴を置き去りにしたまま

逃走。救出には一応成功した。

そして翌朝、逃走したはずの誘拐犯三人が、警察署の前に半殺し状態で放置されていたのだ。

誰がやったかは不明。犯人たちも頑なに口を割らなかった。謎は明かされること無く、そのまま迷宮入り。

救出された姉貴は事件の恐怖から精神を少し病んでしまう。いわゆる人間不信ってやつだ。

でも、俺と円さんの献身的な協力のおかげで、姉貴は徐々にだが人間不信を克服できたのだ。

それで何週間か掛かって、今の姉貴にまで一応回復した。最初のほうはガタガタだったけどな。

それが2年前にあった全て。表立った記録だ。

「でも、それがどうした？」

あの記憶は手に取るように鮮明に思い出せる。でも、今話すような話題でも無いだろう。

姉貴は一閃開けると、笑って口を開いた。

「今回も……あの時みたいだね」

そう………かもな。奇しくもあの時みたいだ。俺はまた、2年前を繰り返してしまったのか。

俺が呟くと、姉貴は違うよと首を振る。

「良ちゃんが直ぐに助けてくれたもん」

俺は何も言えなくなり、恥ずかしさから顔を背けた。……くつ、顔が熱い！

うわー！そういやさっき色々言ってたな！美鈴に手を出した奴は……ぎゃあああああ！！

さっきのことを思い出し、一人顔を赤面させていると、姉貴は思い出したように声を出す。

「そういえば、あの時犯人を懲らしめた人は無事かな？」

こんな世の中の惨状から出た言葉だったのだろう。しかしそれは俺の行動を止めるには十分な言葉だった。

「きつと無事だよな？」

強いからと言う姉貴の顔から、俺は視線を地面に向ける。

ああ、その人は生きているよ姉貴。2年前の犯人を半殺しにした奴は元気だ。

「一度会ってみたいな」

会ってるどころじゃねえよ。そいつは直ぐ近くに居たよ。

俺はそいつを知っている。すぐ身近な奴だから。

「誰なんだろうね？」

違うよ姉貴。目の前に居るよ。そもそも警察や姉貴たちが分からないのも無理は無い。

そいつは誰にも言っていないから。でも唯一俺は知っている。

2年前の犯人を半殺しにしたのは「俺」だからだ。

警察が逆探知に成功した際、俺は警察の後を追って現場に向かった。

そこで周囲を探索していると、犯人の物と思しき車を見つけたんだ。

俺は車の中に隠れ、逃げていた犯人を追跡するつもりだった。案の定犯人は逃げてきて、俺が乗った車で逃走。

最初は警察に通報するつもりだったけど、車が停車した際に犯人たちが姉貴を誹謗したから、つい……ね。

円さん譲りのケンカ強さで半殺しにしまったわけだ。

幸い近かったのもあって警察署に放置してやったけど。

犯人はアレだね、中学生のガキに半殺しにされたのが不名誉だと思っ言わなかったんだね。

その後俺は、傷だらけの風貌で家に帰ったけどさ。

「誰だろうな？」

ちなみに俺はその事を誰にも言ってない。姉貴にも円さんにも理奈にも冬紀にも。

言っ必要性を感じなかったから。犯人が放置されていた事に関しては、後で警察から何かしらあるだろうし。

それが2年前の真実。本当の全てだ。

姉貴は色々話していて落ち着いたのか、立ち上がり満面の笑みを俺に投げかけた。

「いつもありがとう良ちゃん！」

唐突過ぎるだろ。でもまあ、受け取っておこう。ささやかな報酬として。

うーん、気分が清々しい。何か良いことでもしたくなってきた。俺は姉貴の肩に制服の上着を掛けて、左手に持ったMPSをしっかり握らせる。

「こんなことがあった後だけど、もう少し頑張ってくれ」
「うん！」

即答かよ。もう少し渋ると思っていたんだけどな。まあ今回は精神に何も無かったようで、良かった良かった。

っしゃ！行つか！俺はライオットガンを構えて、暗がりの中をゆっくり歩いていく。

もちろん姉貴を連れて……な。だけど今回は横に歩かせよう。何があっても対処できるように。

「行ってくぞ〜！」
「おー！」

ノリ良いな姉貴。あんなことがあった後なのに。良いことだけど。俺たちは会話を止めることに無く、少しずつ歩を進めていった。

「これで全部か？」
「そうだよ〜」

スーパーの前に停めた高機動車の中に、田代さんから言われていた物資を車に載せ終わった俺たちは、一旦車の中へ戻る。

「田代さんは戻ってこないのか？」
「みたいだね……」

だというのに、田代さんは一向に戻ってこない。銃声も全く聞こえないし。

まさか………いやでも、あの田代さんだぞ？今は随分丸くなつたとはいえ、元は傭兵だった人だ。

ちよつとヒーハーしすぎて疲れただけだ。いずれ帰ってくるだろ。………うん。

俺の一考を読み取った姉貴は悲しそうな顔をする。

「だ、大丈夫だって！すぐに呼びましたか？とか言つて帰ってくるに決まつてる！」

俺は無理矢理感が否めない様子ながらも、何とか姉貴を元気付けようとした。くそ……俺だつて一杯一杯なのに！

ふと姉貴の口から零れた彼の名前が、車内に空しく響き渡つていく。

「呼びましたか？」

「うわあっ！！」

「きやあっ！！」

突然運転席から田代さんが顔を出してきた！居たのかよ！彼は俺の心を読んだのか、その返答ばりに言葉を出した。

「ええ、ただ今」

音も無く忍ぶなよ！怖いだろ！ていうか心を読むな！

とりあえずひたすらつつ込んで置こう。……心の中で。口に出してもアレだし。

田代さんは運転席のドアを閉めると、俺に確認するように問いかけた。

「物資は？」

そりゃあもちろん、完璧です。俺はそう即答して、ニカッと笑ってやった。

田代さんも笑い返して、一件落着……………といきたいところだが、遠足は帰るまでが遠足だからな。（遠足じゃないです）

では行きましよう、田代さんが車のエンジンを掛け、ゆっくりと高機動車を走らせる。

「疲れた〜」

俺ってよくよく考えれば働きすぎじゃね？

一昨日は車を爆破して、昨日はハーメルンをぶっ殺して、今日はこれか。……誰か給料出してくんねえかな。

気だるい体をシートに沈め、俺はグチグチ文句をたれていた。

第18話 物資調達で5話目に突入て！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

やっと買い物が終了しますね。はい。

ここまで5話消費しました。買い物だけで。大して書いてないのに。ようやく物資を調達した主人公たち！後は小林邸に帰るだけ？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第19話 守護神たる資格（前書き）

おはにちはーらいなあです！

今回ヤバイです。気づけば10000文字書いてました。

2話分の文字量ですよ！どつりで永く感じたわけだ！

さらに今回は真面目回！&急展開な話です！

紹介はありません！はい！

第19話 守護神たる資格

スーパーを出発して数十分。もう少しで小林邸に着く………という所で、何か異変を感じ取った。

「田代さん、あれ………！」

「むっ………」

小林邸の正門に、数百を超える大量のゾンビが殺到していたのだ。田代さんは高機動車を方向転換させ、敷地を沿うように走らせる。裏門へ行きましょう！と彼の声が耳に届くと同時に、一号館の方から爆発音が響いてきた。

「なに！？」

突然の爆発に、姉貴はオドオドとした目つきで俺に聞いてくるが、俺に問いかけられたところで何も分からん！

後ろに双眼鏡があります！田代さんのその言葉に、俺は指示性を感じ、双眼鏡を取り出して天井を開く。上半身を車外へ出し、爆発音が聞こえたほうを見ると、一号館から尋常じゃない黒煙が天へ立ち上っていた。

俺は双眼鏡を使い、黒煙の元へ視線を向ける。すると、木刀を持って戦う冬紀とハンマーを持って戦う理奈の姿が見えた。

ゾンビが襲撃してきたのか！？と思考し、彼らの周囲を探ると、ゾンビとは違う何かが見界に映る。そいつは2メートルを超える巨体を持ち、屈強な肉体でゾンビをなぎ払っていた。

味方なのか？しかしそいつは周囲にゾンビがいなくなると、理奈へ向けて突進を始めた！

「あいつ！敵……しかもニューゾンビだ！」
「ええっ！？」

俺は直感する。あいつは味方じゃない！ニューゾンビだ！
やっぱり出てきやがった。新しいゾンビ！ハーメルンに次いでか
よ！

バイオハザードというゲームで出てきた「タイラント」や「ネメ
シス」に似ている。アイツらみたいに強力な敵かもしれない。だと
したら俺たちじゃ勝てない！

「田代さん！みんなが新しいゾンビに襲われています！」
「む！急ぎましよう！」

田代さんは一際強くアクセルを踏み、高機動車をもつと速く走ら
せた。物凄い風圧に、体が後ろへもって行かれそうになる。

俺はそれを気合で耐え、双眼鏡でニューゾンビを観察し続けて、
ふと気づく。

香澄さんが銃器を持ってみんなと一緒に戦っていることに。持つ
ている銃器は昔どこかで見たことがある。何だったっけ？……MP
5だっけ？

確かH&K社のMP5とかいうやつだったはずだ。何だっけ？高
性能のサブマシンガン？世界中の諸機関で使用されている信頼され
た装備だとか何とか。良く知らんけど。

「揺れますよ！」

俺の思考を中断させるように叫ばれた田代さんの声に、俺は瞬間
的に車体に掴まった。次にはカーブを曲がる横揺れと、急ブレーキ
による跳躍が車体を襲う。

しかし、秒も経たないうちに高機動車は急発進すると、別の方向

から襲う風圧が、俺の意識を一瞬遮断した。

本当に凄い運転だ！車外だと死ねる！死なないのは上半身だけだからか？

心の中で悪態をつく余裕はあるが、それを口に出すほどの余裕が無いくらいこれはヤバイ！

「すぐに着きます！戦闘の準備を！」

対して田代さんはめっちゃ余裕そうだ。俺は車内に戻り、ライオットガンを手にする。

車外へ視線を向けると、裏門らしき入り口が見えた。幸い、ゾンビはこつちに数体しか居らず、高機動車で轢きながら敷地内への侵入に成功した。

ここから一号館までそんなにはず。すぐに戦えるように気構えとこう。

と車体を横滑りさせながら目的地に到着したようだ。俺は逸る気持ちからか、高機動車が止まりきる前にドアを開けて飛び出す。

「みんな！」

「良祐！？」

「戻ってきたのか！」

冬紀と理奈の待ちわびたような声を軽く受け止めつつ、俺は2メートル近いニューゾンビに12ゲージを放った。

銃声の名残が耳から消え去る前にフォアエンドを往復させ、薬莖チェンバーの排出と次弾を薬室に押し込んだ。

「アイツは何だ？」

さすがに12ゲージの装弾は効いたのか、少し後退しながらしば

らく動かないニューゾンビを指し示す。

ていうか5メートルぐらい離れているからって、ショットガン散弾銃を受けてほとんど効いてねえのかよ！

冬紀がニューゾンビを見据えたまま、力なく首を振る。

「分からない。さっき突然現れて建物を破壊していつているんだ」
「アイツかてえよ！香澄さんの銃もアタシのハンマーも冬紀の木刀も効かねえ！」

理奈、段々弱くなってってるぞ。ともかくアイツはやべえ！
近くでよく見ると、その服装は他のゾンビ同様にボロボロだが、皮膚は土のように黒く、目は真っ赤に染まって血涙すら流している。見た目のキモさじゃ、ネメシスとかと張れるかもしれない。……さすがにそれは無いが。

ゆっくりと動き出すニューゾンビは、後方から来たゾンビを吹っ飛ばし、俺たちへ向けて歩き出す。

「りよりよりよ、良ちゃん！あ、アレ何！？」

「なんと……！」

だから俺に聞くなって！俺と姉貴と田代さんが持っている銃器を理奈と冬紀は気にしているようだが、事態の優先度から聞きはしないようだ。

こっちに向かってくるニューゾンビをよそに呑気なもんだな。

「田代！話してないで手伝って！」

「は、はい！」

向かってくるニューゾンビへ牽制しつつ、香澄さんが俺たちにも怒号を飛ばしてきた。

やべえやべえ。ライオットガンを構えてニューゾンビへ12ゲージをめり込ませる。

「そっぴや冬紀。円さんと早織は？」

次弾装填しながら、俺がこの場に居ない二人の安否を確認すると、冬紀は大丈夫と笑って理奈が補足する。

「二人は車に物資を積んでるぜ！」

なる。ゾンビの注意がコッチに向いている間にか。それなら安全だ。

もう一発ニューゾンビへ向けてトリガーを引く。やはりニューゾンビは後退して、しばらく動きを止める。ちっ、こんなんじゃジリ貧だぜ！

「あのミュータントをなんとかしないと！」

そんな冬紀の呟に俺は噴き出しそうになる。ミュータントねえ。

「突然変異体か。直球でいい名前だ」
ミュータント

というわけであいつの名前はミュータントだ。俺が決めた。

ミュータントはこちらに向かうゾンビをぶん殴って払いのける。まるで邪魔だと言っているようだ。

ミュータントの性質なのか？ゾンビどころかお構い無しにぶん殴ると、脳内にメモしておこう。

俺は冷静に観察してアイツの理解に力を注ぐ。後々役に立つからな。

さっきの手順を繰り返し、ライオットガンを撃てるようにして、ミュータントにぶつ放す。

銃声が響く中、迷わずに俺たちへ向けて歩いてくるな。聴覚の索敵はさほど優れていないのか。使えないのかは分からないが。

視覚は………無理だな。血涙のせいで見えやしねえだろ。あんなもん飾りみてえなもんだ。

となれば嗅覚か？でも硝煙の臭いが凄い中で二オイを追えるか？いやしかし、ゾンビを的確に払いのけている。………異常発達した嗅覚がいまんとこ候補かな。

ゾンビの腐った臭いに反応して払いのけているのかもしれない。ゾンビが近くに居ると嗅覚が使えないからな。

硝煙はさして問題じゃないんだろう。なるほど、ミュータントは嗅覚で生存者を追うのか。

前にも言ったが、電磁波とか第六感とか超能力じゃない限りは嗅覚が一番候補。聴覚が二番手。視覚は三番手だな。

「こんだけ分かれば対策は立てられる」

とは言ったものの、アイツを倒す術は無いわけで……。さて、どうしたもんか。

とりあえずライオットガンをセミオートに切り替えて、残りの全弾3発を連続でミュータントへ叩き込む。

やっぱあんま効いてねえな。俺は下部の装填口にポーチから出した12ゲージ弾を7発入れておく。

ちなみに言っていないけど、このライオットガン（ベネリM3）はポンプアクションとセミオート射撃を切り替えることが可能。

俺が今まで使っていたのはポンプアクション。今使ったセミオートは、フォアエンドを往復させること無く、薬莖の排出と次弾の装填を行ってくれる優れたものなんだが、俺はポンプアクションが好きだからそっちを使っていた。

「皆さん！」

「お母様！」

心の読者様に語りかけている時、俺の耳に円さんと早織の聲が届いた。

どうやら車に積載し終えたようだ。俺はフォアエンドを一往復させ、ミュータントに2発ぶち込む。

よし、後は………どうするんだ？そっぴや俺、何も聞いてないんだけど。

その疑問を埋めるかのように、MP5をひたすらめり込ませる香澄さんは口を開く。

「車に乗りなさい！時間は私と田代が稼ぐわ！」

『！！？』

何を………言っ………！香澄さんは正気か！？

「どっぴつこと！お母様！」

早織の衝撃度は物凄いことになっているだろう。やっと会えた肉親たちに1日程度で別れなければならぬなんて。その説明を香澄さんの変わりに田代さんが語る。

「奥様と私はもう助からないのです」

『へっ？』

もれなくその場に居た全員が間抜けな顔になっていただろう。唐突過ぎる！話に脈絡が無いんだよ！

そして田代さんは右袖を捲る。その腕にあったのは……

「私はもうお終いのようです」

噛み傷だった。まさか………ゾンビにやられたのか？

全員が顔を青くさせ、信じられないものを見た表情で凍りついている。ちっ、さっきの買い物時か！

いやでも、ゾンビ化はきっかり30秒で起こるはず。田代さんは数十分経った今でも普通にしているぞ？

「個人差ですよ」

彼は笑っていうが、そんなものなのか？何か特殊な条件次第でゾンビ化を遅らせることが出来るのか？

いやいやいや、そんなことはどうでもいい。えっ？何だって？つまり田代さんはもう、助からない？

彼と香澄さんはミュータント相手に戦っている中、俺たちは突きつけられた現実にとだ打ちひしがれていた。

「香澄………さんは？」

さっき田代さんは自分だけじゃなく、香澄さんもアウトだと言った。でも香澄さんは噛まれてはいないはずだ。

俺が真偽を確かめるように放った言葉に、香澄さんはMP5を撃つたまま答える。

「私は元から病に冒されていたから………」

後1ヶ月と持たないの。そう言った彼女の顔は清々しさすら覚えるほど爽やかだった。

マジか……。二人は助からない。俺たちは何のために……。

「早く行きなさい！」

ゆっくりと考える時間は無いと言わんばかりの気迫で、香澄さんは俺たちへ喝を入れる。

そうだ。今助かる可能性のある命だけでも守らなければ！

俺は残弾5発をミュータントへばら撒き、みんなを急かす。

「急ぐぞ！香澄さんと田代さんの厚意を無駄にするな！」

しかし誰一人として動こうとしない。無駄に正義感の強い奴らだ！

「行きなさい！」

「行けません！」

「見捨てて行ける訳ないでしょう！」

「ほっとけねえよ！」

「一緒に行きましょう！」

「皆さんで！」

早織が泣きそうになりながら反論し、冬紀が熱い思いを放出し、理奈が信念から反発し、姉貴が厚意から説得し、円さんが子供のように同意する。

「ただ香澄さんはいいい加減にしなさい！」と場を鎮めると、ミュータントを田代さんに任せて俺たちのほうを向く。

「わがまま言わずに言うことを聞いて！」

それでも誰も聞き入れることは無い。俺を除いて。

「……………はあ、何故私は沢山の銃器を所有していると思う？」

何だ？何を言っているんだ？多分彼女は何かを伝えようとしている。今はそれだけしか分からない。

「未知なる脅威に対抗するためよ」

未知なる脅威？何のことだ？まさか……………これか？しかし彼女は首を横に振ると、力なく言葉を紡ぐ。

「分からない。でも武器を持っておけと言ったのは主人なのよ」

言われたとおり武器を集めたけど、警察や政府は何も言ってこなかったわ。銃刀法違反なのにね。

そう付けたし、彼女は苦笑いをした。……………分からない。

「それから色々調べたけど結局分からずじまいだった。でも貴方たちなら！」

この謎を自分が解明できなかったから俺たちがしろってか？はあ？

「貴方たちは生きて真実を解明するの！」

「ふざけんな！」

何だそれ！意味分かんねえよ！意味の分からなさでパニック起こしてるよ！

俺は12ゲージを7発装填してリロードをする。

「俺たちの行動を勝手に選択してんじゃねえ！生きる気すらない奴に操られるほど俺たちは愚かじゃねえんだよ！！」

「！！！！？」

香澄さんと田代さんが驚愕する中、俺はミュータントヘライオットガンを構えて歩き出す。

「真実解明するために生きてるわけじゃねえ！」

ミュータントヘトリガーを引く。落ちた薬莢が金属音を鳴らした。

「未知なる脅威？突然すぎんだよ！伏線張って順序良く説明しやがれ！」

再度ミュータントヘトリガーを引く。銃声がいつもより長く響く感じがする。

「たとえもう少しで死ぬとしても最後まで抗い続けるよ！早織のため！」

三度ミュータントヘトリガーを引き、同時に奴へ向けて駆け出す。右の拳を後ろへ引き、一際強く拳を握る。怯んでいるミュータントへ向けて、円さん譲りの腰の入ったボディブローを放った！

ミュータントはバランスを崩し、仰向けで地面に倒れた。

「ていうか俺の頭の中パニックなんだよ！これ以上伏線張るな！」

ええ〜！！？というみんなの心の声が聞こえた気がしないでもな

い。どんな時でも俺のスタイルを崩さない、それが前原良祐だ。
俺は香澄さんと田代さんをひっ捕まえて、全員へ指示を出す。

「というわけで撤退するぞ〜！」

『ラジャ！』

俺たちは一号館内へ向けて逃走を開始した。

「さて、今度こそどうゆうことか聞かせてもらおうじゃないか」

一号館一階。とある部屋で、俺たちは身を潜めてさっきの説明を
求めていた。

全員が納得できないような表情で香澄さんと田代さんを見ている
中、俺が代表して香澄さんに事の真相を問いかけた。

「始まりは3年前。夫との離婚の際に彼が言った一言だったわ」

そして香澄さんは、始まりであるプロローグを語り聞かせてくれ
た。

香澄さんの夫は言った。「武器を持って。早織が高校在学中に何か
が起こる」それが全ての始まりだった。

言われた彼女は言うとおりに武器を集めた。途中、銃刀法違反じ
やねえの？みたいな事を考えたらしいが、不思議と警察も交流のあ
る政府も何も言ってこなかったらしい。

彼女は不審に思い、あらゆるネットワークを駆使したが情報は集
まらなかった。

そんな中、突然夫と連絡が取れなくなったらしい。行方も不明。夫の行方が分からないまま月日は流れ、気づけば早織の高校入學式。最初のほうは問題なかったけど、8月1日である一昨日、こうなってしまった。

夫の言ったとおりに。「何かが」起こってしまったのだ。

「それから情報収集はしていた。そして一昨日、夫との連絡に成功した」
「!？」

早織が息を呑むのが分かる。当然だろう。父親のことなんだからな。

「彼はこの事態のことを“成るべくして成った生物災害”バイオハザード”と言っていたわ」

という香澄さんの言葉に少し違和感を覚える。何だ？このモヤモヤは……。

しかしそれを顔に出さず、香澄さんの語りを聞き続ける。

「彼によると、これは2年前に始まっていたらしいのよ。とある1人の人間によって」

やっぱり馬鹿が居たか。こんなことになった原因が。

「詳細は分からないけど、彼はそれだけを言っただけでまた行方を絶ってしまった」

早織が残念がる。分からないでもないけどな。やっとの手がかりだったのに。

「それがこの事態に関する知っていることの全てよ」

いや……………嘘だ。たったこれだけの情報で俺たちが真実を解明できる鍵だと分かるはずがない。

さつきが嘘か、これが嘘なのは間違いないだろう。

「病気のことには去年には分かっていたの。余命が1年ぐらいだつて」

話が変わったか。真相は後で聞こう。俺は言いかけた言葉を心の中にしまう。

全員の空気が悲しみの色に変わる。人が死ぬのって悲しいよね。俺は分からないけど。

「田代はさつきゾンビに噛まれたらしいわ。私たちはもう助からない」

やっぱりあん時か。迂闊だったぜ。俺ってばミスってばっかだな。

「だから貴方たちだけでも行きなさい」

「そんな！お母様！」

早織が泣きかけの顔で香澄さんに寄り添う。まあ、現在行方が分かっている最後の肉親だしな。

「いいから。言うこと聞いて」

香澄さんは優しく言い聞かせるが、早織はそれでも引き下がる。

「でも、お母様が居なくなったら私1人に……………」

そう言いかけた早織の口を塞ぎ、香澄さんは視線を巡らして俺たちを見た。

「貴女には仲間がいるでしょう。もう大丈夫よ」

彼女はそう言うと、俺の所へ来てみんなに聞こえないように小声で言った。

「お願いね。リーダーさん」

「2回言われなくても分かってますよ」

少し口元が緩んでしまったかもしれない。香澄さんはそうそうと思いついたように呟くと、これまたみんなに聞こえないように言った。

「さっきのことだけど、詳細が分からないって言うのは嘘よ」

やっぱりな。そんなことだろうと思ったよ。

「夫が言うには“前原良祐”まへはらのりゆうすけという男が鍵を握っている。……だそ
うよ」

「なにっ?!?!?」

俺? どういうことだ? 俺なんかしたっけ?

「後は知らないわ」

彼女は追加でそう言うと、早織の元へ歩いていく。

俺が鍵を握っているだと？そんな身に覚えはないが……。確か、こんなことになった始まりは2年前と言っていたな？

2年前といえば、姉貴が誘拐された事件もあったが、俺としてはある一つある。

中学3年進級直後、俺の黒歴史。以前言ったかもしれないが、女にフラれてクラスのほぼ全員からイジメられた頃と丁度一致する。どういうことだ？どういうことだ？訳分からん。

とそんなことを考えていた時……。

「静かに……！」

田代さんの声が耳に届く。全員が静まり返ってしばらくすると、外からドガンドガンと足音が聞こえてきた。

ミュータントが来やがったか！というか足音すげえな！巨人かよ！ミュータントの足音はこの部屋の前で止まる。見つかったかと思っただが、すぐに足音が遠ざかって行った。

あれ？見つからなかった？まあこの一号館って建てられてから何百年経ってるからな。臭いで追えなかったんだろ。

しかし、それは違っていたみたいだった。

「危ない！」

香澄さんが叫び、近くの早織を俺のほうへ突き飛ばす。と同時に、香澄さんの前の壁が物凄い音と共にぶっ壊された！

「きゃあっ……！」

それに巻き込まれた香澄さんは、衝撃から後方へ吹っ飛ばされて

しまつ。

「お母様！」

「奥様！」

早織を受け止めた俺は、ライオットガンを壊された壁へ向ける。すると埃と煙の中から、ミュータントが姿を現した！

「ちいっ！」

ネメシスかよ！俺はミュータントが動き出す前に12ゲージをぶち込む！

「車に走れ！逃げるぞ！」

全員に指示を出し、ミュータントを牽制しながら香澄さんに肩を貸す。

「こんな死に様なんて許さない！早織のために1秒でも永く生き残れ！」

田代さんにも言い放ち、ミュータントヘトリガーを引きながら全員を出口へ向かわせた。

くそっ！片手じゃショットガンを操りきれねえ！田代さんに任せるしかねえな。

全員が出口を出たのを確認し、ミュータントを田代さんに牽制してもらいながら俺と香澄さんはみんなの後を追う。

もちろん後方に田代さんを連れ添って。

「お手伝いします」

田代さんは香澄さんの反対側の肩を持ち、片手でウィンチェスタ
ーM1300をミュータントへ食らわせた。すげえ。
みんなの後を追いながら廊下を疾走していると、後方から壁が壊
れる音と共にミュータントがゆっくり走り始める。

全力で走れば簡単に振り切れるレベルだが、怪我人が居る状態じ
やすぐ追いつかれる！

「こんにやる！」

田代さんを真似して片手で撃つが、照準がブレて上手く当たらな
い。それでも足を遅くさせることは出来たようだ。

ポンプアクションで次弾装填した田代さんは、M1300をミユ
ータントへ向ける。しかし……

「むう……！」

勢い良く走ってきたミュータントの腕振り回しに、銃身を掠めて
取り落としてしまった。

だが田代さんはすぐさまX-7に持ち替えると、フルオートでV
AB弾をミュータントにばら撒く。

ミュータントは直撃を食らい、失速していく。チャンスだ！
前方へ視線を向けると、車庫らしき場所の扉が視界に入り、みん
なが続々と入っていくのが確認できた。

「田代さん……！」

ミュータントに掛かりつきりの田代さんに注意を促す。彼は頷く
と、肩を貸すのを一旦やめ、俺の後方を随伴する。

先に俺と香澄さんが扉を潜り、後に田代さんが扉を潜ると、ミユ

「タントは扉を潜れないと思ったのか壁ごと扉をぶっ壊した！」

「良祐さん！急いでください！」

軍用の車だろうか？かなり大きな車に乗り込んだ円さんが俺たちに手を伸ばしてくる。

俺は円さんに香澄さんを預けると、弾切れを起こしたライオットガンに12ゲージを詰め込んでいく。

リロードが終わると、ミュータントに向けてトリガーを引きまくった。3発ほど。

「田代さん！早く乗って！」

しかし、田代さんは首を横に振ると、X-7をハイパワーに持ち替えてヘッドショットをかます。

それでも全然効いてないミュータントは、少し怯んだだけでまたこっちへ向かってくる。

「こいつは脅威です！私が押さえている間に早く！」

くっそ！頑なだな！すると香澄さんはMP5のマガジンを換えると、ミュータントへトリガーを引いた。

「私たち……が、食い止めている間……に、早く！」

骨が2、3本折れていてもおかしくない様子で、香澄さんはミュータントへ向けて歩く。

ちいっ！どいつもこいつも！人の話を聞けよ！

俺が2人の元へ走ろうとした時、香澄さんが一際深く息を吸い込んで、一気に吐き出した！

「行きなさい！死ぬ人間をどうにかするより、今生きている自分たちをどうにかなさい！！」

最後の力とばかりに叫んだ香澄さんは、言い終わった後にフラッと倒れそうになる。

「お母様！田代！」

くそっ……………厄日だ。俺が悪役にならなきゃいけないのか。

俺は車へ戻り、2人の元へ走ろうとしている早織を引き止める。

「退きなさい」

「退かねえ」

「退きなさい！」

「退かねえ」

「退きなさい！！」

「退くわけにはいかねえんだ！！」

あの2人がどんな思いで戦っているのかわからねえのか！

多分そんなことを言った。よく分からない。色々な思いが渦巻いて何を考えていたかなんて忘れた。

俺は早織を車の中に押し込むと、他の全員も車に乗せ、最後に俺が車に乗り込んだ。

扉を閉める前に戦う2人を見る。その顔はこれから死ぬかもしれないのに笑顔だった。

「わからねえよ。俺にはわからねえ。何で死ぬのに笑顔なんだ？」

それは若い希望を送り出すことが出来るからよ。香澄さんが言っ

た気がした。

最後に人の役に立てて嬉しいんですよ。こんな老人でも。田代さんが言った気がした。

やっぱり俺にはわからねえよ。クソツタレ。でも……………ありがとうございました。

俺は車の扉を閉め、姉貴に車を出すように指示する。車が発進して、2人が遠くなっていく中、やっぱり2人は笑顔に見えた。

「お母様あ！！田代お！！」

そんな早織の泣き声だけが、車内に虚しく響き渡っていた。

「ねえ田代？」

「何でしょう奥様」

倒れた香澄を抱えるようにして、田代は地面にしゃがみこんでいた。

「最期まで付き添ってくれてありがとう」

「いえいえ。それが私の生きがいですから」

ホッホッホと笑う彼の眼からは真っ赤な涙が流れていた。もう永くない証でもあるかのように。

「あの子達、無事に脱出できたかしら」

「大丈夫ですよ。早織お嬢様はお強い方ですし、仲間もいらっしや

います。それに……」

彼が居る。そう言った田代の顔は随分にこやかだった。香澄も同意するように微笑む。

「そうね。あの子がリーダーなら心配は無いわ」

段々と声の音量が小さくなっていく香澄。田代も様子がおかしくなっていく。

「心残りは無い………と言いたいところですが、唯一残った孫が心配です」

「高校生の？」

そうです。田代はそう言って目を閉じる。孫でも思い浮かべているのだろうか？

「元気だと良いのですが……」

彼は手に力を入れて何かに抵抗しているように見える。あまり時間はないのだろう。

「きっと大丈夫よ」

「……はい」

香澄はゆっくりと瞳を閉じていく。田代も同様に瞳を閉じた。そんな彼らの前には、ひざまずいた血だらけのミニータントがいた。が、死んで無いようでゆっくりと立ち上がる。

「田代」

「はい」

目を閉じたまま2人は笑った。不思議なくらいの笑顔で。

「ありがとう」

ミュータントは思いっきり振りかぶり、その2人に拳を振り下ろす。

肉が潰れるような音と共に、大量の鮮血が、辺り一帯に撒き散らされた。

「今の……!!」

不思議な感覚に、俺は遠ざかっていく小林邸の敷地を見る。

まさか……………2人が……。くそ、くそ、くそ。俺は今日だけでくそって言いまくってた気がする。

未だ鳴り響く早織の泣き声の中、俺は香澄さんがくれた物資を調べていた。

食料だけじゃなく、銃器や弾薬、武器に雑貨など様々な物があつた。

その中であつた一つの銃を手に取り、俺はふと思う。

香澄さんには色々助けてもらったな。今回もそうだけど、香澄さんがくれたUSPがなかったら姉貴を助けられなかったな。

田代さんには色々教えてもらったな。銃器の使い方とか、性能、

それに他にも色々。

あの2人のおかげだな。感謝してもしきれねえ。お返ししてえぐらいた。

まあ、お返しが出来なくなったわけなんだけど。……………畜生。俺は馬鹿だ。みんなに迷惑掛けて、それで人が死んでいく。しかも、もしかしたら俺がこんな状況を作ったかもしれないのにな。

「くそっ」

小さく呟く俺は、生まれて初めて力が欲しいと思った。みんなを守れるだけの力が。

俺が手に取った銃は田代さんのメインアームと同じAF VW03。開発コードはX-7。

試作品だからあまり数は無く、田代さんのと合わせてこれで全部かもしれない。

田代さんのと違って性能に改造はかけてないはずだから、これがノーマルのX-7。

こいつの別名は、防衛戦で最高の力を発揮する構造から、「^{ガーディ}守護^ア神」^アとも呼ばれているらしい。

何の因果だ……………これは。俺に対するあてつけか？香澄さん。田代さん。

俺はその日、おそらく数年ぶりに涙を流した。

第19話 守護神たる資格（後書き）

いかがでしたでしょうか？

はわわ！あわわ！香澄さん！田代さん！

やっぱり平和は永く続かないわけですね。気づかされました。

そしてニューゾンビ！その名も突然変異体^{ミュータント}！

小林邸が壊滅したのはこいつのせいとも言えます。

2人の犠牲の下、命からがら脱出した主人公たち！死が満ちる町でこれからどうするのか？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第20話 「番外編」 第一回 大質問大会！（前書き）

おはにちは！らいなあです！

今回は文字数が少ない番外編です！

番外編一回目は質問コーナー！。キャラの本音が垣間見えます！

第一回ということで今回は主人公である良祐にスポットを当てました！

ちなみに本編とは一切関係ありません。キャラだけを借りました。

第20話 「番外編」 第一回 大質問大会！

とある誰も知らない場所。真つ暗な空間に、一点だけ、照らされたイスがあった。そこに誰かがやってくる。

「何の用だ？今、忙しいんだが……」

制服を着た少年である。彼はイスに座ると、肩に掛けたベネリM3を床に置き、こちらの方を見る。

「何か用があつて呼んだんだろ？早く済ませようぜ」

と私に向かつて言うが、私の姿は見えていないはずだ。しかし……まあいい。

私はさっそく用を済ませようと、ボタンを押す。すると、彼の前にモニターが出現して何かを映した。

《第一回 大質問大会！》

「まあ、そういう風に聞いてやってきたからな」

意外とドライな反応だな……。大爆笑必至と言われたのだが……。私はキーボードを叩き、一つ目の質問をモニターに映す。

《Q1 貴方の名前は？》

「前原良祐」

続けてキーボードを叩き、質問を出し続ける。

《Q2 / 年齢は？》
「16」

《Q3 / 誕生日は？》
「9月27日」

《Q4 / 職業と勤めている場所は？》
「学生。東海林市立林名高等学校」

《Q5 / 現住所は？》
「東海林市2番3号66」

《Q6 / 家族構成は？》
「両親、姉1人」

《Q7 / 趣味は？》
「アニメ観賞とゲーム」

基本的な質問はこんなものか。よし、次はより具体的に……。

《Q8 / 友達は？》
「今んとこ2人。冬紀と理奈だ」

《Q9 / 冬紀君の事をどう思っている？》
「いい奴だ。イジリがいがある。って言うのはまあ冗談として、最高の親友だよ」

《Q10 / 理奈さんの事をどう思っている？》
「少し乱暴ってというか暴力的ってというか残念ってというか。性格と口調を直せばアイツなら彼氏の1人や2人簡単に見つかるだろうに」

《Q11 理奈さんの事は好きではない？》

「冗談。理奈は嫌いじゃないけど、俺はもう恋はしねえ」

《Q12 じゃあ彼氏にはなる気は無い？》

「……………ああ」

《Q13 ホントのホントに？》

「しつこいな！3回も言わせるなよ！！」

《Q14 落ち着いてください？》

「お〜い！ミスってるよ〜！」

しまった。落ち着いてくださいと書くつもりが質問のようになってしまった。

じゃあ次は家族の事だな。え〜っとこんなところ……………えっ？うわっ！やめっ！

《Q15 母親を彼女にしたい？》

「唐突！ぶん殴るぞてめえ！！」

突然、謎の女性が現れてキーボードに書き込んで行ったぞ。なんだっただんだ？

謎の女性が消えたところで話を戻すか。えと、家族のこと……………つて、おい！やめっ！

《Q16 お姉さんを妻にしたい？》

「よっぽど死にたいと見える！待ってる！今すぐライオットガンをぶち込みに行つてやる！！」

今度は顔が似ている女性が打ち込んでったぞ。どこかへ行ったが。私はモニターに落ち着いてくださいと表示すると、質問に戻る。

《Q17 家族のことは好きですか?》

「当然だ。円さんも好きだし、姉貴も好きだ。父親は……わからねえな。居ない期間の方が永いからな」

《Q18 母親の事をどう思っている?》

「チートママの二つ名は伊達じゃねえしな。何でも頼りになる良い母親だ」

《Q19 お姉さんの事をどう思っている?》

「馬鹿ばかりやって、のほほんとしてるが、やる時はやる。そんな姉貴には感謝してるよ」

《Q20 父親とは会いたい?》

「いや、大事な時に帰ってこねえ父親なんか会いたいとは思わねえ」

次は仲間についてだな。手始めに質問に無かった彼女でも。

《Q21 早織さんは彼女?》

「やっぱり死ぬかお前」

ちよつと入りすぎた質問だったな。失敬失敬。

《Q22 早織さんは貴方のなに?》

「仲間……かな?友達とは言えねえだろ」

《Q23 早織さんの事をどう思っている?》

「頼りになるよな。姉貴は頭良いけど馬鹿だから。1人2人冷静で

頭の良い奴が必要だろ？早織は最高の仲間だ」

《Q24 香澄さんについては？》

「残念だ。不思議な女性ではあったが、紛うことなき母親だったよ。早織のためにもう少し生きていて欲しかった」

《Q25 香澄さんは彼女にどう？》

「RPG-7をぶち込んでやろうか！！ていうかどんだけ彼女推奨してんだ！」

これは酷い。何を言っているんだ私。礼に欠けすぎだろう。

《Q26 由代さんは彼女にどう？》

「どゆこと！？性別を超えろと！！？」

しまった。打ち間違えた。訂正訂正。こっちが本題だ。

《Q27 由代さんの事をどう思っている？》

「惜しい人を亡くしたよ。もっと色んなことを教えて欲しかった」

次はゾンビに関してだな。こんなところか？

《Q28 ゾンビはどう思う？》

「最悪だな。ウィルスが原因か。はたまた別の理由か。どちらにしろ邪魔するなら排除するまで。たとえ知り合いであってもな。どうせ直らねえんだ」

それに関しては私も同意見だ。躊躇ためらったって敵は待ってくれないんだ。ならさっさと潰すまで。

じゃあ次はこいつだ。有意義な意見が聞けると嬉しいぞ。

《Q29 ハーメルンやミュータントについては？》
「ゾンビだけでもヤバイのにあんな強力なゾンビが出たんじゃ、いよいよ死ぬ確率が高くなってくるぞ。しかもこの展開だと他にもいるかもしれないし」

確かにそうかもしれん。こいつは面白い対象だ。じゃあ最後にこれ。どう出るかな。

《Q30 こんなことにした犯人をどうする？》

「俺が間接的に関わっているかもしれないし、犯人が分からない今は迷うな。だが、ぶん殴るかもしれないねえ。それが俺でもな」

やはりこいつは面白い。是非とも次回を用意したいところだ。

《回答ありがとう》

「おう。じゃあなー！」

彼はベネリM3を持つと、立ち上がって暗がり歩いていく。私はそれをジッと見つめたまま、しばらく思考を巡らしていた。

私は「観察者」。時に質問し、対象を観察して世界の事象を見続けていく者なり。

世界は未だ、混乱をめぐっている。その先にあるのは、「再生」か「破滅」か。

第20話 「番外編」 第一回 大質問大会！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回からはまた本編に戻ります！

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第21話 死を乗り越えてもう一度……（前書き）

おはにちはーらいなあです！

今回の話は小林邸脱出その後です。あまり文字数はありません。

第21話 死を乗り越えてもう一度……

俺たちはとある軍用車両らしき車の中で、物凄く暗い空気に包まれていた。

車両はハンヴィーだろうか？もしくは民間のハマーかもしれない。ただ、天井口があるからおそらくハンヴィーだろう。

あの後、この車に乗り小林邸を脱出。今は安全を確保した立体駐車場の一階、その端のほうに車を停めていた。

だがまあ、車内の空気は決して良くないよね。当然だけど。

俺は空気に耐え切れず、思わず車外へ飛び出る。重すぎるんだよ。誰も声すら掛けてくれない。まあ良いんだけどね。俺はそれだけのことをした。

とりあえず屋上へ行こう。今は風に当たりたい気分だ。俺は屋上へ向かった。

屋上へ上がると、東海林市の町並みが鮮明に視界に飛び込む。空は憎らしいほど澄み渡っていた。

「くそっ……」

屋上に来たのは失敗だったかもしれない。東海林市の風景が鮮明に視界に入るから。鮮明に視界に入る……言い方を換えれば現状すら眼に入るとのことだ。

あちこちに死が蔓延まんえんしている。腐臭ふしゅうと鮮血と歩く死体が町中に広

がり、未だ消えないいくつもの火事が町を少し熱気で包む。
八月三日である今日。俺たちは三種類目のゾンビ……「突然変異
体」^{ゾン}によって、大事な人を二人失った。

あれから数時間経った今でも、心の傷を癒せず……。

視線を小林邸の方へ向ける。とてつもなくデカイ敷地がまるでジヤングルだ。

しかし一号館は見えなかった。崩れたかな？俺は黒煙が立ち上る一号館方面を視界に映すが、木々のせいで良く見えない。

しょうがないから別の場所を見ようとする。東海林市内をグルッと見回すと、ここの地形が良く分かる。

左手にエメラルドブルーの海。右手に町を包む山々。町の真ん中を貫くように、大きな川が山から海へ繋がっていた。

山の頂上には世界的商社「ラグナロク社」の研究所が堂々と鎮座している。

ラグナロク社は世界的な超有名メーカーで、日用雑貨から軍用銃器までほとんどの物には手を出しているだろう。

俺が着けている耐ショックの腕時計もラグナロク社製だ。税込み千五百九十円。もう一年ぐらい愛用している。

よく見れば研究所は無事だ。あまり人が居ないと聞いたことがあるからな、ゾンビも手を出さなかったんだろう。

そこに一陣の風^{こち}が吹く。頬を撫でる風がふと冷たく感じた。

頬に手を当てると水の感触がする。知らないうちに泣いていたのか。

俺は袖で涙を拭い、空を仰ぐ。澄み渡る空が何かを映しているよ

うに見えた。

それは誰かの顔だった。しかし誰の顔が良く分からない。でも多分、悲しい時は一緒に居てくれた大事な人なんだろう。

誰だっけ？そう思った時に、誰かから声を掛けられた。声の感じからして早織かな？

「あんた……………こんな所で何してんのよ」

やっぱり早織だ。俺は振り返らずに返答する。

「さあ……………何だろうな？」

俺自身、何で屋上に来たのか分からなかった。そのことから出た言葉だったんだろう。

すると早織の声音に変化が生じた。泣き掛けだった声音は少し怒気を孕み、俺に当たるように静かに問う。

「贖罪じゆんざいのつもり？」

俺、神やキリストはあまり信じていないんだがな……………。でもどうだろう？

「案外そうかもしれない。無意識の内に贖あがなおうとしていたのかも」
そう言うと、早織は声を荒げて俺に掴みかかってくる。

「じゃあ死ねよ！」

「！？」

屋上の縁まで押された俺は、まさに断崖絶壁だんがいぜつぺきに立たされているみたいだ。

背後には、死へと繋がる奈落ならくの穴のような地面が見えた。そこに

は数体のゾンビも徘徊はいかいしている。

「お母様と田代のために今すぐ死ね！罪を償つぐなえ！！」

確かに、それも一つの手かもな。こんな地獄の中、数%しかない生存確率を信じて東海林市脱出に全力を注ぐより、今すぐ死んで楽になったほうが幾分いくぶんもマシだ。

体の力を抜き、重力に流されて落ちようとした俺の頭に、一つの言葉が響く。

《死ぬ人間をどうにかするより、今生きている自分たちをどうにかなさい！！》

香澄さんの言葉だ。体から抜けたはずの力が戻ってくる。俺は体勢を戻し、早織を見据えた。

「ごめん。それは……出来なくなった」

「どうして？」

依然変わらない早織は、香澄さんと同じ不思議な眼で俺を見ている。

その視線をしっかりと受け止め、俺は早織の目を見て、早織の心に、どんなことがあっても変わらない思いをぶつけた。

「香澄さんが生かしてくれた」

そうだ、あの人は俺に何かを求めていた。USPで早織を守れとも言った。

「田代さんが生かしてくれた」

そうだ、彼は俺に戦う術を教えてくれた。身を持って本当の強さを見せてくれた。

「だから俺は、生かされたこの命で、みんなを守るんだ」

全てを聞き終えた早織は、小さく何かを呟いて怒気を解く。

「ごめんなさい。あんたのせいじゃないのは分かっていたんだけど……」

しょうがないさ。俺だって同じ立場なら、そうしていたかもしれないし。呟いて、ふと思う。

そこで俺はあることを思い出した。確か昨日のアレが録音されていたはず……。

右ポケットからケータイを取り出し、ICレコーダーを起動させた。早織に聞かせよう。香澄さんのある意味で遺言を……。

「これが、香澄さんが早織に残した最後の言葉だと思う」

俺はICレコーダーを切り、ケータイをポケットにしまう。

早織は……泣いていた。

再生途中から涙目になり、次には溢れた涙が地面に落ちていた。最後まで聞くと号泣どころの話じゃない。言うなれば極泣だ。

「香澄さんは病気のことを踏まえた上で俺にこいつを録音させたんだ」

遺言代わりに。そう言うのは自重しとこつ。

「香澄さんは早織のこと、大好きだったんだな」

とは言ったものの、当然のことか？母親が娘を大好きって？

俺はしばらくその様子を見ていたが、突然早織が俺にタツクルをかましてきた！

「うわつとと！」

と思ったが違ったようだ。早織は俺の胸に顔を埋め、小さく胸貸してと呟くと、それっきり動かなくなった。

「……おう」

動かなくなっただが、彼女が泣く声だけはしばらく響いていた。

俺はただ、早織の頭を撫で続けることしか出来ない。それから数分はずっとそれだけだった。

早織がようやく泣き終えた頃、屋上に四人の人影が上ってくる。

……みんなだ。

「遅かったから探しに来たぜ！」

開口一番理奈が親指を立ててそう言った。

「悪い悪い」

平謝り程度だが、とりあえず謝っておこう。無いよりはマシだ。

「屋上で何してたんだい？」

冬紀が爽やかに問うが、言えるわけ無いだろう。早織が泣いてましたとは。

「まあ、東海林市を見ていた」

こんなとこだな。横の早織も目線だけ俺を見て、感謝しているように見えた。

「全くも〜心配したよ」

相も変わらず呑気な姉貴の声が体の力を抜けさせる。

「ごめんなさい。ここまで永く話すつもりは無かったんだけど……」

早織も申し訳無さそうに謝罪する。最初の頃の早織と比べて随分態度が緩和されたな。

「無事で何よりです」

円さんも心配してくれたのか……。何だが悪いことしたな。

「え、ええ……」

珍しく早織の歯切れが悪い。さっきのことを思い出しているのだろうか？

「ははっ、まあ戻ろうぜ。二人が生かしてくれたこの命、これからどう使うのか決めないとな」

全員が首肯し、下に下りる階段に向け歩き出す。どうやらみんな各々で死を乗り越えたようだ。

俺も歩き出そうとするが、袖を早織に掴まれて途中でストップした。

「どうした？」

振り返り、早織を視界に捕らえると、彼女は俯いていたため表情が見えない。

「その……ありがとう」

それだけ言うと早織は、みんなの後を追って階段へ駆け出す。気のせいか頬が紅潮していたような……。

「……………どういたしまして」

走る彼女の背に向けて呟いた。慣れない感謝は恥ずかしいからな。そんなもんだろ。

俺も後を追って、止めた足をもう一度歩かせる。仲間って良いなあ。

棚引く風が前より心地良い。頬を撫でても前のような冷たさは感

しない。

八月三日午後三時二分。俺たちは初めて、大事な人たちの死を経験した。

同日午後六時二十六分。俺たちは結束を新たに、もう一度戦場へ向かう。

目指すは、東海林市の脱出だ。今度こそ、守ってみせる。

第21話 死を乗り越えてもう一度……（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ICレコーダーが役に立った回でしたね。

物語的に言えば次回は新章突入です。以前までが小林邸編ってところですか？

死を乗り越える主人公たち！その先に待つものとは？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第22話 ウル ラソウル、テイルズオブエクリア、そして再会（前書き）

おはにちはーらいなあです！

パソコンにトラブルが発生しまして、対処に時間を割かれた結果、

小説の投稿のために徹夜することになりました。

眠いです。疲れました。眠いよパトラッシュ……。状態です。

今回は再会のお話です。しかもアイツとも再会！

第22話 ウル ラソウル、テイルズオブエクスリア、そして再会

立体駐車場一階。端に停めてある軍用車両^{ハンダー}。その中で俺たち六人はミーティングをしていた。

「ここから東海林市脱出には、最低でも丸三日は車を走らせないと無理だ」

俺が言った言葉に理奈がそうだっけ？と首を傾げる。

「ここからなら一日二日で行ける距離だったはずじゃなかったっけ？」

まあ確かに普通だったら一日二日だが、今は普通じゃないからな。

「馬鹿めつ。ゾンビとか危険とかを回避して進んだらこのくらいは掛かるだろ」

理奈は何だど〜！と、馬鹿めつの部分にだけ反応して声を荒げることが、俺は軽くスルー！。

「食料はまだあるけど、安全に体を休める場所が必要ね」

早織は俺が言いたいことを理解してくれたようで、要点だけをサッと補足してくれる。

俺がそつゆつことだと首肯すると、姉貴がじゃあじゃあ！と手を上げて意見を述べた。

「ショッピングモール！」

「肉片にしてやる……………確かにありかもな」

いつものパターンでツツコミを入れる前に、ふとそれも一つの手だと思い直す。

食料もそこそこあるし、広大な土地だったら逃げるのも容易い。物資の補給も出来るし、体を休めるのには最適な場所だ。

ただそんな魅力的な場所が無人な訳は無いだろっけど……………しようがないか。善人だった場合は問題ないし。

だがまあ、場所的な都合もある。ここからだると三丁四時間かかってしまう所が難点だ。それじゃあ着いた時には十〜十一時ぐらいになる計算だし。

とりあえず第一候補として念頭に置いておこう。まだ決めるのは早い。

「他に候補は無いか？」

すると冬紀がそれならと小さく手を上げる。

「東野女学院とうのじょがくいんなんて良いんじゃないかな？脱出ルートに向かう途中にあるし、距離もさほど遠くない」

東野女学院か……………一時間も掛からない距離だな。お嬢様が通う高校って言うだけあって、敷地もかなりデカイし、食料もありそうだ。これといった問題も無さそうだし、最有力候補だな。

「他には？無いなら女学院にするぞ？」

全員がしばらく黙考の末、首肯で賛成の意を示した。じゃあ女学院だな。けっしていい。

これであらかたの案件は片付いた。武器の取り決め、主な使用者、等々の問題は既に決めている。

後は東野女学院へ行くだけだ。人が集まる場所では無いが、生存者が立て籠もっているかもしれない。善人だと良いんだけど……。

しかしまあ、早くからククヨクヨしてたっしょうがない。まずは行ってみようじゃないか！

「じゃあ行こう。運転は悪いが早織頼む」

「OK」

運転席に早織を座らせ、俺は助手席で早織をナビゲートする役に徹する。

説明しておくが、今回早織が運転手なものには理由がある。

一つは、姉貴は今日働きすぎたのだ。買い物で体力を消耗した後、に続けざまにミュータントの襲撃。運転は出来ないと判断した。

次に、俺も姉貴同様、動きすぎたため、運転にまわす体力が無いのだ。俺がぶっ倒れたら大幅な戦力ダウンだからな。

そして、円さんは運転出来ない。冬紀と理奈は戦力だからあまり無理にはさせられない。

すると順当に早織へ出番が回ったわけだ。ちゃんとやり方は姉貴と俺で教えるけどさ。

まあ一応、既に基本的なやり方は教えてある。教えたのほとんど姉貴だけだ。

早織は教えられた手順で、ゆっくりながら工程を終えていく。へえ、見たただけだけど筋が良いかもしれない。

じゃあ俺は職務に徹しますか。俺は右手で、飛行機の機内マイクを持つような形にして、車内のみんなに言い聞かせる。

「ご乗客の皆様。運転手が運転の際には、シートベルトを着用の上、安全を確認してテイルズオブエシリアのジャンルをお答えください」

「はいはい！揺るぎなき信念のRPG！」

理奈が手を上げて即答する。はえーよ、もう少し楽しもうぜ。…いいけどさ。

「九月八日発売でございます。皆様、是非お買い求めの上、存分にご堪能ください」

「宣伝なのか！？」

何故か宣伝になってしまった。俺、バンイナムコさんとは一切関係ないのに。

テイルズオブエクシリアは2011年発売です。今は2012年ですので、もう発売している計算になります。（念のために掲載しました）

今俺、変なこと考えてなかったか？モノローグを誰かに乗っ取られたような……。

まあいい。見れば早織は大体の工程を終えたようだ。後はブレーキを放して、アクセルで完璧。

「そうですよ早織ちゃん。後は……」

「ブレーキ放してアクセルね？」

「そうですそうです」

姉貴の指導の下、俺たちが乗る軍用車両ハンヴィーはゆっくりと動き出した。出だしは好調。飲み込みが早いな。俺よりかは全然上手いぞ。

「良祐とは天と地ほどの差がある……！」
「アタシは感動した……！」

イラつときたね。一瞬USPを抜こうかと思ったよ。………実を言うとグリップを握っていたり。

俺はUSPを抜くのを止め、地図を読み取るのに専念する。

視線を上げると、ちょうど立体駐車場を出るところだったようだ。

「んじゃ、右マックスね」

「ま、まつくす？」

「悪い噛んだ。右真つ直ぐね」

「どんな噛み方よ……」

早織の意外な安全運転で、俺たちは東野女学院とりのじょがくいんへと向かった。

ようやく東野女学院が視界に映った頃、俺たちは車内で大合唱会をしていた。

現在の曲目はとあるグループのu i r a s o u i という曲目。何故か俺がメインで歌っていた。あれ？何でこうなった？

確か、円さんが私の愛車フリードがっつて言ってたから、元気付けるために歌つとけと誰かが言ったんだ。

そしたら最初は嫌々だったみんながノリだして、最終的にはこうなってしまう訳か。納得納得。

俺は歌い疲れて、休憩ついでに外を見ると、早織の家以上ありそうな広大な敷地が映る。

「でけ〜。これが東野女学院か〜」

ふと出た眩きに車内の視線が敷地に移る。ほぼ六人全員が、口々に驚嘆の言葉を洩らし、呆けたように女学院を見ていた。

小高い丘の上に作られた東野女学院は、全校生徒が千人にも満たない高校ながら、敷地面積は普通科高校の約三倍。

施設、設備、教育など、あらゆる点において最高の評価を受けるここは、もはやお嬢様学校と化していた。

ちなみに早織がこっちに来なかったのは、ただ面倒くさかったからとの事。彼女いわく、お嬢様なんてばっかみたい！だそうだ。

話を戻して、俺たちは東野の正門へ回る事になった。幸いゾンは正門に居なく、すんなり車ハンヴィーを敷地へ入れることが出来た。

「一旦校舎へ入って安全な場所でも探そう。武器と物資は最小限に生存者が居た場合は銃器類をあまり見せびらかすなよ」

『りょーかい』

ハンヴィーを屋根付きの駐車場（金かかってんなあ）に停めた後、各々で入念に武器や物資の確認をして、それが終わった頃にみんなを見る。

みんなは無言で首肯して、各自静かに車を降りた。最後に早織が鍵を掛け、準備完了！

空を見ればもう夕焼け空だ。暗くなる前に安全地帯セーフティゾーンを確保しておきたい所だが、焦っても仕方が無い。

俺は指だけで全員に合図を送ると、先頭になってハンヴィーから離れた。一路生徒玄関へ向かう。

途中、ゾンビを何体か見かけたが、音を出してないおかげで気づかれることは無かった。

無事生徒玄関を通り抜け、靴箱付近で一旦停止。

玄関ホールだけを見たらお嬢様学校とは到底思えない。そりゃあ、千人分くらいの靴箱があるからホールはデカイが、それだけだ。

あまり装飾もされておらず、普通の高校の生徒玄関にしか見えな
い。

「呆けている場合じゃない。行こう」

色々考え始めた頭を振りきり、靴箱を抜けて一階ロビーへと辿り着く。

壁に校舎内の詳細図が貼ってある。それによると職員室は三階、保健室も三階、第一体育館が一階、第二体育館が二階だ。

その他にも色々あるが、寝床としては保健室が良いだろう。非常階段も近くだし、主要な場所は大体三階だし。

「保健室を見てみよう。一番快適そうだ」

全員の承諾の後、俺はX-7を構えて階段を目指す。階段はロビーのすぐそこで、一気に三階へと続いているみたいだ。

しかしまあ、高校の階段が螺旋階段らせん階段とはね。ここらへんは少し特殊かな。

俺は感心しつつ、螺旋階段をスイスイ上って行く。……………変だな。みんなもそれを感じたのか、空気が疑念を抱いている。

ここまで来たが、死体がない。ゾンビもない。わずかな腐臭と少量の血痕しか残されていないのだ。

何かがおかしい。そう感じた時、三階から甲高い悲鳴が響く！

この叫び声は……………！昨日聞いたばかりの悲鳴に、俺たちは身を固くする。

「急ぎましょう！良祐さん！」

円さんが一番に声を出し、体の硬直をほぐしてくれる。そうだった、こんな所で呆然としている場合じゃない！

「ああ！予想が正しければ、この声は……………ハーメルンだ！」

俺はみんなを急かし、螺旋階段を一気に駆け上がった。最中、X

-7の動作とUSPの動作を確認し、戦闘準備を行う。

USPは良いんだが、X-7は俺用に色々拡張装置プラスパーツを付けたから、まだ不安が残る。

HUDスコープに反動軽減機構キャンセラー。

二つだけとはいえ、専門家の下で指導を受けて付けた訳じゃない。いつか銃工ガンズミスに見てもらわなきゃな。

それはそうと、ともかく！俺がX-7を使うのは初めてだ。しかも対ハーメルン戦ときた。

どこまでやれるか。二人がくれた試作銃、存分に使わせてもらおう！

「……！さっそく来やがったか！」

螺旋階段三階踊り場から、三体のゾンビが下へ降りてくる。ノー
マルゾンビのようだ。

まずは単射セミオートに設定し、安全装置セーフティレバーを解除。

「俺がならしに撃つ！やり損ねた奴を頼むぞ姉貴！」
「うん！」

射撃経験者の姉貴をサポートにつけ、俺は走ったままX-7を構
える。

バットプレートを右肩に当て、ほとんどろ覚えの構え方でゾン
ビに狙いを定めた。

一息に………撃つ！………ちい、サイトがずれて外したか！

距離が少し遠いのもあるが、走ったままというのはかなり難しい
な。ましてや階段なんて。

だが、まだ距離がある。後数回撃てるな。落ち着けばいける。慌
てるな。

もう一度ゾンビにサイトを合わせ、トリガーに指を掛ける。頭が
良く回っているぜ。無意識に弾道予測から着弾予測、反動、等々の
計算が頭に書き込まれる。

ハーメルンと戦った時と同じ感覚だ。気持ちの高ぶりを感じるの
に、冷静に思考できるという不思議な状態になっている。

ゾンビの脳天に銃口を向け、計算し尽くされた直感の元、トリガ
ーを一回、二回引く。

銃口から放たれた二発のVAB弾は、ゆっくりと、狙ったゾンビの着弾予測地点へ吸い込まれ、鮮血と共にゾンビを階下へ叩き落す。

後二体。今度は連射フルオートに切り替え、近づいてくるゾンビへ三発づつ叩き込んだ。

ほとんどが首から上に命中したVAB弾は、一瞬にしてゾンビの行動を奪い、行動不能にさせる。

無様にこけた屍は、死体のように（死体だけど）階段をゴロゴロ転がっていった。

「やるじゃないか良祐！」

「さっきもそうだけどやるなあ！」

冬紀と理奈の言葉がこそばゆいな。もっと褒めて〜！……っつと、アホやつてる場合じゃない。

俺たちはようやく三階に到着し、廊下を視界に映す。そこには……

「多いですねえ〜」

「シヤレにならない多さね。狭い廊下に五十ぐらいはいるかしら？」

円さんと早織の言ったとおり、廊下には五十近くのゾンビが我先にとどこかへ向かっている。

その先には何かの部屋に立て籠もった少女たちも見えた。そしてゾンビの中に口を大きく開けた奴がいる（女性のゾンビ）。

……………アイツがハーメルンだ！よっしゃ！やってやるうじゃねえか！

俺はHUDの電源をいれ、スコープを起動させる。モードをSMサブマシンガンからSスナイピング、フルオートをセミオートに切り替えた後、HUDスコープを覗いた。

群がるゾンビの垣根の中に、口を開け続けている特殊なゾンビを確認し、スコープ内に映し出される詳細なデータを元に予測された弾道予測が頭にインプットされる。
弾道予測と共に、従来通りの交差点の照準がハーメルンの脳天をしつかり捕らえ、ロックする。

全ての準備が整った俺は、本能が命ずるままに引き金を引き、弾丸を放つ。

S Mモードとはほんの少し違う銃声が響き、V A B弾がハーメルンの額にめり込んだ。

瞬間的に声が途絶え、後ろの壁にハーメルンは張り付いた。大量の血液を壁にまわり付かせて。

「イエツツス！」

みんなが呆然と見ている中、指揮官を失ったゾンビは、惹かれる音が無いためそれぞれ階下へ消えていった。

さすがH U Dスコープ。高性能な最新式のサイトだぜ！………ただ電力消費が半端無いけど。

俺はH U Dスコープの電源を切り、排出されていたV A B弾の薬莖を拾い上げてポケットにしまう。後で何か役に立つかもしれないし。

「ポケットとしてないで行こうぜ」

未だに立ち直ってなかったみんなに言葉をかけ、先に進むのを促す。一人先頭に立つ俺は、色々思考を巡らせていた。

射撃はまあまあかな。ただ収穫はあった。ゾンビのことも。

ハーメルンに誘導されていたゾンビは、ハーメルンが死ぬと音を見失うんだ。

ハーメルンを倒して音をたてなければ、どんなに大量のゾンビが居ても気づかれることは無い。

いいねえ。最高の収穫だ。ハーメルン戦で役に立ちそうだ。

はあ〜！動いたし、頭使ったし、疲れたな〜！……………それはともかく。ゾンビに襲撃されていた少女たちは無事かな〜？

ゾンビたちがひたすら押し入っていた部屋は、職員室だったようだ。扉越しに少女が数人居るのが見える。

「ゾンビは撃退したぞ。ちょっと話を聞かせてくれないか？」

そう言うと、少女たちは話し合ってしまった。開けてくんねえの？まあ、しょうがないけどね。銃器持ってるし、男だし。

しかし、しばらくすると少女の一人が扉を開ける。彼女がリーダーかな？

「ちょうど良かった。私も話が聞きたかったところだ」

俺はその声に違和感を覚える。何だ？どこかで聞いた気が……。

「とりあえず入っていいかしら？出来ればゾンビが来る前に」

「ああ、もちろんだ」

早織が変わりに少女と会話する。俺はリーダーさんの容姿をよく見た。

黒い髪を腰ぐらいまで伸ばし、顔立ちは可愛らしいのだが、眼つ

きの鋭さから凛々しい印象を与える。

「まさか……！」

俺は一人、思い当たった人物が居た。姉貴から眼鏡をぶん取り、少女に差し出す。

後ろで姉貴がなに？良ちゃん！？とか言っていたが、俺の耳には入らない。

「なあ、これ着けてみてくれ」

「なんだ？」

「いいから」

リーダーに眼鏡を渡し、着けさせる。その容姿は……！

「やっぱり！お前……サクラか！？」

「何故私の名前を知っている？お前は……良ちゃん？……！！！」

俺が驚愕の表情で凍りつく中、リーダーは姉貴の良ちゃんという呼び方でようやく気づいたようだ。

「前原……良祐？」

「ああ、そうだ。結城ゆづきサクラ」

結城サクラ。彼女は二年前、俺がクラスのほぼ全員からイジメられる原因を作った張本人。

そして……俺の初恋の相手だった少女だ。

第22話 ウル ラソウル、テイルズオブエクリア、そして再会（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まさかまさかのサクラと再会！さらにハーメルン出現！

バトルシーンって良祐しか戦ってないですね。

どんだけヘッドショットしてんのよ！ってツツコミたくなります。

サクラとの再会！その時主人公は？

それでは次回会いましょう！御意見御感想お待ちしております！

第23話 主人公ってだけで女性にモテると思ったら大間違いだ！（前書き）

おはにちは！らいなあです！

徹夜のせいで遅れてしまいました。すいません。

そして今回！久しぶりに紹介があります！サクラさんです！

【結城 ゆづき サクラ】

年齢：17歳

職業：高校生（二年）

誕生：7月7日

知識

体力

攻撃性

俊敏性

統率力

機転性

ギャグ

良祐の幼馴染。役割は若干天然系ボケ。一人称は私（昔はサクラ）。

昔の容姿は黒い髪を腰まで伸ばし、可愛らしい顔立ちが特徴的。

しかし現在は眼つきは鋭く、凜とした美しい女の子になった（髪と

顔立ちはそのまま）。

性格や口調も若干変わっているが、時々昔のように天然になる。

とうのじょがくいん
東野女学院の生徒。二年一組。

良祐の幼馴染で、幼稚園からの付き合い。だが、中学三年の時の事柄のせいで転校。東野女学院の中等部に入る。

東野女学院に転校してからは、護身用に槍術を習う。腕前はトップクラス。

両親は居らず、捨て子同然で結城の家の前に居たところを結城家に保護された。

家事のスキルは高く、何でも出来るのだが、料理だけが微妙。不味いとかではなくて、基本的に味が薄い。

ゾンビ発生時、真っ先に戦い、ゾンビから二人の親友を救った。

成績は上の下。趣味は槍術と家事。

基本的に集団戦では前線で戦う。

第23話 主人公ってだけで女性にモテると思ったら大間違いだ！

夜も静まってきた十時。東野女学院の校舎、その屋上で俺は、サクラと背中合わせに座っていた。

みんなからの強い推しからこうなったのだが、当の本人からしてみれば迷惑でしかない。

気を利かせてくれたつもりが、俺にとっては地獄のようだ。アイツらめ、覚えておけよ。

しかしまあ、漂う無言の空気が重たい……！誰か……！

と逃げてもしょうがないし、俺から行くしかないだろう。聞きたかったこともあるからな。

「君は……」

先を越されてしまった。べ、別に問題はないんだけどねっ！

彼女が発する二の言葉を待っていると、背中から視線を向けられているのを感じた。

振り返り、視線を向けるが、サクラは依然変わらず背中を見せている。気のせいかな？

「なんだよ？」

姿勢を戻し、サクッと終わらせようと口を出した。

「……変わったね」

「ああ？そうか？」

そうだったけ？俺的に言えばまったく変わってない気がするが。首を傾げる俺に、サクラはそうだと確信を持って告げた。

「口調が乱暴になった」

「ケンカ売ってんのか……！」

やっぱりコイツ嫌い！誰のせいだと思ってるんだ！

俺の中のサクラの評価が低下していく中、彼女はごめんと謝罪して笑う。笑うなってるの！

しばらく笑ったサクラは、声を戻して続きを語る。

「だけど変わったのは本当」

まあ、分からなくも無いけどな。以前はもつところ………優しいけど。だがそれを言うなら俺だけじゃないだろ。

「お前だって変わった」

昔は……という程昔でもないんだが……前はおっとりとした天然系だった。でも、今のサクラは凛々しい雰囲気だ。

口調も変わっているし、眼つきも鋭い。以前とは別人のようだ。

「二年経てばさすがに……ね」

そうか、あれから二年経ったのか。そりゃ変わるわな。

二年………か。永かったな。五〜六年は経ってるかと思っただぜ。

「だけど知らなかった。お前って東野に通ってたんだな」

「……うん」

気づかれないようにサクラを見ると、彼女は両膝を抱えて顔を埋めていた。

てつきり県外へ行ったのかと思ってた。前方に視線を戻し、そう小声で言うつと、両親の都合でという返答が耳に届く。

便利だねえ、両親の都合で。引越しとかって大体そうじゃん？

「今でも医者になろうとしているのか？」

ふと気になった将来の夢。話題変えついでに問いかけるが、言った後で後悔する。

こんなこと聞いてどうする？今はもう関係ないだろ。第一、ここから脱出できるとも限らない。脱出できなきゃ、何にもすることが出来ないぞ。

「……………うん」

しかし、そんなことお構いなしにサクラは言った。そうか……。それで言葉は止まる。そりゃそうだ。初恋の人にしばらく振りに会ったとしても当然の反応だし、ましてや俺はそれ＋黒歴史と会ったようなものだ。怒りが湧き出ないのは何故か知らんが。

ああ〜気まずい。どうしよ〜。ていうか何で話してるんだっけ？

若干やけくそになった思考で、事の顛末を整理していると、視界の端に見知った顔が映る。貯水槽の陰に、六〜七人ぐらいの集団が見えた。バレバレだよ。

見れば、冬紀たちとサクラの集団のようだが、男女比が1：6だった。羨ましいな冬紀。

ていうか、自分たちで楽しむためにこれをセッティングしたのか

よ。うわゝ、USPで撃ちてえゝ。でも弾勿体ねえゝ。

葛藤の苦悩から頭を抱えていると、それに気づいたサクラが大丈夫？と声を掛けてくれる。……………めっちゃ近くで。

「サクラさん？」

「はい？」

「ちけえっ！」

「あうっ」

眼前数センチにあつた顔を押し戻す。コイツは毎回毎回！前からそうだ、何か有るたびに顔を近づけて……………！もうちょっと淑女しゆじゆとしての嗜みたしなを————ガミガミガミ……………。

しまった。前みたいにサクラのペースになっている。ていうか前って……………。

「……………もう戻ろうぜ」

「……………ごめん」

「違う。お前のせいじゃない」

俺は立ち上がり、階段へ向け歩き出す。

くそつ。二年前を思い出してしまった。こちとらやっと立ち直つたのが去年だぞ？まだまだ嫌な事だつてあるつて言うのに……………！

最後に貯水槽辺りに居る奴らにガンを飛ばしておいた。八つ当たりだ。

その夜は二年前の悪夢を見ることになるのは当然の帰結だろう。

……翌朝。八月四日。ゾンビ発生から四日目。俺の目覚めがちょい悪かったのは言うまでも無いだろう。

「最悪だ……」

ゾンビ発生から気だるさが抜けない体を起こし、保健室に備え付けられた流し台へと向かう。

蛇口を捻って水を出し、顔に数回かけて顔を上げた。視界に映る鏡には、いかにも疲れたような俺の顔がある。

俺って毎日トラブルに巻き込まれてるな。その割にちゃんと休んでないし。

自分で言っただけで自分で悲しむというサイクル。これほど最悪なものはない。

タオルで顔を拭きながら、すぐ近くの冷蔵庫を開けて、スポーツ飲料を出す。まだ夏の時期だから、冷えたペットボトルが気持ち良い。キャップを開け、一口口に含むと、何ともいえない幸福が体に満たされた。

「いいねえ」

つい無意識にそう呟く。口調が中尾彬風だったのは気のせいだ。

「じゃあそれ貰える？」

気配無く後ろから声を掛けられるが、瞬間的に嫌な顔になってしまふ。

「あからさまに嫌な顔しない」

振り返ると、案の定サクラが居た。道理で瞬間的に嫌な顔になったのか。納得納得。

「納得しない！」

首を縦に振っていたせいで感付かれましたか。ていうか何で嫌な顔していると分かったんだろう？……………鏡か。

しかしまあ、非常に面倒くさい相手に出会ってしまった。さらに間接キッスをご所望と見える。

「それは望んでないから」

心を読まれた！やべえ、変なこと考えてたのがバレてしまう！

「自分で言っているけど？」

「バレたかつ！」

実を言うと間接キッスのあたりで、小さく呟いていたのだ。ふふ、気づかなかつたでしょう？……………キモイな。このキャラやめよう。

「んで？これ飲みたいんだっけ？」

「うん」

「ヤダ」

即答だった。そりゃそうだ。この女の子に、口をつけた飲み物を渡す義理は無い。

いくら小さい頃からの付き合いだったからって、二年前のことを

許したわけじゃないからな。存分に反省しやがれ！

「ケチ」

そう言つとサクラは奥の部屋に消えてつた。な、なんだと……！
今のはヤヴァイ。さすがの俺でも萌えた。凜々しい眼つきである
感じは萌える。萌え死ぬ。

だが、すぐに複雑な心境になつてしまふ。過去の出来事のせいで
くそつ。

あれはもう忘れることにしたじゃないか。何故思い出す？

苦い顔で立ち尽くす俺には、とても暗い影があつた。ようは桃栗^{ももくり}
三年、柿^{かき}八年つてやつだろ？（当たらずとも遠からずです）
俺がサクラを許さない限り、終わらないつて言つのか？

334

「それで君たちはどうするんだ？」

同日朝八時頃。東女（東野女学院）で一夜を明かした俺たちは、
詳細なプランの元、東海林市脱出を再開するために東女を発つこと
に決めたのだ。その前に冬紀が、サクラと東女生二人（確か金髪が
リライトとかいう留学生で茶髪が藤崎）に今後を問いかける。

「着いていく。昨日の話じゃここに居るよりかは良いみたいだし」

「ええ」

「はい」

唯一早織が心からの同情の視線を向けてきているが、俺には慰めにすらならなかった。

「ええい！ウザッたい！！」

ハエのように寄ってくる姉貴と円さんを蹴散らし、X-7を持って立ち上がる。

サクラにお前が東女生の面倒見ろ！と言い放って、一人寂しく保健室の扉を開けた。ゾンビは予想通り居らず、全員に行くぞとだけ言っただけ俺は保健室の扉を潜った。

元から準備は万端だったんだ。USPと短刀は腰にあるし、諸装備も問題ない。

最後に東女生に聞いたらあの様だし。最悪だ。

俺は心の中でグチグチ文句をたらしながら、後に続くみんな（俺含めず八人）の先頭に立って階段へと歩いていった。

第23話 主人公っただけで女性にモテると思ったら大間違いだ！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

凄い人数になりました！主人公合わせて九人！

ちよつと多くね？そう感じた皆様……………ですよね？

自分でも多い気がしました。はい。

ゾンビ発生から四日目！脱出するために今日も戦う？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

なお、新規連載小説の

【異世界が来たっ！ ～俺と少女とファンタジー～】

は、異世界モノですー！ーが！異世界に「行く」のではなく異世界が「来る」という作品になっております！

学校に行っている間に考え付いたモノなので、荒さは拭いきれないですが、楽しめる作品だと思います。

是非一度読んでみてください！

第24話 エロがあつたら命が消えた？（前書き）

おはにちはー！らいなあです！

書くことは無いんですよ。しょうがないから宣伝でも。

不定期更新で新規連載小説を投稿しました！

タイトルはー！

異世界が来たっ！ ～俺と少女とファンタジー～

ー！です！

是非読んでみてください。

第24話 エロがあつたら命が消えた？

螺旋階段らせんの辺りまで来ると、手すりに手を掛け下を覗き込む。ここは三階だが、かなりの高さがあった。

「うわぁ……うじゃうじゃいるぜ」

一番階下の一階に、結構な量のゾンビがたむろって居る様子を見て、つい顔をしかめる。

しかも階段上にもゾンビが居るし、戦闘無しで突破は不可能だろう。

「どつするんだ？良？」

真横で同様に覗き込む理奈が俺に指示を仰いでくる。手には俺が使っていたライオットガンが握られて。

「そつだなぁ……」

階段から何か落とすか？……駄目だな。螺旋階段だからあまり効果的じゃない。

非常階段で降りるか？……これも駄目だ。駐車場の反対側に降りてしまう。

強行突破するか？……論外だ。非戦闘員が居る中で強行したら一人二人は死人が出る。

俺が決めあぐねて唸うなっていると、サクラが俺に声を掛けてきた。

「なら非常用脱出口を使えば？」

「非常用脱出口？」

話によると、この学校には数百年とか続く有名な良家の娘などが居たりするので、非常事態の際、真つ先に脱出させる目的で作られた外部へ通ずる出口があるらしい。それが非常用脱出口という話だ。――なんだそれ。金持ち自慢かよ。でもそれは使えそうだ。

「それで行こう。案内頼む」

「わかった」

サクラが先頭に立って、来た道を戻る。その後ろに流石サクラさんですわ。――とか、野蛮な人には真似出来ませんね。――とか言っただけで行くライトと藤崎が居た。少々、癪しゃくだな。

しかしそれを表に出すことはしない。リーダーがチームの雰囲気ふんいきを悪くしてどうする。そう自分に言い聞かせて、俺はサクラの後を追った。

非常用脱出口っていうのは、まあ「脱出口」な訳だから、決して歩ける通路じゃないんだよね。

「狭い」

「我慢しろ」

まるで通気口のような狭い通路をしゃがんで進みながら、二つ後の姉貴が言った。

ほとんど即答で我慢という言葉を出した俺でさえ、さすがにこれはかったるい。特殊部隊かよっ！とツッコミたくなる。

そのツッコミをグツと堪こらえて、先頭を進む俺は一番後ろのサクラ

へ言った。

「後どん位だ？」

「数分ぐらい」

心なしかサクラの声も辛^{じつ}そうだ。ていうか後数分もこのままかよ。身軽な装備だったのならともかく、X-7とか銃器類を所持した状態でこれはキツイ。特殊部隊って凄^{すご}いんだな。

「狭いのもそうだけど、暑さも大変だ」

真後ろの冬紀の言う通り、この中は蒸し暑さが渋滞を起こしてワヤだ。ましてや今は八月、まだ夏の時期だからな。

「暑いい〜。汗がグシヨグシヨだ〜」

理奈の言葉に同意だな。汗でTシャツが張り付いて気持ち悪い。しかも酸素が少ないから息苦しいし。

「はあ、はあ、速く行ってよ良祐」

「うっせ。これでも精一杯だ」

早織も肩で呼吸しているような状態だ。速く行きたいのは山々だが、俺のポテンシャルではこの進行スピードが一杯一杯だったの。

「良祐さん。胸が支^{つか}えて……」

「じゃあコンパクトに折り置^たんどけ」

姉貴の豊かな胸は円さんの遺伝だから、当然円さんも胸が豊か。しかし同じぐらいの大きさを姉貴が通れたのに、姉貴よりも体が小

「ここは……駐車場か？」

見たことの有る風景と俺たちのハンヴィーがすぐそこに見えたことからも、ここは駐車場で間違いないようだ。

サクラも肯定したし、良かったぜ。面倒な戦闘をせずに済む。

「あの、良祐さん……」

「何だ？」

振り返って円さん（だけ）を見る。よし、透けてはいない。

彼女は怯えた様子で、ある一点を指差したまま硬直していた。俺は指差された方向へ視線を向け、同様に硬直する。

他のみんなも俺と円さんの様子から同じ方向を見て、一人残らず凍結していた。

指差す場所には、二メートル前後の巨体を持つ土色の肌のゾンビが居た。目からは真っ赤な涙が滴^{したた}つて。

「ミュータント……だと!？」

何故奴がここに!?! いやそれより、アイツは嗅覚で索敵するから俺たちに気付いてていうか死んでなかったのか!?

ああくそ! 頭の中がゴツチャゴチャだ! 落ち着け。あれが小林邸に出た固体とは限らないだろ!

そのミュータントをよく観察すると違いが見えてきた。大きさがちよつと違う。前回の奴より小さいみたいだ。それに大量に浴びせた弾薬の弾痕^{たんこん}が一つも無い。あの固体とは違うようだ。

「ちい、こつち来やがる……! 理奈! 冬紀! 手伝え! 他の奴は車に

乗って脱出の準備!!」

「おっつ!!」

理奈と冬紀の返答を背に、俺はミュータントを出来るだけ車から引き離そうと、ミュータントに向け駆け出す。
ハンウェイ

「こっちだミュータント!!」

出来れば撃ちたくは無かったが仕方ないようだ。X-7の安全装置を解除、連射にして構える。
フルオート

サイトを覗かず、目測で狙って引き金を引いた。
トリガー

八発を放ったが命中したのは五発のようだ。でも今はそれで良い。注意さえ引ければ。

数メートルまで近づいた所でミュータントは腕を振り上げた。マズイ!

そう直感し、ミュータントの脇へ前転を繰り返す。瞬間、俺の上をミュータントの腕が通り過ぎていった。

「俺がこんなアクションする日が来るとは思わなかったぜ……!!」

体勢を立て直して、休む間も無く駆け出す。

「援護するぜ!!」

振り返って声のした方を見る。ミュータントからある程度距離を取った理奈が、ライオットガンをポンプアクションでぶっ放していた。

これは前回同様、ミュータントを怯ませるには十分な威力だった。

「はあっ!!」

怯んだ隙を狙って、冬紀が通り過ぎ様に鉄パイプで奴を殴打する。
しかし、あまり効いていないようだった。

「まだまだ！時間を稼げ！」

HUDスコープの電源を入れ、モードをS、フルオートスナイピングでVAB弾を胴体へ放つ。

反動がでけえ！銃口が上に逸れる！当たったのはたった三発で、他の四発は空しくもミュータントの頭上を通り過ぎていく。

くそ！今の俺じゃこれは扱えねえ！連射フルから単射セミオートに切り替えて、さっきのフルSスナイピングが効いたミュータントにヘッドショットする。

「ヘッドショットが必殺じゃないって……ホントに規格外だな」

一応は効いているみたいだが、関係無しにミュータントは立ち上がった。

弾薬だつて無限じゃねえんだぞ！確かX-7は装弾数が三十五発だから、使った弾は十六発、残弾は十九発か！

理奈はライオットガンしか使つてねえから12ゲージ弾。冬紀は一応拳銃持たせてるが射撃できねえとかで使つてねえ。あれ？弾使いまくつてるのって俺だけ？

「何やってるのよ野蛮人！」

「なっ!?!」

俺があれこれ考え事していると、ハンヴィーの近くに立ったりライトが俺に向けて怒号を飛ばしてくる。

あんの馬鹿！ミュータントは視覚が使えないから誤魔化^{しまか}せていただけで、聴覚はまだ使えるんだぞ！？

「逃げる！」

そう言っつて駆け出した頃には時既に遅し。跳躍を開始したミュータントは弾丸を受ける中、リライトの目の前まで着地し、左腕でリライトを払い除けるように、左方へ思いつきり腕を振るう。

「きゃっ……ぐお！！？」

リライトは悲鳴すら上げる前に、淑女とは思えない声で左方にあった乗用車に叩きつけられる。

乗用車に当たった瞬間――例えるなら雪球を壁に当てたように――彼女は潰れて、白色の乗用車を真っ赤に染めた。

見るだけで複雑骨折、大量出血、臓器なんてグチャグチャ、腕から飛び出した骨。多分……即死だろう。

リライトの遺体は無残にも崩れ落ち、その美しかった顔（だと思っ）は見るに耐えない表情で硬直している。有り得ないほど剥き出しにされた白目が、彼女の死を物語っていた。

「ミレリア！ミレリアアアアアアア！！」

ミレリア、確かにリライトの名前だったはず。ミレリア＝リライト。サクラの絶叫が響く中、俺はリライトが殺された怒りを携^{たずみ}え、右手で腰から短刀を抜き放つ！

「キイイイイサアアアアアアアアアア！！」

二度も知り合いが殺された怒りから、俺は直前まで考えていたことを、自分の怒りに変えて特攻を仕掛けた。

ミュータントをハンヴィーから引き離すために俺が特攻を仕掛けるといふ作戦を、俺は怒りのせいで全て忘れて、ほとんど復讐ふくしゅうのように特攻を仕掛けていたのだ。

「良!? 危ないぞ!!」

理奈の警告もいざ知らず、ハンヴィーに標的を定めたミュータントへ、右手の短刀で思いつき切り付けた!

「ちい!」

しかし、ミュータントの強固な肌と、連続使用による消耗しょうこうから、短刀の刃は脆もろくも砕け散ってしまう。

ミュータントは予想通りに俺へ標的を変え、振り返る。あっ、ヤバイ。奴の注意を引いた後を考えてなかった。

避けるだけの余裕が無かった俺としては、瞬間的に跳び、体の前に腕を持ってきて、ミュータントのボディブローの威力を軽減させることしか出来なかった。

「ぐうっあ!!」

俺の体は弧を描き、ゆっくりと校舎近くの植え込みの中に落ちる。不思議と痛みは感じなかった。

そして俺を呼ぶ声が聞こえたのを「さいご」に、俺はその意識を全て失った。

第24話 エロがあつたら命が消えた？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

また知り合いが死んだ！主人公の命は？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

異世界が来たっ！　く俺と少女とファンタジーくもよろしくお願
い
します。

第25話 絶望すらない圧倒的な死。それが「デッドエンド」(前書き)

おはにちはーらいなあです！

今回は第一部完、として書いたものですので文字数は10000文字にも満たないです。

第25話 絶望すらない圧倒的な死。それが「デッドエンド」

考えてみれば俺——というか俺の周りの人間はろくなことが無かった。

たとえば冬紀。あいつは中学の時に母親を亡くしたそうさ。それからと言うものの、父親とは仲が悪くなる等々の不運に見舞われたそうさ。

たとえば理奈。あいつは幼い時に両親を亡くし、親戚に引き取られたそうさ。当初は色々苦労があったらしい。

たとえば早織。あいつは両親の離婚、さらに父親は行方不明、母親と子供の頃から親しかつた田代さんを亡くすという災厄に陥った。

家族だと姉貴。あいつは容姿とスタイルのせいで事件に巻き込まれやすい。代表的だと大学の事件。

円さんは腕っ節強さでケンカを売られることもしばしば。

サクラは小学生の時に事故に巻き込まれた際、生死の境を彷徨さまよったこともある。

そして俺は中学の時のイジメ、他にもあるがとにかくろくなことが無い。

ん？あれ？俺って今何してるんだっけ？——ああ、そうか。俺って死んだのか。

——嫌あ！！良祐君を置いて行けないよ！！

——サクラさん！良祐を回収している時間は無いんだ！！

――冬紀！お前、良を見捨てるのか！？

――良ちゃん！良ちゃん！！

――良祐さん！！！？

――落ち着いて現実を見なさい！！良祐は死んだのよ！！

――まだ死んでるとは限らないだろ！！

――どちらにしろ彼を回収してたら全滅するわ！！

――でもお！！

――来るぞ！早織さん車を！！

――ええっ！！

――嫌ああああ！！

車が走り去っていく音がする。それを追うようにドスンドスン！と足音のようなものが遠ざかっていった。

しばらくして場が無音に支配された時、沢山の呻き声が遠方で聞こえ出した。おそらくゾンビだろう。

駐車場では真っ赤に染まった白色の乗用車の脇に、金髪の少女の遺体が横たわっている。

校舎側では植え込みの中に、詰め襟の制服を着た少年が横たわっていた。その少年はピクリとも動かない。

そして、その場には死体が動くだけで、生者は一人たりとも動くことは無かった。

第25話 絶望すらない圧倒的な死。それが「デッドエンド」(後書き)

いかがでしたでしょうか？

部で区切るとかではないですけど、定めるとしたらここで一部ですね。

これにて短期の休暇を頂きたいと思います。短くて3日、永くても1週間程度です。

完結ではないので、またよろしく願います！
らいなあでした！

第26話 生き行くため、仲間を求めるその前に（前書き）

おはにちはーらいなあです！

短期休暇明けですけど少し疲れてますね。疲れが抜けないタイプなんですよ。

しかもその間は「異世界が来たっ！」に掛かりつきりだったし。まあともかく少しぶりの現実オツトエントをお楽しみください。

第26話 生き行くため、仲間を求めるその前に

「ー起きてー」

誰かの声が聞こえる気がする。でもその声には「ー」中身が無い。

「ー起きてよー」

まるで頭の中で響いてるみたいだ。声質からして中学生ぐらいの少女か？

「ー貴方にはやるべきことがあるのでしょうか？」

「！……不思議とその言葉は胸を抉^{えぐ}ってくる。」

「ーさあ、おはようの時間よ。「良祐」

俺は意識の根底から引き釣り出された感覚に陥り、閉じた目蓋に生を促す小明の光が灯ったのを感じ取った。

「っ！はあっ！……はあ」

思考を揺るがす大きなうねりと衝撃に、俺は思わず凍り付いていた目蓋を開けて飛び起きた。

凍り付いていたと言っても本当に凍っていた訳じゃなく、そう錯覚させるほど永い間閉じていただけだ。

「……………ここは？」

乱れた息を少しづつ整えて、状況の究明に尽力を注いでいると、程無くして簡単に全てを悟った。

ここは東野女学院。一夜を明け脱出を試みた際、ミュータントの襲撃に遭遇、リライトの死と仲間の危機に瀕した俺は、単身ミュー

タントへ特攻を仕掛けた。結果はまあまあ、注意を俺に引き付けることは出来たが、代わりに俺がやられたわけだ。
あれからどれ位経つただろう？

「みんなは……上手く逃げ果せたわけだな」

辺りを見回してみるが、特にみんなの死体は転がっていない。――リライトを除いては。
リライトの元へ行こうと体に力を入れるが……

「あれ？」

腕に力が入らない。それどころか足も。どうやらミュータントにやられたおかげで上手く体が動かないようだ。しかも力を入れたせいで麻痺していた傷が痛み出してくる。――しばらくはあまり動けないな。

時間潰しに空を仰ぐ。長時間目蓋を閉じていたせいで気付かなかつたが、空はもう真っ暗だった。さっき光つたのは太陽じゃなかったのか？――と、視線が光の元を捉えることに成功した。

「学校の外灯か」

すぐ後ろを振り向く。外灯が燦々（さんさん）と俺の周りを照らしていたのだ。

そして外灯の根元にX-7が落ちているのが見えた。少し損傷しているようにも窺える。すぐ近くだったのもあって、俺は側の木の棒でX-7を引き寄せた。

「動作は……問題ないな。念のため機会があつたら完全整備してやらないと」

流れてUSPも確認してみるが問題ないようだ。その他所有物資を確認していると、ケータイがぶっ壊れているのに気付く。

「みんなと連絡取れないな……」

いらねえという理由で財布も持ってきてないからな。公衆電話も使えねえ。しょうがないから出した物を元に戻して、数回呼吸する。少し痛みが引いて動けるようになった体を起こし、やや体を馴染ませてからライトの元へ歩き出す。足を引きずって腕を押さえて、見た目的に言えばライフゲージが真っ赤のキャラクターのような感じだ。

辿り着くとその悲惨さが良く分かる。白い乗用車を鮮血で染め、当たったと思われるドアには人型のように大きな窪みくぼみが出来ていた。そして落ちていった鮮血を辿って視線を下へ向けると、有り得ない方向に曲がった手足を備える無残なりライトの死体がそこにはあった。

「悪いなりライト。助けてやれなくて」

せめてと、血の海に沈む彼女の開ききった目蓋を閉じてやる。心成しかりライトの目から涙がこぼれた気がした。

俺はそれに何も言わず、近くの開けっ放しの乗用車の運転席に乗り込んだ。真っ黒なカラーリングの小型乗用車のようだ。メーカーはトヨタで確かパッソとかいう奴のはず。昔CMでやっていた。

キーも掛けっ放しで放置されているのが幸いしたぜ。多分逃げようとした時にゾンビにやられたんだろう。

俺はX-7を助手席に置いて、シートに凭れ掛かるもた。ドアは閉めない。

「ああ……。本当に不運だ」

腕時計を見ると九時を過ぎていた。単純計算で俺は時計一周するまで寝ていたらしい。

「本当に……」

そのまま俺は気絶するように眠る。とつかほとんど気絶だった。ちなみにこの時の俺は俺を呼んだ少女のことをすっかり忘れていた。そして俺は夢を見る。儂^{はかな}き少女の絶望の様を。

第26話 生き行くため、仲間を求めるその前に（後書き）

いかがでしたでしょうか？

生きてたんですねえ良祐。まあ主人公は良祐なんで交代させる気は無いですけど。

生存の良祐！孤独になった良祐は？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第27話 煉獄に囚われし少女、儂くもその名は知らず（前書き）

おはにちはーらいなあです！

書くことがあります！どっしましよっ？

……………本編に行きましょっ。

第27話 煉獄に囚われし少女、儂くもその名は知らず

朝、目が覚めると誰も居ない静寂が俺の身を襲う。腕時計で時刻を確認すると五時だった。

「四日目の記憶がほとんど無い……」

ずっと寝ていたからな。当然なんだけど……何か寂しいな。時間の流れに取り残されたような感じた。

今日はおそらく八月五日。ゾンビ発生から五日目の午前五時だ。

「腹減った」

昨日の朝から何にも食べてないからな。とりあえず何か食べないと。折角生き残ったのに餓死とか笑えねえぞ。

俺はポケットからカロリーメイトを取り出して一口食べる。うわあ、口が渴いていく。

「確か東女来る前にコンビニ見かけたな。すぐ近くだし歩いて行くか」

カロリーメイトを一つ食べ終わり、助手席に放っていたX-7を持って車外へ出る。前日の傷は九割回復していた。

こんだだけ動ければ十分か。そう思考し、装備のチェックを入れる。

X-7にUSP、VAB弾の弾倉が二つに9mmパラベラム弾の弾倉が五つか……。

メイン武装が乏しいな。どこかで近接武器が欲しいところだ。

「どっかで調達しないと……」

辺りを見回してみるが武器になりそうな物は無い。しょうがないと溜息を吐いて、ゆっくりと校門へ向け歩き出す。

今からは潜入任務だ！ゾンビとの交戦を極力避け、目的地へ辿り着け！と、まるでメルギアソリッドの様なミッションを自分に課してみたり。

幸いにも校門を出た所からはゾンビは視認出来ない。敵が居ないのならその間に行こう。

右に曲がって視線を向けると、前方のずっと先にコンビニが見えた。そこまでもゾンビは居ない。

「ラッキーだな」

足音をたてずに早歩きで歩いていると、コンビニの惨状が目に見えるようになってきた。

「車突っ込んでんじゃん」

残念哉、商品は無事なようだが運転席の部分がグチャッと潰れている。ゾンビ化せずには運転手は死んでしまったのだろう。

こういうのはこの世の中仕方が無いことだ。死人の闊歩する街。それ即ち、死が蔓延していることだからな。

「失礼します」

乗用車の運転手さんとコンビニ二さんに礼を行いつつ、コンビニの中に侵入した。

中は酷い荒れようで、棚が将棋倒しのように倒れている。床に落

ちた商品なんてボロボロ、全然使えそうにも無い。

棚の中にある商品は一応無事なようだが、食つとしたら少し抵抗がある。でもそんな事言つてられない。

「コレとコレは食べそうだな。コレは……うっわ、くせえ。無理だな」

食料と雑貨と必要物資。VAB弾と9mmパラベラム弾もあれば最高なんだが、日本……ましてやコンビニじゃ手に入るわけが無い。選別した物資をコンビニのカゴに入れ、カゴ一杯に集まったところで収集を止めた。

「多すぎると大変だ。まずは今日明日食べる分だけ確保すれば良いか」

足を出口に向け帰ろうとするが、その途中で面白い物を見つけた。

「これ……金属バット？誰かの忘れ物か？」

地面に銀色の金属バットが落ちていたのだ。つくづく金属バットと縁があるな。

「丁度良い。これを近接武器にしよう」

金属バットを拾い上げ、何回か素振りしてみると以前と同じ感覚がした。俺、金属バットと相性良いのかもな。

カゴを左手にバットを右手に。カゴの中にはX-7も入っている。

「まずは飯、話はそれからだ」

コンビニから出て、東女へ向かった。

「あゝ食った」

俺は、俺が寝ていた黒色の乗用車バスに戻り、調達してきた食料を食っていた。

カゴを助手席に置き、動かないようにシートベルトで固定して。

「食ったら体が軽くなったぞ」

完全に体が完治したようで、今ならよっぽどのが出来る気がした。ミュータントの攻撃を受けて約一日、驚異的な回復力だったと思う。俺は運転席のドアを閉め、車のエンジンを掛ける。

「燃料は確認した。鍵もあった。物資もある。次の目的地も決めた。完璧だな」

自分で確認するように呟いた後、ゾンビが来る前に全ての作業を終える。

アクセル踏み進めるぞ。と言うところで、窓を開けてリライトを一目見た。

「俺にはやるべきことがあるんだ。人生終わったら俺もそっちに行く。じゃあな」

当然返答があるわけでもないが、せめて死者へ向けた生者の言葉としてこの場に置いて行く。

俺はシートベルトを締め、窓も閉め、前方を警戒しながらアクセルを少し踏んだ。ゆっくりと歩を進める車を校門へ向け、アクセルを踏む力を少し強める。

「先ずは一番近い大きな施設、警察署だ！」

校門を出て真っ直ぐ。制限速度で警察署へ。

ーとある幽閉された空間。おそらく牢屋ーもしくはそれと同等の場所。

そこに一人の少女が囚われている。肌は物凄く白く、豆腐に並べるんじゃないか？というぐらいに真っ白だった。

「良祐はまだかな？」

同じく純白の長髪を弄りながら、少女はそう呟いた。

長髪と記述したがそれは手入れされたものじゃなく、切らなかつたから伸びてた。ーかのようなボサボサ具合だった。

「早く来ないとこっちから行っちゃうよ？」

とても綺麗とは言えない布を体に巻きつけて、少女は不適に笑う。その表情は、とても見た目の年齢から発せられて良いものではなかった。

とそこに一人？の男がやってくる。見れば服はボロボロ、肌は土色、目からは血涙を流している、身長二メートルぐらいの怪物。と

ある集団がミュータントと呼称するゾンビだった。

「あら？いらっしやい」

少女はゾンビが現れたと言つのに、まるで友達のようにミュータントを見ていた。

ミュータントは牢屋らしき部屋の扉を殴り壊すと、ゆっくりとした足取りで部屋に侵入する。

「やる気？母とも呼べる存在である私と？」

少女は悪魔のような笑みを浮かべてゆっくり立ち上がった。

ミュータントは腕を振り上げて、力の限り少女へ振り下ろす。そして少女は……………消えた。

「まだまだね。成り損ないの憐れな子猫ちゃん」

次の瞬間には、少女はミュータントの後方で何かを持っていた。

それはミュータントの……………「頭」だった。

ミュータントは頭が無くなった状態でその場に崩れ去る。それきりもう、ミュータントは動くことが無かった。

「まだこの程度……………。残念ね」

少女はミュータントの頭を放ると、足音も無く歩き出す。

「世界は終わる。いえ、あるいは……………」

瞬まばたきをするぐらいの時間、たったそれだけ視界を外せば、少女は跡形も無く消え去っていた。

第27話 煉獄に囚われし少女、儂くもその名は知らず（後書き）

いかがでしたでしょうか？

謎の少女？生き行く良祐は？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第28話 予想通りのKAIMETSU状態

「せーんろは続くよ。どーこまーでも。ふう……」

車を走らせること一時間。暇すぎて歌ってみたが、一人だと全く面白くない。

今まで誰かが側に居てくれたからな。一人になったのなんて中学三年以来だ。……つたく。

「もう少しで到着か？」

後方に流れ行く景色の中、おおよその現在地から目的地までの距離はそう長くない。後、永くて十分ぐらいだろう。

さつきから前方にちよくちよく現れ始めたゾンビを轢きながら、辺りの地形を頭に叩き込む。最悪の場合に備えて退路を練っているのだ。さらにみんなが居なかった場合も考えて、次の目的は決めている。そこに向かうのに最適なルートを算出するのも仕事の一つだし。

「次の目的地はホームセンターだから、東に進めるルートを探せばいいわけだ」

結果として次はホームセンターが妥当だと思った。この辺りにある中で、そこそこ意義のある施設だしな。

食料も近くにスーパーがあるし、武器や寝床には苦勞しない場所、さらにはショッピングモールへの中継地点でもある。

東海林市脱出ルートは俺が考えたから、どこまで行けば良いのかも全て俺の頭の中だ。早織がよっぽど奇天烈なルートでも提案してない限りだけど。

「そろそろとうちやく」

視線の先には、住宅街故に家が連ねられていた道路が広範囲に渡って開かれている。

そして視界に飛び込む赤茶色の建物。六階建てぐらいの本館に三階建てぐらいの副館が引つ付いた、敷地面積をめっさ食いそうな造り。あれが東海林第一警察署。ここ東海林市にある警察署の中で一番大きな署だ。

俺は敷地を取り囲む塀が高いことに感心しつつ、正門から敷地内へ車を滑らせた。

「ゾンビは……いないな」

幸いにしてゾンビは皆無。エンジンを切り、X-7と金属バットを持って車外へ出た。ドアを閉めて鍵をかける。

ここに来たのは初めてだ。いつも家の近くの第二警察署を利用してるから。……いつも何に使ってるかは聞かないでくれ。

ここの地形は把握してない。けど見た限りじゃ、みんなが乗っているであろう軍用車両ハンクワイは無いようだ。

「もしかしたら裏にあるのかも。回ってみよう」

X-7を肩に担ぎ、背中に回して温存する。無駄に弾薬は使えない、金属バットでやるしかないだろう。

俺は銀色の金属バットを両手で持ち、正面に構えて歩き出した。

「いねえな……」

全てではないが屋外駐車場には軍用車両ハンウイが無いようだ。変な車は一杯あつたけど。

もう一度正面に戻ってみるが、それらしき車は一台も無かつた。居ないのか？

「くっそ〜いねえのか〜。しょうがない、次行くか……」

さすがに諦めて帰ろうとした時、ふいに銃声が響く。音は一発、音質からして拳銃ハンドガンタイプの弾薬だろう。

「誰か居るのか？」

みんなかもしれない。……そうじゃない確率の方が高いだろうけど。

俺は音源の場所と思われる本館六階に向け走り出す。ゾンビの居ない正面玄関をスルーし、前方に見えてきた二階への階段を駆け上る。

意外ときつい階段走行を不思議なくらい楽に上り一気に四階まで駆け上がったが、それからは誰もが見るも無残なぐらいペースダウンしてしまう。

「ペース配分………間違えた」

だろうね。と一人で空しく芝居を打つてみたり。………余計に悲しくなるだけだった。

俺が息も絶え絶えでようやく六階に上がった時には、既に肩で息をしているような状態だった。

そこに一体のゾンビがやってくる。バットを振り上げ、向かって

くるゾンビ一体を容赦無く殴打すると、そのゾンビは腐臭と鮮血を撒き散らしながら床に平伏した。それきりもう動かなくなる。

久しぶりの殴打感に感銘を受け、ついつい目的を忘れかけてしま
うのは戒めない性さが。どうぞご勘弁ください。

「疲れて……感銘受けて……大変だな……」

深呼吸も儘ままならないその体で、一路音源がした方向へ歩き出す。

どうやら六階は一般人立ち入り禁止フロアのように、備品庫やら
仮眠室、さらには押収品倉庫もあった。

「なんだ……!?!」

だが階段から少し進んだ所で異変に気付く。廊下に大量の死体と
血痕が放置され、壁には無数の窪くぼみとひび割れが俺を出迎えたのだ。
圧あつかん巻まだったのは床に散らばる物。それは破壊された大量の銃器だっ
た。

「この殺され方……ミュータントか？」

署員らしき一人の女性を覗き込む。その様はリライトの遺体と同
様、何かに打ん殴られたような感じだ。

これなら壁の窪あみもこれなら説明がつく。ミュータントに払い除
けられた署員の衝突の跡あとだろう。

見ることさえ良心を蝕むしまれるような悲惨な死体が、たいして広く
も無い廊下じょうげに所狭せうせしと乱雑しているのは地獄絵図以外の何物でもな
い。ただの目測ならば数は優に三十を超えているのだから。

武器もミュータントに破壊されたのだろう。拳銃が多いのは標準
装備だからか？

これじゃあ下の階も同じ様な感じだな。俺は階段だけしか使って

なかったから分からなかったが。

俺は残酷なほど冷静に死体を観察した後、『何の感情も抱く事無く』廊下を進む。死体が無い真ん中辺りを悠々と歩く俺には、多分冷徹な表情が映っているだろう。

さっきの『何の感情を抱く事無く』イーというのは嘘だ。と言っても、精々『ああく、ミュータントにやられたんだな』程度だ。

昔（と言っても一年前ぐらい）冬紀にイー良祐は他人に対する良心が欠けている。と言われたことがある。

奴の話だとイー俺の知り合いと、その知り合いの知り合いには命を賭けるが、何の面識も無い本当の他人は残酷なほど簡単に見捨てているイーだそうだ。つまり、赤の他人は目の前で死に掛けようが殺され掛けようが助けないイーと言いたいらしい。

確かに俺に助ける気は無いが、それが何だ？という話だ。目の前の困っている人は助けなきゃいけない法律でもあるのか？と言いたくなる。それを言ったら冬紀と（何故か）理奈に激怒されたが……。

「俺に正義を求めるのは酷だぜ」

誰に言うつもりでもないが、あえて言うならそこら辺に転がる死体と冬紀と理奈だな。

血で滑りかける足元を正し、死体の海を越えた先に開きつぱなしの扉を見つけて入る。死体の中を歩くと言うのは気分が悪いな。

鮮血が廊下から室内へと続き、まるで俺を誘うように血の道が出来ていた。それを辿り奥へと足を進める。

「誰だ……！？」

どうやらここは仮眠室らしい。ベッドが左右に認識できる。

その中、奥の壁に男性が一人寄りかかっていた。床に座り傷を負っているだろう腹を押さえながら。口の端からは吐血したような跡も見られる。男性は俺に拳銃を構えて睨んでいた。

「まえはらじりゃつすけ
前原良祐。人間です」

両手を挙げ、敵意が無いことを男性に示しつつ、男性の腹の傷を注意深く凝視する。

そこには鉄の棒が突き刺さり、ほぼ貫通状態だった。出血量からしても明らかにもう永くない。死は免れないだろう。

「はは、久しぶりに人間を見た気がする……」

男性は拳銃を持った右手を床に落とし、言葉の通りからか少し笑みを見せた。俺も両手を下げ、男性の下まで行く。

「前原君……か。私は大宮元義^{おおみやもとよし}。大宮とでも……」

聞いた様子でも声量が低い。弱っているのは自明の理だ。

大宮と名乗った男性の脇に行き、しゃがんで声が良く聞こえるようにする。

「では大宮さん。ここで一体何があったんですか？」

単刀直入、回り道無し。彼も自分のことからか何も言わずに本題へ入る。

「なあに。ただタイラント^{暴君}が暴れていただけさ……」

タイラント
暴君ねえ、バイオハザードと一緒にの名称だな。でも確かにミュー

タントは暴君の名を冠するには相応しい。仲間も関係無くぶっ飛ばすし。

「それより前原君に言いたい事がある……」
「何でしょう?」

雰囲気が変わった大宮さんに俺も思わず身を固くする。その表情からは鬼気迫った空気と命を賭けた様子さえ感じ取れた。

「奴はまだどこかに居る。ここは危ない。逃げるんだ……」

ミュータントが居るのか!? ちっ、弾薬が少ない今だと分が悪いな。だけど……。

「それは俺が決めることです。そんなことより教えて欲しいことが多々あります」

大宮さんは物怖じしない俺の雰囲気と自然と言葉を失っていたが、俺の発言の意味を考察すると表情を戻した。

「答えられる範囲なら……」

俺は一度頷くと、用件を簡潔に話し始めた。

第28話 予想通りのKAIMETSU状態（後書き）

いかがでしたでしょうか？

混沌を極める警察署！その時出会った男性は？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第29話 俺はアイツと縁がある(前書き)

お楽しみください

第29話 俺はアイツと縁がある

俺は大量の死体の中を音をたてずに歩く。ミュータントに認識されないようにだ。ニオイの方は心配無いだろう。これだけの血が撒き散らされていれば一人分くらいは紛れられるだろうし。

廊下の両脇に無残に放置されている死体が血の海を作る中、出来るだけ血に触れないように気をつけて足を下ろす。

音が出るのを避けるためと滑らないようにだ。以上のことに注意しつつ、俺は目的の場所に辿り着いた。

押収品倉庫。そう書かれたプレートが頭上で鎮座する中、辺りに敵の陰が無いことを確認してその中に入った。

まだ使える扉を閉め、鍵をかける。視線を庫内に巡らすと、床に散らばるのもあるが鍵付きの棚に並べられた銃器がちらほらと見えた。

大宮さんの情報通りだ。ふと十分前の大宮さんとの会話を思い出す。

「答えられる範囲なら……」

俺は一度頷くと、用件を簡潔に話し始めた。

「ミュータント……タイラント？の居場所は分かりますか？」

大宮さんは力無く横に首を振ると、分からないとギリギリ聞こえ

る声量で呟いた。

だろうな。分かれば値千金だったんだが……。しょうがない。

「じゃあ、警察署員の生き残りは？」

「いない……」

素晴らしいぐらいの即答だった。一人として脱出できなかったのか。正確には知らないけど。

そこまで言ったところで大宮さんの状態が悪化してしまう。持つて後数分、一つぐらいの質問で息絶えるだろう。

最後の質問は決めてある。俺の行く末すら左右しかねない大事なことだ。

「最後に……使える武器はどこにありますか？」

彼の雰囲気が変わったのが分かる。高校生が武器のこと聞いたからか？

本当なら武器が欲しいなんてタイホものだ。今は法は関係無い。この東海林市で法を適用してたら、ただ死ぬだけだ。

そのことを彼も分かっているのだろう。決心した様子で答えを語りだした。

「署員の装備は分からない。使える奴があるかも……。だが確実性を求めるのなら押収品倉庫へ行った方が良さだろう。ついでにコレも……」

彼は手に持った拳銃を俺に差し出す。俺は何も言わずに受け取った。

後は押収品か……。本来なら真つ先に持ち出されるべき武器だが、持ち出す前に署員が死んでしまったのだから仕方が無い。

ミュータントに武器は効かないからな。工夫しないと死ぬのは当たり前だろう。

「ありがとうございます大宮さん」

感謝の辞を述べた時、彼の意識があつたのかは分からない。ただそれきり彼は動かなくなった。呼吸も無いみたいだ。

看取るのは気分が良いものではないな。……………当然か。俺は何も言わずに立ち上がり、静かに仮眠室を出た。

ということがあつた。結果的に彼の情報通り押収品倉庫には武器があつたわけだが。

鍵付きの棚を見ると、鍵が開錠されている。ここの武器もミュータント討伐に当てたのか……………。

とりあえず目測だけで、使えそうな武器は十ぐらいありそうだ。近くにあつたテーブルに資料みたいなものがある。俺はそれを手に取りサラッと読んでみた。

『東海林市警察正式装備の納品について』

先日、東海林市内で起こった大規模銃撃戦の際、多数の破損を確認されたS & W M 37を追加で三十丁納品致します。

弾薬の・38スペシャル弾については、ラインが整わない為、通常時より三割の低減を……………

途中で止めて資料をテーブルに放る。ふと目に付いた資料の日付は一ヶ月前だった。

一ヶ月前の大規模銃撃戦っていうと、何かヤバイ物の取引現場に

警察が介入して、海辺の倉庫街で銃撃戦が起きたってアレか。テレビでチラッとやっていた気がする。数日で放送されなくなっただが。

俺は大宮さんから貰った拳銃を見る。……………そうか、これがS & W M37か。

回転式弾倉の中を確認する。……………五発。弾薬は記述通りなら38スペシャル弾。

コイツの名前はS & W M37、リボルバー、装弾数五発、弾薬は38スペシャル弾。これがスペックだな。

「9mmパラベラムだったらUSPと兼用できるんだけど……」

弾薬は持ちすぎると邪魔なだけだしな。しかもリボルバーは自動拳銃マチックと違って装填リロードに時間が掛かる。S & W M37は非常用の単発銃だな。もしもの時ぐらいしか使わないだろう。

手に持ったバットとX-7とS & W M37をテーブルに置き、押収品の中から大きめのリュックサックを探す。武器を入れるためだ。

棚のプラスチックケースを引っくり返して、かなり大きめのリュックサックを発見する。少々血が付いているが許容範囲内だ。

リュックに問題が無いことを確認し、俺はS & W M37をリュックの脇のメッシュ袋に入れた。抜き易いようにグリップを上にして。

「後は弾薬、それに武器の選別をしなきゃな」

リュックを持ったまま鍵付きの棚の方へ歩く。丁寧に保管されているものから、使おうとしたのか無造作に置かれているものもある。

棚の引き出しを開けると、その武器に関する情報や使われた事件、経緯、担当官が丁寧に書かれていた。

引き出しの更に下の引き戸を開けると、押収された弾薬や小道具

が入っていた。

「マメだね警察」

俺は使えそうな武器を片っ端からリュックに詰めた。もちろん出し易いようにグリップは上だ。

入りきらない分は押収品の中のバックに詰める。弾薬も一緒に。何故か手榴弾とか火炎瓶とかあったけどついではコレも持って行く。

それらが終わる頃には数十分掛かっていた。疲労感も少し増してきたし。……だがこれで終わりじゃない。

とある棚からガンホルダー（足用）を取り出し、制服越しに右太股ももに装着する。そこにUSPを保持した。

リュックを背負い、カバンを持ち、X-7を肩に引っ掛け、金属バットを持つ。資料もついでにカバンに詰める。

「おk……完璧だ」

手榴弾を何個かポケットに入れてそう呟いた。正にグウウツレイトオ！

カバンは左手、バットは右手、リュックは背中、それらと制服脱いだら完全に兵士だな。傭兵か？

自重はこの際仕方が無い。後で楽するためだしな。

忘れ物が無いことを確認して、扉の鍵を開ける。そーっと顔を覗かせると辺りには誰も居ないようだ。

「行くか……」

音をたてないように扉を開けきり、身を廊下に出す。顔を覗かせた時には死角になった所にゾンビが数体居た。

今のこの状態じゃ相手には出来ないな。気付いてないようだし、スルー出来るか？

ゆっくりと階段方面へ向け歩き出す。途中で通らなければならぬ場所にゾンビが居るのがスリルを煽るが、気付かれたら死ぬと言わバッドエンドが俺の額に汗を垂らす。

落ち着け、焦ることは無い。いつも通りの隠密行動だ。何一つ変わりはない。ゾンビが片側に寄っているのが幸いだ。俺は空いている反対側の壁に沿ってゾンビの群れを突破することを試みた。

眼前数十センチまで近寄るゾンビが気持ち悪い風貌とか。今まで良く見てなかったゾンビが間近に居る。ようやく通り過ぎた時には尋常じゃない汗が背中に伝っていた。ベタベタで気持ち悪っ。一旦休憩して、落ち着いた頃に歩き出した際に事は起こった。

バットの先を壁にぶつけてしまったのだ。甲高い金属音が辺りに響く。

しまった……！時既に遅し。三体のゾンビが一斉に俺に向けて歩き出した。

どうする？とカバンを置いてポケットを探っていたら、一つの円形状の金属が出てきた。薬莢だ。

見た所VAB弾の薬莢みたいだ。東女の時にハーメルンをヘッドショットした時のアレか！

俺は一か八か薬莢をゾンビの向こう側に投げた。バットと同様、甲高い金属音を鳴らして薬莢が床に落ちる。

瞬間、ゾンビはピタッと動きを止めて振り返った。そして音がした方へ歩き出す。

成功したみたいだ。危ねええ〜。カバンを持ち直し、急いで階段を下りた。

一気に一階まで下りるのに成功した俺は、ゾンビが居ないことを視認して正面玄関を抜ける。が……………。

「マジかよ……………」

駐車場には小林邸とも東女の時とも違うミュータントが悠々と歩いていた。

俺、ミュータントと縁があるのかもな。泣けてきたわ!と、ミュータントが俺に気付いたようで俺に向かって走り出した。

「いいぜ……………!来いよ馬鹿野郎!ここで白黒ハッキリさせようじゃねえか!!!」

第29話 俺はアイツと縁がある（後書き）

いかがでしたでしょうか？

再戦のミュータント！軍配はどちらに上がる？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第30話 良いねえ、次はコイツだ（前書き）

お楽しみください

第30話 良いねえ、次はコイツだ

俺はミュータントの突進を右に回避した。

そのままの勢いで車^{バス}まで行き、屋根の上にカバンを放って金属バツトを立てかける。

X-7は使えない。別の奴を使わないと。背負ったリュックの中からショットガンを抜き放った。瞬時に資料で見た基本的性能が頭にインプットされる。

モスバークM500、ソードオフ（銃身を切り詰めた物）。装弾数は銃刀法に則って二発。ポンプアクション^{ショットガン}式散弾銃。

振り返って、突進してくるミュータントにぶちかます。弾薬は倉庫で装填済みだ。

ミュータントは走ってくる足を止め、例の如く怯^{ひる}む。イツァチヤーンズ！

俺は出来るだけ車^{バス}から離れるために警察署の本館に向けて走り出した。ついでにミュータントの後方からもう一発12ゲージを放つ。

「って、もうリロードか……」

弾薬ポーチの中から12ゲージ弾を二個取り出し、装填口に押し込んで先台^{フォアエンド}を往復させる。不便だね。

そうしている間にミュータントの怯みが解けてまたも突進してくる。それを回転しつつ左に避けて、右手で持ったモスバークの銃口をミュータントに押し当てた。ほぼ零距离。

照準^{サイト}を見ずにトリガーを引く。片手撃ちと言えど零距离なら外す筈も無く、当然の如くミュータントの行動を奪う。

ちよっと距離が離れた奴にもう一発お見舞いする。そしてモスバ

ーグをリュックにしまい、別の銃器を取り出した。

イズマツシユ・サイガ12。銃刀法で二発。セミオート式。箱型
マガジン 弾倉。12ゲージを使う。

手に取った銃器の基本スペックが無意識に頭に投影される。

次には銃声とともに12ゲージ弾が銃口から放たれていた。ミュータントに着弾するも動きを奪っただけだ。

ミュータントってどうやって倒せんか？時間を稼いでいるが解決策が出なかつたら死ぬだけだぞ？

とりあえず色々なことを試してみるしかないだろう。無駄撃ちをあまりしたくは無いが時間を稼ぎながら。

俺はもう一発の12ゲージをミュータントにぶち込み、サイガをリュックにしまった。

リュックの中から別の銃器を取り出す。

「次はコイツだ」

アロウズ・4。クローズド・ボルトの短機関銃。サブマシンガン 装弾数は27発。
・32ACP弾使用。

VZ61「スコープオン」には勝てないがこれもかなり小さいサブマシンガンだとか。弾薬はスコープオンと同じだ。

セミ・フルオートの切り替え可能だが、威力の低い・32ACP弾じゃ単射セミを使う者は少ない。大体が連射フル使用だ。

弾倉位置はスコープオンと同様。しかし直弾倉マガジンとなっている。

俺はA-4を構えてフルオート射撃でミュータントにばら撒いた。反動が予想以上に軽い。

威力は低いが数で牽制して一時的にミュータントの動きが止まる。全弾撃ち尽くしても尚、ミュータントが倒れることは無かった。

A-4をリュックに戻し、次の銃器を引つ張り出す。

「それならこれでどうだ」

レミントンM870。ポンプアクションショットガン散弾銃。装弾数は銃刀法で二発だが……。

こいつあ凄いぜ……弾薬を12ゲージ弾じゃなくて一粒弾にした仕様だからな。………残念ながら一粒弾がスラック一発しかなかったけど。最悪だ〜！泣けてきたー！

怒りというか嘆きのままにレミントンをミュータントに向ける。トリガーを引いた瞬間、何とも言えない反動が俺に降りかかってきた。

「のおっ！？意外と来るな〜」

スラック一粒弾はミュータントの右肩に直撃。流石にこれは効いたのか、出血しないものの肉が抉れた奴の右腕は動かなくなった。

キタコレ。チャンス到来。スラック一粒弾サマサマだな。リュックにレミントンを戻して、今度は肩に掛けたX-7を構えた。モードS。セミ。HUD起動。

ミュータントの右肩、傷口の辺りに照準を合わせて………引き金を引く。

傷口に命中した激痛からか、ミュータントは一際大きく呻いて片膝をついた。

「終わりだな」

瞬間的、刹那的に俺はミュータントの下へ走り、ポケットから手榴弾を取り出した。そのピンを抜き、奴の傷口に押し込む。

ミュータントは左腕で俺を払い除けるが、痛みので威力が無いーと言つても数メートルは吹っ飛ぶぐらいはあるーそれを、俺は前回同様両腕でガードした。ちなみに俺は数メートル吹っ飛ばされながらも何とか着地した。

「派手に爆死しろ」

辺りの空気を振動させるような爆発音と圧力の後にミュータントの体は爆発した。というより破裂した。

キタネ工花火だな。三回の遭遇でやっと倒せたぜ。俺はミュータントの残骸をみながらふと思う。

「アイツって痛覚あつたんだな」

しかも爆発（というより破裂）すんだな。初めて知った。……今初めて倒したから当然なんだけど。

ほんの少し痛む体で車^{バタン}へ戻る。音を出しまくってゾンビが集まってきたからだ。

屋根の上のカバンと立て掛けた金属バットを車内に放り込み、俺は運転席に乗る。疲れた体を無理矢理動かし、ゾンビで溢れる前に警察署を脱出した。この時は気付かなかったが、ミュータントを倒せたことに嬉しさを感じながら。

東海林市ホームセンター。

そこに陣取る集団が居た。男二人に女一人、後高校生ぐらいの少女が一人だ。しかもゾンビに囲まれている様子。

「ミナト！数ガ多過ギル！！撤退スルゾ！！」
「わかったランド！」

服装は普通に見えるが、都市迷彩とチエストリグ（弾倉や手榴弾を収めるポーチがいくつも付いたベストの様な物）が彼らを普通じやないと示していた。手には各々銃器を装備している。

「ミナト！先に撤退しなさい！」

金髪がかった長髪を揺らしながら、明らかに日本人ではない女性が叫ぶ。

ミナトと呼ばれた黒色の短髪の少女は無言で頷き、両手に持ったイングラム M10（カスタム）をゾンビに向けてトリガーを引いた。

穴が開いたゾンビの包囲網から、ミナトが走り抜けて脱出する。

「マーシャ！次ハ才前ガ行ケ！！」

「OK！クルス」

白人の男性が金髪の女性に促した。マーシャと呼ばれた女性も同様に穴から脱出する。

後には黒人のランドと白人のクルスが包囲に残った。二人とも背中合わせで冷や汗を垂らしている。

「ランド……………ドウスル？」

「クルス、スツカリ日本語二慣レタ様ダナ」

「才前モナ」

カタコトながらそんな事を日本語で言い合っていた。二人に迫るゾンビは段々と数を増していく。

あと少しで噛まれる、と言う所で、遠方からミナトという少女の
声が響いてきた。

「二人とも伏せて！」

反射的にランドとクルスは身を屈める。瞬間、
物凄い爆発音と共に前方のゾンビが弾け飛んだ。垣根に穴が開く。

「相変ワラズ無茶ヤルナ！ミナト！！」

“チャーリーキラー” ナンテ使ウカ？普通」

何て言いながらも、ちゃっかり二人は脱出する。視線の先には、
どこで手に入れたのか軍用車両ハングライダーがあつた。

その運転席にマーシャ、車体近くにミナトがグレネードランチ
ヤーを持って立っていた。マーシャを除く三人は何も言わずに、た
だ拳を合わせる。

「流石ダナ、ミナト」

「当然、誰だと思っているの？」

軽く笑いあつた後に、三人はハングライダーに乗り込んだ。

第30話 良いねえ、次はコイツだ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

アロウズ - 4 はオリジナルです。

撃破するミュータント！謎の集団の正体とは？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第31話 運命の歯車は回りだす。……格好は付けてないよ(前書き)

おはにちは、らいなあです！

ついに総合評価が100になりました！処女作ぶりです！

これもひとえに読者様のおかげです！

では、お楽しみください

第31話 運命の歯車は回りだす。……格好は付けてないよ

次の目的地、ホームセンターに辿り着いた時、俺は異変を感じ取った。

「何だ？あれ？」

駐車場に車を止めると、その非常さを理解できた。

大量のゾンビの死体（既に死んでるけど）と弾丸の薬莖があったのだ。更に目を引くのは中心辺り、小さいながらもコンクリートが捲れて、クレーターみたいになっていた。

「戦争でもあったのか？」

正しくそんな感じだ。ゾンビの相手は軍兵だったのか？

クレーターから見て、使ったのは銃器と爆発物、ロケットランチャー程じゃないだろうけど手榴弾か？

活動しているゾンビは居ないが、ここじゃあゾンビだって転びまくる。その位ゾンビの死体（もう死んだる）があった。

「まあそれより……」

答えが出ない詮索を止め、駐車場を見渡す。その限りでは、軍用車両は無いようだ。でも、

「ちっ、ゾンビが集まってきやがった」

あまり大きくない駐車場に、段々とゾンビが集まってきやがった。俺は押収品装備のアーチェリーを構えてゾンビへ向ける。あらか

じめ持ってきたサイレントキル用装備だ。

以前のやり方を思い出し、試しに一発放ってみる。それは狙った所から下に十センチ位外れてしまった。

「重さで下にずれたか？もう少し重心を上を保って放てば行けるか？」

冷静に自己分析して改善点を直す。今度は狙いから上に向けて放った。アー直撃。

狙った場所から二、三センチ外れたが、許容範囲だ。矢が頭に命中したゾンビは、うめき声を上げずに前のめりに倒れた。

「ふむ、コツは掴んだ」

次の矢を番^{つが}えてゾンビの頭を狙い、一息にアー放つ。三度目の正直とばりに、それは狙った場所に直撃した。先手の手順を繰り返し、もう二体ゾンビを屠^{ほぶ}った。

「さて、用は無いい撤収〜」

次矢を番えず、余裕綽々で車^{バツ}に戻る。エンジンは掛けっぱなしなので、サイドブレーキを倒し、アクセルを踏んで問題無く駐車場を出れた。まだ運転が危なっかしいのはしょうがない事だ。

次の目的地はアーショッピングモール。次の、というか、最後の、が正しい。俺は他に思いつかなかっただけだが。

脱出地点は山を越えるトンネル（国道ルート）なんだが、そこまで行くのに、速くて二日は掛かる。体を休める最適な場所は、後、ショッピングモール位しか無いのだ。

「みんなは何処いすこに？」

ここまでやって出会わないなんて……早織か？
その予想は当たらずとも遠からずだったと言うことを、後々実感したのは今言うことではない。

「くしゅっ……！」

「どうしたの早織ちゃん？湯中ゆあたり？」

「………かもしれないわ」

別場所、とある一軒家。

可愛らしいクシヤミとは裏腹に、目を鋭くさせる少女、
小林早織である。

彼女はソファに腰掛け、かなり高性能スペックのノートパソコンを弄いじっていた。

その服装はピンクのTシャツと真っ白の短パンという、いかにも寝巻きの様な格好だった。

「前原先生は随分際どい寝巻きね」
「そう？」

前原先生……言わずもがな、前原美鈴まえはらみすずだ。

彼女の服装は早織の指摘通り、かなり危ない。と言っても、普段の寝巻きとは比べ物にならないが。

普通の水色パジャマなのだが、胸元がガッツリ空いているぐらいだ。

そんな美鈴は風呂上りなのか、バスタオルを頭に乗っけていた。

「先生、一応家には男性も居るんですよ？」

「冬紀君はノーカン」

黒長髪の白いYシャツを着た少女、結城サクラは、苦笑気味の笑みを洩らす。

でもなあ。と、赤髪の少女――緋達理奈は笑った。

「サクラん家が近くで良かったな！」

その場に居た全員が肯定の雰囲気流していた。

そう、ここは結城サクラの家。早織がサクラに提案したのだ。

場に居る四人の雰囲気はとても微笑ましい。だが、その奥底には暗い影が落とされている様だ。

皆、その事を分かっているのか、誰一人としてその事を口にしない。故に不自然さが滲み出ている。

しかし、その事に終止符を打つ様に、早織が唐突に話題を変えた。

「大丈夫かしらね、彼」

瞬間、早織を除く三人の動きが凍り付く。

後に残るは痛い程の静寂。それを破るのは誰でもない、サクラだった。

「大丈夫。きっと」

その自信はどこから来るのか。優雅に微笑んだ彼女は、何故か、そう断言した。

それに続く様に、二人も頷く。瞳には信頼、それともう一つ宿っ

ていた。本人たちすら分からない感情が。

「そう……」

早織は母と同様の表情を浮かべ、ノートパソコンに目を落とす。彼女とて嫌味でこの話題を出した訳ではない。覚悟と信頼を見る為だ。それを見て何を思ったのかは、早織にしか分からないが。

「（早く戻って来なさい。良祐）」

「っ……！な、何だ？」

強い寒気が俺を襲う。誰かが悪口でも言ってるのだろうか？

車を走らせてんだから不吉な事は願わないでくれよ……。そう願わずには居られなかった。

「まあ良いけど。それより、ここってどこだ？」

車を止め、地図を確認する。地図上では、ここは空き地――だが、

「工事現場っぽいな」

ビルの工事現場のようだ。まだ鉄骨とコンクリートしかない、造り掛けの。

そろそろ落ちそうな陽が、無骨なビルを怪しげに影させる。ゾンビは居ないがホラーだ。

「あれは？」

そのビルが一番上、鉄骨の上に、白い少女が見えた。生存者だろうか？

俺は確認する為にも装備を整える。USPにS&W M37、それとアーチエリーを持って行こう。

各弾薬と矢を携えて、エンジンを切り、車外へ出る。鍵を掛けるのを忘れない。

「はあ、俺は何やってるんだ？」

危険もあるだろうに。と、追加で呟いた。生存者を助けにでも行くのか？

でもまあ、ただ言える事は、

「行かなきゃならない気がした」

だな。どんな中二病だよ。

そんな事を言いながら、俺は無骨なビルへ向け、足を動かした。

「ふふっ、来た来た」

ビルが一番上の鉄骨、そこに立つ白い少女は嬉しそうに微笑む。

その笑顔は、引き込まれそうな程、美しかった。とても見た目から出せる笑顔ではない。

少女は身を翻し、歩き出す。少女の足取りは何故か不自然だった。

「やっと会える。良祐に……」

刹那、少女の姿は掻き消える。

後には、静寂と地面一杯の鮮血が残されていた。

第31話 運命の歯車は回りだす。……格好は付けてないよ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

最近、文字数が三千ぐらっぱっかりです。ギリギリなんですよ。

混沌の世界！少女と出会う時、何が起ころ？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第32話 俺はロリコンでも変態でもない。更に紳士でもない(前書き)

お楽しみください

第32話 俺はロリコンでも変態でもない。更に紳士でもない

ビルの構造は5階建てのようだ。階段は不完全で、まだ出来てない所が多数ある。

一面コンクリートだが、所々鉄骨も見えたりするのが危ない気がする。崩れたりしねえよな？

「ゾンビが居ないのが唯一の救い……か」

油断無くアーチェリーを構えながら、とりあえず造り掛けの階段の前まで来た。

踊り場まで階段が無い。高さは2メートルちょっとか？でも、これ位なら行けるかもしれない。

辺りにゾンビが居ないことを確認して、アーチェリーを踊り場に放り投げる。それから、急いで踊り場に向けてジャンプした。

踊り場の縁に両手を掛けて、腕の力だけで体を上に持っていく。これが地味にキツイ。

体を振り、左足を踊り場に掛けられた。そのまま、腕と足で体を踊り場に乘せる。ようやくと、階段を上がることに成功した。

「俺、万年皆勤賞の帰宅部だぞ……？」

寝転んだまま、弱音の一つでも言いたくなってしまう。しょうがないことだ。

しかしまあ、そのままというのは流石にマズイので、早々にアーチェリーを持ち、立ち上がった。

「これ、続けなきゃならねえのか？」

という不安は杞憂きゆうに終わる。次階の階段は造り掛けではあったが、作業員用の足場があったのだ。

どうやらこのビルは1階から5階まで直通のようで、作業員用の足場で、難無く一番上の5階まで来れた。

5階は無骨さを極めた位、何も無い場所だった。分かりやすく言うなら、一面のコンクリート、以上である。

しかも、ここからは異常な雰囲気ふんいきが漂っている。それは、ただの高校生でも分かるような、とても、

「気味の悪い空気……」

だった。感じるだけで逃げ出したくなるような。

俺はアーチエリーを背中せなかで保持し、レッグホルスター（と資料に記述してあった）からUSPを抜く。

屋内では近接武器の方が有利なんだが、生憎あいにく今は無い。ならばせめて、アーチエリーよりかは使いやすいUSPで戦うことを、俺は選んだのだ。

「初日ゾンビ、2日目ハーメルン、3日目ミュータント、まさかまた新しい奴出ねえよな？」

まさかだ。そんな調子で新種のゾンビと遭遇していったら、1年経った時が怖いわ。356種、覚えきれねえよ。

実際には、俺は1日寝てたから、355種だ。大して変わらねえ
I。

心を保つ為にそんな事を思いつつ、ゆっくりと足を進める。USPを両手で構えて、前方に向けた。

広い空間では全方向へ警戒を向け、壁際では物陰を注意しながら、5階の探索を開始する。

ゾンビは（当然）居らず、居る可能性が高いのは、ミュータントと新種と生存者だ。可能性を全て考慮し、気を緩めず進んでいく。

と、

「ん？」

とある壁際、その床に、少し　かなり汚い布切れが落ちていた。

「何だこれ？」

しゃがんで布切れを拾い上げると、なんとも言えない臭いが漂ってきた。……洗濯してねえな。

うおっ、気持ち悪くなってきた。イラネイラネ、ポイツ。

俺は即行で布切れを捨てた。

『人の服を捨てるなんて酷いわ』
「誰だ!？」

辺り一带に響くように聞こえたその声に、俺は瞬間的に後ろへU SPを向ける。

しかし、そこには誰も居なかった。幽霊？んなわけねえか。

「どこ見てるの?」

「コンクリート」

やべえ、冷や汗が止まらねえ。真後ろから聞こえる声は間違いなくやべえ。

反射的にボケ(?)で回答したが、少女の声したコイツは只者じ

やない。

このゾンビ発生の状況下で、少しばかり五感が鋭くなった俺に、足音無く、気配無く、触れられる距離に移動してきやがった。

現に俺の背中に手？を触れている。な、何だ？後ろに振り向けない。

大量の汗が頬を伝って地面に落ちる。後ろの少女？は、ひよつとしたら 人間じゃ無いんじゃないか？

「ねえ、どうして、振り向か、ないの……？」

「あ……！う……！」

一区切り一区切りする少女の声が、余計に俺の恐怖を煽る。

が、俺は無意識に恐怖に抗う。そして、ゆっくりと、機械の様な動きで、視線を後ろへ向けた。

「女の子……？」

「あら？声で分からなかった？」

そこには、肌も髪も真っ白な、裸の少女が佇んでいた。

……… ちよつと待て。このネタはZ指定モノじゃないのか？

「そう直視しないでくれる？」

「す、すまん……」

少女は見事なぐらいに何も着ていなかった。 下着すらだ。

俺はこうゆうのには何て事無いが、青少年だったら鼻血ものだろう（俺の場合は相手が少女というのも要因の一つではある）。

とりあえず視線を逸らしておく。流石にガン見出来る程勇者じゃない。

「というか服を着ろ」

直視するなと言うから服を着るのかと思ったが、少女は一向に服を着ようとしなない。

「こつちの方が喜ぶと思って」

「俺を変態みたいに言うな!!!」

残念ながら俺にロリ属性は無い。確かクラスメイトの田下が、「俺は幼女が大好きだ!! 幼女愛してるうううう!!」とか大絶叫して、数人の先生に連れてかれた事があったが、俺の知る所ではない。ちなみに俺はどつちかって言うと、年上好きだ。

すまない。脱線してしまった。

少女は渋々と俺が捨てた布切れを拾うと、それを身に巻きつけた。

俺はどう反応すればいいんだ？

「服は？」

「これ」

即答された。俺は、溜息一つでそれを了承した。それから少女に、

「他の生存者は？」

と問いかけると、

「いないわ。私だけ」

と返答してくれた。

そこまで言った少女は、もう何も言わない、とばかりに口を閉ざ

してしまう。

やれやれ、質問は無しか。しょうがない、じっくりと聞き出そう。
その前に。

「名前は？」

「……………アルテミス」

ギリシア神話の狩猟の女神の名前だ。あと月の神でもあるとか。
神の名を冠する少女とはな。偽名は当然だろうが……。この少女
は色々ありそうだ。

「わかったどう呼べばいい？」

「何でもいい」

「じゃあアーティだ」

今は分かった振りだけでもしておこう。後々聞き出すしかあるま
い。

この見た目小学生の少女が、歳に合わない雰囲気を出してるのも
気になるしな。

「俺は……………」

「前原良祐でしょ？」

「どうして知っている？」

名乗ろうとしていた俺の言葉を遮り、アーティは俺の名前を的確
に言い放つ。

そして俺の問いには欠片も反応を示さずに、そのまま歩き出して
しまった。

「おい、一人だと危ないぞ」

「心配してくれるの？」

「そりゃあ……な」

アーティは振り返って、歳相応の笑顔を浮かべる。不覚にも萌えてしまった。

俺は右手に持ちっぱなしだったUSPをレッグホルスターに戻し、背中からアーチェリーを抜く。

「それじゃあ行こう良祐」

「命令するな」

何故かとても嬉しそうなアーティが前を歩き、俺が後ろを歩くと言う不可解な構図になってしまった。

ちなみにその時の俺には恐怖は微塵も無かった。ただ、アーティの不思議さが先行していただけかもしれないが。

第32話 俺はロリコンでも変態でもない。更に紳士でもない（後書き）

いかがでしたでしょうか？

駄目ですね。暑さで頭が回りません。

少女との邂逅！それがもたらす未来とは？

それでは次回会いましょう！御意見御感想をお待ちしています！

第33話 こっちの手の内は揃った。次はお前が晒す番だ（前書き）

お楽しみください

第33話 こっちの手の内は揃った。次はお前が晒す番だ

外に出て先ず出迎えてくれたのは、大量のゾンビだった。

「マジか……」

「ひい、ふう、みい、……………30ぐらい？」

アーティ、落ち着きすぎ。もうちょい慌ててもいいんでねえの？
まあ、別に良いんだけどね。

ただ、ゾンビが何故か俺たちを認識しているのには首を傾げる。
俺たちは音を出してないのに。

「交戦は避けられないか……」

アーチェリーでは分が悪い。ここはUSPだな。

レグホルスターからUSPを抜き、こっちに向かってくるゾン
ビ2体をヘッドショットする。

「アーティ、ちゃんと付いて来るんだぞ？」

「子供に言い聞かせる様に言わなくても分かっているわ」

見た目小学生がそれを言いますか。

とまあ、こんな感じに雑談している時間も、どんどん無くなって
いつているわけだが。

「先手必勝。車まで行けば俺の勝ちだ」

とは言っても、目標は対するゾンビの向こう側。こっちに近
接武器は無し。遠距離は火力が少ない。≡絶体絶命だ。火力が弱い

この銃器ハンドガンで、映画版バイオハイド4のようなアクションをしなければならぬとは……。まあ、それより悪いけど。援護ねえし。

ともかくやるしか無いだろう。時間は無い。

手薄な右側の垣根に向けて走り出す。両手構えのUSPで三発撃つが、1体を屠るに止まってしまった。

「やっぱまだこんなもんか……！」

静止状態ならともかく　という喧きは銃声にかき消された。俺はUSPを撃つて無いぞ!?

途中で足を止め、銃声があった　ゾンビの向こう側へ視線を向けた。

「大丈夫!?少年!!」

視線の先には軍用車両と、その周りに3人の男女が居た。全員、ハンダー視線の先には軍用車両と、その周りに3人の男女が居た。全員、チェストリグ弾倉等を収めるベストを着て、手には何かしらの銃器を持っている。はた傍から見れば、怪しい集団だ。

その集団の中でも異彩を放つ、俺と歳があまり変わらないであろう少女が居た。声を出したのは彼女だろう。少女は最前線で、サブマ短機関銃シンガンを両手にゾンビを蹴散らしている。

「あ、ああ……」

異様な光景に、そして圧倒的な戦力に、俺は思わず息を呑んだ。そんな俺に、アーティはニヤニヤとした表情で笑いかけた。

「良祐、怖気づいた?」

「今、タイミング違くないか?」

それはさっき言う言葉だろう。何故、今言った？
ツツコミを軽くスルーされ、しかもアーティは何を思ったのか、
ゾンビに向かって歩き出していく。

「危ないぞ！」

「平気平気」

俺の制止も聞かずに、アーティはゾンビの中へ姿を消してしまっ
た。

死んだか？　そう思う前に、ゾンビの垣根の中で踊る白い少女
を見る。

アーティだ。

彼女は、噛み付こうと両腕を伸ばすゾンビたちを物ともせず、ま
るで踊る様にひよひよひよい避けていた。

「アイツ本当に人間か？」

そして、俺と同様に呆然としている銃器集団の所まで、難無く辿
り着いた。

最早、俺が足手まといのような感じになっているじゃないか。

「早くシロ！」

少女の集団の黒人の男性が、俺を促すように叫んだ。

アーティの様には行ける筈も無く、俺は手薄な所をそのまま走る。
途中、向かってくるゾンビ2体を、1体はUSPのヘッドショットで、もう1体はアーチェリーの矢で眼球を刺すことで切り抜けた。

「ちい！」

アーチェリーの矢を捨て、一目散に走り抜ける。と同時に、銃器
持ちの少女が何かを投げるのが見えた。 グレネード
手榴弾だ。

その形状はリングゴの様に見える。前に何かで見たが、確か別名と
してアップルとかいう名前を付けられた奴……。

思い出した。正式名称、M67破片手榴弾。

爆破地点から数メートル、数10メートルに亘わたって、生成破片を
撒き散らす殺傷武器。それが破片手榴弾。フラググレネードそれに硬質鉄線フラスを追加
たのがM67破片手榴弾だ。爆破はレバーが離れて 5秒。もう
既に2秒が経っている。

「間に合え……！」

俺は急加速と同時に、最適な物影へ向け走った。残り時間すら忘
れたまま、コンクリートの塀の向こうに身を隠した瞬間、爆音と共
に空気を揺るがす振動が発生、破片が容赦無く猛威を振るった。

「普通やるか？破片手榴弾なんて……」
フラググレネード

精々、閃光手榴弾せんこうか焼夷手榴弾しょういだろうが。……………それも危ない
な。

落ち着いた所でゾンビどもを見ると、爆発で死んだ奴が中心辺り
に居た。その体は撒き散らされた破片でバラバラ、ぐちよぐちよ。
その中心辺りから距離をおいていく毎に、被害は治まっていくもの
の、ゾンビの半分ぐらいは破片で動かなくなっていた。

「俺は地獄を見た」

今までにも何度も見ているだろうが。というツッコミを胸にしま

い、俺はアーティたちの下に走っていった。

ゾンビの垣根を越えた俺とアーティは、謎の集団の助力と、俺の頑張りによって、ゾンビの群れを壊滅させた。 まあ、数は両手ほどしか居なかったけど。

それから集まりだしたゾンビから逃げるために、とりあえず車を走らせ、今は大手家電量販店の立体駐車場に車を忍ばせていた。

「どなたか知りませんが、助力感謝します」
「困った時はお互い様でしょ？」

車の近辺で、まだ言ってなかった感謝を述べる。それに、集団の中の一番若い少女が反応を返した。無言で差し伸べられた右手が、交流の証とばかりに、俺の脳内で一瞬の戸惑いを生んでしまう。ただ、ここで渋つても心証が悪くなるだけだし、何も言わずに差し出された右手を握った。握手だ。

「俺は前原良祐。16、高2です。自由に呼んでください」

ここは助けられた俺が先に名乗るべきだろう。 と、俺の名前を聞いた瞬間、未だ握られた右手に多少の変化が見られた。本当に多少だったので、一瞬見逃しそうになったが。それでも少女は、何事も無かったかのように元に戻ってしまった。

「オレは篠書湊（なごがきみなと）。18の高3だからタメ口で良いよ。湊とでも呼んでくれ」

初めて見たぜ、女性が自分の事をオレって。本当に居るんだな。ていうか先輩だったのか。

湊を良く見ると、黒髪を俺と同じくらい短く切り、人懐っこそうな栗色の瞳を携えて、まるで男のようだが、目元や鼻や口が女性特有のラインで整われていた。美少女と言っても過言では無い。いわゆる、守るより守られたいタイプだ。

ミナト嬢はようやく手を放すと、自分の仲間をパーティ紹介してくれた。

「この真っ黒いのがランド」

真っ黒いの呼びわりされたランドさんは、黒い肌に坊主頭、それらだと優しそうな親戚のおじさんなんだが、目元を跨ぐ様に出た大きな傷が目立ち、190を超える巨体が圧巻の雰囲気をもし出していた　　が、

「ヨロシクナ」。ジャパニーズボーイ」

めっちゃ軽っ！？優しげ！？もう本当に親戚のおじさんじゃん！？ランドさんとは友達になれるかもしれない。

「次に白いのがクルス」

「君ノ“バトルセンス” 八良イネ！今後トモヨロシク！」

白いの呼びわりされたクルスさんは、とても俺を評価してくれているようだ。その金髪をオールバックにした髪形に、青色の瞳、イケメンと言っても差し支えない。そんな彼はニコニコしながら握手してきた。　　が、

「ミナトニ手ヲ出シタラ……」

耳元で小さく囁いて行きやがった！？脅迫！？
クルスさんとは一線を画しとこう。命が無くなりかねない。

「それで最後にマーシャ」

最後に紹介されたマーシャさんは、金髪の長髪を後ろで纏めたポニーテールで、モデルかのような容姿に、栗色の瞳がマッチしていた。歳はクルスさんと同じぐらいの20歳前半か？

「ヨロシク。仲良くしてね（特にミナトと）」

最後の方は聞き取れなかった。何て言ったんだ？

しかし、それを考えるのを止め、こっちの紹介してない人物を俺の後ろから引つ張り出す。

「この子はアルテミスだそうです」

どうやらアーティは恥ずかしいのか、俯いたまま視線を上げようとしない。

そして俺の後ろにまた隠れてしまった。はあ、しょうがないな。

湊はそんなアーティを見て、俺に、

「良、その子の格好って貴方の趣味？」

「……………違う。アーティとはさっき会ったばかりだ」

最初は分からなかったが、どうやらボロ布一枚体に巻いただけのアーティの姿を、俺がそうしたと勘違いしている事によろやく気付き、それを補足含めて訂正する。

「ふん」

「俺からも聞きたい事がある」
「何？」

俺はそれよりも、少女たちの武装について興味があった。良くは分からないが、使っている武器のほとんどがそうそう手に入らない銃器だったからだ。日本に密輸入されている武器でも無いし（多分）、数も異常。弾薬に銃刀法が適用されてない上、軍用装備まで持っている。更には洩れなく全員が戦い慣れし、戦場帰りの兵士の様な風格を伴っている。　　湊もだ。

「アンタたちは、何者？」

その問いに、湊は結構ある胸を張って答えた。　　馴染みの無い答えを。

「オレたちは“民間軍事会社ヴァンガード”^{P.M.C}『特殊任務実行部隊』^{セカンドオルフェウス}。その第一種特装执行官で構成された、第一種精鋭集団だ」^{マスターズフォース}」

第33話 こっちの手の内は揃った。次はお前が晒す番だ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

専門用語がビッシリ。頭が痛くなりそうです。

ちなみに手榴弾とかはもちろんんウイキ調べです。

新たな邂逅！出会った集団は民間軍事会社PMCの特殊部隊員？

それでは次回！御意見御感想をお待ちしています！

第34話 説明ばっかでアレだな……って、へ？（前書き）

おはにちは！らいなあです！

小説書き終わった後に絵を描くんですが、先日一番出来の良い絵が出来て。

即行でみてみんなに投稿しました。ちなみにみてみんなの僕のネームもらいなあです。

上手くないんですけどね。どなたか彼を描いて頂けないでしょうか？らいなあで待ってます。（常時受付中）

第34話 説明ばつかでアレだな……って、へ？

湊みなとの話だと、民間軍事会社ヴァンガードとは基本的なPMCと同じ、軍隊や特定の武装勢力・組織・国に対して武装した戦闘員を派遣しての警備・戦闘業務、さらに兵站・整備・訓練などを業務として行っているらしい。

その中でも『特殊任務実行部隊』と呼ばれる部隊は、通常行うはずが無い依頼や任務を請け負い、秘密裏に完遂するエリート部隊だそう。表舞台には決して出ない、任務遂行のプロフェッショナル。

そして第一種特装執行官マスターとは、第三種までである階級の最高位。ヴァンガードの社員の約一割程度しかこの階級を持っていないらしい。第一種特装執行官の特権として、申請した銃器の全面許可・専属の銃工・非常時総指揮権等がある。そんな精鋭で結成されたエリート中のエリート。それが第一種精鋭集団マスターズフォース。全2チームしか存在しないらしい。

「その傭兵さんが東海林市に何の用だ？」

話を聞き終えた俺は、興味半分、疑心半分で問いかける。

表舞台に出ないって言ってる割には、あっさりバラしてるし。

湊はまたも結構ある胸を張った。

「とあるサンプルの護衛、及びその奪取だ」

「……………はあ？」

直訳すると守った物を奪えって事だろ？本末転倒（使い方あってたっけ？）じゃねえか。

聞いた話によると、『セカンドオルフェウス特殊任務実行部隊』にはそういう事も少なからずあるらしい。とある組織から“ある物を守れ”という依頼と同時に、別組織から“同じ物を奪え”という依頼が舞い込むという事例が。

基本的にヴァンガードは、引き受けた依頼を遂行するまで仲間、終わったらただの他人という姿勢をとっているので、依頼が終わった時点で敵になる事もしばしば。どこかに専属している訳でも無いから問題無いらしい。……………そのせいで敵が多いのは言うまでも無い。

「金払いが良い方に付く。傭兵の鉄則だ」

とは湊の談だ。“守れ”と依頼してきた組織が、“奪え”と依頼してきた組織より多額の金を積めば、後者の依頼を阻止する事も可能とか。複雑なんだね、傭兵の世界って。ぶっちゃけ面倒メンくさつ。短時間で結構な量の情報を取得したから、頭が痛くなってきた。ふと町の方へ視線を向けると、もう夕暮れ　しかも末期だ。

「湊たちはこれからどうするんだ？」

他の三人よりは幾分か話し易い湊に問いかけた。彼女は自チームで少し話し合うと、

「この家電量販店で一夜を明かして、任務に戻るだそうだ」

と結論付けたようだ。俺とアーティも寢床を確保しないといけな
いから、

「途中まで一緒しても？」

湊たちに聞く。程無くして、

「良いよ」

と、めっさ軽く了承された。軽っ!?めっさ軽っ!?

ただこれでマシにはなった。俺とアーティで過ごすよりはよっぽど安全だ。

危険かもしれないが。

まあ、この際しょうがない。やるしか無いだろう。それに湊たちの任務であるサンプルというのが気になる。……………まさかな。

「先ズハ安全ナ場所ノ確保ト食料モ必要ダ」

ランドさんのカタコト日本語に、さっきまで考えていた思考をシヤットアウトされる。

とりあえず頷き、傭兵集団が歩いていくのを見届けていた俺に、アーティが口を開いた。

「良祐、私あの人たち嫌いだわ」

その様子は先程の人見知りとは打って変わり、元のように戻っている。さっきのは演技かよ。食えないねえ。

「誰にだって好き嫌いはあるものだ」

そう言った俺は釈然としない感情を抱いていた。

それから湊やランドさん達に色々な事を教えてもらった。

ランドさん達が日本語を知っているのは湊がいるからだとか、チームを組んで三年になるとか、湊が何でこの仕事をやっているのかとか。逆に俺たちの事も聞かれたから教えた。俺は仲間が居たけど、はぐれてしまったとか、銃器を持っているのは警察署で調達したからとか、今まで三種のゾンビに遭遇したとか。アーティは何も話してくれなかったが。

彼女らの話は結構面白かった。俺も将来はヴァンガードに就職しようかな。……………冗談だ。

ついでに基本的な銃器の扱いを教えてもらった。流石に撃てはしないから不便もあつたが、中々に有意義な時間だ。これで少しは戦力アップに繋がればいいが……。

ちなみに今は夜も深まった頃、家電量販店の事務室に居た。

ランド、クルス、マーシャさんは周辺警戒と見張りで店内を索敵している。今居るのは俺、湊、アーティだ。

「疲れた〜」

「だらしないな、男の子だろ？」

パイプイスに座って伸びをする俺に、同じくパイプイスに座る湊は容赦無い言葉を浴びせてきた。

それに俺は反論したかったが、湊の職業を考えると簡単に言い返されそうだ。止めておこう。

「男装かもよ？」

「ふふっ、面白いジョーク」

頬杖付いて笑う湊は、歳相応の可愛らしい笑顔で、ついつい視線を逸らす。か、かわいい。

はっ!?!?しまった!?!?今のは俺的に言えば、はうう、きゃわい
い、おっ持ち帰りい、
と言っべきだったんじゃないか!?!?

「良祐、それは気持ち悪い」

「アーティ!?!?真剣トーン!?!?!?!?」

すんげえ冷たく斬り付けられた。何で考えてる事が分かったんだ
?幼女のクセに生意気だぞ!

「良祐、とても、気持ちが悪く、悪い」

「区切り区切り言うな。そんなこと、とっくのとうに分かっている」

言っつてすんげえ悲しくなった。しかも小学生に虐められる高校生
っつて……。

話題を変える(傷心を癒すため)為、湊にさっきの事でも聞いて
みよう。

「そっぴや湊。さっき握手した時、なんか気になる事でもあったの
か?」

「えっ?」

湊は何の事か分からないのか、素で首を傾げている。

「正確には俺が名乗った後、ちよつと変だった」

「あ、ああ……!」

湊には焦りが見える。と言っつてもほんの少しだが。

ゾンビ発生以前の俺だったら、全く気付かなかった違いにも今だ

つたら分かる。不思議だね。

「それは……ね」

今度は明らか。何なんだ？

無表情のアーティも待つているように口を閉じている。

そしてしばらく経った後、湊は意を決した様子で口を開いた。それは予想だにしない言葉。

「“前原”は今回の任務の依頼人なの」

第34話 説明ばつかでアレだな……っで、へ？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

良い感じに深みに嵌まって行ってますねえ。

真実解明の日は近いのか？楽しみです。（作者ですけど）

クライアント依頼人は前原！それが示すは？

御意見御感想をお待ちしています！

第35話 地下シエルトター？何でそんな物があるんだ？（前書き）

お楽しみください

第35話 地下シエルター？何でそんな物があるんだ？

「前原」は今回の任務の依頼人なの」

「……………で？」

「で？と言われても…………（もう少し驚くと思ったんだけど）」

そんなことを言われても「だから？」と言う話である。

この世界に前原姓がどのくらい居ると思っっているんだ？ただ同姓なだけかもしれないだろうが。同姓だとしてもこのタイミングは不自然だな。

「大体、前原だけじゃ何とも言えないだろうが。フルネームが同じで、住所が同じならともかく」

「良祐、とても苦しい」

「あ、ごめんごめん」

無意識の内に近くに居たアーティにチョークスリーパーホールド掛けてた。全く気付かなかったぞ。

「そんな焦っても仕方が無い。落ち着く」

湊の前だからか、とてつもなく変な喋り方のアーティがそう指摘してきた。

えっ？俺、焦ってた？ふと手の平を見ると、尋常じゃない汗が吹き出ている。

俺は現実から逃避していたのだ。前原の名前を聞いた瞬間に分かってしまったから。

「フルネームは…………」

厳しい表情で俺を見る湊は、追い討ちを掛けるかのごとく言い放った。

「まえは前原良太郎」
「つ……！」

間違いない。親父の名前だ。的中してしまった。

もちろん同姓同名の可能性も捨てきれないが、鬱陶しい位に頭がそれは違つと訴えているようだった。それはきつと、香澄さんの「前原良祐という男が鍵を握っている」という言葉のせいだろう。んで次は親父か。どういう事だよ！まったく！

湊は何も言わずに俺を見ていた。その瞳には困惑の表情が見て取れる。彼女自身、依頼人クライアントの名前ぐらいしか聞かされてなかったのだろう。仕事現場でゾンビが発生して、そして依頼人クライアントの関係者と出会うなんて思っても見なかっただろうしな。

「この話は止めよう。これ以上進展もしなさそうだし」

湊は力無く首肯する。アーティだけが、何かを感じ取っていた。

翌日、8月6日。午前7時24分。

家電量販店で一夜を明かした俺たちは、湊たちの軍用車両ハンヴェーと俺の乗用車バスンでビル街を走っていた。

ハンヴェーにランド、クルス、マーシャさん。バスンに俺とアーティと湊という乗り合わせだ。湊は俺とアーティの護衛とか。

次の目的地は地下シェルター。湊たちの目的地なんだが、シヨッピングモールの途中にあるから俺たちも同行させて貰っている。直前に聞かされるまで、俺はその存在すら知らなかった場所だ。

地下シェルターとは言うが、名ばかりの、実際は違う目的で作られた場所らしい。ちなみに湊に、何で関係ない俺にそこまで教えてくれるのか聞いてみたが教えてくれなかった。よう分からん。

「何でその……地下シェルターとやらに行くんだ？」

助手席に座った湊に問いかける。地図を見ながら四苦八苦していた湊の代わりに、（湊が持っていた）通信機越しにマーシャさんが返答してくれた。

『地下シェルターと言っても実際は研究所みたいなものよ。そこにターゲットのサンプルがあるらしいの』

外人組で唯一、日本語をペラペラ喋れるマーシャさんは、そう回答した。

どうやら、シェルターは市民を収容するモノじゃなく、研究所を存続させる為のモノだったようだ。

『マア、多分誰も居ナイダロウケドナ』

と言ったのはランドさんだろう。まだ聞き分けられない。

クルスさんは銃器のメンテしているのか、カチャカチャいうだけで何も言葉を発さない。

言葉を発さないと言えばアーティもだ。日付が変わってから一言も話さなくなつた。後部座席に乗る今も、何にも言わない。

「（あの子はどうしたの？）」「
」（さあ？分からない）」

心配した湊が小声で聞いてくるが、俺にもさっぱり分からない。

やっぱりアーティは不思議だ。服を着たがらないし。

そんな中、先導するハンヴェーが右に曲がったので、俺も同様に右に曲がる。

『ソロソロ着クゾ』

ランドさんの言葉の通り、辺りの雰囲気が変わっていくのが分かる。

どこかの路地で車を止めたのを見て、後ろにつける様にパッソを駐車させた。

「良はどうする？」

「そつだな……」

湊が車を降りて、そう問いかけた。俺としては行きたい所だが、アーティのこともあるし……。だが、アーティは早々に車から降りると、

「行かないの？」

と無表情に言った。どうやら心配ないらしい。

「んじゃ、行く」

湊の首肯を見届け、諸装備を整える。

サブにUSP、S&W M37、近接用に短刀ドス、メインにX-7

だな。

USPをレッグホルスターに保持。S&W M37を弾薬ポーチのガンホルダーに保持。短刀をベルトに挿し、X-7を持つ。

「中々様になってるじゃん」

「そりゃどうも」

出来れば普通の高校生でいたかったよ。そんな言葉を胸にしまつて、俺はエンジンを切った。外に出て、車に鍵を掛ける。

「オレたちから離れるな」

「分かっとうわ」

イングラム（昨日聞いた）を両手に持った湊が、続々と歩いていく傭兵集団の後に続くように歩いていった。俺はアーティを連れ、またその後を追う。どこかのビルの裏口で立ち止まったみんなは、特殊部隊の突入の様に陣取り、指で合図をしていた。

「ここが地下シェルターの入り口か？俺はやる事がなくて、辺りを索敵するがゾンビは居ないようだ。」

キィイという音と共に開かれた扉に全員が突入したのを確認して、俺とアーティはその中に足を踏み入れた。

建物の中は薄暗く、ある物と言えば下に降りる階段が一つ、それだけだった。

その階段はかなり深い所まであり、目を凝らさないと最下段が見えないぐらいだ。

もうすでに先に行くみんなを追って、俺たちも階段を降りて行く。

「良祐、そこ気をつけて」

「えっ？つとと！？」

アーティの声に気を取られ、段に踏み下ろした足が滑ってしまふ。何とか持ち直し、足元に視線を向けた。そこには、

「血？」

少量ながらも血液　それも凝固してない様子から見ても、まだ時間が経ってないものがあった。

何でこんなものが？その思考は先を促すアーティに遮られてしまふ。

「怖気づいた？」

先行する湊が馬鹿にした様な声音で言った。

それは心外だ。俺はよっぽどの事じゃないと怖気づかないぞ。

「大丈夫だ。問題無い」

「そう」

「なら結構」

エ シャダイネタを持ってきたが、アーティも湊も分からなかったようだ。

ああ。ツツコミが恋しい。泣けてきた。

しょうがないからボケも無しでさっさと歩く。下に降りるにつれ、不気味な雰囲気が出てきた。

最下段まで降りた所で、大きな隔壁かくへきの前で何かやっているクルス
さんが見えた。手元にはダイナマイトを持っている。

「場合によってはダイナマイトの方が役に立つ事もあるから」

説明キャラが定着しつつある湊が説明してくれた。

「どつやら隔壁を爆破するらしい。おいおい、どんだけよ。……………」

「…ゾンビが寄ってくるんじゃない？」

「ここの防音は完璧と資料に書いてあったから」

毎回毎回ありがとう湊。ていうか俺のモノローグが何故分かった？

「顔」

なるほど、それか。……………理奈と早織かつ！！

頼むから顔でモノローグを読まないでくれ。

「そろそろ物陰に隠れて」

「お、おう……………」

いきなり仕事モードになった湊が、俺とアーティを物陰に連れて行く。俺一人アウエーみたいじゃないか。(みたいじゃなくてアウエーです)……………度々俺のモノローグに介入している奴がいる気がする。

そんな事を考えていると、突然爆発音が響いた。終わつたらしい。湊の後について、隔壁の前に進んだ。大して頑強じゃなかった隔壁は完全に穴が開き、奥まで綺麗に見通せた。そう、見通せた。

穴の向こうには、学校の体育館顔負けの広大な空間が広がっていたのだ。

第35話 地下シエルター？何でそんな物があるんだ？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

段々おかしな事になって行ってる気がします。

地下シエルター、深まる謎！ここには一体何がある？

御意見御感想をお待ちしています！

そして明日、8月1日は新作の投稿日です！

是非ご覧下さい。

第36話 この調子だと終わる頃には10を超える(前書き)

おはにちは、らいなあです。

まずは投稿が一日開いた事の謝罪を。

次に言い訳を言わせてください。

実は昨日、8月1日。偏頭痛を起こしまして、更に嘔吐を5回ほどしまして。

朝から病院に行ってたんです。

……幸い何も無かったんですが、点滴打って来ました。

それで昨日、パソコンに向かえず、投稿できませんでした。

今日は昨日の今日と言う事で何時も以上にゆったりペースで。

と言っわけなのです。すいません。

第36話 この調子だと終わる頃には10を超える

体育館顔負けの広大な空間には、両壁に扉があるだけで他には何も無い。

机もイスも“照明”すらだ。なのに少し明るいのは何故だ？マジツク？

「アーマライト充電式自動発光体を使っているのよ」

「アーマライト充電式自動発光体って……」

後ろに佇むアーティはアレの正体を知っているようだ。

かくいう俺もアーマライト充電式自動発光体という名前は聞いたことがある。

充電式自動発光体 正式名称「アーマライト暗転時自動発光金属鋼体：

充電式」

消灯の際、自動で発光して辺りを明るくさせる金属。

科学によって作られた金属で、現時点では数はそれほど多くない。照明代わりに使用。

主にメンテナンスフリーなので、手入れに時間が掛かる巨大建造物等に使用される。

まだ一般には出回っておらず、少々高値。だが、性能は保証されている。

充電式、電池式、コンセント式、電球式があるとか。そんなに無駄だろ。

「既に何日も充電されてないみたいね。蓄電した電気で何とか発光している程度だから、近い内に消えるでしょう」

マーシャさん曰く、そういうことらしい。

しかし、初めて見た。去年の年末に発表されてから全世界で認知されているが、実物はそうそう見れるものじゃない。現にこの東海林市では使われている場所はないはずだ。こういう非公式な場所を除いて……な。

俺だつてそういうものがあると知ってはいたが、ついさつきアーティから聞かされるまでは何か分からなかった。……？何でアーティはアレが充電式自動発光体アーマライトつて分かったんだ？

「なあアーティ……」

「貴方が知らなくて良い事よ」

「……………」

質問すらさせて貰えなかった。アーティさあ……。

止む無く質問するのを止め、X-7を構えて警戒を巡らす。物陰は特に注意しながら、足をその広大な空間に踏み入れた。

「気ヲ付ケロ。誰も居ナイカモシレナイガ危険ガアルトモ限ラン」

ランドさんの洪い声の忠告を頭の片隅に、広大な空間の真ん中辺りまでやってきた。

辺りを見回し、以上が無いか確認する。そんな時、

「良祐」

「何だアーティ？」

後ろにピツタシくっ付いているアーティが俺の袖を引っ張った。目線をアーティに向ける。が、アーティは何も言わない。

「何なんだ？」

若干不自然なアーティを不審に思いつつ、もう一度声を出した時にふと気付いた。

アーティ（と俺）の足元の影が何故か小さくなっている。まるで俺たちを捕食する様に狙いを定めている様だ。というか俺たちの影ってこんなに大きかったっけ？

所で話は変わるが、影が出来る原理は知っているだろうか？

当然知っているだろう？幼稚園や（せめて）小学生ならともかく、簡単に説明すると、光源体光を受けた物体の反対側光に出来る。つまり、影を見る時は“光を遮る物体”を“光源体”と“自分の間”に置けば、必然的に見る事が可能と言う事だ。

更に言えば、影が変化するということは光を遮る物体が変化するか、“物体と光源体の位置関係が変わる”事でしか起こり得ない。

何が言いたいかと言うと、

影が小さくなるとは、光源体と、影の間の、“光を遮る物体”が、“影に近づいている”事を示している。物体が小さくなっているのならば話は別だが。

ちなみに俺たちは動いてない。つまり影が大小する事は無いという訳だ。

ならば、何故影が小さくなっているんだ？
それは決まっている。

“光源体”から“俺たち”へと落ちてくる物体があるからだ。

「アーティ!!!」

その実1秒。刹那的に膨大な情報量処理した瞬間、俺はアーティを抱えて横に飛び退いた。

これまた瞬間、さっきまで俺たちが居た場所に何か落ちる。爆発音と大差ない位のけたたましい落下音が辺りを包み、大量の土煙がその場を隠した。

「良！大丈夫！？」

「なん……とか……」

落下音で異常に気付いた湊が、アーティの下敷きになっている俺の名を呼んだ。

上のアーティの体重というより、おもいつきり背中を強打したせいで呼吸がしづらい俺は一閃開けて返答した。

「何ダ？アイツ……」

額から血の気が失せているクルスさんが落下地点を見て呟いた時、アーティを立てさせて俺も立ち上がった。しかし、アーティかなり軽かったな。今時の小学生ってあんなに軽いのか？昨日持った銃器力バンの方がまだ重いぞ？（10数キロはある）

そんな事を考えつつ、俺も同様に落下地点を見た。そこに居たのは……、

「……………USODARO」

蛇へびだった。何故ローマ字表記になったのかは甚はなはだ疑問だが。

煙が晴れた時、そこに居たのは俺たちの2倍はある大きな蛇だっ

た。
形そっくり、鳴き声シャー、それはほとんど蛇だが、違う所もある。

まずデカイ。こんな大きさの蛇、図鑑にも載ってねえだろ。そして黒い。体全体が洩れなく真っ黒だった。それらが指し示したのは、
「新しい怪物キターーーーーー!!!」

ニューゾンビ（ゾンビか？）。しかも人型じゃない新しい奴。
みんなも驚愕している雰囲気を感じ取れた。そんな中、その蛇（名前無いと不便だな。『スネーク』？まんまだな。『バシリスク』で行こう）は一際大きく咆哮ほしうすると、俺たちの向かって加速する。

「あつぶね!？」

俺はギリのギリで右に退けぞいた。アーティは楽々避けている。
マスターズフォース
第一種精鋭集団は、流石精鋭というだけあって余裕で回避していた。

直ぐにバシリスクへ視線を向ける……………が、

「なに？アイツ……………」

同じ様に視線を向けた湊がそう呟いたのが聞こえた。それもそうだろう。

何故ならバシリスクは、勢いそのまま後方の壁をぶち抜いてどこかへ行ってしまったからだ。

「私達が目的じゃない？」

マーシャさんですら疑問符を浮かべている。そりゃそうだ。

今まで会った化け物（俺の場合）は人間を食うか殺すかしていたのに、あのバシリスクは何もせずにごどこかへ行ってしまったのだから。と言っても、落下と最初の攻撃は殺すつもりだったのだからうけど。

「ソレナラソレデ好都合ダ。サツサト済マセルゾ」
「ソウダナ」

ランドさんの言葉にクルスさんが同意する。これに反論するものは居らず、俺たちは一番近くにあった扉を開けて探索を開始した。

第36話 この調子だと終わる頃には10を超える(後書き)

いかがでしたでしょうか？

4種目ですよ！この調子だと終わる頃には10種を超えるんじゃないですか？

危険の中、探索を開始する主人公たち！無事に戻れるのか？

御意見御感想をお待ちしています！

第37話 不憫な子たち（途中で変なの居た）（前書き）

お楽しみください

第37話 不憫な子たち（途中で変なの居た）

扉を開けた先には薄暗い通路が奥まで続いており、薄暗いのも相まって一番奥が見えなかった。

両サイドの壁には扉と横長のガラスが等間隔で並んで、映画とかで見る研究所の廊下まんまだ。

俺たちは纏まって目的のサンプルを集めるのは時間が掛かると判断し、ランドさんの提案で2つにチームを分けることになった。

俺はアーティとセットで、一般人と言う事もあって湊とマーシャさんが付いてきてくれるそうだ。ランドさんとクルスさんは2人だけ。危険じゃないか？と言ったが、湊は俺と歳が近い事で決定。それで3：3に分けると、俺たちの方が危険度が高い。ならもう1人追加したいが、ランドさんかクルスさんを回すと今度は向こうが危険になる。一番強いのはランドさんとクルスさんだからだ。

ならば必然、一番強い2人で組ませて、俺と女性組で組ませれば一番安全という事になった。

これには俺も最良と判断し、それで同意して見せた。

そして今は二手に別れ、俺、アーティ、湊、マーシャさんは近くの扉の中でサンプルを探している。

「サンプルってどんな物なんだ？」

そういえばと、研究室の机を探りながら問いかける。

そもそも俺はそのサンプルとやらは知らない。どんな形状かも聞いてなかった。

だから思い出した俺は作業をしながら、隣の湊に声を掛けた。

「何でも“人型”らしいよ」

湊も同様、作業をしながら、簡潔にそれだけ述べた。

人型ということは生き物？しかも人型って……… 人体実験でもしてたのか？

ふとした疑問を言葉に出すと、回答主の湊は表情一つ変えずに、

「そつだよ」

と言った。軽っ！？でも、だからこんな地下に作る必要があったのか。

人体実験は禁忌、バレたらどうなるか分かったもんじゃねえからな。

というか人体実験を案外すんなり受け入れてる俺って……。まあ、人体実験なんて表立ってないだけで意外とやってるものだからな。国でやっている国家もあれば、一組織としてやっている団体もある。一般人が知らな過ぎなんだよ。

ちなみに俺は早織からその事を聞いたから威張れないんだけどね。

「サンプルとやらが人だとして、なんで湊は机を探しているんだ？」

「……………あ」

俺がそう聞いた途端、湊は作業中だった手を止め、数秒間を開けてから小さく呟いた。

うん、今「あ」って言ったぞ。意外とこの子天然だ。

湊は見る見る顔を真っ赤にさせ、耳まで赤くなってしまった。

「……………ドンマイ」

「……良いんだ。いつもの事だから」

俺は大層に同情の視線を湊に向け、手を肩に置いた。

どうやら湊は、昨日マーシャさんから聞いた通り、戦闘以外はまるで駄目に当てはまる様だ。

なんだか湊がとても不憫ふびんに思えてきた。あれ？目の端に温かいものが……。

「向こう、探してくる……」

湊はそう言つて、逃げる様に走つて行つた。頑張るんだぞ。

何故か娘を見守るお父さんの視点で、走つて行つた湊を見る俺が居た。俺、年下なのに。

「不憫な子」

「アーティ。それはもう言つた」

気付けば、俺の真後ろに張り付くアーティが居た。アーティ、頼むから気配無く後ろを取らないでくれ。

「マーシャさんは？」

後ろに振り返つてアーティを見た。やはりお世辞にも綺麗とは言えない布を体に巻きつけた、見た目小学生の長白髪・白肌のアーティ。彼女は俺の問い掛けに、小学生とは思えないほどの大人な笑みを浮かべ返答する。

「あの子が向かつて行つた方向に居るわ」

何故か俺以外の人の名前を呼ばないアーティは端的にそう述べた。

アーティは俺以外の人の名前を呼ばない。大抵、「あの子」「あの人」「黒人」「白人」という。理由を聞いてみたが、覚えられないとの事。じゃあ何で俺の名前……俺がそれを聞く前に、「貴方が知らなくて良い事よ」と言われた。

ふと考えてみると、最初からアーティは不思議な事だらけだ。

俺の名前を知っていたり、ゾンビの垣根を踊る様に抜けて行ったり、変な風に知識はあるわ、現実離れたその存在感とか。それにあの表情、そうそう出せる笑みじゃない。波乱万丈の人生を歩んだアラフォーがようやく出せるレベルだぞ？

名前も偽名だろうし、日本人じゃなさそうだし。思い返せば、アーティについて俺が知っている事は何も無い。

「アーティ……」

「貴方が知らなくて良い事よ」

何時もこんな感じだ。俺に恨みでもあるんだろうか？

これは俺の予感でしかないが、ひよつとしたらアーティはこのゾンビ発生事件の核心に居るんじゃないだろうか？犯人とは思えないが、何かしらの形で関わってるんじゃないか？

彼女は何かを知っている。でもそれは、時が来ないと質問すらさせて貰えない。

そんなキーパーソンの彼女が俺の事を知っている。これは香澄さんが言った通り、俺が鍵を握っているからか？

俺が選択した全てが、真実を解明させる為に動かされているのなら、この研究所にも何かしらの鍵が眠っているはずだ。

多分俺は、そんな感覚で研究所に入ったんだと思う。良く分から

ないけどな。

……………いつの間にか話が二転三転してないか？

「はあ、まあいいや。アーティ行くぞ」

「しょうがないわね」

俺はアーティを伴って湊たちと合流した。

所変わって商店街。

「なんなんだ、つたく……………」

商店街を疾走する彼の名前は、みぞはたつねまさ溝端常正。

冴えないフリーターだ。

これは彼が犯した罪と、その後の彼の行動を記した物語である。

……………あ、間違えた。これ別の話だ。今、これ関係無いんだよな……………」

えーっとスケジュールではここには……………ああ、冬紀ハーレ（ゴホンゴホン！）……………じゃなくて、冬紀達の話が入るわけか。んじや、早速……………」

「えっ！？俺の出番もう終わり！！？」

今度別で作ってやるから我慢してろなう。

「絶対使い方間違ってるだろ！！しかもツッター風に言ってるんじゃないえ！！」

それじゃバイならー。

「おい！待てって！おい！！」

ちなみに、今度とは言ったけど半世紀後かもしれん。

「おiiiiiiiiiiii！！！！」

(今度こそ) 所変わって住宅街。

その道路を走る1台の軍用車両があった。灰色塗装のハンヴィー、冬_ニ紀達である。

「何故か途_と轍_つもない遠回りをした様な……」

後部座席にちよこんと座る茶短髪の藤崎が、苦笑気味の表情で口からそんな事を洩らした。

彼女も今では馴染みまくっている。馴染みすぎて存在感が薄くなっつてすらいる。

はつきり言っつてこの集団の中で藤崎は普通過ぎたのだ。そりゃ目立たなくなるわ。この集団、一人一人のキャラがめっちゃ濃いもん。

「そうか？気のせいだろ？藤崎」

天井ハッチから身を乗り出して付近の警戒をしていた理奈が、車

内に戻ってそう言った。

その理奈に同意する様に、隣に座った円が頷く。

「そうですよ藤崎さん。道は間違えていませんし」

「いえ、そういう事では……」

しかし藤崎は訂正しようとして………止めた。この数日で円の面倒臭さを思い知ったからである。

「早織ちゃんがナビしてくれるから大丈夫よ。藤崎ちゃん」

運転中ながら、美鈴がのほほんと余裕で会話に参加してきた。

最初の頃とは雲泥の差である。

「何か気になる事でもあるのかい？藤崎さん」

「何でも無いです……」

天井上で理奈と同様、付近を警戒していた冬紀も、会話に参加した。

ちなみにこの時点で誰一人として藤崎の下の名前を呼んでいない。早織は初っ端で呼んだ美鈴すらだ。

本当は良祐と逸れた後、一度自己紹介をしたのだが、何分影が薄すぎて直ぐに忘れられてしまったのだ。

サクラが唯一、藤崎のフルネームを覚えているが、何故か語ろうとしない。

それを聞こうとした理奈に迫られた際、「ああ持病のフォックスダイがつ！」とまるで生会の一存の病弱妹みたく逃げてしまうのだ。藤崎はもう諦めたのかなんとか。

「大丈夫？気分でも悪いの？藤崎さん」

「大丈夫です……」

親友であるはずのサクラにすら苗字で呼ばれる藤崎。

「どうやらここにも不憫ふひんな子が居たようだ。あれ？目の端に温かいものが……」。

第37話 不憫な子たち（途中で変なの居た）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

なんだかとても変な回！次回からは多分普通？

御意見御感想をお待ちしています！

第38話 何故か、いつか天の黒ウサギを思い出した（前書き）

おはにちは、らいなあです。

バイトを始めました。週2日なのですが、とても疲れます。

投稿が遅れるくらいに。すいませんでした。

という事で、投稿は毎日とは行けなくなります。私事で申し訳ありません。

ではお楽しみください。

第38話 何故か、いつか天の黒ウサギを思い出した

サンプル検索から30分が経った頃、マーシャさんが何かを見つけたようだ。

「これはサンプルの資料みたいね」

今時アナログな紙の束だったが、資料となれば話は別だ。

パソコン上のデータより、紙の方がトラブルで無くなりにくいからな。

……でもまあ、その分のデメリットも皆無ではないが。

サラッと、マーシャさんが資料の内容を口頭で説明してくれた。

「名前、年齢、職業、身長体重と言ったプロフィール、他にも実験結果や考察まで。ご丁寧に詳しく書かれているわ」

纏めるの面倒臭そうだ。 研究員、お前頑張ったんだな……。

俺が変な感動を覚えていると、湊がマーシャさんに問い掛けた。

「サンプルの名前は？」

おお、それも大事な情報だ。 …………… 大事な情報か？ まあ、ともかく覚えておかないと。

「レイナ・ユウキというらしいわ」

「女性？」

マーシャさんは無言で頷いた。 どうやらレイナ・ユウキという女性が目標らしい。

俺は脳内メモにすっかりとその名前を刻み込んでおく。意味は無いんだけどね。

「ちなみに15歳」

「マジで!？」

何てこった。そんな青春を謳歌おつかしている年齢で人体実験だと?進んでやる訳無いし、誘拐でもしたのか?このくそ研究所は。

「流石に若すぎるわね」

「一体なんで……」

湊とマーシャさんですらこんな感じだ。その様子から見ても、そうそう在り得ない事が分かる。

別に正義を語るつもりは毛頭無いが、途轍とてつもなく胸くそが悪い。ここに所員がいたらサンドバックにしていたかもしれないねえな。

「早く外に出たいわ」

唯一、アーティだけが意に介して無い様子で、そんな事を呟つぶいていた。

更に30分後。俺たちは、ランド・クルス組と最初の地点で合流を果たす。が、2人もサンプルの発見には至らなかつたようだ。

「ダガ、サンプルガ居タト思ワレル場所八見ツケタ。人型ノデカブツガ、首無シデ転ガツテイルダケダツタガナ」

クルスさんが言う、人型のデカブツ
ミュータントだろう
か？

しかも首無し！？あのミュータントの頭をどうやって……。
でも、だとしたらここには、バシリスク以外にもゾンビが居た事になる。先程の探索中には出会っていないが、もしかしたら一箇所に固まっているのかもしれない。……………出口パターンじゃねえよな？

「何か居る」

などと思っていると、アーティが不吉な事を言ってくれやがりました。

おいおい、今の今だぞ？ゾンビが来やがりやがったか？

「違う。人の形をしていない」

「どこに居る？」

思い当たるのはアイツしか居ないよな。

しかし、アーティは忙^{せわ}しく視線を動かして、ちよつと慌てている様にも見える。

そりゃそうだ。何たって、

「全方向」

それが“一体だけとは限らない”のだから。

刹那、上から、下から、左から、右から、前から、後ろから、普通の大きさの真っ黒な蛇が、俺たち6人に向かって飛び掛ってくる。死ぬ間際に見えるスローモーションで流れる世界で、俺は膨大な量

の思考を巡らしていた。それは走馬灯の様な、それとは違う様な。その中で、色々な人から色々な事を言われたのを思い出した。

それは理奈から。それは冬紀から。それは姉貴から。それは早織から。それは円さんから。それは香澄さんから。それは田代さんから。

そうだ。俺はまだ死ぬ訳にはいかない。

死んでいった人たちの為に。今、生きている仲間の為に。地べたを這い蹲はくすつても生きてやる。

『それで良いのよ』

X-7を左手で持ち、連射フルオートで前方の蛇どもにばら撒く。と同時に、開けた前方に向け、駆け出した。残った右手で、レッグホルスターからUSPを抜き放ち、X-7と併用して、進路に立ち塞がる全ての蛇を撃ち貫いていく。

零距离だからか、はたまた絶体絶命だからか。俺が放ったVAB弾や、9mmパラベラム弾は、ほぼ全て蛇の頭を貫いている。

「俺は諦めが悪い方なんだ」

蛇の波から脱出した俺は、真っ黒な蛇に向かってか、そう言っていた。

「流石ね、良祐」

気付けば、真後ろにピツタリ張り付くアーティが、歳相応の笑顔で笑っている。……アーティの思考は分らん。

他の四人は？と後ろに振り返って見るが、そこには蛇の山がある

だけで、人は居なかった。

「埋もれたか？」

とも思ったが、よく見れば山の向こうに4人が見える。

どうやら無事脱出したようだ。しかし、マーシャさんが手負いの様でもある。

そんな状態でも、蛇たちは容赦無く飛び掛ってきた。ただ、二手に分かれたから蛇の量はさっきの半分ぐらいだ。

「ちい、流石にこれだけの物量じゃやられちまうぞ……！」

弾薬ポーチからUSPの弾倉マガジンを取り出し、素早く弾薬を再装填リロードする。

USPだけじゃなく、X-7も持っているから、途轍とてつもなくやり辛かったのは言うまでも無い。

「サンプルは後でで良いから、二手に分かれて脱出するよ！」

湊の指示を背に、俺はアーティを連れて蛇の群れから逃走する。

バシリスクが開けた穴の中に入り、学校の廊下程度しかない狭い通路を全力で疾走していると、小学校のヤンチャだった頃を思い出して仕方が無い。だが、そんな考えはコンマ1秒で頭の中から消え失せ、前方から来た大量の蛇の群れに頭の思考が全部持っていかれる。

「挟み撃ちかよ……！」

「大丈夫大丈夫」

こんな状況でも呑気なアーティに若干イラツときたが、んなこと

言っている暇は無い。

通路を左に曲がり、挟み撃ちを何とか回避した。 が、

「マザ〜スネ〜〜〜〜ク。イツアピー〜ンチ……!!」

曲がった先には、バシリスクより小さいが2メートル程あるバシリスクが、堂々と鎮座してやがりました。

「右に……」

「右だな!？」

アーティの助言に、俺は進路を右に向けた。 が、

「……は、ゾンビが居るわ」

通路を右に曲がると、そこにはゾンビが1体、待ち構えるように歩いていた。

「おiiiiiiiiiiiiっ!!」

右手のUSPでゾンビをヘッドショットし、アーティに向かって怒鳴る。

「アルテミスウウウウウ!!??」

「言い切る前に行ってしまった貴方が悪いんじゃない」

そうだけでも!それでも先に危険を示唆しないでくれないかな! ?安全な道筋教えてくれよ!!

「善処するわ」

何となくアーティの利便性が見出せてきた。考えてる事を勝手に読むから、言わなくても済む。意外と便利。

「どうもありがとう」

ほらな？つとと……。

止めてしまっていた足をもう一度再稼働させ、蛇群れから逃げる。翌々考えれば、俺って走って走ってばっかだな。

「でもどうするの？」

それもそうだな。ずっと走りきれぬわけじゃ無いしな。

でも、ここを出るには戻らないと行けないぜよ。どうやったら戻れるんだ？

「ぜよ？」

アーティがモノログに引っかけたようだが、俺は俺で脱出方法を考えているので、構っている暇は無い。かと言って、良い案が浮かぶ訳でもなく、

「真っ向勝負」

以上、アーティの案。無茶苦茶すぎるが、他に無いのも事実。故に、

「それ採用」

こうなるのも必然と言えば必然だ。

第38話 何故か、いつか天の黒ウサギを思い出した（後書き）

いかがでしたでしょうか？

廊下を疾走する少年と少女。いつ天みたいな気がするのは僕だけでしょうか？

真つ向勝負！秘策はあるのか？

御意見御感想をお待ちしています。

第39話 撃ち貫くと言っても、拳銃ではなくパイルバンカー（前書き）

お楽しみください

第39話 撃ち貫くと言っても、拳銃ではなくパイルバンカー

俺はポケットから手榴弾をグレネード一つ取り出し、ピンを引っこ抜いて後ろに放る。

足を止めずに、頃合いを見計らって通路を右に曲がった。さっきまで進んでいた場所で、小規模の爆発が響いた。

「室内だと響くな」

壁や床、天井を伝って、爆発による振動がここまで届いてきた事に若干の感動を覚える。

……別に爆弾魔だから感動した訳じゃないよ？

「それは誰も聞いて無いわ」

さて、アーティの鋭いツツコミも入った事だし、真面目にやりますか。

少し後ろに振り返る。俺たちを追っかける蛇の数は減った感じがしない。まあ、こんなんで終わるはず無いよな。

「とりま、最初の広大な空間に戻るか」

丁度近くだし、俺としても狭い空間は得意じゃない。

だがそれも、相手にも同様に言える事だがな。はあ、今回も骨が折れそうだ。

「頑張つて」

心無いアーティの応援が余計に俺のやる気を削いで行く。他人事

みたいに言いやがって。

止まりかかる足を気力で動かし、正面にあつた扉を全速力で抜ける。その先は一番最初の広大な空間だつた。

「予想通りだな」

実を言うと、地形をあまり把握してなかった俺。ほとんど勘で近くとか言つてました。

とりあえず中心の辺りまで走つて振り返ると、大量の蛇が向かつて来てました。はつきり言つて、

「キシヨイ」

です！だつて万ぐらいの量の蛇が一様に俺たちに向かつて来るんだぜ？気持ち悪いだろ？

「否定はしないわ」

ほら、アーティも言つてるぜ？……………雑談はこれぐらいにしよう。

見れば蛇たちの様子が変だ。拡散して向かつていた筈の蛇の群れが、何故か一箇所に集まりだしている。ハッキリ言つて嫌な予感しかない。

「こういうパターンってアレだね。GATTAIパターンだね」

嫌な予感つていうのは往々にして中^{あた}るものだ。

蛇たちは一箇所に集まり、そして、最初に見たバシリスクと同じ大きさになつた。

「バシリスクは小さな蛇の集まりだったみたいね」

言わなくても分かってるよ。俺の気分をこれ以上落ち込ませるな。とまあ、俺はどこぞの戦隊ヒーローモノの優しい怪人じゃないので、変身中でも合体中でも容赦無く攻撃するんだけどね。左手のX-7でVAB弾を5〜6発放つ。

片手で撃つたから命中率なんてカスみたいなものだが、3メートルぐらいのあの巨体だったら流石に数発は命中する。まあ、ダメージは皆無みただけだ。

「……………まあ」

「ドンマイ」

アーティの慰めが余計に心を蝕んでいく。やべえ、勝てる気がしねえ。

今度はX-7とUSPで3発づつ放つが、バシリスクは命中しても全く怯みもしない。

「……………うん」

「頑張れ」

合体が終わったバシリスクは、何もせず俺たちを見ている。

まるで何時でも殺せると言わんばかりに。まさに狩人だ。ハンター

X-7を肩に掛け、ポケットから手榴弾グレネードを取り出し、ピンを引き抜いて放り投げる。数秒の後、爆発した黒煙の中から、頭が無くなったバシリスクが堂々と登場した。無くなった頭は再び生えてくる辺り、流石化け物だ。

「アーティ……………」

「なに？」

俺は視線をバシリスクに向けたまま、疑問符を浮かべるアーティに言っただけだ。

「後……………頼んだ！」

「ちょ待てい」

全速力で逃走したつもりだったが、何故か伸びたアーティの手に捕らえられてしまう。

「無理だつて……………！！！」

「うん、もう打つ手が無いって様相は伝わってきたわ」

あんなもん無理でしょ！？勝てる訳ねえつて！！

だってもう、まったく攻撃してこねえんだぜ！？何時でも食えるつて言ってるようなものじゃねえか！！それが不気味で不気味で！！

「ミュータントの時はX-7でも少し怖んだから戦う気が起きたけど、コイツは怯みもしねえわ再生するわで……………！！！」

最早折れ掛けた心が、めっちゃ帰りたいつて言ってる。

「しっかりなさい。姿形に惑わされないで」

とは言っただけだ。まあ、やるけども。アーティのおかげで少し戦う気が出てきた。

少しばかりボケが入ったショートコントを終わらせた俺は、USPをレックホルスターに戻す。

「そろそろ真面目にやりますか」

いい加減動き出しそうなバシリスクさんの為に、戦闘準備を終わらせる。

何故、今食わないのかは激しく分からないが、優しさだと勝手に解釈しておこう。

コイツは素早いからな。気をつけないと。どこぞの身体をバラバラにされても復活する魔装少女？とか、15分に6回までなら死んでもOKな犠牲者じゃないから、俺は1回死ねばそれで終わりだ。

視界に You Are Dead とか、ゲームオーバーとか出ない。ただの真つ暗な死だけだ。

「来いよ。俺の悪運から来る強運、見せてやるぜ！」

それは遠回しに、バシリスクには運無しじゃ勝てないと言っているのにも同義だと言う事を、この時の俺は知らなかった。

バシリスクは、待ってましたとばかりに突撃してくる。それを危なっかしく右に回避した。

「いきなりかよ。動かなければ良かったのに」

両手構えの X-7 で5発連射すると、それ以上何も出なくなつた。弾切れだ。

「マジかよ……！」

使い切つたバナナ型弾倉^{マガジン}を捨て、弾薬ポーチから新しい弾倉^{マガジン}を装填する。自動装填なので、後は余計な事をしなくても弾倉^{マガジン}から薬室^{チェンバー}

に自動的に装弾される。便利だね。

モードを連^{フル}から単^{セミ}、S^{スナイピング}に切り替え、3発バシリスクに命中させた。
と、

「怯んでいる？」

何故かバシリスクが少し怯んだ。今まで全く怯まなかった奴が、何故か。

そこで俺は突然、アーティの言葉を思い出した。

姿形に惑わされないで

もしかしたら奴には弱点があるのかもしれない。それも体内の中に。

^{サブマシンガン}SMモードだと、貫通力が足りなくてそこには届かなかったんじゃないだろうか？^{スナイピング}Sモードにして、貫通力が少し向上した事により、ようやく届いた。でもそれは致命傷を与えるほどじゃなくて、怯むに止まった。

「弱点があるなら話は別だ」

ようやく見つけた光明、手放すわけには行かない。しかし、

「おいおい……!!」

弱点を攻撃されて怒ったのか、バシリスクは今までとは段違いのスピードで突撃してきた。今まで何とか避けていた俺なんかにそれが避けられるわけ無く、一瞬の内にバシリスクに食われてしまった。

死んだと思った。だが、俺は閉じた目蓋を開けると、何故か生きて
いる事に気付く。

「どういう事だ？」

しかし、その場所はさつきまで居た場所じゃなかった。

妙に息苦しい。しかもなんか狭い。めっちゃ真っ暗。

そこで俺は1つの結論を見出した。……………ほとんど勘で。

「ああ！バシリスクの腹の中だ！」

途轍とてつもなく、しっくりきてしまった。俺はバシリスクに丸呑みさ
れてしまったという事に。

「やべえ、どうしよう？」

まったく身動きが取れない。しかもX-7を持っていない。

食われた時に落としてしまったのだろうか？最悪である。

そんな動けない中、ふと前方に何かが居る。それはとても気持ち
が悪い、人のような……………。

「こいつ、ゾンビじゃね？」

間違いない。ゾンビだ。

更に言うなら、動いている。こいつ死んでねえぞ！！

「やばい！噛まれる噛まれるー！！」

俺は動けないのに、何故か突然現れたゾンビは動いている。というより、俺の動きを阻む黒い塊が、ゾンビの所だけ道を開ける様に無くなっていく。

もしや、と思った。俺の予想が正しいなら、このゾンビはバシリスクの本体だ。

バシリスクは蛇が本体なんじゃないんだ。その中に居る、このゾンビが本体なんだ。ゾンビを中心に、小さな蛇が集まってバシリスクが出来る。つまり、こいつを倒せばバシリスクは消える。

まあ、予想でしかないわけで。事実かどうかは不明んだけどね。

「って、そんなこと言っている場合じゃねええー!!」

気付けば、ゾンビが直ぐそこまで迫っている。俺、噛まれるううううう!!

『しょうがないわね』

そんな声が響いた瞬間、俺の動きを阻んでいた黒い塊が消えた。ていうか、俺の体が宙に浮いた。

「荒っばいな」

どうやら、バシリスクの腹の中から出れたようだ。ただ、

「たあっ!!!??」

受身を取れずに背中から地面に落ちてしまう。背中を強打した…

…!

「だらしないわよ」

アーティが助けしてくれたみたいだ。見ればバシリスクの頭が無い。

「手刀でバツサリと」

「お前は本当に人間か？」

化け物の首を手刀で切り取る人間って、本当に地球人か？Z戦士とかじゃなくて？

アーティってスーパーイヤ人とかにならねえよな？

「さあ？どうかしら？」

地味に怖い事を言ってくれる。ただ今回は、そのおかげで助けられたからな。ありがとう。

「ごうごういまして」

こういう時、言葉に出さなくても済むから読心も悪くない。

「そろそろ立ち上がったら？2度は助けないわよ？」

「おおっと！」

アーティの言葉の通り、バシリスクは頭の再生を終える所だった。俺は立ち上がり、腰から短刀を抜く。ポケットから最後の手榴弾グレネードを取り出し、ピンを引き抜いた。

「さあて、終幕の時間だ！」

手榴弾を放つて、安全圏までとりまダッシユ。爆発と共に、バシリスクの頭が無くなった。

俺はこれまた全速力でバシリスクの下まで行くと、再生途中のバシリスクの首から胴体まで、短刀で一直線に切り裂いた。

「出てらっしゃいな奥さん!!」

胴体の切り口を押し開くように、ほとんど力技でバシリスクの胴体を開かせる。

その奥に居たのは、さつき見たバシリスクゾンビの本体だ。

それを見つけた俺は、閉じかかる切り口を短刀を横にして抑え、弾薬ポーチのガンホルダーからS&W M37を取り出し、本体ゾンビの脳天に押し当てる。

「どんな装甲だろうと、ただ打ち貫くのみ!」

このセリフが分かった人、あなたは同士だ。今度スロボ談義で
もしよう。

リボルバー故に少ない装弾数を余す事無く全て使い切り、5発全てを撃ち切った時、そこには頭が穴だらけのゾンビが動かなくなっていた。そして、バシリスクを構成していた黒い蛇たちはもがき苦しむように消えてなくなり、最後には本体であったゾンビがその場に倒れているだけになった。

俺は、バシリスクに、勝ったのだ。

「勝つ……………た!」

「く苦労様」

これまた後ろにピツタリ張り付くアーティは、嬉しそうに笑って

いた。

第39話 撃ち貫くと言っても、拳銃ではなくパイルバンカー（後書き）

いかがでしたでしょうか？

僕はスパロボを全作やってはいませんが、とても大好きです。

「どんな装甲だろうと、ただ打ち貫くのみ！」

とは、スパロボの主人公の一人のセリフです。

かっこいいですね！名セリフです！

バシリスクを撃破した主人公！彼は頑張りすぎでは無いだろうか？

御意見御感想お待ちしております！

第40話 「番外編」 軽食喫茶リリアンの日常（前書き）

おはにちは、らいなあです。

まあ、タイトル通り番外編です。

番外編で話を詰め込みすぎてもしょうがないので、文字数少なめです。

息抜き程度にポケーツと見てください。過度な期待は厳禁です。ではお楽しみください。

第40話 「番外編」 軽食喫茶リリアンの日常

これはゾンビが発生した日、2012年8月1日から1年遡った、2011年の話である。

林名高校から中心部に向かった途中にある商店街。そこに、少し古びた外観の軽食喫茶があった。

それこそ、魔女の宅 便とかで出てきそうな、今時には無い珍しい建物である。

その店の名前は、『軽食喫茶リリアン』という。日本人の名前と言われれば、違和感が多少どころじゃなくあるが、外人の名前と言われれば、不思議と納得出来そうな名前だ。

話はリリアンの事ではなく、このリリアンで働く1人の女子高生の日常を綴る話だ。

その話をする前に、まずは店内に入ってみよう。今日はシフトが入っているはずだから、少女は居るはずだ。

「いらっしやいませー!!」

元気印でとても宜しい。今回の主役の少女、彼女は店長の趣味であるメイド服を見事に着こなし、満面の笑みで客に対している。水色を基調とした、ミニスカメイド服が何とも言えない。彼女特有の赤みがかった髪が、相する水色のメイド服と不思議とマッチしている。

ここまで自然に着こなせるのは彼女ぐらいじゃないだろうか？

秋葉原アキハのメイド喫茶だと、やらせ感が如実なものに対し、彼女はとも自然に接客できている。こんな子が居れば、普通だったら店は繁盛しまくっている事だろう。しかし、店はあまり人が居ない。精々5〜6人だ。

「今日も微妙に人が居るな」

客の少年が、皮肉とも取れる言葉を何の躊躇ためらいも無く発する。それを聞き、客の姿を確認した少女は、明らかに嫌な表情を showed した。

「おーい、客、客。嫌な顔しない」

とは言ったものの、少女はまったく変えようとしなかった。やはり仕事場に知り合いが来ると、何とも言えない感覚になるよね。

ようやくと表情を普通に戻した少女は、溜息混じりに頭を掻く。もはや先程の雰囲気は皆無である。

「来るなって何回も言っているだろ？殴るぞ、良」
「殴るのは勘弁してくれ。大体な、俺はお前の為を思って毎回来てやっってるんだぞ？分かっているのか、理奈」

客の少年の名前は『良祐』。リアンで働く少女の名前は『理奈』という。言わずもがなな2人である。

「まあ良いけど。いつものコーヒーよろ」

「えー」
「だから俺は客だ！ー」

良祐が怒鳴り散らして、ようやく理奈はカウンターの向こうに居る店長にオーダーを出す。

その間に、良祐は入り口からカウンター席に座っていた。

「毎回飽きずによくやるね、良祐君」

コーヒー用のカップを取り出しながら、見た目3〜40ぐらいの男性が何時もの様に笑う。

この人が、この『軽食喫茶リアン』の店長。従業員の制服にメイド服を採用する、所謂変態だ。

「挨拶代わりですよ。親しき仲間にもなんとやらです」
「ふふっ、そうかい」

雰囲気的には紳士だが、メイド服のデザインはこの人が考えたものだ。

これだけは忘れてはならない。この人は紛う事無き変態だと言う事を。

「ていうか今日は何しに来たんだよ？」

何時の間にか別の客の接客をしていた理奈が、良祐の右隣に座ってそんな事を聞いた。

「冬^{ふゆ}紀^ぎが部活だから暇で暇で」

血涙すら出しそんな雰囲気で、良祐は遠回しに「遊ぶ相手が居ないから暇だ」と言い放った。何様だコイツ？

「そうかよ……」

理奈は少し、暗い影を落としてしまった。

それは自分に向けたものではなく、良祐に向けたものだ。何故なら、良祐の黒歴史からおよそ1年。2011年とは、彼の心が癒え

て間もない頃だからだ。

と言っても、

「なーに暗くなってるんだよ！」

本人は全く気にして無い様子だが。彼は頭がオカシイと思う。

良祐は理奈の頭を乱暴に撫で回して、自分は無事だとても主張する様に笑っていた。

「やめろおおお！」

理奈が撫で回される頭を押さえて、めっさあたふたしている。萌えた。

「仲睦まじいね」

店長がニコニコしながらカップをテーブルに置いた。中には良い匂いのコーヒーが入っている。

「どこがですか！！？」

今も変わらず頭を撫で回されている理奈が、心外だとばかりに驚愕していた。

第40話 「番外編」 軽食喫茶リリアンの日常（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回からはまた本編となります。

御意見御感想をお待ちしています！

第41話 亜種と出会ったら、俺は大体気絶する（前書き）

お楽しみください

第41話 亜種と出会ったら、俺は大体気絶する

心地良いまどろみの中、聞き覚えのある声に、ふと目蓋を開く。

「あつ、起きた！」

まず視界に映ったのは、心配そうな表情で俺を覗き込む湊の顔だった。

覚醒しきらない頭をフルに回転させて、最初に思い出したのがバシリスクとの戦いだ。奴の胴体を開きにして、本体にS&W M37全弾発射をしたのは思い出せる。が、それ以降が全く思い出せなかった。

「気絶してたのよ」

俺の思考でも読んだのか、姿の見えないアーティがそんな言葉を投げかけてきた。

つまりは、バシリスク倒したら気を失ったわけだ。よくよく考えればそれも無理ない。走って走って走って食われたからな。アレ？ ハーメルンの時もこんな感じじゃなかったか？ 流石に慣れたが、無限ループに陥りそうだったので、とりあえず考えるのを止め、仰向けの体を起こす。体を起こすために、少し離れてもらっていた湊の肩を借りて、俺は完全に立ち上がった。まだ少し動かすのが億劫な体で、辺りをゆっくりと見回す。

「アーティ、無事だったか」

「どうやら場所は研究所で変わりないみたいだ。ただ、充電式自動発光体の蓄電した電気が切れたのか、室内はさっきと打って変わっ

て真っ暗だった。と言つても、見えないほどじゃない。そんな目のおかげで、アーティをすぐに見つける事が出来た。

「おかげさまで」

相変わらず無表情なアーティにも流石に慣れたな。

一間開けて辺りをもう一度見回すと、ランドさんたちが居ないのに気付いた。その節を湊に聞くと、

「上で待つてるよ」

という返答が返つて来た。どうやら先に脱出したみたいだ。

ということは、湊とアーティは俺が起きるのを待ってくれていたのか。感謝に尽きるな。

「それじゃあ、待たせるわけには行かないな」

俺たちは外へ向かう階段に向かった。もちろん、X-7を忘れない。

後々聞いた話だが、あの研究所にはサンプルは居なかったようだ。研究所にある可能性が極めて高かったため、他の場所はデータにはないとか。ゾンビ発生時の混乱に乗じて逃げ出したかもしれないとランドさんは言っていた。つまりは、全て振り出し。サンプルがどこに居るのか全く分からない状態だ。

その事も考慮して、彼らにこれからどうするのか聞いたが、サンプル搜索に戻ると言っていた。当ては無いそうだが。

俺はそこまで付き合うわけにも行かないので、ここで彼らとはお別れだ。

「お元気で」
「じゃあね」

アーティは俺と行動するそうだ。その目的は依然として不明ではあるが、彼女の人間離れた身体能力は頼りになる。今の所支障がある訳でも無いし、彼女の同行に俺は快く了承した。

「2人モナ」

「良祐、2人ツキリダカラッテ変ナ事スルナヨ」

失礼な。俺はロリコンではない。
ていうかクルスさんのキャラが何となく判ってきた気がする。

「仲間と会えるといいわね」
「はい」

マーシャさんはとても優しくしてくれた。まるで姉のように、まるで母のように。

俺にも姉と母は一応居るが、あんなだし。

「またね」
「ああ、また」

湊には色々教えてもらったな。年齢が近い事もあって、良い友達になれたと思う。

俺は全員と握手をし、出発する4人をアーティと見送った。

あの人たちだっいたら生きていそつだ。俺が生きている限りは、また会えるかもしれないな。

「行くか」

「そつね」

4人が乗る軍用車ハンワイが見えなくなった所で、俺たちは乗用車バスンに乗り込み、次の目的地へ向けて車を走らせた。

「次はどこへ？」

助手席に座るアーティの問いに、俺はすぐに返答を出す。

「ショッピングモールだな。それしか思いつかない」

ここからだとい没前には着ける距離だ。そこに理奈たちが居なければ、もう打つ手が無い。

俺の携帯ぶつ壊れたし。公衆電話で掛ければ良いじゃん。と思つた人も居たかもしれないが、それは不可能である。何故なら、俺はあいつらの電話番号を知らない。赤外線赤外線で番号をメモ帳に登録したから、メモ帳から選択して通話ボタンを押せば、番号を知らなくても電話は出来る。つまり、便利すぎたが故に、俺は今、途轍とてつもなく困っていると言つ事だ。

「ご愁傷様」

「そりやどつも」

アーティの慰めはトゲがある。もう少し優しくしてくれよ。

ハッキリ言つてダル過ぎる体を酷使して、俺は車をショッピングモールへと向けた。

“遭遇”という言葉聞いたことがあるだろうか？ 当然あるだろう。何年も生きていれば流石に1回は聞く言葉だ。では、その意味を知っているだろうか？ “思いがけず出会うこと”が、正しい意味である。

“遭遇”とは、雪崩といった自然現象にも適応される。もちろん生物にも、人間にも適応されるのだ。

何故、こんな事を言うのか疑問に思うだろう。

それは簡単である。“思いがけず出会うこと”が、言いたかったからだ。

例えば“思いがけず出会う”相手が、生物だとしたらどうだろうか？ 危険であれば十人十色の反応を示すかもしれないが、危険でなければ、おおよその2パターンに分類される可能性が高い。

それは、“無視”か“興味を示す”かである。

その“無視”か“興味を示す”かは、人間である場合は大体がこれになってしまう。危険があるとはあまり考える事はしない。

しかし、その遭遇した人間が、おかしな見た目をしていたら警戒はするだろう。

ゾンビと遭遇した場合は、見た目がおかしかったから人間は全滅せずにすんだ。勘の良い人間が生き延びる事にも成功はするだろう。

だが、もし見た目が普通のゾンビが居たら？

それでも、人間はしぶとく生き残るだろう。何て言っても、ゾン

ビは足が遅い。簡単に逃げ切れる。噛み付かれる距離まで近付けば、どんなに鈍感な人間でも、そいつがゾンビだと流石に気付く。後は走って逃げれば、生き残れるだろう。

が、もし、そのゾンビが、“見た目が普通”で、“走れたら”どうなる？

よっぽど勘が良い人間か、運動神経が神がかっている奴じゃない限り、生き残ることは難しい。それがたとえ、ゾンビを殺し慣れ、ゾンビの亜種みたいな化け物を何体も殺している人間でもだ。そんなゾンビと“遭遇”したら、本当に命を懸けなければならなくなるだろう。しかし、もしの話である。そんなゾンビ居るはずが無い。

と、思っていた人間は、

東海林市駅の目前。そこに死体の山となってゾンビどもに食い荒らされていた。

ゾンビの数は少ない。3体ほどである。が、次の瞬間、

ゾンビに食い荒らされていた死体が、5体ほど起き上がった。

その見た目は、限りなく人間に近い。遠くから見たら、本当に人間と間違えそうなほどだ。

そんな8体のゾンビは、生きている人間を見つけると、ゆっくりと歩き出す。

「何だあれ！！？」

ゾンビに狙われた男性は、背を向けて走り出す。当然の判断だ。

しかし、
8体のゾンビは、ゆっくりとしていたはずの足取りをドンドン速め、次第には、

「何で走ってんだよお!!」

平均男性となんら変わり無いスピードで走り出す始末。もはやゾンビとは到底思えない。

だが、走るゾンビとは思っている以上に恐ろしい。それは恐怖、それは畏怖。

「あっ!?!」

そのせいで足がもつれたものなら、その生存者は、もう立つことは出来るはずもない。
というより、

「ぎゃあああああああああああ!!」

立つ前に食われるのが末路である。

第41話 亜種と出会ったら、俺は大体気絶する（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ふと思ったんですけど、今回のサブタイトルって遠回しに1パターンって言うてるにも等しいですよ。まあ、否定はしませんが。

湊らと別れ、ショッピングモールへと向かう2人！危険な臭いがないでもない？

御意見御感想をお待ちしています！

第42話 あれ？短くね？

良祐達が研究所を出発した頃、冬紀達はショッピングモールに辿り着いていた。

「入り口にゾンビが居るけど、数は多くないみたいだ」

ハンズリー
軍用車の上部ハッチから顔を出す冬紀が、目を凝らしながら視認した情報を車内のみんなへ流す。その情報に、車内ですし詰め状態のみんなは、各々様々な反応を示した。

「ぶつつぶせ！！」

という理奈や、

「いえ、誘い出してその間に向かった方が消耗は少なくて済むわ」

と、冷静に作戦を立案する早織、

「車で轢いちゃえば？」

などと、呑気に語る美鈴も居れば、

「あれってデモ行進ですか？」

以前説明して理解したはずなのにそんな事を言う円がいる。
車内で十色の反応を示すみんなに、ハッチから顔を覗かせる冬紀はただ、溜息を吐いて、ふと呟く。

「こんな時良祐ならどうしたんだろう？」

誰も答えを持っていない状態でその問いは残酷すぎる。以前の彼の反応だったら多数決を持って決めていたかもしれないが、現在の彼は誰も知らない。

行方も、考え方も、誰と居るのかも、何もかもだ。

結果論で言えば、実質上のワンマンアーミーを経験した良祐はそのような方法は取らないだろう。意見を取り入れ、自分も立案に参加する。おそらく、そういう思考になっているだろう。

他人にばかり頼っているのは、彼は今頃、ゾンビの仲間だ。

故に、冬紀の問いは答えなど無い。現時点で良祐が居ない以上、当然の帰結である。

だが、元から答えなど無いことを知った上での問いかけ。冬紀は、考えを振り払う様に頭を振り、自身も作戦立案に参加していった。

「後、もう少しか？」

日没前、シヨッピングモールへと続く国道を走行途中、標識に書かれた文字を見て呟いた。

標識には 後15キロ と書かれていた。完全に陽が落ちる前に着ける距離だ。ただ、なんか。

「どっかした？」

なんて、様子がおかしい俺に、助手席に乗ったアーティは声を掛けてくれる。それに俺は、

「嫌な予感が……しないでも、ない」

曖昧な答えを、苦い表情で呟いてみたり。はっきり言って勘でしかないが、何となく、思う。

別に進行方向が変わったものがあるわけでもないし、変な音を聞いたわけでもない。

前方には変わらず、放置された乗用車や、事故った乗用車、ゾンビに噛まれて出た鮮血や、事故で死んだ死体が、まるでゴミの様に放置されているだけだ。なにも変わったところは、おそらく、無い。

「それじゃ、警戒だけでもしておきましょう」

こういう時、読心してくれるアーティが、少し、嬉しい。言いたく無いようなことも、その時の心情も、全部分かってくれる。若干面倒臭い時もあるが。

だから俺は、^さ覚られるのを承知で、心の中で感謝する。ありがとう、と。

「よし、スピード上げるか！」

言ってから、アクセルを少し、強く踏んだ。

車外に流れる景色が、速度に応じて、我先にと早く流れていく。

それきり俺もアーティも、無言になった。何故なら、会話の話題が無いからだ。

聞きたい事はある。が、どうせアーティ答えてくれないし。

「なにか……」

「んっ？」

とても小さく、聞こえるか聞こえないかぐらいの音量で、アーティは突然言葉を発した。

「何か言ったか？」

「なにか聞きたいこと、ある？」

それはとても魅力的なお誘いだった。アーティに聞きたいことなんて山ほどある。でも、

「そうだな……」

アーティは何でそんな事を言い出したんだ？研究所では話してくれなかったのに。

疑問はある。だけどそれ以上に、興味がある。が、唐突な心変わりになるのも事実。

視線だけをアーティに向けると、その表情は今までに見た事の無い顔をしていた。

俺はアーティじゃないから詳しく分からないが、彼女の表情は不安……なのか？

はあ……つたく。

「聞きたいことは無い」

「……えっ？」

俺の言葉が予想とは違ってたからか、アーティはさっきと同様、見せた事ない呆けた顔になっていた。

そんなに意外だったか？

「聞きたいことはない。けど、聞かせてもらいたいことはある」

「……」

くさ過ぎたか？これは俺のキャラじゃないな。けどまあ、これが俺の精一杯だ。

「話したくなったら話してくれれば良い」

やっぱりキモイな。これは俺のキャラじゃねえし。

アーティは何も言わずに、ただ意外そうな顔のまま俺の顔を見ていた。

止めるよ恥ずかしいじゃねえか。

「良祐、気持ち、悪いわ」

「区切らんでいい!!」

運転している俺の心を抉るな！事故るぞ!?

うわっと！言ってるそばから事故りそうになった!!

気をつけないと。

「……………ありがとう」

運転に集中していた俺は、アーティが何を言ったのか聞き取れなかった。

第42話 あれ？短くね？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

………短いですね。多分最短じゃないかと。

どうも最近、執筆意欲が湧かなくて。

御意見御感想お待ちしております。

第43話 あの金属の棒は音聴棒とも言つらしいよ(前書き)

おはにちは！ らいなあです！

遅くなつてすいませんでした！

いや、本当に申し訳ありません。色々あつたんですよ、色々。

とまあともかく、復帰したからといっても今回で急展開はありません。

文字数も少なめですしね。では、お楽しみください。

第43話 あの金属の棒は音聴棒とも言つらいよ

……帰りたい。

俺が生きてきた16年間で、ここまで帰りたいと思ったのは初めてだ。

眼前の光景はポジティブだった思考をネガティブへ持っていくのに数秒とかからなかった。

「現実逃避しても駄目よ」

もはや逃げ場はなくなった。

絶望した。鬱だ。オワタ。

「……………」

ヤバい。アーティがプルプルしてる。完全に怒り心頭の様子だ。

「なんかすいません」

「……別にいいけど」

アーティがキレる前に状況を整理しよう。

俺とアーティはショッピングモール近くまで来たが、大量のゾンビに遭遇した。しかも、変異種らしきゾンビも数体居やがるって話だ。……鬱になるだろ？

ただ、このゾンビの垣根を越えればショッピングモールにすぐ着くのは唯一の救いだっただ。

「……………つっても、車バツごときじゃ無理そうなんだよな」

ちゃんと突撃してもある程度は大丈夫な車……そう、ハンヴィーとかじゃない限り、この物量は押し負ける。そうなればどうなるか分かったものじゃない。

「なにか……なにか無いか？」

突破口を開くことの出来るなにか……。

物陰に隠れつつ、辺りを見渡してみる。だが、市街地の一角とはいえ、そうそう便利なものなど……と、諦めかけた時、視界の端に”あるもの”を見かける。

「あれは……」

こんな所にあつたっけ？ そう疑問が浮かぶ俺の後ろから、アーティが疑問の正体を口にする。

「配管の修理店のようね」

正しくその通り。2階建ての小さなビルの1階に、店舗のような佇まいでそれはあつた。

看板には配管修理専門店ハヤシと書かれていることから、ここがアーティの言った通りであることが分かる。

「もしかして……」

俺は1つの可能性を考え、そこに向かう。アーティは何も言わずに付いてきてくれた。

店の中に入ると、そこには普通の様相が広がっていた。何もおかしな所はないはずだ。……多分。

さすがにこのおかしな状況で配管修理専門店に入るバカはいないのか、店内は長机1つとイス5つがキレイに置かれていた。奥には扉が1つと、上に続く階段がある。

目的のものは恐らく事務所だと思うのだが……念のためくまなく探そう。使えるものがあるかもしれないし。

「アーティ。探して貰いたいものがあるんだけど」

アーティにも助力を願おう。1人で探すには些か広すぎる。日没まで時間もないしな。

「……わかったわ」

お得意な読心で俺の思考を読みとったアーティは、スタスタと奥の扉へと消えていく。

「たたく、話しがいのない奴だよ。楽だからまあ、いいけど。」

1分後。ようやく目的の物を見つけた俺は、アーティと1階の店舗で合流した。

「はい、良祐。懐中電灯と電池」

「あんがとアーティ」

アーティに探して貰ったのはありつただけの懐中電灯と電池だった。これから行く場所では必須であるからだ。

どこに行くのかって？ それは長机の上に広げられた何か地図の様なものが指し示してくれる。

「下水道の地下通路……よく行く気になったわね」

とは言うが、別に俺が進んで行きたい訳じゃない。地上からゾンビの垣根を強行突破するよりかは幾分かマシなだけだ。……もつとも、地下にゾンビがない保証はどこにもないのだが。

「ただの高校生が下水道を通らなきゃいけないなんてな。……はあ、イヤな世の中になったもんだ」

なんて愚痴ったものの、余計に気が滅入るだけだった。

このパンデミックの原因の一端は俺にあるかもしれないし。俺は全く身に覚えがないんだけどな。

湊が言っていたのを信じるとすれば、俺の親父も関わっているらしいし。どこにいるんだあの親父は。

「あゝ！ 考えるのはやめやめ！ 今は理奈たちと合流するのが先だ！」

無駄なことに思考を費やしたって貴重な時間が浪費されるだけだ。だからこそ先へ進むだけ。香澄さんが言った「俺が関わっている」という言葉。本当なら、いずれ真実が浮かび上がるはずだ。

俺はその言葉を頭の片隅に、下水道の地図を凝視する。

「俺たちがいるのがここ。ショッピングモールがここ。最短だと……」

「ショッピングモール地下の下水処理施設が一番じゃないかしら」

アーティが言った通りだな。そこが一番最適ではある。

ただと念のためもう少しルートを考えておこう。万が一があると

も限らないしな。

すると突然、俺の中で何かハジケた気がした。そうするとどうだろう？ 下水道の地図に数十のルートを無意識に書き込む俺がいた。

「俺、おかしくなったか？ すんげえ頭が回るんだけど」

自分自身のことなのにまるで分からん。さっきのバシリスクの時より頭が回っているぜ。

「それが貴方の力よ」

アーティはまるで当然のように言っているが、そうかなあ？
左手で後頭部を掻きつつ、半眼でため息一つ。

「まあ、こんな状況だから何が起きても不思議じゃないが。そーゆーもんかね？」

「そーゆーものよ」

アーティが言っただったらそーゆーもんだろ。

俺はあらかた地図に書き込むと、地図を丸めて懐に仕舞い込んだ。懐中電灯の1つを持ち、アーティに差し出す。

「いらないわ」

拒否られてしまった。なんにも見えなくなるぞ？

まあもつとも、化け物じみた力を持つアーティには必要ないかもしれないけどな。

「そっか」

懐中電灯2つに電池4本を持って、配管修理店から車へ移動する。シヨップピングモールに理奈たちがいる保証はないが、武器は全部持っていかない。ここに置いといて誰かに持って行かれてもシヤクだし、頭のおかしな奴らに渡ったら俺たちまで危険になりかねない。鍵閉めても窓ガラス割られるだろうしな。

俺は武器弾薬その他が入ったリュックを背負い、同じ様な物が入っているバッグを左手に持った。

「武器……は、まあ金属バットでいいか」

銃声が出る銃器は駄目だし、アーチェリーは邪魔になる。となれば、必然的に金属バットと短刀でやるしかないだろう。

すんげえ動きにくい装備ではあるが、右手の金属バットとアーティを頼りにしよう。

「んじゃ行くか」

「そうね」

俺たちは、一番近くにあった配管修理店の裏のマンホールへと向かった。

その途中で、配管修理店の廃棄品らしき山を見つける。

「ん？　なあアーティ、アレ使えそうじゃないか？」

その中に、まるでデカイ釘のような金属の棒を発見し、指さした。

「……………そうね。私が貰っておこうかしら」

アーティはそれを拾い上げると、マジマジと見つめる。

だが次の瞬間、彼女は中国舞踏顔負けに棒を振り回し、かつこよく演舞を決めた。

「……気に入ったわ」

「そ、それはよかつたな」

もう今更だからあまり驚かないけどさ。お前は本当に小学生か？
というか人間か？

とにかく、アーティが気に入ったのなら良い。これで戦力アップ
だな。

「んじゃ、気を引き締め直して行くか」

「ええ」

俺は廃棄品の中のバールを使い、マンホールを開けた。
中を覗いてみる。マンホールの中は真っ暗ではあったが、見えな
い程ではない。

安全を確認し、俺から先に降りる。うげえ、くっせーっ！
バッグ持つてるし、金属バットあるしですんげえ降りにくかった
けど、なんとか降りた。

「こんな感じなのか下水道って」

薄暗く、臭いもひどいし、きたねえし、人が住むのには適さない
場所だ。

まあ、だからこそゾンビにはお似合いではあるな。

「は、うちの女性陣は絶対に来たがらない場所だな」

理奈もああ見えてきれい好きだしな。アーティ位だろう、ここが

平気なのは。

「行きましよう」

「……はあ。そうだな」

第43話 あの金属の棒は音聴棒とも言つらいよ(後書き)

いかがでしたでしょうか？

……ま、まあ久しぶりですから。多目に見てください。

御意見御感想をお待ちしています。

第44話 人間を超えた人間（前書き）

おはにちは！ らいなあです！

トラブル発生！ キーボードのkが使えなくなりました！

インターネットに繋がなくなりました！ だから遅れましたー……。
……すいません。

第44話 人間を超えた人間

下水道をある程度進んだところで、マンホールから入ってきていた光が完全に見えなくなった。

かと言って辺りが見えなくなった訳ではない。下水道の中は俺の予想に反して、意外と明るかったからだ。

「懐中電灯必要になると思ったんだけどな」

これじゃあ折角持ってきた懐中電灯2つが無駄じゃないか。まあ、良いけどさ。

ゆっくりとした足取りの中、油断せずに金属バットを構えつつ、最短のルートで目的地を目指す。こんなことは一刻も早くおさらばしたいしな。

そんなことを考えている間に、最初の分岐点にたどり着いた。

「最初は右だよな？」

忘れていた訳じゃないが、念のためアーティにも確認する。俺の独断でミスりたくないし。

そんな考えを知ってか知らずか、聞かれた彼女は小さく頷き、肯定の意を示す。

「よし、行くか」

アーティの同意を受け、進路を右へと向けた。

そしてそれを数回繰り返したところで、大きな広間のような場所へたどり着いた。

「下水の集合する場所か？」

「……………でしようね」

アーティが言うんだから間違いない。

ここは、ここら一帯の下水を集めて処理場へと持っていく中継な
んだらう。もつとも、予想でしかないが。

「こういう場所ってあれだな。RPGだとボスが出るような場所だ
よな」

なんて不謹慎なことを言うのはご愛嬌ってね。

ただ、言うだけだったら愛嬌で済むだらう。しかし、

「そうね。肯定しておくわ」

「……………は？」

愛嬌で済まないのが俺の人生だった。

「……………慣れたけども」

十字でわかれた通路の3方向から、ゾンビがわらわらといらっし
やいました。本当に鬱だ。

唯一ゾンビがない後方、来た道に戻るように、俺たちはゾンビ
の群れから退却する。

「アーティ！ 2番目に最短のルートはどう行く？」

「2つ目の曲がり角を左」

俺は言われた通りの道を辿って、曲がった。すると、

そこにもゾンビが居ました。はい。

「アーティ、出来ればゾンビがないルートを教えてくれ」

アーティは悪くない。俺がゾンビが居ないルートを教えてくれと言わなかったのが悪いんだ。彼女は俺が言った通りに、2番目に最短のルートを教えてくれただけなんだよ。うん。そう思って諦めよう。

かと言っても戦闘は避けたかったんだがな。荷物が多いし。

「しょうがないわね」

俺を読心していた(だろう)アーティは、渋々と言った感じでそう呟くと、一際素早く加速した。そのスピードは今まで見せた中で一番早く、まるで世界陸上が子供のお遊戯会に見えるほどだった。……このレベルの陸上競技だったら、視聴率50はいけると思う。

100メートル6秒フラットよろしのスピードで駆け抜け、アーティは釘のような棒(後々分かったが音聴棒というらしい)で一番手前のゾンビを貫き、その状態で辺りのゾンビを蹴散らした。

遠心力で棒から引き抜かれたゾンビは、勢いそのまま近くの壁に激突し、無惨にも肉片と化してしまう。

すげえ。アーティは2アクションで、数十はあったゾンビの大群を退けてしまった。

「貸し一つよ」

「……考え……とくよ」

返り血で真っ赤になった顔で、アーティは妖艶に微笑んでいた。

俺、この貸しと同価値のものを返せる自信、無いよ。肋骨の一本は覚悟しといた方がいいかもしれないな。

後方から迫ってくるゾンビに急かされて走りながら、仏のような顔で覚悟を決めていた。

「撒いたか？」

辺りを確認して呟いた。アーティも首肯し、安全が確保できたところで足を止める。

「はぁ……前途多難だな」

走りずくめの上に、数十キロの荷物を持ったままじやさすがに疲れる。アーティが疲れていないのは荷物を持ってないからだと思いたい。いやホント。

だが、もうやばいかもしれない。いい加減に、十分な休息を取ってない体が悲鳴を上げてやがる。

ゾンビ発生から6日目。最初の頃はリーダーとして、今は一個人として、休息が取れる日はなかったと言っている。まあ、俺の気負いすぎともいえるが、それでもちゃんと寝たことはない。大体気絶だしな。

理奈たちと一緒にいた頃はマシな方だった。別れてからと言うものの、アイツらが心配で熟睡できたことはなかったから余計だ。体が悲鳴を上げるのも無理はない。

……………アイツら、元気かな？

怪我してないかな？ 病気になったりしてないかな？ まさか…

…しんで…っ！

俺なんかがどうなったっていい！ アイツらを失うぐらいだったら喜んで死んでやる！ でも…… アイツらが死んだら……。俺には……何も残らない。

「そんなことないわ」

また俺を読心していたアーティが、俺の思考に口を挟んだ。

「そんなことない！？ お前に俺の何が分かる！！」

また心を読まれた事への怒りか、はたまた俺の考えを否定された事への怒りか、俺は怒りを隠す気も無く声を荒げた。

このことで彼女は反省すべきだ。少なくともそんなことをあわや期待して言ったつもりもあるのだが、アーティはしかし。

「ほぼ、すべて」

「！！！？」

今、彼女はなんて言った？ ほぼすべて？

嘘だ。そう思う心の中で、本能が訴えかけている。

嘘だ嘘じゃない嘘だ嘘じゃない嘘だ嘘じゃない。

その2つが渦巻き、やがて俺の中で一つの言葉が浮き彫りにされた。

アイツの言葉は嘘じゃない。

「貴方が生きてきた約12年間を、私は、すべて、知っている」

恐怖。まず感じたのは圧倒的な恐怖。

それはアーティと初めて会った時と同様の、恐怖。

そして疑問と、謎。

なぜ彼女はそこまでのことを自信満々に言えるのか。

「お、お前は……誰なんだ？」

震える声で、無意識に絞り出した言葉は、アーティの雰囲気にも包まれ消えた。

彼女はゆっくりと瞬き、開いた瞼に隠されていた瞳は、赤く、紅く、血のように真っ赤だった。しかし、その瞳に見つめられた俺は、凍えるような寒さを感じ、体の震えが増す。

そして……彼女は語る。

「私はアルテミス。月と狩猟の女神の名を冠する者。そして……人間に替わってこの地に君臨する、新たなる人類」

全ての思考が凍結^{フリーズ}する。理解が出来ない。

彼女はなんて言った？ 人間に替わる新たな人類だと？

怖い。彼女が言っている意味が分からない。

何故なら、彼女の言葉が嘘じゃないと……本当だと分かるから。本能で分かるから。

だから恐怖する。言っている真実の意味がわからなくて。理解が出来なくて。

「そんな……」

怖い、怖い、怖い。

彼女の真紅の瞳に、俺の中の何か……奥底の……細胞のレベルで恐怖している。

彼女は俺の12年間を知っている。彼女は全てを知っている。人
を超えた人として知っている。
すべては彼女の手の中だ。

「ねえ、良祐」

第44話 人間を超えた人間（後書き）

いかがでしたでしょうか？

御意見御感想お待ちしております！

第45話 ふざけてない！まともにもふざけているんだ！

俺は俺の人生しか歩んでないから分からないけど、多分みんな同じだと思う。

子供の頃、特に小学校とか幼稚園（保育園）以前の記憶がない。そんなこと。

俺はそれが他の人より酷いと思う。確証なんて無いけど、俺は小学校2年ぐらいまでの記憶がない。

気付いたら小学校2年で、クラスの人気者で、円さんがいて、姉貴がいて、そばにサクラがいた。

だから実質、俺は9年間ぐらいしか記憶がないということになる。

それなのに、アーティは俺より俺を知っている。

別に証拠があるわけでもないし、口からの出任せの可能性だってある。

でも、俺の中の細胞の1つ1つが、それを事実だと、真実だと訴え掛けてくるんだ。

俺はそれに抗えない。抗うことができない。だから、俺は全てを受け入れるしかない。

「ねえ、良祐」

「……な、なんだ？」

アーティは雰囲気を一転させて、ゆっくりと俯いた。

その様子に先程までの異質感は無い。ただの少女にしか見えなし、感じもしない。

一転した雰囲気感に感化され、一寸一秒たりとも働いてなかった俺の脳がゆっくりと働き始める。

アーティを見つめ続けていた時、ふと冷静になり始めた思考が少しの異変を感じ取った。

まさか……アイツ。

俺の中に流れ込んでくる謎の感情が俺の物でないと感じた瞬間、アーティの雰囲気の意味が分かり始めた。

ひよっとして、アイツ不安なのか？

よくは分からないし、その不安が何に対してかも分からないが、それだけは確信できる。

人間が単純というか俺が単純というか。

そんな心情を察してしまった俺は、ほぼ無意識に手を伸ばした。

「えっ？」

右腕で彼女を抱き寄せ、胸に埋める。それはかつて、早織にしたように。

意味なんてないし、俺もやってからどうしようなんて考えているが、やるしかなかった。

いや、それしか不安を取り去る術を知らないんだ。だから無意識にやってしまった。

「今更なんだよな」

「……？」

でも後悔はないし、気恥ずかしさもない。

ただ俺は、アーティの不安を取り去るために言葉を選ぶ。

まあもつとも、気の利いた事なんて一つも言えない。それっぽいことだけを語るだけだが。

「お前が俺の12年間を知っていると、お前が人に替わる人とか」

本当に今更過ぎる。そんなもの冗談でも笑えねえ。

アーティと出会って1日程度。まるで子供の頃から居たような錯覚もするが、それ故に彼女が……アーティがどんな奴か分かってしまっ。

「お前は今まで何でも知っていたし、最初から俺の名前も知っていた」

「ライト 思えば最初に出会ったときも俺の名前を知っていたし、アイマ 充電式自動発光体だって知っていた。」

「すんげえ強いし、俺よりよっぽど大人っぽい」

最初の建設現場で有り得ない身体能力を発揮し、ゾンビの垣根を踊るように避けたし、バシリスクの頭を手刀でバツサリいった。

「なんで俺はさっきビビってたかなあ」

「……………」

「アーティがそんな奴だつて、強いって、物知りだつて、俺は最初から知っていたじゃないか。」

「ホント、全部今更なんだよ」

だから、だから、

俺は軽蔑しない。

引かない。

気味悪がない。

嫌いにならない。

「だからそんな顔すんな」

俺はずっとお前の味方だ。そこまで言ったところで、アーティが小刻みに震えだした。

俺はそれに何も言わない。ただアーティに胸を貸すだけ。

「良祐」

「ん？」

アーティは顔を埋めたまま、小さく呟いた。

「ありがとう」

今度はハッキリ聞こえた。何に邪魔されるわけでもなく、よく通る声で。

俺はそれに驚き、笑った。

「うわっとと」

そうしていたら唐突に弾かれた。
何だ？　と思ってアーティを見るが、

「早く行くわよ」

そう言っただけで早々に歩きだしていった。
でも俺は見逃さなかった。アイツの瞳めからこぼれる雫を。
何だ。十分か弱い乙女じゃねえか。全然化け物じゃねえじゃん。

拍子抜けというか、安心したというか。

「行くか」

俺はすんげえニコニコしながらアーティを追った。

結果としては正しかっただろう。いや、正しかったはずだった。
さっきまでは。

シヨツピングモールの前に陣取ったゾンビの垣根を超えるために、
音でおびき寄せる作戦は悪くなかったはず。

事実、滞り無く作戦は成功した。でも、聞いてない。知らない。
”あんな奴”がいるなんて。

「ぐぬぬっ……」のおっ！

理奈はベネリで噛みつかれるのを防ぎ、力任せにゾンビを押し返す。

そして構え直し、引き金を引くが、放たれた12ゲージは目標ターゲットの
後方にあるゾンビにめり込んだだけだった。

「うわあ〜！ ちょこまかと！」

この行程が何回も続いているからか、理奈は激しく地団太を踏んだ。

「理奈！ 後ろ！」

「！？」

駐車場に響いた冬紀の声に振り向けば、そこにはゾンビが1体、今にも噛みつきそうなほど大きく口を開けて理奈に迫ってきていた。しかしそのゾンビは、理奈に噛みつく前に力無く崩れ去った。見れば頭に貫かれた痕がある。

「早織か！ 助かった！」

遠方のハンヴィーの上で、寝そべって狙撃銃を構えたまま、小さく親指を立てている早織の姿が窺えたから間違いないだろう。

それよりも今、この事態が非常にマズイ。

理奈と冬紀がそれぞれで孤立しているのもあるが、ハンヴィーに他の5人が取り残されたままだ。このままだと個別にやられて全滅の可能性大。なんとか立て直さなければならぬのだが……

「こつ多くちゃ、どうしようもできねえよ！」

現在、そうはいかない理由がある。

それは新たな変異種、走るゾンビの存在だ。

奴らはたった8体ながらも、ゾンビを殺しなれたはずの理奈たちをここまで追いつめるに至った。

ヒット&アウェイ。走るゾンビのそのスタイルは、最も効果的で、最も厄介なものだった。

「くっ！ このままじゃ……！」

冬紀の悲観も頷ける。しかし、それを許さない人間が1人。

「諦めんな！ 頑張れば何とかなる！」

——理奈だ。両親の死からか生に執着する思いが人一倍強い彼女の叫声は、折れ掛けた心をもう一度奮い立たせるには十分だった。

「でもどうすれば！」

しかし、奮い立ったところで現状を打破できるわけでもなく、絶体絶命は変わらない。

刻一刻と追いつめられていく中で、どんどん死が迫ってくる。そして……崖から足を踏み外すように、

「しまっ!?!」

弾薬が切れる。

理奈は弾薬を入れているポーチに手を入れるが、あるべき物はそこになく、抵抗する術を失ってしまった。

冬紀が叫ぶ。早織がカバーする。だが、間に合わない。間に合わない、間に合わない、間に合わない、間に合わない。

……最後に、死が襲いかかってくる。

ゾンビが理奈の数十センチ先に迫った時、彼女は思いっきり眼を瞑った。

終わった。誰もがそう思った。

「きゃああああああ！！」

叫ぶ理奈……………に、響く”銃声”。

「……………え？」

数十センチ先まで迫っていたはずのゾンビは、脳天から鮮血をまき散らし、その場で崩れ去る。

そして、その向こうにいた人物に息を呑んだ。

「え〜っど？ 何これ？ どうゆう状況？」

頭を掻きながら右手に”USP”を構えた少年。言わずもがな、良祐だ。

彼は状況を呑み込めていないようで、頭に？マークを浮かべて首を傾げている。

後方にいた”白い少女”がアレコレ呟くと、良祐は「おおっ」と理解したようだ。

「仲間のピンチにカッコ良く登場しちゃったわけね。オーケーオーケー」

変な理解の仕方だった。

「まあ、こいつら殺^やっちゃえば良いってことだろ？」

そう言つと良祐は、カバンとリュックを降ろして駆け出した。
向かってきた走るゾンビに足払いを掛け転倒させ、そいつの頭を
USPで撃ち抜く。

「まず、1」

次に向かつてきたゾンビ3体を2体はヘッドショット、1体は腰
から引き抜いた短刀を眼に突き刺して倒した。

「4」

そしてもう1体の走るゾンビを跳び蹴りで転倒させ、頭を思いつ
きり踏み潰した。

「んで5だ」

そこまでした頃には、理奈のすぐ近くまで来ていた。

「……………」

「まあ、話は後な」

良祐は理奈の手を引き、冬紀の下へ駆け出す。

途中、進路上のゾンビをUSPで退け、冬紀の下へたどり着いた。

「良祐……………」

「はいはい、話は後」

何か言いたそうな冬紀を遮り、付いてくるように言い渡した良祐
は、ハンヴィーの方へ叫ぶ。

「早織！ ショッピングモール併設の立体駐車場だ！ ねじ込め！」
それだけ言っつて、迫るゾンビをすり抜けて走った。
後方でけたたましいエンジン音が聞こえたことから、声が届いたことが確認できる。

良祐は手を引いている理奈を気に掛ける。まだ現実感が無くて放心しているようだ。

「あゝ……………理奈」

「……………」

彼は振り返らず、少し気恥ずかしそうに小さく告げた。

「ただいま」

すると、理奈は見るからに放心していたような表情を満面の笑みに変えて、

「じゃ、許す！」

元気になった。

それから良祐たちは、アーティと合流して職員専用出入り口に駆け込み、早織たちは立体駐車場の中へハンヴィーを押し込んだ。

「冬紀！ 俺は立体駐車場のシャッター閉めるから、お前は職員の出入り口閉めとけ！」

「了解！」

冬紀は近くにあった棚やら何やらを扉の前に置き、簡易的だが支えとした。

良祐は良祐で事務室のような場所に入り、一際大きなレバーを倒した。それが立体駐車場のシャッターに連動し、数体のゾンビの進入は許したものの、その他のゾンビは完全にシャットアウトしたようだ。

「はあ、疲れた」

こうして局面は1人の少年の参入によって大きく好転した。

1人も欠けずに生き残ることができたのだ。

第46話 ヤーさん関係を語る上でマカロフとポン刀は外せないよね

事務室で駐車場のレバーを倒した俺は、そばにあった事務机の上
にドツシリ腰をかけた。

「良祐！」

「良！」

待ちわびたというか、信じられないというか。仕事を終えた冬紀
と理奈は、大急ぎで事務室に顔を出す。

少しして、ゆっくりとした足取りでアーティも顔を見せた。

「どうしたお前等。そんな、死んだと思っていた奴が数日後にベス
トなタイミングで現れたみたいなりアクションは」

「正にその通りだからだよっ！」

いいなあ、数日ぶりの理奈ツッコミ。何故か癒される。マイナス
イオンとか出てるんじゃないの？

まあ、実際はそんな事あり得ないのだけど、ここ数日はツッコミ
に飢えていたからしょうがない。

「良祐……」

しまった。久しぶりの日常に自分の世界へレッツゴーしてしまっ
た。

冬紀から変な目で見られてるじゃないか。

「悪い悪い。また、こう出来ることが嬉しくて」

とは言ったものの、それは2人も同じ様で、無意識に笑顔になっていた。

「言わなきゃいけないことが沢山あるし、聞きたいことも沢山あるけど、まずは他のみんなと合流しよう」

「そうだね」

「おう」

休憩もそこそこに、事務机から飛び降りてアーティの所まで歩く。すっかり忘れていたけど、アーティは俺が置いてったカバンとリュックを持ってきて貰っていた。

「ほら、カバンとリュック」

「忘れていたでしょう?」

気のせいだ。そう心の中で思っておこう。

荷物を受け取り、事務机の上に丁寧に乗つけた。金属バットやら、銃器やら、弾薬やらが入った大切なものだしな。

「理奈。12ゲージの弾もうないだろ? とりあえず30発程度補給しとけ」

「あ、ありがとう」

カバンの中を漁って、12ゲージ弾を30発理奈に渡す。それから理奈の姿を確認して……。

「あと、サブになんか持ってた方が良さ……」

確か拳銃ハンドガンが何挺かあったはずだ。

遠くから当てられなくても、噛まれそうな位近くだったら簡単だ

ろう。ましてや撃つたこと無いド素人じゃあるまいし、ライオットガンを使っている理奈なら楽勝だろうしな。

俺はカバンの中から、ある意味でも有名な拳銃を出した。

「てれれれつてれ〜。ヤーさんが大抵持っているマカロフ〜」

年度で警察署が押収した銃を統計した結果、2000年前後ぐら
いからトカレフを抜いてこのマカロフが1位になったとか。暴団
関係は大概持っている、とても（その筋関係では）メジャーな拳銃
なんだね。

俺がこの銃器たちを手に入れたのは警察署だから、勿論あつたし
な。

理奈にマカロフを渡し、あれこれ説明する。

やれ弾薬が9ミリマカロフ弾とか装弾数が8+1発とか作動方式
がストレート・ブローバックとか。

まあもつとも、欠片も理解した様子は見て取れなかったけどな。

ともかくマカロフ自動拳銃とその弾薬24発（弾倉3つ）を理奈
に手渡し、冬紀にもプレゼントを手渡した。

「お前にも弾薬と……日本刀だ」^{ボン}

冬紀が使っていたのは古ぼけた鉄パイプとイサカM37だったか
ら、12ゲージ弾と日本刀を支給した訳だ。

イサカM37は12ゲージ弾を使用する装弾数4発のポンプアク
ション散弾銃。^{ショットガン}

これも結構メジャーで、映画だとターミネーター。ゲームだとメ

タルギアソリッドシリーズ、バイオハザード5、コールオブデューティー。アニメだとひぐらし、ルパン三世。マンガでも学園黙示録などで使用される、知る人ぞ知る散弾銃なのだ。

日本刀は警察署で見つけた。マカロフと一緒に押収されたそつち関係のものだろう。うん。

「俺は剣道出来ねえし、冬紀が使った方が良いだろう」
「……そうだね。受け取っておくよ」

理奈と冬紀に支給しても、まだまだ荷物は減らないものだ。そう考えながら、荷物を手に取り、アーティの後ろに回った。

「ちなみにこの子はアーティ……じゃねえ、アルテミスだとき。以上。質問は受け付けない」

「はいはい！ 何歳なんですか？」

「日本人なのか？」

「質問は受け付けねえって言っただろうがっ！！」

全く話を聞かない奴らである。殴っても良いかな？

「年齢不詳！ 人種国籍不明！ 後はみんなと合流してから！」

荒々しく言い放つと、アーティを連れて事務室を後にした。

後ろから何か言っているが、完全無視である。

幸いなのか不幸なのか生存者とは出会わずに立体駐車場まで来た上、途中でゾンビとも変異種ともはち合わせることにはなかった。おそらくゾンビが進入する前から防犯シャッターが降りていたおかげで、店内への感染拡大は防げたのだろう。立体駐車場のシャッターが降りていなかった理由は不明だが、そっちに進入していたゾンビは理奈たちのドンパチであらかた退出しただろうから、先程の数体だけに注意していれば何も問題はないはずだ。

俺たちは細心の注意を払いながら、立体駐車場1階、閉鎖したシャッターの前まで来ていた。

「従業員通路はこんな所に繋がっていたのか……」

真後ろでシャッターに群がるゾンビたちを横目に、従業員通路の扉を閉める俺。すんげえ余裕だなおい。

「一応この中にもゾンビがいるだろうし、気を付けないとね」

冬紀もなかなか余裕だ。場数が何とやらだろうか？ 頼もしい限りだ。

「余裕、余裕！」

理奈も同様に。

「早く行きましょう」

アーティも、のようだ。

……………あれ？ マトモな感性の持ち主はいないのか？

いや、俺も同じだから人のこと言えないけどさ、もう少し怖がってもいいんじゃないだろうか？ だつてすぐそこにゾンビが居るんだぜ？ シャッター越しに俺たちに手を伸ばしているんだぜ？ 何故余裕？

「……………行くか」

果てしない論理迷路ロジックラビリンスに陥る前に、思考を中断させるよう、声を出した。

類は友を呼ぶつて奴だな、きつと。俺はそう断言して歩き始めた。

ゆったりとした斜面を登っていくと、ショッピングモール本館の2階に通じる、F2駐車場にまで出た。

辺りを見回してみても、早織たちが乗ったハンヴィーも、それを追ってきたゾンビも見当たらない。

「次は3階だな」

早々と先に行った3人を追い、俺も3階へ登る。そこにも、早織たちやゾンビは居なかった。

……………アイツ等は一体どこまで登っていったんだよ。

何てことを考えていたら、3人が居なくなっていた。

「あれ？」

4階へ行く斜面を見ると、探していた3人が早速見つかる。俺は全力で追いかけて、

「勝手に先行くなって!!」

怒鳴りつけた。が、しかし。3人は3人して俺の方を見ずに、どこか一点を見つめたまま微動だにしない。

疑問に思いつつもその視線を追って、4階の中心あたりを見た。

そこには早織たちが乗ったハンヴィーと早織たち5人。それと2体のゾンビに1体の走る奴。ついでに……。

「わ〜お。デツカい蛇だね」

本日2度目の遭遇、バシリスクちゃんでした！

「いやいやいやー！」

ノリツッコミしてしまった。不覚！ じゃなくて！ 何でここに
いんの？

まあ、考えられる理由としては、立体駐車場に進入したゾンビの中にバシリスクの本体が居たって言うのが、もっとも確実なものかなあ。

勝てなくはないけど面倒くさいんだよね。それにほら、俺疲れてるし。というわけで。

「俺、ゾンビ3体やるから。バシリスクはアーティよろしく」
「貸し」

「手厳しいなあ……OK、誰も怪我しなかったら貸しで良いよ」
「お安いご用」

そう言うとアーティは、バシリスクの方へ駆け出した。

俺は俺でX-7を取り出し、HUDスコープを起動させ、モード

スナイパーズオート

S、単射でまだ俺たちに気付いていない走るゾンビをヘッドショットする。

そして残りの2体も手短かにKILLし、スコープの電源を落としてアーティの方を見た。

アーティは手に持った音聴棒を振り上げ、槍投げの要領で思いっきりブン投げていた。

それは的確にバシリスクの胴体を貫き、中にある本体ゾンビを後ろの壁に礫にしてしまう。勿論、脳天を貫いて。

「……………前回もお前がやってくれば良かったのに」

小さな蛇が消えゆく中、呟いた俺の言葉を遠方から理解し、

「いやよ」

と呟くアーティが見えた気がした。

第47話 出会う奴には気を付ける。出会わない奴にも気を付ける(前書き)

お楽しみください

第47話 出会う奴には気を付ける。出会わない奴にも気を付ける

俺たちは早織、サクラ、姉貴、円さん……………それと藤崎（えっ？ ……忘れてないよ。うん）と合流すると、立体駐車場内のゾンビ（居るか知らんけど）の掃討に乗り出した。理由は簡単。駐車場のゾンビを全て倒してしまえば、事実上、ショッピングモール内のゾンビは居なくなったことになる。……………多分。

警備室にでも行けば監視カメラで一目瞭然だろうが、それは後回しだ。先のことを案じるより、今の危険をどうにかするのが俺流だからだ。

ともかく駐車場内にゾンビが居ないことを確認した俺たちは、ようやくショッピングモール本館へと進入した。

「このショッピングモールは初めて来たな」

今は最上階である5階。まあ屋上とも言っただけだね。

ここは駐車場直通のイベントスペースみたいなところのようで、立体駐車場を登って行ったらここに着いた。

ここも駐車場の一部だからか、それとも建物の5階としてだからか、コンクリートの屋根が作られていた。と言っても、駐車場の延長みたいな質素なものだが。

「遠いものね」

俺の言葉に、早織が追加で理由を述べてくれた。こうして話すのも久しぶりのような。

ちなみにさっき話した限りでは、早織は戦力として数えられるほ

ど成長したとか。

何でも幼い頃から田代さんと一緒にいたせいかな、銃器の知識と扱いを自然と覚えてしまったらしい。

俺が居なくなっただけから銃器を使っている内に思い出してきた、と本人は語っている。それと得意なのは実戦射撃じゃなく狙撃だとも言っていた。

香澄さんの銃に田代さんの技術。あの2人は早織の力となっていて生き続けているんだな。俺は素直な感想として、そう思った。

「僕は市外だから機会ないしね」

冬紀は銃器の扱いが少し上手くなっていた。とは言っても、ヒョコにトサカが出来てきた程度だが。

やはり剣道少年には銃より刀剣の方が割に合うらしい。おかげで近接武器の上達は銃の何倍も早かったとか。やはり冬紀は根っからの剣士のような。頷ける。

「アタシは家の近くのスーパーの常連だしな」

理奈は持ち前の運動神経に磨きが掛かったと言っていた。事実はどうか知らないが。

銃器の扱いも上達し、実戦射撃ではパーティーらしい。(俺が居ない時)

狙撃はてんでダメだが、散弾銃ショットガンと相性が良いらしく、少ない弾薬で最大の戦果を挙げられるまでに成長したとか。

「あ、それ私です！」

円さんはあまり前線には出ないようだ。専ら藤崎と狙撃中の早織

の護衛を専門として戦ってきたらしい。

「お姉さんも！」

姉貴は人並みに戦えるようになったらしい。今でもMPSを愛銃として、後方支援に勤しんでいるとか。

「私は来たことあるけど、あまり詳しくは……」

サクラは護身槍術を生かし、多対戦を得意としているらしい。銃器は得意じゃないらしく、申し訳程度にベレッタ901TWOを装備している。使えるかどうかは……知らない。

「サクラさんと同じです」

藤崎は……まあ、うん。ボチボチだな。

「……何か言いました？」

「気のせいだろ。ハハハハ……」

言えない。会話の内容を忘れたなんて言えない！

「……はあ」

後方からアーティのため息が聞こえた気がした。……多分。

とにもかくにも俺たちは今、屋上のイベントスペースからの室内進入を試みようとしていた。

目的地は警備室。監視カメラの利用と拠点の確保。もしくは生存者との接触か探索をするためだ。

監視カメラがある警備室は生存者にとって便利なものだから、いるとしたら警備室だろう。もし警備室にいらなくても、監視カメラで探せばいい。

シヨッピングモールの食料や物資は限られている。まずは生存者と交渉しなければならぬからな。

事前の情報で警備室が3階にあるということは承知済みだ。そこから各階へ繋がる専用の通路があることも勿論知り得ている。つまりその通路を目指せばいいわけだ。……だが、

「でも、警備室へ繋がる専用の通路ってどこにあるんだ？」

そう、当面の問題はそれだ。大抵こういう場所は、防犯上の理由や客が間違つて入らないために、通路の入り口はカモフラージュされている場合が多い。それはここも同様のようで、通路の入り口は分からずじまいだったのだ。

通路さえ分かれば、わざわざ3階にまで行って客用のデッキに張り紙が扉に張つてある警備室の扉を叩く必要はない。

まあもつとも、専用通路が分かったところで鍵が掛かっていれば無意味なのだが。

「それは後にしよう。まずは3階の警備室まで行って生存者の有無を確認しなきゃな」

専用通路は警備室まで行けば分かるだろうし。と言うと、8人は頷いて物資と武器の確認を始めた。

俺は屋上にまで上げてきたハンヴィーの中を確認して、忘れ物はないか探る。

武器や物資を置いていけば持つて行かれる可能性があるからな。その辺りは抜かりがないのだ。

ハンヴィーから離れ、俺も装備の確認を入念にする。

今回はゾンビを誘い出す意味を含めて銃器で戦おう。外に関しては問題ないとして、内に1体でもゾンビがいればそこから感染拡大してしまう恐れがある。故に今回は緘滅戦だ。銃器は……MP5Kクルツで行こう。

本当はX-7フルメンテナンスを使ったかったが、東野でのミュータントの攻撃、連日の使用、完全整備の欠如などの問題を受けて、少しながらも動作不良が起きてしまった。まだ撃つなどの動作に問題はないが、さっきのゾンビ3体をヘッドショットした時から、Sモードへ切り替えられなくなってしまったのだ。

ライオットガンは理奈が気に入ってるみたいだし、俺は理解を深めるためにも別の銃器を試してみることにした訳である。

マガジンをクルツチェンバーに装着し、コッキングレバーを引いて薬室に弾丸を装填する。

セレクターレバーセミを単射に設定すると、俺は室内への入り口へと歩きだした。

「行くぞ」

途中、歩きながらそう言い、みんなが頷くのを確認してから、入り口の扉を開け放った。

中には使えるのか分からないエレベーターと稼働を停止したエスカレーターがあるだけで、他にはベンチぐらいしかなかった。どうやら5階はイベントスペースしかないようだ。

下へと降りるエスカレーターをのぞき込むと、動かないだけである。問題はないように見える。

俺は指で合図すると、アーティに殿しんがりを任せて一足先に下へ降りた。

「誰も……いないな」

辺りを五感で探るが、店内は荒らされた様子もなく、人が居る気配もなかった。

上の冬紀に親指を立てて、安全確保を伝える。程なくして8人が降りてきた。

「アーティ。何か気配は？」

「……いいえ。感じないわ」

念のためアーティにも確認させてみるが、同様のようだ。ならばと、エスカレーターでさらに下へ降りた。

3階に辿り着いた時、変な雰囲気から漂ってくる。それが何かは分からないけど、けして良いものではないことは断言できた。

「……誰だ」

ゾンビか、はたまた生存者か。どちらにしても刺激しないように、小声で確認をとってみる。

しかし当然のごとく、何も言ってくることはなかった。

五感を最大限発揮し、360度全方向に注意を向ける。

そして硬直状態のまま10秒を超えたところで、先方が動きを見せた。

来るっ！ 俺はそう直感して、一番異様な空気が強い場所へクルツを向けた。

「動くなっ！」

「っ！！」

何かがクルツの銃口マスルの先で停止する。油断せずに先の何かを見る
と……

「……人？」

銃口の先にいたのは40代位の白髪の男性。シルバーフレームのメガネを掛けて、手にはバットが握られていた。

「君は……ゾンビじゃないのか……？」

俺はゆっくりと頷く。むしろゾンビに見えるのかって話だけどな。男性は納得がいったようで、振り上げていたバットを下ろした。どうやらさっきの異様な空気はこの男性の気配だったようだ。もしかしたら殺気と言っやつかもしれない。

「あなたはここの生存者ですか？」

情報収集のために問いかけるが、

「ああ、そうだけど。それとそのMP5Kクルツを下ろしてくれるかな
「あ、すみません」

礼を欠いたことを指摘されて、急いでクルツの銃口を下に向けた。

……？

「どつしてこの銃の名前を？」

MP5は日本のSATや空港警備隊などたくさん場所で使用されているから見たことはあったとしても、これがそれを小型化したMP5Kクルツだというのは分からないはずだが。もっとも、ガンマニアなら話は別だ。

そうゆう意味合いを持たせた言葉をぶつけると、男性はハハハと笑って訳を話し始めた。

「私は兵器製造の工場に勤めていてね。そう言うモノには詳しいんだ」

なるほど、どつりで。珍しい職業についているんだな。

俺が別の質問をぶつけようとした時、ふと後方から聞き覚えのある呻き声が耳に届いた。

「……！」

発作的に声が出た方へ銃口を向ける。そこには………毎度おでまし、歩く屍が居た。

視認できるだけで5体。何れも変異種ではなかった。

俺はとつさにトリガーに指をかけ、片手で3発、手前のゾンビの額に浴びせる。

反動で照準が少しブレたが、近くだったのが幸いして全弾命中した。

「次っ！」

セレクターレバーを連射^{フル}に設定し直し、今度は両手で2体のゾンビにばらまいた。

数発外してしまったが、残りは的確にゾンビを無力化する。

他の3体を相手にしている間に、残りの2体が結構近くまで迫ってきていた。

しかし俺は冷静にバックステップで距離を置く。すると、視界の端でさっきの男性がバットを振り下ろしている姿が鮮明に映った。1体の無力化には成功したみたいだが、もう1体が男性に迫る。

彼はゾンビに迫られているのに余裕で、俺の方へアイコンタクトしてきた。……………マジカヨ。

しょうがないので、ご要望通りフルオート射撃で男性に迫るゾンビをケチらしてやった。

「……………危ないじゃないか！」

「あんたがやれって言ったんだろっが！」

「掠めるとは思ってたよ！！！」

「俺は訓練された兵士じゃないから当然だろ！！！」

なにやら言い合いが起きてしまったが、無事にゾンビの撃退に成功した。

「良祐！ 大丈夫か！！！」

銃声の影響か、上から降りてきた冬紀が心配そうな表情で駆け寄る。

「大丈夫だ。安全確保したし、みんなを呼んでこい」

「あ、ああっ！！！」

とりあえずまあ、無事な姿を見せて、冬紀にみんなを呼びにパシ
らせた。

「どつやら仲間がいるようだね」

「まあ、アイツ含めて8人ほど」

エスカレーターを急いで登っていく冬紀を見ながら、男性の質問
に答える。

「そうか。じゃあ、立ち話もなんだね。警備室に案内するよ、リー
ダーさん」

優しく言ってるのだったが、俺には「聞きたいことあるだろう?」
とまるで上から言っているように聞こえた。

男性はそのまま歩き始め、先に闇に消えていく。しばらくその後
ろ姿を見ていた俺は、4階から降りてきた冬紀たちと一緒にその後
を追った。

第47話 出会う奴には気を付ける。出会わない奴にも気を付ける（後書き）

いかがでしたでしょうか？

あまり話は進みませんでしたね。まあしょうがないんですけど。

ちなみに良祐君の銃に関する知識は自前ではありません。田代さんから聞いたり、湊ちゃんから聞いたり、押収品資料を見たり、早織ちゃんから聞いたりしています。

……受け売りばかりですね。御意見御感想をお待ちします。

第48話 怪しい所は無い。だからこそ怪しい時もある(前書き)

お楽しみください

第48話 怪しい所は無い。だからこそ怪しい時もある

俺は歩きながら、無くなり掛けてた弾薬を再装填リロードするためにクルツから弾倉マガジンを外す。弾薬ポーチから新しい弾倉を取り出すと、無くなり掛けていた弾倉をポーチにしまった。そして新しい弾倉をクルツに装着し、コッキングレバーを引いて弾薬を装填すると、クルツを肩に掛け直した。

今度はレツグホルスターからUSP自動拳銃を引き抜き、安全装置セーフを解除、遊底スライドを少し引いて薬室チェンバーに弾薬が入っているか確認する。中には何も入っていなかった。

遊底を元に戻し、安全装置を掛けてベルトに挿し戻す。

諸装備のチェックを終えて、前方を歩く男性に視線を移した。

「あの……」

「ん？ 何だい？」

彼は後ろに振り向かず、前を見たまま答えてくれる。

そう言えば、と名前を聞いてないことを話すと、少しして返答が返ってきた。

「私は幸田唯正「いっただただまおの。先だって言った通り兵器製造の工場員だ」

返答を受けて、俺たちも名前を告げる。……藤崎の名前が覚えられない。

それはともかく、幸田さんはアーティの名前を聞いた時、驚愕の表情で凍り付いた。

「アルテミス……？」

「どづかしましたか？」

後方に続く冬紀が幸田さんの異変に声を上げる。しかし彼は直ぐに元の表情に戻ると、何でもないと手を振った。

「いや、変わった名前だなんて思っただけ。神話の女神の名前なんて」

まあ、もつともだ。外人でもそうそう居ない名前だしな。当の本人は素知らぬ顔で一番後ろを歩いてるし。

会話に一区切りついたところで、俺は別の話題を幸田さんに振る。

「ちなみに生存者は幸田さん以外に何人居るんですか？」

予め知っておきたい意味で問いかけたのだが、返ってきたのは予想していなかった言葉だった。

「いないよ」

「……え？」

まさかの言葉に開いた口を閉めるのを忘れてしまう。きっと今俺は、相当バカみたいなお表情をしていることだろう。しかしそれは、決して間違っていない反応のはずだ。現にみんな（アーティ以外）、俺と同様の表情をしている。

「どづして？」

サクラがふと出した言葉に、幸田さんは補足で言葉を継ぎ足した。

「ああ、誤解しないでくれ。私が来た時には誰も居なかったんだ」

なるほど、幸田さんは最初からここに居た訳じゃないのか。恐らく逃げてきたのだろうが、ここにはもう既に生存者は居なかった訳だ。どこかへ行ったか、はたまた全滅したか。どちらにしる前者の確率は低いだろう。これほど良い場所を手放す理由がないしな。まあ、問題が無ければの話だが。

「私が考えるに、防犯シャッターが下りた時には既にゾンビが内部に進入していて、それに気付かず寝泊まりをした生存者から感染が広がったと考えている」

そして……全滅した。辻褄は合っているな。間違いないだろう。ただ、何か引つかかる。幸田さんは口調も優しく、発言も行動も何もおかしい所はない。でも信用できない。発言の裏にスゴく高圧的で人を見下しているような感じが………しないでもない。

『良祐』

と脳内にアーティの声が響く。どういう原理なんだよ。

「何だアーティ」と脳内で返答すると、程なくして彼女はたった一言だけ告げた。

『その男には注意しなさい』

それきり声は聞こえなくなった。前々からこんなことはあったが、未だにどういう原理なのか理解できない。それはともかく、アーティが言うんだつたら幸田さんは怪しいのだろう。信用するにはまだ早いつてことか。油断せずに接するしかないな。

「さあ、着いたよ」

幸田さんがとある通路の奥で振り返った。どうやら警備室に着いたみたいだ。

彼の背中にある扉には、関係者以外立ち入り禁止と書かれたプレートが鎮座している。そのことからここが警備室というのは本当のようだ。幸田さんは警備室の鍵を開けると早く入るように促す。俺たちは俺を先頭にそれに従った。

「うわぁ……………」

「スゴいですね……………」

姉貴と円さんが感嘆の呟きを漏らす中、彼は警備室の鍵を閉め、監視カメラのモニター前のイスに深く腰掛けた。手に持っていたバットを杖代わりに俺たちを見据える。

「まずは隣の部屋に荷物でも置いてきなよ。話はそれからだ。

聞きたいこと、あるだろう？ 僕も何で銃器を持っているのか、聞きたいなぁ」

異様な雰囲気醸し出す彼に、俺は言いようのない気持ち悪さを感じた。

「そうか……………そんな経緯があっただね」

すべてを語り終えた俺たちに、最初に言った言葉がそれだった。彼からも同様に話を聞いたが、要約するところだ。

彼はラグナロク社の軍事科学部門、その主任研究員なのだが、とある先方とのミーティングで日本に帰国した際、ゾンビ発生に遭遇山の上にあるラグナロク社研究所から命からがら脱出した。しかし町にもゾンビは溢れていて、為す術も無く呆然としていた頃、ショッピングモールを発見。研究所から持ってきた試作サンプルを片手にここに駆け込んだと。そう言うことらしい。

試作サンプルも敵との戦いで壊れ、いよいよヤバイと言う所で俺たちが来た。と本人は語っている。それが事実かどうかは定かではないが、嘘についているようにも見えなかった。

「私は武器もないし戦えないから、もし良かったら君たちの銃器のメンテナンスをさせてくれないか？」

俺たちの銃器がともにメンテナンスされてないことを見越しての発言なのだろう。

「本当ですか!？」

「マジで!？」

「本当に!？」

冬紀、理奈、早織は一斉に声を荒げる。どうやら自分たちが使っている銃器に不安な点があるようだ。余談だが、早織は銃のフルメンテナンスが出来ない。いくら子供の頃から田代さんと一緒でも、小さい脳で複雑な機構のメンテナンスは理解できなかったようだ。……話を戻して。

「もちろん、君たちが良かったら……だけど」

その言葉に俺とアーティを除く全員が了承した。だが俺は首を縦

には振らない。

アーティは銃器を使っ
てないからともかくとして、俺は信用できない奴に自分の銃器を触らせるのはどうかと思う。自分と……仲間
の命を守る銃に何かあったら、その先には死しかない。故に俺は1
つ提案をした。

「俺にメンテナ
ンスの仕方を教えてくれませんか？　ここから先、
1人でも出来るようにしておきたいんです」

さあ、ど
ういう反応に出る？　化けの皮だけは剥がすなよ。利用
できなくなっ
てしまっ
たらな。

「良いよ。じゃあ君の銃器は君がメンテナ
ンスしてみよう。大丈夫、
ちゃんと教えてあげるから」

「……………あ、ありがとうございます」

まさか普通な反応が返ってくるとは思わなかつた。てつきり何か
しらくアクションを起こすと予測していたのにな。意外な反応に少し
呆然としてしまっていた。遅れて感謝の辞を述べると、彼は良いん
だよと言って笑っていた。

はあ、身構えていただけに少々空回ってしまった。んだよ、つた
く。

「それじゃあ、早速取りかかろう。と、その前に……………」
「？」

イスから立ち上がった幸田さんは突然動きを止めると、申し訳な
さそうに俺たちを見た。

「今まで私しか居なかったからね。その……食料が……」

なるほど。突然人数が増えたから食料が足りないって言いたいのか。

「わかりました。整備していただけるのですから私たちが行きます」

すると勝手にサクラが請け負ってしまった。俺の存在価値って……。

「ありがとう。調達メンバーはリーダーさんに任せるよ」

何て幸田さんは言っているが、当然だ。さつき出会ったばかりの奴にアレコレ指示される謂われはない。……つい毒づいてしまうのも致し方無いとしてスルーしてくれると助かる。

とりあえず俺はみんなに向き直り、確認事項をいくつか述べる。

「んじゃまあ、行きたい奴はいるか？」

シーーーーーーンっ。逆にスゲエぐらいの圧倒的な静寂。ま、だろっね。わざわざゾンビの中に潜入したい奴なんかそうそういないぜ。このままでは話が1ミクロンたりとも進まないの、俺だけで勝手にメンバーを選出する。

「理奈、サクラ、円さんは俺と食料調達。他は情報収集と待機。メンテナンスを教えるほしい奴が居たら幸田さんと話つけてる。異論は？」

誰も反論しないので、これで決定だな。

「じゃあ、調達メンバーは各々の装備の確認、所用があるなら終わった後にここに集合。以上！では解散！」

みんなバラバラに解散し、各々でしたいことをしている。

調達メンバーの3人は、隣の部屋に装備を取りに行ったみたいだ。

「信頼されているんだね」

幸田さんにそんなことを言われるが、俺にはあまり自覚がないしな。

今までだってこう言ったらちゃんとやってくれる奴らだったし、反抗しても最終的には俺を認めてくれた。俺がどんな無茶をしても真摯にぶつかってきてくれるし、期待をしたらその分以上の成果で答えてくれた。

俺にとってはそれがアイツ等の見方だし、それがアイツ等の普通だと思っている。

「それが友達で、それが仲間ってものだからでしょう。多分」

俺はそう返答し、アーティの方へ歩く。すれ違いざまに、誰にも聞こえない程度の小さな声で呟いた。

「こっちは任せる。何かあったら知らせてくれ」

発した俺ですら聞こえるか危うい程の言葉を、アーティは髪をかきあげる動作で了承してくれた。

俺はそのまま、自分の装備を取りに俺たちの部屋へ向かった。

第48話 怪しい所は無い。だからこそ怪しい時もある（後書き）

いかがでしたでしょうか？

……………ヤバい。終わりが見えない。
御意見御感想お待ちしております。

第49話 なんだ。今回は理奈フェイズか（前書き）

お楽しみください

第49話 なんだ。今回は理奈フェイズか

今回のミッションは食料の調達だ。食料品売場は1階にある。俺たちは速やかに1階まで急行、そしてターゲットを迅速に確保するんだ。

先だつて記述しておくが、俺の武装は前回に続きMP5Kクルツである。同様に理奈はライオットガンとマカロフ。サクラはベレッタ90 I T W oと長刀。円さんは未だに角材刃矛を使っている。さすがに銃器も持っているが、ベレッタM92FS1挺だけである。

現在俺たちは警備室の専用通路を歩行中だ。今ちようど2階に差し掛かったところである。

「そう言えばさ。良はなんでこのメンバーにしたんだ？」

全くもって緊張感のない理奈の声に、1人スークさんみたいに隠密していた俺は気分を無くしてしまった。しょうがないから普通に返って答えてやる。

「冬紀は俺以外じゃ唯一の男だから俺とは別だろ。残った女性陣を見て、これが最も良い分配だと思ったんだ」

「ふーん」

もはや興味なさげな理奈にイラつときたが、ここまで来たからには意地でも語ってやると言葉を続ける。

「それに……相性良さそうだったし」

『……！？』

何か今、メタル アソリッドの敵に見つかった音みたいなの流れなかったか？

まあ、いいや。もうメンドクさいし語るのやめやめ。しかし……

「で？」

「は？」

何故か理奈が会話を終わらせてくれない。さっきまで興味なさげだったのに。

良く見れば、3人が3人とも聞く耳を当てているようにも窺える。

「誰が一番？」

サクラの問いかけに、俺は誰が一番相性が良いか考えてみる。

と言つてもなあ。円さんとサクラとは一緒にやってないからなあ。

逆に理奈とは出会って程なくしてやったし。やっぱそう考えると……

「理奈だな」

妥当だろう。それに1回や2回じゃないし、俺としてもやりやすい感じはある。

だが、理奈を除くサクラと円さんに変な視線を向けられた。俺なにかしたか？

当の理奈は「アタシかあ……えへへ……」なんて理解しがたい反応を示しているから頼りにならないし。頬を紅潮させる意味が分からない。

「大体、そんなこと聞いてどうするんだよ。」共闘の相性”なんて「

………はい？」

今まで謎の世界に旅立っていた理奈がゴ　ゴの13みたいな表情で凍り付いた。

他の2人も、「両親の死の真相を聞かされ、拳げ句の果てに一番の親友だった奴と一番好きだった恋人が裏切り出来ちゃっていた時の、まだ幼い16歳の主人公」みたいな表情で俺の顔を凝視してきた。怖っ！　お前ら怖っ！！

「……だ、だつてサクラや円さんとは2人1組で戦ったこと無いからわからねえし」

普段とは違う3人の雰囲気には圧されつつ、俺が何とかそこまで絞り出すと、3人は三者三様の反応をした。

「相性つて、そのことかよ！！」

理奈に胸ぐら掴まれ、般若のような能面顔でスゲエ怒られた。何で？

「まあ、良祐君のことだからそんなのだとは思っていたけど……」

サクラはある意味でも付き合いが長かったから、何かもう悟っているみたいな表情で呆れられたがな。

「ヒドいです良祐さん！　乙女の純情を弄ぶなんて……！！」

人聞きの悪いこと言うな！　勝手に勘違いしたお前らが悪いんだろっが！

まあもつとも、今この場でそんなこと言おうもんなら間違いない。10分の9殺しは確定だろうから、俺はあえて言わないんだけどね。

「早く行こうぜ！ みんなが食料待っているんだからさ！」

理奈の拘束を解き、大急ぎで1階まで駆け下りた。

危ない危ない。あのままじゃ確実に面倒ごとに巻き込まれそうだったぜ。

うちの女性陣怖っ！ 恋はしないが俺の信条だが、このままだと女性不信になるかもしれねえ。主にアイツらのせいだ。

ともかく俺は、さつき幸田さんから受け取った鍵のスペアを使って、1階へ続く扉の鍵を開けた。装備を調べて扉を少し開ける。隙間から外を覗くと、段ボールが積み重ねられているのが見えた。どうやら職員通路みたいな場所らしい。ゾンビは居ないようなので音をたてずに外に出、いつの間にか後ろにいた3人を先に行かせる。

扉の鍵を閉めて職員通路を進み、近くにあった扉を潜ると、冷凍食品の売場に出たみたいだった。

「とりあえず2人1組で手分けして食べるものを探すぞ」

全員の領きを確認するのを境に、俺は右拳を突き出した。それだけで3人は理解してくれ、同様に拳を突き出す。

「行くぞっ！」

「おうっ！」

「うんっ！」

「はいっ！」

気合い十分、俺の一声を反射するかのごとく声を上げた3人と

もに、シンクロした動きで手を後ろに振り絞った。

「最初は……」

次の瞬間、全員が前方に握り拳を見せつけるように出し、『ゲー！』と声を一体にして叫ぶ。そしてもう一度手を引っ込め、

「ジャンケン……」

先手の手順を繰り返すように、しかし手の形は各々で変え、みんなに見せつけるように突き出した！

『ポンッ！！』

みんなの手の形を見回してみると、理奈はゲー、サクラはパー、円さんはパー。

そして俺は………ゲー。俺と理奈の負けである。

「負けた〜！」

「ぐぬぬ……」

負け組は（俺も含め）スゴく悔しがって、理奈に至っては唇から血が出そうな程強く噛んでいる。

「上々かな」

「わ〜い！ 勝ちました！」

勝ち組は勝ち組で（特に円さんが）喜んでいる様子だった。

こいう勝負事は些細なことだけど、負けると意外と悔しいものだ。

俺は勝負事には常人と同程度の関心と運は持っているつもりだが、それでも負けず嫌いが悔しさを生む。さらに理奈は俺より重度の負けず嫌いなので、悔しさもひとしおだろう。

「じゃあ、俺と理奈は右回りで行くから、お前らは左回りな。集合場所はここで、30分後な」

いつまでも悔しがっても仕方がないので、早々に理奈を連れて歩きだした。

何故かサクラと円さんが「あっ！」というような謎の表情をしていたが、興味も無いので気にしないでおこう。

理奈と歩きだして数分経った頃、唐突に理奈が話題を振ってきた。

「……………なあ良」

「なんだ」

全方向に注意を払いながら物陰にも関心を向けなければならないので、自然と返事が生返事になってしまふ。だが理奈はその事を分かってくれているので気にした様子はなかった。

「久しぶりだな……………」

「……………なにがだ？」

問いかけの意味が分からず聞き返す。だがこれも同様に気にした様子はない。

「2人きりになったの」

そう………だったか？ いや、確かに2人きりになったのは久しぶりのような気がする。最後になったのは去年のような。

「……かもな。だけどいきなりどうした？」

でもだからといって今する話題でも………なくはないか。これを逃したら次はいつころなるかわからねえしな。いつの間にか仲間が増えたし。

「どうしたってことも………ないんだけど………」

珍しく理奈は言い渋っている。普段からは想像もつかないような様子だ。

だからだろうか？ 見たこともない女の子の表情を見せる理奈にふと胸が高鳴った気がした。理奈が頬を紅潮させることは良くあったのだが、それは恥ずかしさやボケであって、こう言うことではない。

「な、なんだよ。珍しくしおらしいじゃねえか………」

慣れていない雰囲気からか口調がおぼつかない。声が裏返りそうになるのを必死に抑え、出来るだけ平静を保つ。

「アタシがしおらしくしちゃ、だめか………？」

「っ………！！？」

しかしその努力は簡単に崩れ去ってしまった。狙ってやっているんじゃないかと思うほど、理奈は的確に俺の胸の高鳴りを助長させ

る。俺にはそれを回避する術が……ない。

「初めて会った時、良に助けられたのを思い出して……」

唐突に話題を変えたのかと思ったが、直結させると思い出してしおらしくなったということらしい。相も変わらず会話に整合性が無い奴である。

しかしまあ、理奈が言う初めて会った時。確かに俺は理奈を助けた。

でもそれは初めて会った時ではないはずだ。出会ってしばらく経ってから俺の問題に理奈が突っかかってきて、その時に俺が助けた。だから初めて会った時〓俺が助けたにはならないはずだが。

俺がそのことを理奈に話すと、理奈は首を横に振って否定をした。

「違う。それよりも前」

「……前？」

とは言つが、俺にはそれよりも前に助けた記憶もないし出会った記憶もない。

もしかしたら昔、俺に絡んできた野郎共を返り討ちにした時にいたのか？ いやでも、こんなキャラが濃い奴忘れるわけねえし。絶対「誰だか知らねえけど、助けてくれてありがとな！」とか言ってくるだろうから。

「覚えてねえ……」

正直に覚えてないことを理奈に話す。怒鳴られるかと思っただが、意外と優しい表情だ。

「しょうがないって。あの時はお前、スゲー馬鹿みたいな表情だったからな」

言うに事欠いて馬鹿みたいだと！ お前に言われたくないわ！
とおおうとしたが、思い出し笑いしている理奈の表情に何も言えなくなってしまうた。静まり掛けていたはずの鼓動がもう一度蘇ってくる。

「と、ともかく！ 早く食料を集めようぜ！ もう20分位経ってるし！」

胸の高鳴りを誤魔化すために、本来の本題を会話に割り込ませる。それは結構な効果があったようで、理奈は「そうだな」と言っ歩いて行った。

「……………はあ」

誤魔化せたことになのか、懐かしい感覚になのか。どちらにせよ、ふと出た溜め息に余裕がなかったのはしょうがないことである。

とある山中の山道。舗装された道路から眼下をのぞき込む沢山の人たちが居た。

車道の脇が緩やかながら崖になっており、落下防止のために設置されたガードレールから身を乗り出して居る人すら居る。彼らは何故眼下をのぞき込んでいるのか？ と思うだろう。それは、ある1カ所が突き破られたガードレールが教えてくれる。

破られたガードレールから崖下へ辿っていくと、爆発炎上している1台の乗用車がのぞけた。

「……いたい」

その乗用車の近くで、ボロボロになり傷だらけの少女が活力もなく横たわっていた。全く体が動かないのか、少女は立ち上がりもせずに地に伏せている。

「お父さん……お母さん……」

だが少女は自分よりも、両親を気に掛けていた。いや、気に掛けているというより悲しんでいるようにも窺える。

「死んじゃった……」

それきり、少女は死んだような瞳で呆然とする。車の中とともに燃え尽きる両親が、生き残りを少女1人だと物語っているようにも見えた。

絶望の淵で生きる気力を無くした少女は、両親の死を口にしていくが理解しているのかどうか。

「もっ……」

このままでいいや。そう口にしようとする前に、誰かが言葉を遮った。

「だれだお前？」

少女が声のした方へ視線を向けると、そこには4〜5歳程度の少

年が訳も分からず少女を見ていた。

「痛そうだなあ。大丈夫か？」

ノンキに駆け寄る少年は、突然少女の頭を撫で始めた。
おそらく痛いのでけとという意味なのだろう。

「どうでもいい。だからあっち行って」

「やだ」

拒否を言葉にするが、それを即答で拒否し返し、むすっとした表情で断言する。

「お前、死にたそうな表情しているもん」

事実そう思っている少女は苛立った声音で叫ぶ。

「何でも良いでしょ！ 死にたいの！」

唐突に叫んだ少女にビックリしながらも、少年は強く言い放った。

「ダメだ！ 死んだら何も出来なくなる！ そんなの悲しいだろうが！」

だが少女は別にやりたいことがないのか、関係なしに怒鳴った。

「何もすることないから良いの！ 生きている意味もなくなっちゃったし！」

その言葉に少年はしばらく考え、誰も予想出来ないことを突然口

走った。

「じゃあ、僕にご飯作ってよ」

「……え？」

予想してなかった言葉に、少女は呆然と少年の顔を見る。

「それで僕のお嫁さんになって」

さらに言い放った言葉に余計訳が分からず、少女はぼけつと少年を見続けた。

「ほら。すること出来たし、生きている意味出来たでしょ？」

そう言ってニコツと笑った少年は無邪気にとんでもないことを言っているのだが、少年はさして気にしてないようだ。

「あなたは、だれ？」

常識を打ち破ることを連続で言う少年に、少女は訳も分からず問いかけた。

「僕は前原良祐。ただの子供だよ」

そしてこれが、後の少女の運命を変えた出会いだったということ
は、少年は未だに理解していない。

第49話 なんだ。今回は理奈フェイズか（後書き）

いかがでしたでしょうか？

おーい！こいつフラグ立ててるぞー！！
御意見御感想をお待ちしています。

第50話 若かりしあの日(去年の事だけど)(前書き)

良祐過去編 理奈との出会いです。
お楽しみください。

第50話 若かりしあの日（去年の事だけど）

あの後俺たちは食料調達を終え、ひとまずの飯にした。

夜が深まっていたこともあって、食い終わると自然とみんな寢床についた。聞いたり聞かれたりは、まあ、明日に持ち越しとなるだろう。

ともかく俺は今日、とても懐かしい夢を見る事となった。

多分……と言うか確実に、理奈との会話が要因だろう。別に俺としてみいやな思い出でもないから問題ないしな。

さて、若かりしあの頃の出会い（去年のことだけど）でも思い出しながら見てみますか。

2011年4月初頭。

この日は東海林市立林名高等学校の入学式だった。

「良祐さん良祐さん！ 忘れ物は無いですか！？」

「朝からうっせーよ！ 忘れてねえから静かにしろ、馬鹿！！」

産まれてこの方ずっと住んできたあの家の玄関で、円さんが、今と変わらない容姿と言動を容赦なく俺に押し当ててくる。

だがあの時の俺には、それが何よりも厄介で、何よりも滑稽に見えた。

それは円さんに、ではない。……俺に対してだった。

「じゃあ良祐さん！ 私、準備してきますね！ 待っていてくださいー！」

うざっいたらしく恋人のように身の回りの世話をする円さんに、あの時期はスゴクムカついた。過去のことから完全に心を閉ざしてしまった俺は、物事を卑屈に捉えてしまうのだ。

そのせいで、円さんが俺に向けてくれる思い、感情といったものは、全て、俺に似ている……というより俺が似てしまった、父親に向けられたものだ。勝手に解釈してしまい、勝手に苛立つ。その悪循環に陥り、最後は耐えきれなくなり、

「誰が待つかよ」

俺が物事から逃げ出す。

円さんの恋人親子が見ていられなくて、見ていたくなくて、俺は逃げ出すために早々と玄関から飛び出した。

高校への通学路を他の学生と歩きながら、両手をポケットに突っ込んで考える。

今日がいわゆる高校の初登校の日、高校デビューとさえいいのか。

そんなものには欠片も興味もないし、そこらへんのお気楽な学生共とは違って「友達出来るかな？」などと幼稚なことも考えていない。

ただ俺が考えていることは1つ。高校3年間という時間を如何にして潰そうか、だけである。

入学する当日に終わりを考えているのは、世界を探してもそうそういないだろう。だが俺には興味も関心もつくのとうに無くしたので、高校なんて早く終わらねえかなぐらいにしか思っていない。

本来なら、入学すらしたくなかったのだが、円さんと姉貴に凄まじくされてしまえば従うしかない。これからは俺だけで生きていけるかも

しれないが、ここまで育ててくれたのは円さんと姉貴なのだから、恩を徒で返すみっともない真似だけはしたくなかった。

人の思考を邪魔するかの如く、周りの学生共がヒソヒソ何か話し始めた。

ウザいことこの上ないのだが、十中八九俺のことだろう。

黒の詰め襟制服を着崩し、染めているのではないかと思うほどの茶の頭髪。

睨むような鋭い眼光。死んだような、触れたものを全て切り裂いてしまう意志を持った瞳。父親譲りである凜々しい顔立ちも相まって、周りの奴らには俺が不良にしか見えてないだろう。

事実、聞く耳を立ててみると、

「なにアイツ……不良？ こっわ」

「問題起こさないで欲しいよね」

「ていうか学校来んなって話」

などと、エンドロールのテロップで男子高校生A、女子高校生Aと表記されるような、脇役みたいな残念な人生を送るであろう、残念な学生共が、とても下らないことを話していた。

はつきり言って時間の無駄だ。俺は不良でもないし、問題も起こさない。

問題を起こすのはいつも、決まって周りだ。

こついう学生共の根も葉もない噂。

見た目だけで全てを判断するクソ教師。

そして……不良生徒。

こいつらの連携具合と言ったら軍隊顔負けだ。それぐらい面倒く

さい。

まず不良生徒が、俺に変ないちやもんをつけて、ランチにしようとする。

次に学生共が、それに尾ひれ付けて噂する。

最後に教師が、噂を聞いて内申点を下げ、手に負えなくなったら停学、行くところまで行けば退学である。

本当に……面倒くさい。

学生共も無駄な時間を過ごすぐらいだったら勉強にでも励んでろ。そう言いたくなるぐらい、周りから向けられた好奇心目が鬱陶しかった。

本当に……面倒くさい。

そう呟きながら、またも俺は早歩きで逃げ出す。

こういうのは関わらない方がいい。

あの連携をこの身で体感し、本当に淵の淵まで追いやられた俺が出した結論はそれだった。

実際、林名高校だってギリギリ入れた一番良い高校だった。本来なら、俺の学力があれば、もう2〜3ランク上の高校だって入れるはずだ。それでも入れなかったのは、当然、内申点のせいだろう。

内申点などには興味はないんだが、問題を起こすと迷惑が掛かる奴らがいる。

他人ではなく、身内にだ。もはや脅迫の一種ですらある。

しょうがないから、俺は関わらない道を選んだ。逃げ出したのだ。

俺はまたも卑屈に捉え、そして、程なくして学校に着いた。

「おい、お前！」

林名高校は本来、中の上程度のランクであったはずだった。それが何故、中の下程度にまでランクが落ちてしまったのか。理由は諸説あるが、俺はこいつのせいだと思う。

角刈りヘッドの体育会系体育教師。兼……保健医。

林名高校内だけでなく、諸高校、果てには中学にまでその名を轟かす最凶災厄の教師。角刈りゴリラ……またひでめ牧田秀雄だ。

「何ですか？」

明らかに俺を見ている角刈りゴリラを無視するわけにもいかず、視線だけを向けて用を促す。それに対し、何か癩かんにでも触ったのか、きたねえ唾を散弾のようにまき散らしながら奴は俺に怒鳴り始めた。

「なんだ、そのトゲのある言い方は……！ 大体、この髪はなんだ？ うちの高校は染髪禁止だぞ！」

「地毛です」

角刈りゴリラの散唾攻撃を一定の距離を保つことで回避し、うざったらしく馬鹿まるだしのことを言っている奴に即答で返した。そしてもう用はないなとばかりに校舎へ歩き始めた俺の肩を、奴は強く握りしめ、制止させる。

「何ですか……？」

いい加減我慢の限界がきた俺は、少し強めに用を促した。すると待つてましたとばかりに角刈りゴリラは、スゴく気持ち悪い笑みを浮かべ、肩を掴んでいる方とは逆の腕を振り上げた。

「教師に対する口の聞き方がなっていないなあ……！」

腕を振り上げればやることは1つ。奴は俺を殴り飛ばした。

これだ。林名高校はこの男……角刈りゴリラがやることを黙認している。

裏取引があつたとか、角刈りゴリラは実の所良いとこの出とか、校長を脅しているとか。生徒共の中では様々な噂が飛び交っているが、真実として証明されたものは1つたりともない。

そして角刈りゴリラの暴拳を黙認している高校に、未来ある中学生が入ってくるだろうか？ 入ってくるのは他の高校に落ちた残念な受験生だけであつて、他の高校に落ちたということは当然、頭の出来が良い方ではない。

ならば必然、高校のランクが落ちていく。

そんな問題の元凶に登校初日眼を付けられた俺は、さながら哀れな生け贄といった所だろうか？

ああ、本当に………面倒くさい。

「はっはっは！ 俺がいる限り、貴様ら不良共に居場所はない！」
だから不良じゃないって。

そう言つてやるのもシヤクだし、どうせ信じてはくれないだろうから何も言わない。……ただ、

「それじゃ、さよーならー」

「あつ、待たんかゴラア！！」

「そつだ、忘れてた」

「ああ？」

やられっぱなしって訳にはいかないけどな。

俺は右手の鍵を角刈りゴリラに放り投げた。奴はそれを手に取り、叫ぶ。

「これは俺の車の鍵！！ 貴様いつのまに！！」

そう角刈りゴリラが叫んだ時には、俺はもう校舎の中に消えていた。

また……………逃げ出したのだ。

「いつてえ……………あいつ、思いつきり殴りやがって。頑丈さが取り柄の俺でもいてえもんはいてえんだぞ」

入学式が終わり、ロンクホームルーム 新人生初めてのLHRの最中。

窓側から3番目、一番後ろというなかなかの好ポジションを獲得した俺は、若干青くなつた左頬を押さえつつ呟いた。

もはや角刈りゴリラは許せないかもしれない。

傷を付けたとかそういうことは別に良いのだが、入学式という新人生だけでなく在校生や保護者、学校のお偉い方が出席する衆人觀衆の真つ直中で、今日初登校の新入生がいきなり左頬に青胆つくつてれば、イヤでも注目を浴びる。

つまり俺は、登校初日に林名高校関係者から不良だと認知されたことに等しい。

初日からケンカに勤しんでいる危ない奴だと思われたに違いない。毎度の事ながら出席していた円さんにも迷惑が及ぶだろう。

……………よし、ぶっ殺すか。あの角刈りゴリラ。

しかしそれをすると余計迷惑が及ぶので、ここは我慢して貰うしかなさそうだ。

「はい、次は前原君！」

「ああ？」

突然担任教師から声を掛けられた俺は、反射的に凄んだ声で反応してしまう。

見れば同級生共から向けられる圧倒的視線。異物を見るような蔑みの眼差し。

凄んだ声を向けられた担任の女教師はスゲエ怯えた眼で何度も謝罪をしてるし。

はあ、俺ってそんなに怖いかな？ 普通の表情をしているはずなんだけどな。

視線を女教師の後ろの黒板へと向けると、そこにはデツカく「自己紹介」と書いてあった。どうやら俺の番まで回ってきたから声を掛けたようだ。

俺はしょうがないから立ち上がり、極力周りを見ないようにした。

「前原良祐。言っておくが俺は不良じゃない。髪は地毛だ」

早口でまくし立て、さつさと席に着いた。

俺の時間を設けた所で誰も俺と友達になろうなんて奴いないし、それに何れ俺の名前は全校生徒に知れ渡ることになる。

学校一の不良として。

学校一危ない奴として。

これがいわゆる、一種の風評被害ってやつだろう。

と言っても、元から友達を作る気もないし、良い子ぶるつもりもなかったから別に構わないんだけどな。

「じゃ、じゃあ……次の子お願い」という、未だ怯えた様子の女教師の声を聞きながら、俺はまた思考に耽っていった。

入学式から1週間が経った。

もはや俺は学校内で知らない者は居ないほどの有名人にまでなっていた。

風評つてももの凄い効果があるんだな。と、つくづく実感してしまつた感想をこぼす。

ああ、面倒くさいことになつたな。なんてことを、教室の自分の席で思う。

視線だけを窓の外、憎らしいほど澄み渡つた青空へと向け、ボケーっと考え事をする。それに意味はなく、急がれるべき用事でもない。

休み時間であるはずの教室はガラーッと閑散で、隅の方に3〜4人程度の女子集団がいるだけだった。いや、訂正しよう。何人かの男子生徒が机に突っ伏して寝ているみたいだ。

教室の入り口には好奇心から俺を見に来たであろうあらゆるクラス、あらゆる学年の生徒が、通行の邪魔になるほど溢れ返り、「時間を無駄にしてんなあ」と思わずには居られない惨状となっていた。

もつとも、俺には関係ないし関係したくないし気にしたくもない。だから俺は、窓の外を見たまま馬鹿みたいな表情で時間が経つのを待っていた。

しばらくそのまま固まっていると、何故か、教室の入り口の方が

騒がしくなり始めた。角刈りゴリラでもやってきたのか？ と思っ
たが、耳を澄ますと「危ないよ」とか小声で言っているのが聞こえ
た。

角刈りゴリラが心配されるはずがない。ということは、別の誰か
だ。

まあ、俺には関係ないし興味もないから放っておくんだが。

しかし、とある足音が俺の近くでピタリと止まった。

そして、俺の視界の右端から“赤みがかった何か”が出現した。

俺はそれに驚きはしないが、その“赤みがかった何か”の正体を
探ろうとはする。

程なくして、それが“赤みがかった長髪”だと気付いた。

珍しい髪色だな。最初の印象が俺の中で生まれた時、それは視界
の中央まで移動して、その長髪の主を俺の眼前に晒した。

その長髪の主は……………人懐っこい雰囲気、美少女と言っても
過言ではない少女だった。

第50話 若かりしあの日（去年の事だけど）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回も過去編です。

御意見御感想をお待ちしています。

第51話 俺がお前と出会う時（前書き）

良祐過去編 理奈との出会い。
第2部です。

お楽しみください

第51話 俺がお前と出会う時

突如視界に現れた赤髪（完全な赤ではないが便宜上そう呼称する）の美少女は、ニカつという擬音が聞こえそうなほど大きく笑うと、親しみを込めた口調で話し出した。

「アタシは緋^{ひだちりな}達理奈。理奈って呼んでくれ。お前、前原良祐だろ？」

自分のことを緋達理奈といった少女は、俺のことを知った様子で問いかけてきた。

まあ、全校生徒の注目の的（悪い意味で）であるから、俺のことを知っていても何ら不思議はないのだが、だからといって噂を聞いてまで俺の所に来ようなどと、教師や生徒に見つかれば自らの品位や尊厳を落としかねない暴挙である。

もしかしたらこの学校の恐怖の対象である角刈りゴリラと俺にアタックし、勇気ある若者を演じたい脇役馬鹿なのかと思ったが、緋達の瞳には一寸の邪な気持ちは感じ取れなかった。

ただあるのは、無邪気な……それでいて俺には一切理解できない謎の感情だった。

それ故か、訳も分からず圧倒される俺は、悪態をつく暇もなく首肯する。

すると、奴はとんでもないことをしてかした。

「久しぶりだなあ〜！ 命の恩人兼永遠のパートナー！！」

と言って、俺の首根っこに腕を回して抱きついてきた。

「……………はいいいいいいいつ!!??」

数秒の逡巡の末、俺だけでなく教室内にいた女子集団&男子生徒と入り口に屯っていた生徒共は、みんなが一樣に絶叫していた。その頭には、3つも4つも疑問符を浮かべている。

緋達の行動と言葉を向けられた俺は、問題の渦中にいる………というか問題を起こしている緋達に、怒鳴るように早口で聞き出した。

「命の恩人兼永遠のパートナーってなんだ!？」

いやまて命の恩人は良いとしよう。俺も記憶が全然ないから昔何かで助けたのかもしれない。それによって久しぶりの問題も一応の解決はした。………だがな!

永遠のパートナーってなんだ!!?! 俺はそんなフラグを立てた覚えもないし立てられた覚えもないぞ!! そんな大事を俺が覚えてないはず無いだろう!! つまり一体どう言うことだ!!!

「うるさいよ! 耳元で怒鳴るな!!」

緋達は俺に抱きついていたわけで、当然、今までの会話は耳元で怒鳴られているに等しい。だが、そんなことなどどうでもいいぐらいに、目の前に差し迫った問題が俺を駆り立てる。

「わ、わりい。でも、どういうことだ?」

謝っていないように感じるほどあっさり謝罪し、それよりも事実の解明のために息を吐ききらないまま言葉を発する。

当の緋達もんだいは俺の言葉を聞いた瞬間、目を見開くように驚愕の表情を見せた。

「え……………と、お、覚えてないのか?」

「覚えてない? なんのことだ?」

奴はその表情のまま俺の首から腕を離し、おぼつかない足取りで後ろへ後退した。

なにやら言っではいけないような気がしたが、もう一度確認のため言った。

「ていうかお前、昔会ったっけ？」

すると緋達は表情を驚愕から悲しみに変え、鋭いながらも大きな瞳を潤ませ始める。もうはや俺の株価が急落している気がしないでもない。

そして耐えきれなくなった緋達は、肩まで伸びた赤髪を振り乱し、一路、教室の外へと駆けだした。

「ちょ……質問……！ …… ……はぁ」

駆けだす緋達の背中に手を伸ばす姿勢のまま、俺は訳も分からず硬直していた。

教室内外からももの凄く睨まれたが、俺が睨み返すと全員視線を外した。

その後、いくら待っても緋達が現れる気配がなく、しょうがないのでその日は素直に帰宅した。問題を先送りにするのは俺の性質上、あまり好ましくはないのだが、俺の言動で傷を付けてしまった以上、俺の言動で傷を抉ることは出来ればしたくなかった。

……のだが、

「前原良祐はいるかー！」

翌日、教室でいつものように体よくダラケていた時、突然、教室の扉が開いて奴が姿を現した。その口調は試 召喚戦争で宣戦布告してきた哀れな使者のような感じで、しかしながらクラス単位の宣戦布告ではなく、俺個人に対しての宣戦布告のようにも思えた。

「……………はぁ」

これは先日印象を覆されたな、と、自分の観察眼も半人前であることを実感させられた。容姿が絶世というほどではなくてもそこらへんのB級アイドルよりかは確実に良好なので、緋達もそういうタイプみたいに猫を被る奴かと思っていたが、どうやら違っていたようだ。

奴は何も被らず、全て……………表情も行動も言動も全て、ありのままに接する元気娘タイプだったようだ。容姿と中身のギャップがここまでスゴい奴はそうそういないだろう。

「……………どー……ん……！」

「がっ！……？」

などと、緋達の宣戦布告を全く持って無視し、自分の中で思考の網を辿っていた俺に、奴は突然リアットで攻撃してきた。突然リアットしてきたことに驚くのは普通だが、俺はそれよりもリアットの破壊力に驚愕した。

殴られ慣れ、強靱な耐久力を持っているはずの俺が、意識を持って行かれそうになったのだ。数人相手に一方的に殴られ続けても、意識を失うことはないはずの俺が。これは間違いなく、プロの技だ。

「……つて！ 何すんだよ！！」

思考を巡らせても事態は解決せず。俺は考えるのを止め、問題児に向き直った。

道徳心を説くつもりはないが、せめて暴力は止めていただきたい。なんてことを言った瞬間、強烈な右エルボーが俺の頭髪を掠めた。

「今は忘れていた分だ」

昨日のことだろうな。と、直ぐに分かった。

緋達が過去のことにもスゴく執着する奴だと言うことは分かった。俺は忘れていた側なので、何も言えないし、何かを言う権利もない。だから俺は何も言わず、緋達の言葉を待つ。

「だから忘れていたのは許す。……忘れていたのなら思い出させりゃ良い話だしな」

後半はイヤな予感しかしないような言葉ではあったが、ひとまず許してはくれたようだ。まあ、俺には全く心当たりがないので自分の事のように感じられないが。

ともかく俺は「そうか」と言っただけで、自分の机に顔を伏せる。

現在昼休みではあるが、さっきパンを2個食ったから今はとても眠いんだ。

しかし緋達は無言で、それが余計に悪いことの前触れのように思えて仕方がなかった。

もっとも、それは直ぐに降り懸かってくるんだが。

「寝るなよ」

とか言いつつ、奴は伏せた俺の後頭部を平手でバシバシ叩いてく

る。

無視してずっと寝続け、数秒が経った。

バシバシ、バシバシ、バシバシ、バシバシ、バシ……

「やめる馬鹿！！ 気になって寝られねえだろうが！！」

怒鳴る俺を無視し、奴は左手に持った正方形の包みを俺に差し出す。

薄紫の布で包まれたそれは、俺の予想が正しければアレだ。

「さあ、食べ！」

満面の笑みで、緋達は包みを押しつけた。

間違いない。食べ、ということとは、アレは弁当箱だ。とどのつまり、手作りベントーということになる。

「やべえ！ 持病の冷え性が！！ じゃ、俺帰るわ！！」

「待てえい」

馬鹿な！ 俺の完璧な逃走術が見破られただど！！

テキトーな言い訳で逃走しようとしたのだが、全く騙せずに拘束されてしまった。

俺の持論では、キャラ濃い奴が作るベントーは大抵濃い（いろんな意味で）。

俺は人生諦めているような表情をしているかもしれないが、人生捨てたくはないのだ！

「食べ！」

しかし拳を降り上げながら強く言われてしまえば、もう為す術がない。

なんで俺に？ という疑問は尽きないが、これを言ってしまったえば昨日とさっきの二の舞は避けられない気がする。いらなと言えば、林名高校殺人事件というサブタイトルで、見た目は子供、頭脳は大人な探偵さん物語に登場してしまう気がする。

つまりは、逃げ場が無いわけだ。真つ向勝負するしかないだろう。

俺は緋達からベントーを受け取ると、爆弾を扱うように丁寧に机の上へ置いた。

キャラと同じでベントーも濃いんだろうなあ……などと、ほとんど決めて掛かっていた俺は、包みを解き、蓋を開けて硬直する。

そこには絶妙な炊き加減の白米に、黄金色の厚焼き卵、薄茶色の唐揚げ、俗に言うタコさんウィンナー、見栄えは問題ないポテトサラダ、などなど……。

三ツ星シェフが作るとこんなだろうなあ……と思わせるほどの彩色豊かな惣菜の数々。細やかな配慮が行き届いたバランスの良いメニュー。

無意識の内に口の端から落ち掛けた雫を拭き、緩み掛けた気を引き締め直す。

見た目に騙されるな！ 緋達だって容姿と内面にギャップがあったらどうが！

そう、一番の危惧はそれだ。

大抵、キャラが濃い奴の料理は、一般的に3つの種類に分類される。

見た目が悪くて味も悪い奴。

見た目が悪くて味が良い奴。

そして……見た目が良くて味が悪い奴だ。

俺が危惧しているのは最後、見た目良くて味が悪いということだ。もしそんなことになれば、失神は免れない。最悪、「見せられな
いよ!」っていうテロップが出る可能性だってある。

故に、俺はグルメではないけどせめて食べられる物を出してくれ
よ! と、経の代わりに心の中で108回ほど唱え続けるのも仕方
がないことだろう。

「早く食べっ!」

もはや、一刻の猶予もない。覚悟を決めなければ。

急かす緋達の声を後押しに、箸を持ち、「いただきます……」と
言っつて、ベントーに箸を下ろしていった。

「さあさ、感想をはやく」

意見を急かせ過ぎな緋達はともかく、先ずは無難に厚焼き卵だろ
う。

変な隠し味さえ入れてなければ、味が無いだけで済む可能性があ
る。

一縷の望みに賭け、厚焼き卵を持ち上げると、俺はそれを口に運
ぶ。

「があはっ!?!?」

「どどどど、どうした!?!?」

何故か(?)狼狽する緋達を後目に、俺は驚愕の表情で凍り付い
た。

なんだ、この美味さはあ!!

固過ぎもなく柔らか過ぎもなく、それでいて絶妙な柔らかさを保

ちつつ、程良い食感が食べる物に不快感を出させない精巧な作り。何よりも味が1つのはずなのに洗練されていて、噛めば噛むほど旨味が溢れだしてくる。時には顔を変え、性格をも変えてしまおうが、本来ある旨味を全くブレさせない。

全てがマツチした、正に至高の厚焼き卵。

これが本物の王道の中の王道。ベントーの定番の1つ、厚焼き卵か！

「う、美味しい」

「本当か!？」

「あ、ああ……」

産まれてこの方初めて食べた未知の領域に、精神力がゴツソリ持つて行かれた。

しかし、それを良いとさえ思わせる心地良い幸福感が、俺をベントーへと駆り立てる。

「これ、全部食って良いか？」

不躰かと思つたが、俺は目の前の未知に興味を引いた。

濃いキャラの絆達を作るベントーだから濃いんだろうなと思つていたが、この濃さだったら俺は大歓迎だ。

絆達はそれが当然であるかのように首を縦に振った。

それを皮切りに、俺は停止していた食事をすぐさま再開し、一心不乱にベントーを堪能していた。

それから1ヶ月が過ぎた。

俺は緋達と良好な関係を築けている思う。
事実、学校内で友人と呼べる者は緋達以外にいない。
そのことから、良好だと言えるだろう。

昼食は専らパンで済ませる俺だが（円さんが作るうとするのだが、俺が拒否する）、あれからは緋達の提案で作ってきて貰っていた。
俺も緋達のベントーを食うのに吝かではないので、提案は素直に嬉しかった。

一時、何故ベントーを作ってくれるのか？ と問いかけた時、奴は笑って誤魔化していたが、やぶ蛇になりたくないのも俺も追求はしなかった。

緋達には、何か並々ならぬ事情があるんだろう。と、勝手に他人事のように理解してしまう。

学校内では、もうはや緋達の噂で持ちきりだった。

「少女が不良と仲良いらしい」とか

「脅迫されて仕方なく従っている」とか

「美少女とラブライブイベントして楽しいか！ リア充爆発しろ！！」とか。

俺の擁護をしてくれる者など当然おらず、生徒共は緋達ばかりをプラスに見る。

それに引き替え、俺に対しての評価はマイナスばかりが多分に含まれていた。

……最後は多分どこか悪意しか感じなかったが。しかも私念だから余計に質が悪い。

ともかく、緋達の評価が下がらなかったのは唯一の救いではあったが、このまま放置していればいずれ何かが起こりかねない。

緋達の評価が下がるか、俺の評価がもつと下がるか。

前者ならば緋達が俺と同等の扱いを受け、後者ならば全校生徒か

ら俺は恨まれることになるだろう。

どちらにしても、平穩無事、とは行きそうにない。
そろそろ、潮時なのかもしれないな。

そう思い始めた頃、唐突に災難はやってきた。

あれはいつもの如く、教室で緋達のベントーを食っていた時だった。

突然、閉められていた教室の扉が、大きな音を立てて開け放たれた。

さして興味もなかったので、扉の方を見ず、いつもの通りにベントーを食っていた俺に、その言葉は向けられた。

「あれえ？ 本当に可愛い娘と一緒にいるよ」

「この声は……」

聞き間違うはずがない。その声が俺に向けられたものだとは理解する必要もない。

声の主は俺の目前まで来ると、俺の横にいた緋達に顔を近付けた。

「ねえねえ。そんな奴と居ないでさ、オレと一緒に遊ぼうぜ」

「そうそう」

全く気付かなかったが、最初に声を発した奴以外に3人居るようだ。

緋達はその野郎共に睨みを利かし、「やだね」と簡潔に告げると、そっぽを向いた。

「そんなこと言わないでさあ」

なおもしつこくナンパし続ける4人組に、いい加減俺も無視できなくなった。

「止める。真東、西山、南田、北岡」

この4人組は俺と同じ中学出身。

クラスの中で一番、俺に対するイジメが酷かった奴らだった。

この4人は一緒にいることが多く、よく東西南北と（秘かに）揶揄されているアホ共だ。

「へえ、そういう口利いちゃって良いの？」

その中のリーダー格、最初に言葉を発した真東は、まるで格下相手に……というか奴隷を相手にしているように、俺を見下す。

……訂正しよう。奴は俺のことを奴隷と同等の者として見ていた。他の3人も同様に、俺を一番底辺だと思っている。

「それがどうした？ 東西南北」

「っ！ てめっ……！！」

だが俺には関係ない。

こいつらが俺のことをどう思っただろうが、俺は屈することはない。そして、

「調子にのんな！ このクズがっ！！」

たとえ殴られようとも、俺が反撃することはない。

真東に思いつきり殴られ、俺は物理法則に従って顔を逸らしたような姿勢になった。

緋達が（何故か）逆上して、真東に殴りかかろうとするのを制止する。

「このやるお……!!！」

今にも真東を半殺しにしかねない勢いだったが、俺が頭を軽く撫でると渋々ながら止まってくれた。

この1ヶ月の間に見つけた緋達の制止方法が役に立ったな。

俺は東西南北にもう一度向き直ると、全く変わらない口調で告げた。

「今は人目がある。お前らも噂にはなりたくないだろう？ 後で相手してやるよ」

「ぐっ……!!！」

どうやら威張っている癖に器は小さいようで、東西南北は眼光を鋭くさせながら、教室から退出した。

「だ、大丈夫か!? 前原!!！」

扉が閉められたのを確認した途端、緋達がさっきとは打って変わってオロオロし始めた。

「大丈夫だ。問題ない」

「死亡フラグだぞ。それ」

などと冷静なツツコミをした緋達には、俺の意図が伝わったようで安堵の表情をしていた。殴られ慣れているからこの程度どうってことはないが、その経緯を知らない緋達からしたら結構痛かったように見えたのだろう。

ともかく、問題がないように振る舞い、俺はベントーを堪能するの
に勤しんだ。

その日の放課後。

約束(?)通り、東西南北と人気のない高架下へ出向くと、早速
戦闘が始まった。

もつとも、戦闘なんて大それたものじゃなく、ただの一方的な暴
力^{ンチ}なのだが。

「おらおら！ クズはクズらしくのたうち回ってる！！」

「これ、ストレス解消に最高！！」

「こいつくそ弱いからタコリがある〜！！」

「もっと無様に転がり回れよ〜！！」

東西南北の一方的な暴力。それに俺は反撃もせず、ただ殴られ続
ける。

殴る蹴るは当たり前、踏みつけられ、力比べと投げられ、練習台
とプロレス技を掛けられる。

「やめるよー！！」

その最中、付いてこなくて良いと言った俺の言葉を無視し、勝手
に付いてきた緋達が悲痛な叫びを上げた。

何度も、何度も、何度も。

だから付いてこなくて良いって言ったのに。などと、リンチにさ
れながら思った。

「なんかこいつ、表情が今一つだな」

すると、真東が俺を蹴りながらそう呟いたのが耳に届いた。確かに俺は表情が良くない。リンチにされても、痛そうな表情はするものの、今一つ辛さが垣間見えないからな。

しかし、それによって誰かが被害に遭うとは思ってなかった。

「あいつを使おう」

真東のその一言で、他の3人が緋達に手を伸ばす。

どうやら俺の表情のためだけに（というわけでも無さそうだが）他の奴を巻き込む気らしい。

俺は肺の中の少ない空気を総動員して、小さく「止める」と呟いた。

「黙ってるクズが！」

だが、わき腹を思いつきり蹴られ、一瞬、呼吸困難になり掛ける。そんなことをしている間にあっさり緋達は捕らえられ、両腕を拘束されていた。

「くくっ、こいつをどうにかすればお前も良い表情をすんじゃないか？」

拘束された緋達の下へ行つて、気持ち悪い笑みを浮かべながら真東は俺に言った。

確かにこの状況、あまり芳しくはない。思わず俺の表情も険しくなる。

「そう、それを見たかった！」

こいつ、殺すか。

そんな黒い感情が俺の中で渦巻き、緋達の姿を捉えて消え失せた。駄目だ。手を出したら家族に迷惑がかかるし、緋達だって……。俺の考えを知ってか知らずか、緋達は唐突に大声を上げる。

「気にすんな!!」

「……え？」

拘束された人質の決まり文句みたいなものだが、それは俺の思考と丁度マッチし、俺の思考を全て停止させた。

「ドガンとやっちまえ!」

意味不明な擬音ではあったが、俺の中でさっきとは全く違う感情が溢れだしてきた。

東西南北は緋達の「ドガンとやっちまえ」宣言に大爆笑し、誰に言うでもなく声を張り上げる。

「こいつはなあ! リンチしてんのに手も出せねえほど弱いんだよ!」

なるほど。東西南北は俺のことをそんな風に評価していたのか。それは心外だ。俺は手が出せないのではなく、出さなかっただけだ。

俺は東西南北を全く無視して、緋達に問いかけた。

「良いのか？」

「ああ!!」

ほぼ即答だった。いらぬ心配だったようだ。

俺は東西南北に気付かれないように近くの小石を拾い、ゆっくりと立ち上がる。

「緋達。最初に出会った時、理奈って呼んでくれて言ったよな」

俺の唐突な話題に疑問符を浮かべているが、緋達はゆっくりと頷いていた。

「じゃ、そうさせてもらうか」

俺はどこか笑顔のような、それでいて違う表情を浮かべ、緋達に……理奈に言った。

「理奈。指の1本たりとも動かすなよ」

雰囲気が変わった俺に息を呑む様子が見て取れたが、理奈は俺を信頼しきった、確信的な表情で頷く。と同時に、完全に蚊帳の外だった東西南北の1人、理奈を拘束している西山が笑いながら叫んだ。

「お前がなんて言おうが雑魚はざっ……!!?」

全て言い切る前に、小石を奴の眼前に飛ばし、目くらまし代わりとして使う。

小石を避ければ俺が迫り、避けなければ直撃し、目をくらませる。どちらにしろ、小石を避けたアイツは迫った俺の右ストレートで地面に沈んだけどな。

「まったく、ギヤアギヤアギヤアギヤア喧しいんだよ。西山」

俺を信じているからか、全く目を閉じなかった理奈の、とても可愛らしい美少女と言っても過言ではない容姿が、顔が、直ぐ目の前で驚きに変わる。

俺はそれに対し左手で、拘束の解けた理奈の頭を胸に抱き止めた。

「こんな無茶はあまりしたくないんだがな」

小さく、耳元で呟いた。

理奈はそれで正気を取り戻し、俺から離れる。

心なしか、頬が髪と同色のように赤みがかっている。俺は気付かないフリをしたが。

「てめえ!!!」

と、真東が放心から立ち直り、俺に向かって拳を振り上げた。今の俺には制限がない。心置きなく本気を出せる。

とりあえず攻撃を少ない動作で回避し、右拳のボディブローを叩き込んだ。

すると、声もなく地面に崩れ落ちる。

ありやく。終わっちまったか。

「2度目はねえって!!!」

俺が真東の早すぎる死（死んでないけど）に頭かぶりを振っていると、後方から理奈の声が届いた。その声に振り向くと、南田の遺体（死んでないけど）が転がっていた。理奈って以外と強いんだな。

最後の1人、北岡は驚愕の表情で恐れおののき、尻餅をついていた。

「こんなの聞いてねえよ!!」

誰から聞くわけでも無かるうに。

意味不明な北岡の言葉にため息を吐き、勝者の余裕とばかりにその言葉に付き合っただけだ。

「誰から聞いたんだ？」

完全におちよくっている口調ではあるが、余裕がない北岡にとってはどうでも良いらしく、律儀に返答してくれた。

「角刈りゴリラ」

「……なんだと？」

まさかここで聞く名前とは思ってもみなかったから、若干驚いてしまった。

まあ、こいつが他人に罪を擦り付けようとしている可能性もあるけど、何分角刈りゴリラには借りがある。もしかしたら借りを返せるチャンスなのかもしれないな。

「角刈りゴリラに命令されてやったんだ」

命令されてやったけど俺は楽しんでたぜ。みたいな表情をしてやがる。

やっぱり話聞かずにブン殴るところか。コイツ。

しかしそれをやると全校生徒の自由がこの先数年間失われてしまう。我慢だ。

「それじゃあ、ブン殴らねえから話を聞かせろ」

俺は理奈とともに北岡から話を聞いた。

それはとても気分が悪くなるような話ではあったが、角刈りゴリラの職権乱用、そして法に触れるレベルの悪事が垣間見えた話だった。

さて、反撃の狼煙を上げるか。

俺と理奈は翌日から、角刈りゴリラを陥れるための下準備を始めた。

ちなみに東西南北はあの場に放置し、北岡は拳骨で懲らしめてやった。

とりあえずそれで無罪放免。久々に心が晴れた戦闘も出来たしな。それに今は角刈りゴリラの方が優先だ。ぶっ潰してやらないと。

第51話 俺がお前と出会う時（後書き）

いかがでしたでしょうか？

過去編は次回で終わりの予定です。

予想以上に長くなってしまいました。

御意見御感想をお待ちしています。

第52話 事実を消すたった1つの魔法（ほうほう）（前書き）

過去編終了です。

お楽しみください。

第52話 事実を消すたった1つの魔法（ほうほう）

数日後。 林名高校校長室。

その部屋で行われていたのは、世にも恐ろしい闇取引……ではない。
く。

「つーわけで、俺のやることに関して黙認してくれれば、あの牧田
教諭をどうにかしてやるよ」

単なる合法的な取引であった。

俺は窓から外を見続けている校長に、ある取引を持ちかけていた。

「そんなことは……」

「出来るだろう？ アンタらがやってきたことだろうが」

渋る校長を説得するというか、言い含めるように語り掛ける。

やってきたこと。の辺りを聞いた途端、校長は悪いことをしている
自覚はあるのか、押し黙った。

「アンタらは黙認すればいい。後は全て俺がやる」

どうやら教師陣も角刈りゴリラの行き過ぎた行動には頭を悩ませ
ているようなので、自分の手を汚さずに、問題を解決してくれると
いう俺の言葉には魅力的に見えるようだ。

故に、一生徒の言葉に対し、駄目だとも断言できず、言い渋って
いるようにも窺える。

「……………良いだろう。好きにしまえ」

しかしそれも一時の迷い。

ここで駄目だと言うより、角刈りゴリラをどうにかした方がメリツトが大きい事を思ったのか、たっぷり時間をかけながらも、最終的には首を縦に振った。

それを聞いて、俺は少し畏まった佇まいでそれを受け取った。

「まあ、ハッピーエンドに向かいますか」

いつも通りだ。と、小さく呟く。

俺がよくやる美少女恋愛ゲーム……俗に言うギャルゲーと一緒にだ。なんて思いながら、俺は校長室を退室した。

数日後。生徒総会。

毎年この時期、体育館で行われる(らしい)生徒総会には、全校生徒に教師陣、校長も出席する、いわば絶好の裁判日和なわけだ。こんな日に行動できるのが、嬉しく思う！

『……以上を持って、生徒総会を終了する』

壇上で進行をする角刈りゴリラの言葉を皮切りに、俺は列から抜け出して壇上の近くまで行く。

「ああ？　なんだ前原。貴様いたのか」

生徒だからそりゃいるだろうに。というツッコミは胸の奥に嚴重に保管し、何も言わずに壇上へ上る。

生徒共や教師陣のざわめきが聞こえる中、俺は角刈りゴリラと相

対した。

「壇上に上るんじゃない！！ 不良が何のつもりだ！！」

だから不良じゃないって。

言わずに、俺は突然、ニツコリ笑って角刈りゴリラを見た。

奴はスゲー不快な顔をしていたが、必死に堪えて声を出した。

「牧田せくんせい！」

「なんだその気色悪い口調は！ 大体、何故貴様がだんじょ……ぶえっ！！？」

奴が全てを言い切る前に、俺は角刈りゴリラの顔面を右ストレートでブン殴った。

奴の懐からビデオカメラみたいな物が転げ落ちる。

広大な体育館にいる全員が、その突然の事態に驚愕しているのが窺えた。

そんな中、角刈りゴリラは起き上がると、俺を睨んでギヤアギヤア怒鳴り散らした。

「貴様！！ 教師を殴ってただで済むと思っているのか！！」

あゝうるせえ。喚くしか脳がないのかこのゴリラは。

俺は奴の懐から落ちたビデオカメラを拾い上げると、角刈りゴリラに見せつけながら話し始めた。

「あれえ？ 何か落ちたぞ？ これはハンディカムってやつか？」

「おい！ 勝手に触るんじゃない！！」

必死になって止めようとする角刈りゴリラを制止させるように、

壇上に上がってきた理奈が俺と奴の間に割って入る。その間に俺は電源を入れ、ハンディカム内に録画されている動画を最初から順に再生していった。もちろん、音量は最大だ。

『……ねえ、ミキさあ。好きな人いるの？』

『えー、私はあ……』

最初に流れたのは女子生徒2人の姿。奥の方にはロッカーが並んでいる。

注目すべきは女子生徒の服装。……間違いなく着替え途中だった。つまりは、録画場所は女子更衣室。手ブレが皆無なことから、どこかに隠していたんだろう。盗撮だな。

整列している生徒の中から、「えっ？ あれって更衣室の会話じゃ……」「私たちの声だ……」という呟きがあったことから、間違いはないだろう。

さすがに見続けるわけにもいかないのさ、さっさと次へ進ませる。

『……おらあ！！ なに口答えしてんだよ！！』

『ごめんなさいごめんなさい……』

次は男子生徒が暴行を受けている映像だった。

最初の声が角刈りゴリラだろう。次に流れたのは男子生徒の悲痛な謝罪か。

視線だけを角刈りゴリラに向けると、酷く青ざめた顔をしていた。そろそろいいかな。

俺は再生を停止し、ハンディカムの電源を切った。

そして、強い眼光で角刈りゴリラを睨む。

奴は一瞬怯んだものの、すぐに強く睨み返してきた。

「前原！！　こんなことしてただで……」

「それはこっちのセリフだ。こんなことしといてただで済むとでも？」

そんなデジャブを感じさせるような言葉を遮り、未だ心が折れない角刈りゴリラを追い詰めていく。

「これはアンタの解任決議の証拠品として校長先生に提出する」

それだけ言えばもう、絶望的な表情をしていたが、心だけはまだ折れず、打開策を模索しているようにも見えた。

「貴様になんの権限があつて……」

「なにを勘違いしているんだ？」

「あつ？」

奴は俺を査問官とでも思っているのだろうか？

俺はただの高校生。林名高等学校の一生徒だ。そんなものではない。

つまりは、

「俺はただ単に拾い物をして、持ち主を特定するために再生したら大変な物が映っていたから、それを校長先生に渡した。というだけの話だ」

何も問題はあるまい。

しかしそれを言っても諦めない角刈りゴリラは、少ない脳みそをフルに活用して何とかしようとしていた。そして、1つ思い付いた

ようだ。

「貴様は拾ったと言ったが、俺を殴って奪い取っただけだ。これは十分な窃盗だぞ！」

まあ、確かにその通りだ。窃盗と言われても反論は出来ない。ていうか角刈りゴリラ。それじゃあ、俺も何かしらの罰を受けるが、お前の罪は晴れないぞ。結局のところ道連れが精一杯だ。だが、そんなことどうでも良いのか、これでどうだみたいな目で俺を見ている。

さて、どうしようかな……と。

視線を横にズラすと、理奈が心配そうな表情でいた。

はあ、打開する方法をちゃんと考えてはいるが、これは完全に全校生徒と教師陣任せだぞ？ まあ、どちらにしろやらなければ俺が終わるだけなんだが。

渋々、と言った苦い表情で、俺は壇上上のマイクに向かって言った。

『はあ、このままじゃ牧田先生を解任できない。とは言っても、俺が殴った証拠が牧田先生の証言だけじゃ立証も出来ない。これは証言を集めるしか無いみたいだな』

ここで俺は賭けに出た。
もし、誰も俺が角刈りゴリラを殴っていると証言しないのなら俺の勝ち。

逆に、誰か1人でも殴ったと証言すれば俺の負けだ。
負けた場合は角刈りゴリラは解任、俺も同様に何らかの処分を受けるだろう。

しかし勝った場合、角刈りゴリラ1人の処分済む。

さつき解任できないと言ったのは嘘だ。

本当はここまで林名高校中に知れ渡ってしまったのだから、校長も重い腰を上げざるおえない。俺が勝っても負けても、角刈りゴリラは解任される。

だがこう言うておくことで、角刈りゴリラに苦痛を味わわされてきた奴らは、角刈りゴリラの解任のために俺に味方してくれる可能性がある。

しかしそれと同様に、俺にも良い噂は無い。

この意味するところは、俺の破滅も望んでいる奴がいるということだ。

一か八かの大勝負。チャンスは一度きり。

『俺が牧田先生を殴ったところを見た奴はいるか？』

一瞬の静寂。

生徒と教師は俺の言った意味を考え、結論を出した。

理奈と一緒に体育館中、視線を巡らす。

全員が全員、俺たちを見ていた。

そして、手を高く挙げている奴を探す。

1年生は……………いない。

2年生は……………いない。

3年生は……………いない。

最後に教師陣は……………いなかった。

俺は満面の笑みで、角刈りゴリラに向き直った。

「この体育館中の誰も見てないそうだ。つまり、俺が先生を殴った証拠は……ない」

言葉に出すと、より実感が湧いた。

悪い噂しか流れていなかったはずの俺に、みんなが味方してくれたのだ。

全員が共通の利害を抱えたことによって、事実が1つ、吞まれて消えた。

角刈りゴリラは今度こそ本当に終わった表情で、うなだれていた。これで全部終わり……にはならない。

まだやるべき事がある。

「牧田秀雄。まだ1つだけチャンスがある」

うなだれていた角刈りゴリラは、その言葉に顔を上げた。

この場にいる全員が、何事かと息を吞む様子が分かる。

「アンタが金輪際悪事を働かないと言うのであれば、然るべき手続きの下、辞職という形でやめることが出来る。この場合、アンタの名前に傷が付くことはないし、犯罪者として逮捕されることもない」

これは取引。

解任という一方的な形で終着だと、林名高校の教師が盗撮諸々の罪で逮捕され、林名高校の悪評が増えてしまう。それだとハッピーエンドではない。

しかし今回の騒動を黙認し、角刈りゴリラが自分で辞職するのであれば、角刈りゴリラの悪評も増えることはないし、逮捕されずに済む。尚且つ、逮捕者を出さずに、林名高校の悪評の原因である教師が辞めたとなれば、この高校の株も上がり、数年掛ければ以前の

ランクまで上げること不可能ではない。

「しかし解任だと、アンタは犯罪者として世間を賑わすことが出来るぞ。もちろんその様子は、アンタが知ることの出来ない鉄格子の奥だな」

これは裏を返せば、逮捕される代わりに林名高校の悪評を増やす……つまり、復讐のチャンスを与えていることにも等しいのだが、

「……………金輪際、悪事は働きません」

こんな脳みそまで筋肉で出来ているような奴にそんなこと考える頭があると思えないし、今は絶望の中に沈んでいるからまともな思考が出来るとも思えないけどな。

「OK。後は校長先生や教師陣に任せるよ」

そこまで言ったところで、生徒共から嬉嬉ききとした声が巻き起こった。

全校生徒が角刈りゴリラにどれほど苦しめられていたのか、この様子を見る限り想像に難しくない。

「良！」

巻き起こる声に耳が慣れ始めた頃、壇上の理奈が俺の下へ駆け寄ってきた。

呼び名が変わっていることは、勝利の褒美として受け取っておこう。

「やったな！」

出会ってからしばらく経つが、その中で一番の笑顔を見た気がして、俺も自然と笑みがこぼれる。自然に笑ったのなんて、どの位ぶりだろうか。

すると、理奈が拳を突き出してきた。

俺は少し迷ったものの、最終的には拳同士を合わせて笑った。

事後報告としては、角刈りゴリラの辞職は今すぐとは行かないので、まだ少しの間、教師を続けてもらうこととなった。

悪事の方は問題ないだろう。

俺が目を光らせている限り、奴は敗北を思いだして何もしないだろうから。

それからもう一つ、変わったことがある。

それは……、

「おはよう！ 前原！！」

「おはよう！ 前原君！！」

「ああ、おはよう」

みんなが俺を怖がらなくなったことだ。

以前の悪評は嘘のように消え、全校生徒からは親しまれるようになった。

まだ若干の凝りがある奴もいるが、概ね良好だと言えるだろう。

これも、生徒総会の事と、それから………理奈のおかげだ。

そりゃあ、いくら利害が一致したとはいえ、全員が全員俺に賛同するわけ無いだろう。どうやら理奈が手回ししていたみたいだ。俺の知らない内にイメージアップの作戦活動をしていたとか。まったく、余計なことを……………いや、今回は素直に助かったしな。

感謝しておこう。

なんだか、理奈が来てから生活が様変わりしたな。

以前の方が良かったとは言わない。

やっぱり人間、1人でいるよかみんなでいた方が楽しいしな。

「なあ、良」

「ん〜？」

廊下を歩いている時、隣にいた理奈が俺の顔をのぞき込みながら問いかけた。

「いくら角刈りゴリラをどうにかするためとは言え、あれはやりすぎじゃなかったか？」

確かに一理ある。が、角刈りゴリラを退治するだけじゃ、意味がない。

それだと「角刈りゴリラが辞めたのか。へえ〜」で終わってしま

う。しかしあのような場所で、あのような手段で勝利すると、「自分も角刈りゴリラとの勝利の要因だ」と言う風に自覚が生まれる（明確にそれである必要はない。ただそれに似たような自覚が生まれることに意義がある）。

そしてその自覚が、また角刈りゴリラのような人間が現れた時に、何事にも屈しない精神力となってその人物の糧となるわけだ。

「それに」

「……？」

そこまで語り終えたところで、一度区切るように一呼吸する。
理奈に向き直って、自然と笑った。

「自由がなくなるって、“そんなの悲しいだろうが”。それならそれを奪った奴には相応のことをしなきゃな」

そう言うと、理奈は数秒ほどポカンとして、満面の笑みで頷いた。

「そつだな！」

第52話 事実を消すたった1つの魔法（ほうほう）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

無理矢理過ぎでしたかね？

次回からは現代に（1年後だけど）戻ります。
御意見御感想をお待ちしています。

第53話へ、別に俺はロリコンじゃないからねっ！(前書き)

お楽しみください

第53話 へ、別に俺はロリコンじゃないからねっ！

何となく思い出した。

あのは角刈りゴリラの辞職と同時期に姉貴が赴任してきたんだよな。

冬紀と出会ったのも生徒総会すぐ後だし。

懐かしいなあ。東西南北と角刈りゴリラは今頃、ゾンビになってるだろうけど。

……ていうか理奈との出会いってあんなんだっけ？

ベントーの存在感ありすぎてすっかり忘れてた。

確かに会おうよりも前に出会っているっぽいこと言ってるな。また忘れてた。

ああ、また忘れたなんて言ったら今度こそ怒鳴られるんじゃないかねか？

何て事を考えながら、俺はゆっくりと体を起こした。

いつものように寝間着から制服に着替える時間の短縮のため、制服のまま寝たのだが、当然のように至る所シワだらけで、更に洗えなかった制服は連日連夜の酷使のせいでボロボロの上汚れていた。

風呂も入っていないから髪もベトベトで、少し気持ち悪い。

頭を掻きながら風呂入りてえなあ。何て事を思う。

ふと、寝息が聞こえた気がして辺りに視線を向けると、みんなが無防備に寝顔を見せていた。

右手につけた腕時計で時刻を確認する。5時29分だった。

この時間の見張りは姉貴だったか？ と思つて、起こさないよう

に布団から抜け出し、俺たちが借り受けた部屋の出口まで歩く。

扉を潜る前に、視線を理奈に向けた。

無防備に、尚且つ寝相良く寝るあいつに、どこか直視し続けると冷静な思考が保てない気がして、頭を振って扉を潜った。

「あつ、おはよう。よく眠れたかな？」

扉を閉めるのと同時に、監視カメラのモニターの前でコーヒーを飲んでいた幸田さんに声をかけられた。

安全性のために俺たちが1つの部屋を借りてる中、別部屋でノンキに寝てやがったんだろうなあ。何て事を思ってしまった自分に苦笑しつつ、彼の問いかけに律儀に答えるために口を開いた。

「程々に。……ですけどね」

わざとらしく肩を竦め、自前のインスタントコーヒーを作って眠気覚ましに飲む。完全にブラックではないが、少し濃いめのコーヒーを飲んでいく内に、冬眠していた思考力が蘇ってきた。

「ああそうそう。君のAF VW03だけどね、見た限りじゃあ直すのは一苦労だよ」

AF VW03……ああ、X-7か。

そういえば前日、見てくれと頼んだ記憶がある。

X-7はどちらにしろ使うには危うい武器だったし、直してくれるなら直してくれるで頼むつもりだった。直らない限りよっぽどの事でもないと思われないし、それなら幸田さんに任せても問題ないかなと思つた訳だ。

「それだと俺には荷が重すぎますね。お願いしても良いですか？」

「ああ、構わないよ」

彼はイヤな顔1つせず、快く引き受けてくれた。

俺は俺で、コーヒーを一口口に含むと2階への階段を上っていく。2階と言っても警備室の真上に作られたものではなく、展望室とでも呼べる休憩スペースだった。ここは建物の構造上、警備室の真上に作ってしまうと、ショッピングモールの4階売場と重なってしまうのだ。故に少しズラして作ることに、スペースの無駄なく広さを確保できるというわけである。

さらに言つと、展望室からハシゴを登っていけば、屋上に出ることがができる。

そこは本館の5階のイベントスペースではなく、別の屋上だ。そこに行く方法は、展望室に備えられたハシゴしかない。

「姉貴」

「あつ、良ちゃん。おはよ〜」

「はい、おはようさん」

展望室には姉貴が寝てないか見に来るつもりだったのだが、どうやらいらぬ世話だったようだ。姉貴にはちゃんと年長という自覚が芽生えたみたいで何より何より。

俺がイスに座った姉貴に近づくと、突然、顔をしかめた。理由は分かっているのだが、実際にやられると凹むな。

「俺ってそんなに臭うか？」

誰にも聞いたことはなかったのだが、改めて聞いてみた。すると、姉貴は全力で首を縦に振り、これでもかという位に肯定をした。

やっぱり臭うのか。そりゃあ風呂入ってないし、ゾンビという腐臭

の塊と戦っているし、下水道行つたからしょうがないけどな。
残ったコーヒーを一気に飲み、コーヒーカップをデスクに置くと、
肺の空気を全部出す勢いの大きなため息を吐いた。

「何とかしないとなあ」

昨日話を聞いた限りじゃ、俺以外だとアーティ位しか風呂入つて
ないみたいだ。

何でも俺と別れた後にサクラの家行つて、風呂を堪能してきたら
しい。

俺は風呂入らなくても気にしないし、アーティも同様だろうが、
他の女性陣が問題だ。いつ、何を言い出すか分かんねえ。早急に対
処しなきゃな。

「つーわけで、どうにかしてくるわ!!」

「え？ 良ちゃん!? 良ちゃん!!」

唐突に階下に降りてつた俺に手を伸ばすように、姉貴が訳も分か
らず叫んでいた。

M P 5 Kクルッを持って警備室を飛び出したのは良いが、どうするかな。
幸田さんが言うには警備室にも温水が出る様にはなっているけど、
肝心の浴槽が無いということだった。それなら持つてくるか。と意
気込んで出てきたが、俺1人で持つてこれないだろう。
そう今更気づいたが、完全に手遅れだった。

「小さい奴だつたらいけるか？」

もはや意地でも持って帰ってやる。なんて思ってしまったのが間違っていた。

しょうがないから浴槽コーナーでも見てくるか。と、一路4階へ目指す。

その途中、前日に幸田さんから貰ったケータイが独りでに震えだした。

これは連絡用に借り受けたケータイで、四六時中モニターを見ている幸田さんが何かを発見したり、問題が発生した時に連絡がくるようになっている。

「どうしました？」

ポケットから取り出し、通話ボタンを押して耳に当てた。

てつきり幸田さんが出ると思っていたら、通話口から聞こえたのは意外にも姉貴の声だった。

『良ちゃん！ 大変！ 女の子が！！』

ただならない姉貴の声に、誰かがヤバい状況なのが直ぐに分かった。

「分かった！ どこだ？」

『4階の工具売場！』

場所を聞くなり、俺は一目散に駆け出す。

4階なら向かっている途中だったから、直ぐに着くはずだ。

俺の予想通りに、程なくして目的の場所に着いた。

「誰かいるのか？」

手つとり早く叫んでみる。

すると、泣き声みたいなのが売場に響いてきた。

それはとてもうるさく、一瞬耳がイカれるかと思ったほどだ。

泣き声の発生源らしき場所へ走っていくと、そこにいたのは1人の少女と、

「だいじょ……うぶ……か？」

2人のむさ苦しい男だった。

少女の方は幼稚園位の年齢だろうか？

むさ苦しい男たちは、双方とも20〜30位だろう。

そこで何が行われていたかというのと、泣きわめく少女をむさ苦しい男たちが宥めている（？）構図のはずだ。

ただ何分、男たちがむさ苦しい上に体躯がデカく、気持ち悪い表情をしているので、少女のことをより悪化させているようにしか見えない。

なるほど、確かに「大変」だ。

そして俺の見立てだと、あの男たちはロリコンだろう。

これは………放っておいても良いかな。

『ダメだよ！！』

未だ切っていないかったケータイの通話口から、姉貴のツッコミが聞こえた。

モノローグって近くにいらなくても読めるんだな。初めて知った。

とりあえず姉貴にもツッコまれてしまったので、むさ苦しい男たちを説得し、少女の救出に成功した。ただ、

「べ、べつにたすけてほしかったわけじゃないんだからねっ！」

助けた少女にツンデレられた。

第53話 へ、別に俺はロリコンじゃないからねっ！(後書き)

いかがでしたでしょうか？

ツンデレっていないんですよね。

御意見御感想をお待ちしています。

第54話 こいつガ ホモだあぁー！！！(前書き)

お楽しみください

第54話 こいつガ ホモだあぁー！！！！

助けた少女の名前は絵素えすというらしい。

少女を宥めていた（？）むさ苦しいロリコン2人組は兄弟で、弟が得留えりる、兄が獲武えむと言っていた。

これももうサイズじゃねとか、某国民的オーバオールおじさんを思い浮かべないでもないなとか、色々思ってしまったのは一時の気の迷いだ。

ともかく救出した生存者3人を警備室に連れていき、俺は起きていた冬紀と共に浴槽を取りに向かっていた。

「そういうことなら言ってくれば良かったのに」

「寝ていた奴が何を言うか！」

最初相談した時に、そう会話したのを覚えている。

思い返せば冬紀と2人だけというのはゾンビが発生してから無かった気がする。

まあ、男だけじゃないと話せない話題もあるから良い機会なのだが。

ちなみに現在、俺たちは4階を歩いていた。

俺の武装は前回と同じMP5K。クルッ

冬紀は日本刀ボンとイサカM37だ。

「そういえば冬紀。お前、俺がいない時は男1人だったんだろ？」

何かあった？」

「何かあってなんだよ……」

冬紀は苦笑して、俺から視線を逸らした。

なに？ なに？ 面白いことでもあったのか？

「連日連夜奴隷のように扱われただけさ」

「……………何か……………すまん」

あの冬紀が遠い目をしている！？ どんな悲惨なことをやられたらこんな風になるんだ！？ 外面だけじゃなく内面もイケメンな冬紀が！？ ていうかもう達観してないか！？

このことに関しては深く踏み込まない方が良さそうだ。

最悪、俺も明鏡止水を体得しかねない。

俺はこの歳で悟りたくはないぞ……………！

言いようのない寒気を感じていた時、ポケットに入れたケータイがまたも震えだした。

『今度は2階みたいだ』

通話ボタンを押して通話口を耳に当てた瞬間、簡潔に用件を告げられてしまった。幸田さんめ……………！ ボケ殺しか！

『ただ様子がおかしい。気を付けて』

「了解です」

通話終了のボタンを押し、ポケットに放り込んだ。

2階って反対だし、ボケさせてくれないし、浴槽取りに行けないし。

次々と巻き起こる不運に某上条さんみたい叫びたくなってしまったが、隣に冬紀がいることを思い出して自粛する。

しょうがないので、冬紀に生存者がいることと2階であることを述べて、走り出した。

程なくして目的の2階にたどり着くと、早速生存者を見つけた。その人は俺たちに背中を向け、暗幕の様な物をマント代わりに羽織っているようにも見える。

「大丈夫ですか？」

と、油断無く日本刀を構えた冬紀が問いかけると、男はゆっくり振り返って、その姿を俺たちに晒した。

その姿は某国民的ネコ型ロボットのお面をし、暗幕をマントのように羽織った、服を全く着ていないボディビルダーのような体格の男だった。

俺と冬紀はその姿を見た途端、真っ先に同じことを叫んだ。

『変態だああー！！！！！っ！！！』

男は絶叫を意に介す様子もなく、右腕に力こぶを作ったと思えば、

「ウホッ！ 良い男」

と言い始めた。

この場の室温が氷点下を記録した瞬間だった。

『こいつガ ホモだああー！！！！！』

またも同じことを叫び、俺と冬紀は今まで見せたことのないシンクウ率でその場から逃走する。何故かって？ 俺たちの貞操が危ないからだ！！

今だったらアーティの走力すら超えられるんじゃないかっていうほどの全力疾走で変態から遠ざかるが、いつの間にか前方に回り込

まれ、やむなく急停止した。

「やらないか？」

変態のその一言に、俺たちはもの凄い剣幕で断言した。

『やりませんっつー!!』

しかし変態は俺たちの言葉を無視し、ゆっくりと距離を詰めてくる。

俺たちは変態が詰めた距離だけギリギリと後退し、やがて壁に追込まれた。

「お帰りくださいませ、お帰りくださいませ……!!」

まるで祟り神に拝み倒すような村民のように、両手を合わせて祈ってみるが、当然のように効果はなかった。だが変態は一定の距離まで詰めると、それ以上は距離を詰めなくなった。

突然の行動に不審に思いながらも、一時の猶予が出来たことに安堵する。

すると変態は懐から150センチの長さの杭の様な物を出すと、俺たちの方へ突き立てた。

何かもうイヤな予感しかないし、あの杭みたいのがスゴく禍禍しく思えるし。

案の定、変態は一瞬の間を置くと、もの凄い勢いで突撃してきた。それを間一髪で回避し、冬紀は変態に切りかかった。が、それは変態が杭で受け止めてしまう。

「良祐！」

冬紀の声を聞く前に照準を変態へ向け、フルオートのカムフラージュを引き出した。

連続する銃声と反動から8発程度は放ったはずだが、その全てはマント代わりの暗幕の中に吞まれて、消えた。

「そんなのありかよ!？」

驚愕する俺の視線の先で、冬紀は一旦距離を置いた。

こんな得体の知れない奴を相手に真つ向から切りかかるのは得策じゃないと判断したのだろう。妥当な判断だし、もし近接で特攻したりすると、何かの拍子にやられかねない(いろんな意味で)。

つまり、こいつには一斉射撃フルバースト！ 安全かつ的確かつ安全かつ安全にい!!

「かつかつうるさいし、どれだけ安全を望んでるんだ」

冬紀にモノローグをツッコまれた件はさておくとして、作戦の意図を理解したのか、冬紀は日本刀をイサカに持ち変えて変態へ向けた。

俺もカムフラージュを変態へ向け、2人同時に引き金を引いた。

俺は引き金を引き続け、冬紀はポンプアクションで連続射撃する。しかし、変態に向かっていく弾丸は、暗幕の中に吞まれると一切の消息を絶った。反対側に落ちるわけでもなく、変態にダメージを与えるわけでもなく、忽然と姿を消したのだ。

「いやだから、どついう原理なんだ？ 4次 ポケット？」

謎が尽きない変態は、懐から1メートル程度の杭を出すと、それを投げつけてきた。

「ヤバい！ 掘られる！？」

俺のことは無視してくれて構わない。どうぞご自由に軽蔑してくれ。

ともかくそれを右に回避して、弾丸が無くなったクルツの弾倉交換マガジンチェを迅速に行う。その間にさっきの杭を沢山出していた変態が、またもそれを投げつけてきた。

「ヤバいよヤバいよ！！」

某リアクション芸人のマネをしながら、冬紀と共にそれらをどんどん回避していく。変態のマントは本当に4元ポケットのようだ。全く尽きる様子がない。

このままでは死亡確定は必至なので、一瞬の内に冬紀とアイコンタクトを交わし、変態へ同時に突撃した。

理由は簡単。「引いてダメなら押してみる！」と言うわけだ。

俺たちはそれぞれの近接武器を持ち、杭を回避しながら歩を進める。

俺は左手に短刀を持ち、右手に持ったクルツで変態へ向けてフルオート射撃を敢行した。それは片手ということもあって数発外してしまったが、そのほとんどは命中したはずだった。

だがやはり、あの不思議なマントのせいでダメージを受けた様子はない。

しかしこれはただの牽制。本命は冬紀だ。

冬紀は日本刀で切りかかるが、それは長い方の杭で防がれた。

俺も左手の短刀で切りかかる。だが短い方の杭で防がれてしまった。

だけでも、これも困だ。俺は肩に掛けたままだったクルツを手放し、右の拳で変態の顔面（某国民的ネコ型ロボットの面）を殴った。

変態はよろめき、後退する。

それにすかさず、冬紀と共に渾身の回し蹴りを放った。

変態は大きく後退し、エスカレーターから転げ落ちていった。

その下には6体のゾンビがいて、転げ落ちてきた変態の体に噛みついていく。

なんか、「いやんやめてえ」とか「そこはダメえ」とか聞こえてきたが、俺たちは意に介してないよ。そんなことどうでもいいからね。

俺は無言でポケットから手榴弾を手にし、ピンを引き抜いて変態の下へ放った。

そして死に様を見るまでもなく、振り向いて冬紀と歩き出す。たった一言、冬紀と八もった言葉を残して。

『殺られてろ』

後方の階下で、凄まじい爆発音が響いた。

第54話 こいつガ ホモだあーーーー!! (後書き)

いかがでしたでしょうか？

良祐君と冬紀君でやってみたかった話です。
御意見御感想をお待ちしています。

第55話 VSSスナイプゲーム(前書き)

お楽しみください

第55話 VSSスナイプゲーム

シヨップینگモールに拠点置いてから3日目の朝。
俺たちが割り振られた部屋でミーティングをしていた時だった。

「ここから脱出地点まで1日と掛からないだろう？ 何故出発しないんだ？」

唐突に放たれた冬紀の言葉で、場の空気が凍り付いた気がした。
確かにここからなら1日と掛からずに隣市に行ける距離だが、そのためにはたくさんの準備が必要なのだ。

ハンヴィーで脱出するにしてもガソリンが無いし、生存者を救出したからハンヴィーじゃ入りきらないし、銃器のメンテも終わっていないし、体調も万全ではないし。

等と言いつつ述べてはいるが、本当の理由は別だ。

忘れてた。

安住の地というものを手に入れたせいか、脱出するという最優先事項が思考から欠落してしまっていた。もちろん理由はそれだけじゃないが、一番はそれだろう。

こんな危険だらけの世界で生きていた俺たちにとって、目の前のことに一生懸命にならなければ、いつ死ぬか分からない。

そんな状況で、脱出などという先のことに意識を向ける暇は皆無だったのだ。

先ず生き残る。そして脱出する。

最近の俺たちに、そう考える余裕は無かったということだ。

「考えなきゃいけないよな。色々」

バツが悪そうに頭を掻いて、床に広げられた地図を見てみる。

最悪、1〜2食食べなければ荷物が随分軽くなるし、その間に隣市に行けば食料なんて山ほどあるだろう。そう考えたとしても、1人が乗れる車両の確保もしなければ行けず、ゾンビが集まっているショッピングモールを脱出しなければ行けないし、問題は山積みだな。

とどのつまり、現時点で脱出できる見込みは無い訳だ。

生存者たちを見捨ててもしない限り……な。

もつともそんなことを無駄に正義感が強いこいつらが選択するのは到底思えないので、全員で脱出する術を模索しなければならぬ。作戦立案及び最終決断を決める俺としては、途轍もない重圧だ。

まあ、俺が1人で抱え込むことは無いから、今はまだ考える必要は無いだろう。

「ともかく今は、生き延びていくための食料物資の確保と安全確保を優先しましょう。脱出は追々考えていくとしてね」

俺たちの頭脳でもある早織の言葉に反抗する者はおらず、みんなが一様に頷くのを確認して、今日のミーティングは終わりを見せた。

生存者が居た場合に迅速に対処するために、日中は交代制でショッピングモール内の偵察をしている。俺はそれのついでに、浴槽の調達を推し進めていた。

しかし今日のように担当が午後からだ、午前中にやる事が無くなる。さすがに偵察でもないのに本館をうろつくとは非常事態の際に早急に対処できないし、休むための交代制なのに体を酷使すると

有事の際に最大限力を発揮できない。

そうだった時は専ら、幸田さんにメンテナンスを教えてもらうか、誰かと話をするか、寝るか。後は大抵、早織との講義か論議である。今日は前者。早織の講義だった。

講義と言うのは銃器の簡易メンテナンス、扱い方、性能特性、その他と、銃器のことばかりだ。とは言っても、銃器のことだけではないけど。

ちなみに今回は扱い方。早織が得意とする狙撃の講義だ。

場所はさつきと変わって警備室屋上。

展望室から伸びたハシゴを上らないと行けない、安全性の高い場所だ。

みんなは風に当たりたい時やショッピングモール外の偵察の時など、外でしか出来ないことをするために利用するのが多い。俺と早織は狙撃実習のためによく利用する所ではある。

諸装備と弾薬を持ってハシゴを上り終えた俺に、同じような装備を持った早織がいつものように口を開いた。

「まずは肩慣らしのゲームをしましょう。ルールは前回と同様」

早織の言葉を引き継ぐように、俺は前回言われたルールを復唱した。

「制限時間は5分。弾薬は8発。ノンアクションターゲットウォークターゲット固定目標でも移動目標でも構わないが、ヘッドショットに限る。……だっけ？」

最後に確認を取るのを忘れない。

早織は首を縦に振り肯定の意を示すと、ルールを覚えていたことにか、満足そうな表情をして、屋上の端、転落防止用の手すり

に歩いて行った。

手すりに触れられる距離で足を止めた早織と同じように左隣に行き、俺たちは抱えていた諸装備を手に取りやすい位置に置く。

これから俺たちがするのは早織が言ったようにゲームだ。

とは言っても遊戯という意味のゲームではなく、訓練という意味でのゲームだが。楽しんでいるという共通の事柄がある以上、そんなことは些細なことに過ぎない。

ルールは簡単。そして単純明快。

制限時間5分以内に弾薬8発を使って、より多くのゾンビを倒した方が勝ち。

ただし、一射一殺を常とし、ヘッドショットだけでゾンビを倒さなければならぬ。

その代わり、移動する目標でも移動しない目標でも点数に数える。特に最後は、狙撃経験2回目の俺に対するハンデという意味もある。

俺もそれに甘えさせて貰っている訳だ。

俺は狙撃位置ボジションを確定させてそこに陣取り、持ってきた装備の確認作業に移る。

今回の相棒はVSS狙撃銃。愛称はヴィントレス。

箱型弾倉ボックスマガジンの10発タイプで、使用弾薬は9×39ミリ SP 5 亜音速弾。これは通常のボール弾（被覆鋼弾）タイプの弾薬らしい。全く分らないが。

このVSS狙撃銃は半自動消音狙撃銃という銃声を抑えた、遠距離狙撃ではなく中距離狙撃及び近距離銃撃戦用の突撃銃アサルトライフルのような狙撃銃スナイパーライフルなのだ。最大の特徴はその消音性。大型のサプレッサーが大部分を占める銃身バレルに、VSSと併用して開発された9×39ミリ亜音

速弾が凄まじき消音性を可能にしている。

9×39ミリ亜音速弾は、ライフル弾でありながら銃口初速が音速を超えず、衝撃波が発生しないため、ソニックブームによる断続的な音波が生じない弾薬。この弾薬と消音器を組み合わせることによって驚異的な消音効果が発揮され、エージェンションポート排莖口の真横に立っていない限り、ボルトが動作して弾薬を排莖する際の金属音しか聞こえなくなるという。

銃声の元となる火薬の破裂音をサブレッサーが軽減し、ソニックブームによる断続的な音波を9×39ミリ亜音速弾が抑える。

ゾンビは音で位置特定をするので、俺たちにとってはとてもありがたい特徴の狙撃銃な訳だ。俺がこの狙撃銃を選択したのも、それが要因の1つではある。

俺は予め8発の弾薬を詰め込んだ弾倉を装着し、機関部右にあるレバーを引いて初弾を装填する。これはセミオート狙撃銃だから、弾倉内の弾薬が切れない限りもうレバーを引かなくて済む訳だ。

横目に早織を見ると、同様にVSSの装填が完了したみたいだった。

俺たち2人は転落防止用の手すりから銃口を下の駐車場に向け、寝そべるようにうつ伏せになる。

それで、準備完了の合図となった。

「3」

ゆっくりとした口調で、静寂が支配していた空間に音が落とされた。カウントダウン

俺はSVD（ドラグノフ狙撃銃）で有名なPSO 1スコープを流用設置した狙撃スコープを覗き、それと同時進行で構えを正す。

「2」

低く小さいながらもよく響く声を聞き流しつつ意味を理解する。そして覗いたスコープの中心にある十字の交点の少し上を、立っ
たまま呆然（？）としているゾンビの頭に合わせた。

「1」

大きく息を吸い、苦しくない程度に少し吐いたところで口を閉じ
た。

トリガーガード
用心金から人差し指を外し、そのまま引き金に指を掛ける。
そして

「0!」

高まった緊張感が声と共に吐き出された瞬間、引き金に掛けた指
に力を込めた。

銃声と言えない無機質な金属音が、ゲームの開始を語っているよ
うにも思えた。

最初に放った9×39ミリ弾は、狙ったゾンビの脳天に見事に命
中した。

昨日初めて狙撃した時は地面にめり込ませてばかりだったが、
そう考えるとマシになった方だと言えるだろう。

命中したことの喜びを噛み締める前に、俺は次の目標ターゲットへ銃口を向
けた。

次の目標は移動しているゾンビだった。

そいつはスコープの右下に消えるように歩いている奴だったが、速度が遅い上に狙いやすい方向に向かって行っているおかげで、さして苦労も無く照準を定められ、奴の進行方向少し先の辺りを狙って引き金を引いた。そのゾンビはまるで押されたように倒れると、地面に血の池を作って動きを停止させた。

さらに右へとVSSを移動させ、スコープに捉えた突っ立っているゾンビの脳天にT字を合わせる。勢いそのまま引き金を引こうとした瞬間、そのゾンビは唐突に歩き出してしまった。

「っ!？」

引き金を引く指を止めることは無理だと直感で判断し、VSSを移動させて照準を定めようとしたが間に合わず、放たれた弾丸は無残にも地面に穴を作るだけだった。

スコープ内で狙ったゾンビは、相も変わらず元気(?)に歩いていた。

若干どころじゃなくムカついた俺は、そのゾンビをサクッとヘッドショットして次に移る。

その後2発の弾丸を命中させたが、残りの2発を外してしまった。俺の点数は5体。外したのは3発のようだ。

「……まあ、そんなとこだな」

「そう。昨日の今日にしては上出来じゃない」

ゲームの終了後、早織に俺のスコアを報告すると、彼女は満足そうに微笑んでいた。

「ちなみにお前は？」

その表情を眺め続けているのも悪くは無いが、それよりも早織のスコアが気になった俺は、頃合を見計らって問いかけた。

早織は自慢げに（大して無い）胸を張り、鋭く目を細めて口を開く。

「パーフェクト
必中必殺」

流暢な英語で、成績優秀者の風格漂う発音だった。

俺は悪態をつくよりも先ず、そのことに純粹に笑っていた。

「……流石だ」

それは悪意ではなく、単純な賞賛。

仲間の成長をただ単に嬉しく思っているからこそ出た言葉だった。

「当然でしょ？ 私を誰だと思っているの？」

……言ったことをちょっと後悔したのは言うまでも無い。

その時、下へ降りるハシゴから、アーティが“跳躍”してきた。

少なくとも、俺にはそういう風にしか見えなかったぞ？

しかし、横目に早織を見れば、呆れたような不思議な表情をしていた。

「あの子、本当に何なのよ？」

確か一昨日だかも言われた言葉だ。

その問いに俺は力無く首を横に振り、分からないとだけ告げる。

それよりも、と、俺はアーティに向き直って口を開く。

「どうしたアーティ？」

すると、アーティは真剣な表情で、ゾンビが集っている駐車場を指差した。

その方向に俺と早織は視線を向け、そして硬直する。

そこには、大量のゾンビを薙ぎ払いながらシヨッピングモールへと進む、2メートル弱の大男……ミュータントが居た。

「バカな！？ ゾンビで嗅覚は当てにならないはずだ！！」

「いいえ、よく見てみなさい」

驚愕の表情で叫んだ俺の言葉を遮るように、早織が俺の視界を改めるよう薦める。言われた通りにミュータントの周りを見回してみると、シヨッピングモールへと逃げてくる複数の生存者が視認出来た。

くそ。生存者がミュータントを誘導しているのか。

俺は早織と一瞬のアイコンタクトを交わすと、同時に階下へ向けて走り出した。

「アーティ！ 警備室で生存者の警護を頼む！！」

額くのを確認するのと同じタイミングで、俺はハシゴを伝って下へ降りた。

腕時計で現在の時刻を確認し、今誰が警備室にいるか思い出しながら、展望室の階段を駆け下りる。監視カメラのモニターを見ていた幸田さんに偵察に出ているメンバーの召集を頼むと、俺は声を張り上げた。

「理奈！ 姉貴！！」

程なくして隣室から飛び出してきた2人に事情を説明しながら、俺と早織は装備を整える。後は現場で冬紀、サクラ、円さんと合流して、ミュータントを退ける訳だ。

もし生存者がショッピングモールに入ってしまうと、ミュータントは壁をぶち抜いて追ってくるだろう。そうなれば大量のゾンビが館内に侵入することになってしまう。それだけは何としても避けなければならぬ。

「事態は一刻を争う。今度こそミュータントから仲間を守るぞ！」

「おう！」

「うん！」

「ええ！」

この時を境に、緩やかだった波紋は次第に大きさを増して、俺たちに襲い掛かってくる。しかしこの時の俺たちは、そのことを知る由も無かった。

第55話 VSSスナイプゲーム（後書き）

いかがでしたでしょうか？

御意見御感想お待ちしております。

第56話 異変と友情のコントラスト(前書き)

お楽しみください

第56話 異変と友情のコントラスト

警備室の専用通路から1階の売り場まで出た所で、俺たちは偵察に出ていた他のメンバー3人と合流した。

俺たち警備室班4人と偵察班3人の計7人で、1階にある1箇所しかない出口　館内に侵入する時に使った職員出口　から外へ出る。

そこには数えるのが億劫おっくうになる程の大量のゾンビと、それを薙ぎ払うデカイ体躯のミュータント、そして猟銃と思しきライフル銃を持った生存者4人が攻防を繰り返していた。

「おい！　その猟銃持った奴ら！！」

うるちよろされても面倒だし。と、大声を張り上げて生存者たち呼びかける。気付いた生存者に手招きをしつつ、俺の声で感付いたゾンビ共を持ってきたMP5Kクルツで手早くヘッドショットした。

「姉貴、サクラ、円さん。生存者を警備室まで頼む」

前言した3人が頷き、生存者の誘導のために駆け出した。

それを確認した後、俺、理奈、冬紀、早織はミュータントに向かって走り出す。

今回は逃げるわけには行かない。あのミュータントを倒さなければ取り返しのつかない事になってしまう。それに、逃げてばかりじゃこの世の中生けて行けないからな。

とは言っても、前回は何で倒せたのか俺自身よく分かってないのだ。スラッ

一粒弾は効果的のように見えたが、あれと手榴弾なんかでミュー

タントが死ぬようには見えなかった。

それにその後の謎の破裂。あれの正体も分かってないままだ。全ての謎が解ければ、ミュータントを倒せるかもしれない。解明を急がなければ。

「俺と早織は後方支援に回る。前衛は頼んだぞ！」

「わかった！」

ミュータントからある一定の距離にまで近付いた俺と早織は立ち止まり、後衛に尽力する。ミュータントのかく乱は運動性能が高い理奈と冬紀に任せよう。

俺は早織の狙撃位置確保のために、立ち止まった場所近くのゾンビを次々と倒していく。

屠ったゾンビが20を超えた所で、クルツの弾薬がちょうど切れた。

辺りを見回してみてもゾンビはすぐ近くには居ないので問題無いだろう。

クルツの弾倉交換を迅速に行い、俺は今回初めて、ミュータントと対峙した。

「……………え」

距離は50メートル程度だろうか？ その間25メートル位で、理奈と冬紀が驚きに目を見開いていた。早織も同様に、珍しく驚いている様子だ。

だがそれも領ける。何故なら俺たちが対峙しているミュータントは、どこかで“見たことがある”のだから。

体に刻まれた無数の弾痕。似通った背格好。

間違いない。あいつは、あのミュータントは、“小林邸に出た奴と同じ奴”だ。

無論、根拠はそれだけではないが、俺の中の何かが、あいつの正体を肯定しているようにも感じた。

「あいつ……!!」

この中の誰も、あのミュータントを仇だと断言する者は居ない。しかし俺の中の細胞の1つ1つが、あいつを仇だと断言している。俺はそれに逆らえない。逆らう気すら起きない。ただあいつを殺せと、殺してやるとしか思考することは出来なくなっていた。

「2人の仇だ……! 討たせてもらう!!」

疑問は無い。何も考えられない。

俺は全ての思考をクリーンに抹消し、ただ、走り出した。奴の下へ。仇の下へ。殺すために。ただ殺すために。

フルオート
連射でクルツの引き金を引く。

それは驚くほど簡単にミュータントの頭を捉え、走りながらでありながらも高確率で命中した。

それに疑問は無い。嬉しさも無い。それどころか何も無い。

もはや先程まであったはずの怒りすら消失してしまっていた。

ゼロ距離程度まで詰めた俺を殺そうと、ミュータントが腕を振り上げた。脇を通り抜けるようにそれを回避し、片手で持ったクルツの全弾を奴の脇腹に埋め込ませる。

しかし当然の如く効いた様子は無く、しゃがんだ俺の頭を通り過ぎるように奴の腕が掠めて行った。

「……っ」

と同時に繰り出していたと思われる足蹴りを後退して避けるものの、バランスを崩して片膝をついてしまう。その隙を見逃さないよう、ミュータントが跳躍して跳び蹴りを放とうとしていた。

だと言うのに危機感も不思議と湧いて来ず、俺は淡々と弾倉交換をしていた。

丁度コッキングレバーを引いたタイミングで銃声が響き、眼前まで迫っていたミュータントが無様に転がって俺の後方に落ちる。

「良！ お前大丈夫か？」

「……………えっ？ 何が？」

銃声はライオットガンの物だろう。その銃の持ち主である理奈が、怪訝な顔で俺を見ていた。見回してみると、冬紀と早織も同じような表情だった。

俺は理奈が言った意味が分からず、クルツを構えたまま首を傾げた。

「何がって……………」

理奈が何か言いたそうにしていたが、それを指で制止させ、後方のミュータントに向き直る。

「よく分からんけど後でな」

そう言いつつ、何かミュータントを倒せる術が無いか考える。

この時、思考力が、沸々とした怒りが舞い戻ってきた。

しかしそれに俺は気付いていなかったのだが、それを気に掛ける思考は無かった。

あいつを倒す術は未だ不明だ。

あいつが何で堅いのかすら不明である今は、時間を稼ぐことしか出来ない。

今後のためにも攻略する術を理解しておかなければ、もしもの時にどんな事が起きて死ぬか分からない。だが逆に理解しておけば、どんな状況でも生き残れる可能性がある。

とどのつまり、一粒弾スリッでの攻略はあまり得策ではないということ。

「時間を稼いでくれ。あいつの……あの仇を倒す術を絶対に見つけ出すから」

みんなが一瞬の思考の間を設けたと思えば、次には圧倒的な信頼の眼差しで俺の前に歩み出た。3人が俺のことを信じている様子が誰しも分かる行動が、意思が、表情が、俺の頭を、俺の思考を、急速に冴え渡らせてくれる。

つい無意識に零れる笑みが、俺の余裕を感じさせる。

もうはや、勝利しか俺たちの頭には無い。

そして、銃声が開戦の合図だとばかりに、ミュータントとの攻防が始まった。

俺はその場で片膝をついたまま思考にふける。

ミュータントの特徴はその怪力と強固な身体。

科学で推し量れるような奴ではないと思うが、科学的に医学的に考えてみよう。

奴の察知方法は嗅覚。恐らく眼球は硬化しているのだろう。ヘッドショットが効かないのもそれが理由だと推測できる。

奴の怪力は強靱な筋肉に因よるものが大きいだろう。

2メートルを超えるデカマッチョな見た目からも間違っていないはず。

じゃあ、何があいつの強固な身体を構成しているんだ？

後方から向かってくるゾンビが銃声と共に大きく後ろに仰け反った。

前方で早織が「考えるのも良いけどゾンビぐらいはどうかしなさいよ！」なんて吐き出したが、俺にはそれに意識を割く余裕は無かった。

もしかして皮膚？ いや、それだとしたら動きに支障が出てしまう。見た限りだと、あいつに支障が出ているようには見えない。これは違う。

後考えられるのは怪力の基である筋肉。

強靱な筋繊維が弾頭や物理衝撃と言った今まで行った攻撃を無効化、或いは軽減させているんじゃないだろうか？

だとしたら前に一粒弾が効いたのはその破壊力に因るものではなく、人体の構造上行動を阻害しないために筋肉が他ほど成長しない関節に命中したからでは無いだろうか？

つまり関節部分は他ほど強固ではなく、しかしある程度は強固である。ということになる。一粒弾ですら貫通には至って無いことを考えても、威力の低い弾薬じゃ効果は低いだろう。

的確に狙えばともかく、それは狙撃手レベルの技量が必要だ。あまり効率的とは思えない。しかもそれで破壊できるのは一部分だけであり、ミュータントを殺せるかと言えばNOとしか言いようが無い。

俺の方に向かってきたミュータントが腕を振り上げた所で、理奈のライオットガンが火を噴き、ミュータントの動きを阻害した。と

同時に冬紀がイサカM37と併用してミュータントを俺から遠ざける。

「避けるぐらいはしてくれても良いじゃないか」「考え出したら他が見えなくなるからな、良は」と一言置いて、2人はミュータントとの攻防に戻っていった。

後は破裂の謎だな。あれさえ解ければ攻略出来るかもしれない。
い。

前の奴は一粒弾スラッゲで抉った肩口にX-7のSシヨットスナイピング、そして手榴弾の爆破で倒す事が出来た。

奴が破裂したのは手榴弾の爆発のすぐ後だった。
それから考えるに、手榴弾に攻略の糸口があると思われる。

まさかミュータントは爆風に弱いなんて事は無いだろうな？
いや、或いは熱か？

どちらにしろ1つの候補として頭の隅に置いておくとしても、俺は可能性が低いと思う。確証は無いが、俺の本能が何となくそう言っている気がするんだ。信頼性は……五分五分だろう。

後考えられる可能性は……無いか？

くそつ。科学的に医学的にと言っても、俺は専門家じゃない。
これ以上は無理があるか……！

………破裂？ 爆発？

破裂するということは奴の中に破裂してしまう物質があるということになるんじゃないか？ もしくは何か特別な反応を示すと誘爆物質に変わるもの。ミュータントの異常発達した嗅覚と筋繊維が、人をゾンビ化させるウイルス（と今回は定義する）の性質変化の結果であるならば、他にも何か変化しているのではないか？

もしその誘爆物質が奴の体内に潜んでいるとして、手榴弾が爆風

や熱以外でその物質を起爆させたのだとしたら、その起爆条件が分かれば簡単にミュータントを倒すことも可能なんじゃないだろうか？

だが問題はその起爆条件。爆風と熱以外。

何か……何か無いのか……？

前後から向かってくるミュータントとゾンビ。

俺はすんでのところまで横に回避し、ポケットから出した手榴弾を置き土産代わりに放り投げた。数秒の後に爆発した場所には、相も変わらず効いてない様子のミュータントが姿を現した。ゾンビは肉片になっていたが。

俺の方に向かってこようとしたミュータントを、理奈と冬紀が注意を逸らす事で遠ざける。

やはり爆風や熱ではないのか。だとしたらなんだ？

一体なにが起爆条件なんだ？ 衝撃と言う訳ではないだろうか？

衝撃なんて銃器というもので嫌と言うほど発生させてるはずだ。

あの筋繊維のせいで全く効いてない銃器が。

……………筋繊維？

俺が無効化或いは軽減させるのは殺傷力や破壊力だけだと思っていたが、それだとしたら全く効いてないのはおかしい。

衝撃が内に伝わって奴の痛覚が少なからず反応するはずだ。

事実防弾のボディアーマーだって衝撃は軽減出来ない。

確かに弾丸の殺傷力や破壊力は軽減するが、衝撃は内に伝わり、強い弾薬だとボディアーマーを装備した人間を気絶させるほどの衝撃を発生させる。それに伴ってかなりの痛みだって発生すると聞いたことがある。

ミュータントには痛覚があるのにそれはおかしいだろう。

つまりあの筋繊維は衝撃も軽減させる性質を持っているのではな

いか？

そして起爆条件が衝撃だとしたら。厚い筋繊維が衝撃を軽減させているのだとしたら。

攻略方法は……………内部に衝撃を与える事だ。

「早織！」

「なに！？」

思い立ったら吉日ってな。

俺はクルツを構えて早織の隣に走りよった。

「何とかして奴の内部に衝撃を与える方法は無いか？」

最初は意味が分からない様子ではあったが、早織は俺の顔を見ている内に確信的な表情に変わり、「ちよっと待って」と言うと鋭い眼光で考え始めた。

俺はその間の時間稼ぎをするために、近くのゾンビへ銃口を向けて引き金を引いた。

程なくして口を開いた早織は、あまり自信が無さ気だ。

でも俺には弱点を探ることは出来ても効果的な攻略法を発案することは出来ない。早織を全面的に信頼しているから、俺はそれが正しい攻略法だと信じている。

「手っ取り早く衝撃を与えるなら口の中に手榴弾でも放り込めば終わりなんだけど」

「まあ、その通りだ。でも難しい……………よな？」

「ええ。動き回る上に、もしも噛まれたらと考えれば得策ではないわね」

「その様子だと他にも案が？」

その時、早織の頬を伝う一筋の雫が目に残る。
絶対的な案とは言い難いということか。或いは危険性が高いか。

「……金属を突き刺してそれを振動させれば、或いは……」

これは綱渡りで危険性大だな。

接近戦の上、あの筋繊維が薄い関節、さらにかなり強い力じゃないと到底突き刺せないし、その金属を振動させる事もしなければならぬ。

その間ミュータントは動き続けるし、少しでも反応が遅れたりすれば即死だ。

もっと言うならば俺の論理構築が間違っていたり、破裂しなかったりしても体力が底を尽きる。危な過ぎる……が、一粒弾スラックが無い今、それしか方法は無いか。

「だが、やるしかない」

「……ええ」

「やるしかなければやるだけだ」

などとFF13のお方の言葉を真似し、心を奮い立たせる。
そうだ。やるしかないんだからやればいい。

「早織。援護と最後を頼む」

「……わかったわ」

「それまでは……俺たちがやってやる」

俺はミュータントと交戦中の2人の下へ向かう。

早織には悪いが1人で別行動だ。

「理奈、冬紀」

「おう」

「なんだい？」

ライオットガンで怯んでいるミュータントを視界に、2人に掻き摘んだ作戦を伝える。

「なるほど。可能性の問題と……」

「アタシたちの運動神経が主な要つてところか」

「そういうことだ。詳しく細部まで作戦を立てる時間は無い。」

俺たちのコンビネーションで奴の身体にナイフでもぶっ刺せば勝ちだ」

俺には短刀、冬紀には日本刀があるが、理奈には金属の近接武器が無い。

そういう意味でも俺と冬紀と理奈のコンビネーションが重要と言える。

「久しぶりだな。この3人で戦うのも」

「そうだね。ゾンビ発生してからだと初めてじゃないかな？」

「なに言っつてんだ冬紀。一番最初があるだろうが」

久しく欠落していた3人の時間。共闘。コンビネーション。

だが忘れてもらっては困る。ゾンビ発生時から一緒に戦ってきたのは、この2人なんだ。

「さあて、友情が織り成すコンビネーション。見せてやろうじゃないか！」

『おうー』

第56話 異変と友情のコントラスト（後書き）

いかがでしたでしょうか？

突如として異変が生じた良祐君。一体どうしたんでしょう？

そして、ついに現れた香澄さんと田代さんの仇。

勝利の軍配はどちらに上がる？

御意見御感想をお待ちしています。

第57話 レクイエム〜2人の為に捧ぐもの〜(前書き)

おはにちは。

先日、久しぶりにアクセス解析見たんですよ。

PVが10万でユニークが1万だったかな？ そのぐらいになっていて。

いつの間に……と、少々驚きました。

さて前回は因縁の相手との遭遇でした。

今回はその相手との決着です。ギャグは前回に続いて無い……か？

ちなみにそろそろ終盤が近付いています。

今までに張りに張って「回収？え？なにそれ？」状態だった伏線を順次回収していく予定です。

疑問点などがありましたら、感想に書いていただければ1日以内に返答いたす所存です。暇なんですよ。

それでは長らく失礼しました。

どうぞ、お楽しみください。

第57話 レクイエム〜2人の為に捧ぐもの〜

俺がクルツを構えたタイミングで、理奈と冬紀がミュータントに特攻を掛ける。

俺はそれを援護するように、フルオートで尽きるまで弾丸をばら撒いた。効いた様子は無かったが、足止めには十分効果的のようで、続け様に冬紀が日本刀で切り掛かる。しかし刃先がミュータントの身体に接触する前に、奴が腕を振り上げたのに危険性を感じたのか、切り掛かるのを止めて横に飛び退いた。

ミュータントの腕が空を切ったと同時に、今度は理奈がライオットガンを2発、ポンプアクションで放つ。12ゲージの装弾が奴の動きを阻害し、隙を誘った。

俺は再装填を迅速に行い、ミュータントをかく乱する為に奴の周りを距離を保って走りながら、引き金を一定の間隔で引き続ける。

遠巻きで早織がVSSの援護射撃をしている中、俺が引き金から指を放して、前衛組が攻撃できる間を設けた。理奈がミュータントの横を走り抜けながら3発の12ゲージをめり込ませると、冬紀がイサカM37でミュータントの右脇に向けて引き金を引いた。

脇ならば筋繊維はそれほど厚くないはずだ。そう思ってたの攻撃だが、冬紀が撃った弾は予想通りに右脇を貫いてくれた。

オーバーリアクションじゃね？ という位の大きなうめき声を上げて、ミュータントは痛みからか地に片膝をついた。

やはり筋繊維が攻防の要だったのだらう。俺の予想は当たってたのだ。となればやることは変わらない。奴の身体中にどデカイ衝撃を与えるだけだ。

冬紀がミュータントから距離を取り、もう一度、コンビネーションアサルト連携突撃を仕掛ける準備をする。俺含め4人が4人距離を取って、リロード再装填をしながら

らミュータントの様子を窺っていると、奴は動かなくなった右腕を自ら引き千切り、理奈と冬紀に向けて勢い良く投げ付けてきた。

『！！！？』

投げ付けられた2人は奴の突然の行動に反応できず、もろに直撃を受けてしまった。まるで鉄骨でも乗っているかの如く腕の下敷きになった2人を援護するために俺が前衛に回る。

早織には腕をどかさ役割に回ってもらい、実質、戦うのは俺1人となってしまった。

「ちいつ！俺が相手になってやる！！」

フルオートで奴の傷口へ引き金を引くが、今までと違い素早く動き始めたせいで上手く当たらなくなってしまった。

あんな芸当が出来るなんて、考えても見なかった。

ただそれを悔やんでもしょうがないので、今は奴を食い止める事に集中しなければ。

「スピードはそれほど速くない。落ち着いて対処すればやれないことではないはずだ……！」

言った直後、ミュータントが右からタックルを仕掛けてきた。

それをバックステップで回避し、クルツを使う。が、傷口が俺とは真反対に回っているため、さしてダメージにはなっていないようだ。ミュータントは左腕を振り上げて、俺に、ではなく、地面に腕を振り下ろした。

「つつう！？」

弾け飛んだコンクリートの破片が俺を襲い、傷までには至らなかつたものの、一瞬の隙を作ってしまう。それにすかさずとばかりにミュータントがボディブローのような格闘攻撃を食らわせようとする。

俺は間一髪のタイミングで半身を引いた。

腕が腹に掠ったが、何とか避ける事に成功した。しかし、避ける事にだけ集中していたために、クルツがミュータントの攻撃を受け、自身の部品を撒き散らしながら遠方へと弾かれてしまう。

「しまった！？ ……くうっ！？」

クルツが破壊された事に若干の動揺をしてしまうが、大急ぎでミュータントから距離を離し、ひとまずの安全を確保した。

ただの力馬鹿だったミュータントが無駄に戦略性を身に付けやがった。

一体全体どういうことなんだ？ 学習しているんだろうか？

どちらにしろ今まで出会った3体の内、一番厄介なのは言うまでも無いな。

おふざけで勝てる相手じゃない。しかも周りのゾンビにも気を使わなければならねえなんて。 ……少し、無茶するしかないな。

俺はレッグホルスターからUSP自動拳銃を引き抜き、弾薬ポーチから保持していたS&W M37リボルバーを取り出した。

拳銃弾じゃミュータントの足止めにはならないだろう。

数で勝負するしかないか。

セーフティ
安全装置を外し、長らく沈黙を保っていたミュータントへ向けUSPを3発放った。

奴は千切った右腕を庇う様に左半身を突き出し、芸の無いタック

ルで突撃してくる。

案の定弾かれた9ミリに「そんなもんだろうな」という感想を抱きながら、軽やかな左ステップでタックルを回避し、左手のM37で向かってきたゾンビをヘッドショットしつつ、右手のUSPでミュータントの傷口を狙う。

だが、振るった左腕に9ミリは全て弾かれ、そのまま奴は振りかぶった腕を地面に振り下ろす構えを取った。

「2度も同じ手は食らうか！」

地面に振り下ろされた腕に対し、俺はバックステップで破片の射程外へと避難、続いて向かってきたミュータントを回避しようとした時、俺のものではない銃声が響いてミュータントが横転した。

視線を銃声の方へ向けると、腕から抜け出した冬紀がイサカを構えて安堵の息を吐いているのが目に映った。後ろでは理奈と早織も同様の反応を示していた。

「遅い遅い遅い！ お前らの血は何色が！！」

「赤色の何ものでも無いと思うよ。というか何でそこまで罵倒されなければならぬんだ」

冬紀が何か言っているが無視だ！ 俺ばかりに仕事させてんじやねえよ！

とまあともかく、立ち上がったミュータントを視界に収めつつ、俺は理奈と冬紀の2人を見る。

2人ともボロボロで、弱音を吐きはしないが限界に近いことは明白だった。早織も精密射撃と周囲のゾンビの圧迫感で精神をすり減らしているみたいだ。随分と疲れた顔をしている。

あまり時間は掛けられない。次でおそらく最後となるだろう。

「理奈、冬紀」

「ん？」

「なんだい？」

ゆっくりと歩くミュータントと迫った空気に決着が近い事を悟り、
普段の俺とは想像もつかないほど真剣な表情で2人に告げる。

「最後だ。と言えば分かるな？」

今までの和んだ雰囲気とは一転、2人だけでなく早織まで真剣な
雰囲気になり、その中で2人は首をゆっくりと縦に振った。

それだけでも俺たちに意思疎通は必要無かった。

共通の認識と目的が共有できた人間ほど強いものは無いってな。

「カウント3で奴に楔くわくを打ち込む」

「誰に合わせれば良い？」

「俺に合わせる。だがアタッカーは各々に任せる」

「ラジャー！」

こういう時(どういう時だ)に親友の存在は大きいな。

言葉が少なくても分かってくれるし、何よりやりやすい。

ミュータントが10メートル位まで近付いたタイミングで、俺た
ちは同時に奴の周りへ散開した。

理奈のライオットガンと冬紀のイサカが多重奏を奏で、ミュータ
ントを挟み込むように左右へ分かれる。奴は傷口を抱きかかえるよ
うに左腕を盾にし、防御の構えを取った。

俺はその隙に奴の後方に回り込み、傷口を重点的に狙う。

俺と冬紀が同タイミングで突撃すると、ミュータントはしめたとばかりに防御を解き、左腕を振り回して周囲を薙ぎ払う行動に出た。それを予測していた俺と冬紀はミュータントの間合い手前で立ち止まり、冬紀はイサカ、俺はUSPで奴をけん制する。

左手のM37をポーチで保持しなおし、ベルトから久しく使っていなかった短刀を抜き放って、ミュータントの頭上を越えるようにその短刀を放る。

その向こう側にいた理奈がそれを受け取り、隙だらけのミュータントの傷口に短刀を突き立てた。

「終わりだバカ！」

傷口を抉るように突き刺さった短刀をそのままに、理奈がミュータントから距離を取る。うめくミュータントが腕を振り上げた瞬間、

「早織。自分で背負った仇は自分で閉めろ」

「……言われなくても」

銃声など無い静かな幕引きが切って落とされた。

放たれた弾丸が短刀の刀身を掠め、一際甲高い金属音が辺りに響いた。

それに共鳴するように、ミュータントの身体がどという原理が膨張していく。

そしてその膨張が頂点にまで達した時、いつか見た時と同じ破裂がミュータントを内から弾けさせた。真っ赤な血と肉片が奴のいた地点を中心に波紋のように撒き散らされ、それきりもう、ミュータントだったものは動かなくなった。

早織が幕引く敵討ち。

一番美しい終わり方を迎えて、俺たちの過去は愁いを無くした。
香澄さん、田代さん、これで貴方たちは笑えますか？

願わくば、その笑顔を早織と共に。あいつの心を守ってやってください。

経った時間を忘れる黙祷を捧げ、俺たちは早織の下へ駆け寄る。

「早織」

「……なによ？」

俯いている早織をあまり見ず、頭に手を置いて出来るだけ優しい表情で笑いかけた。冬紀も理奈も辺りのゾンビを警戒するように、それと無く視線を外してくれた。

「頑張ったな。……帰ろう」

「……………うん」

声が消え入りそうだったのと、震えていたのは思考に含まれない。ただ、俺は髪を梳くように撫でた。それ以上行動しないし、何も言わない。

その空間には音は無く、ゾンビのうめき声さえ聞こえない。
場にあるのは、唯一、たった1つの感情だけだった。

第57話 レクイエム〜2人の為に捧ぐもの〜（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ゾンビの正体、ミュータントの本当の弱点、その他は後々明かしていきます。

このパラドックスを起こしたのは誰なのか？

そんなことをする理由があったのか？

ゾンビとはなんなのか？

皆様の予想を良い方で裏切ることには難しいと思いますが、楽しめていただけたら何よりです。

御意見御感想をお待ちしています。

第58話 再会は必ずしも嬉しいだけではない(前書き)

お楽しみください

第58話 再会は必ずしも嬉しいだけではない

救出した生存者は4人。内2人が男性。他の2人が女性である。持っていた猟銃は男性の1人の所有物らしい。猟師をやっていると言っていたから間違い無いだろう。

ちなみに4人は元から知り合いと言う訳でも無さそう。ゾンビ発生から生き残っていく過程で出会ったようだ。

あの騒動の後、みんなにミュータントの正体、結末を簡潔に述べた後の反応は五者五様とでも言えばいいのか……。実質小林邸での出来事を知っているのは俺たち4人を除けば姉貴と円さんだけなので、他のサクラ、アーティ、藤崎はそれぞれがそれぞれで反応を示していた。

それから翌日。

早織と姉貴と巡回中に遭遇した俺は、丁度良い時間帯というものもあって一緒に警備室に戻る事となった。その途中ではあるが、俺は2人に頼み込んで浴槽入を手伝ってもらった。2人とも自分のことだからか、はたまた善意からか、迷う素振りも無く引き受けてくれた。

今は4階、浴槽コーナーのすぐ近くだった。

「良ちゃ〜ん。疲れたよう〜」

「ウソをつくくなウソを。ていうか姉貴は最近巡回ぐらいしかしてないじゃないか」

辺りを警戒しつつ歩いていた俺の真横で、油断しかしてない姉貴が腕をダランと下ろしながらそんなことを言ってきた。

最近の姉貴がやってきたことなんて巡回と見張りぐらいである。

それに比べたら俺たちの方が疲れているんだが、姉貴は大学から運動と言う運動をあまりしてなかった。そう思えば、円さんみたいにチート属性は装備していない一般女性（？）が疲れるのも当然と言えるだろう。

「それでも疲れた〜」

とは言っても俺に抱き付く理由にはならない。

もつとも、おおよそ予想はしていたからあまり気にはしないが、それに伴って動きにくくなるのだけは何とも言い難い。

「抱き付くな。危ないだろうが」

ゾンビが出たら対処出来ないだろう。と言う意味での危ないだったのだが、姉貴は理解してない様子で「危ないって何が〜？」とのんきな事を言っただがった。

激しく姉貴の顔をこねくり回したい衝動に駆られたが、早織の前だからと自粛し、早織に視線を向けた。

「なんか悪いな」

「良いのよ。貴方たちのコントは見ていても参加しても面白いから」
「コントでは……」

無いんだがな。と言おうとする口を噤んだ。

俺の視線の先で自然に零れた笑みに無粋なことを言う気にはならない。

早織は昨日の今日に至って、今まで以上に笑うようになった。敵討ちという一種の使命感に晒され続けた精神が、それを終えた事で呪縛から開放されるように解き放たれたせいだろう。開放的な心持ちでいる早織に以前のような刺々しさは無く、孤独が似合う少女は、

人の輪の中心に居るフレンドリーな少女へと華麗な変化を遂げた。
これも香澄さんと田代さんが見守ってくれているおかげなんだろうなあ。なんてことをただ、思う。妹の成長を喜ばしく思う兄のよ
うに（妹いないけど）、ふとした笑みが口の端に宿った。

「……そろそろだな」

さすがにそのままと言うわけにはいかないので、話題の転向も兼ねてわざわざ口に出した。

「たくさんあるね」

ようやく抱き付くのをやめてくれた姉貴が呟くのも頷ける。

何故なら浴槽コーナーだけでコンビニの敷地面積を上回るんじゃないかというほど広かったからだ。まあ当然、それに伴って種類も豊富で、本当にたくさんあるね。状態だな。

「……とりあえず手軽な物を探しましょう」

「……だな」

俺たちは手分けして適した浴槽を探し回った。

大きさ、重さ、運用性、その他諸々を考慮して、数十分後に一番良い物を調達することに成功する。2人で持っていける大きさ、重さで、尚且つ一番使い勝手が良さそうだった。

俺と姉貴でそれを専用通路まで持って行き、その間の護衛を早織にしてもらった。

専用通路の扉に入るか？ とも思ったが、それは杞憂に終わり、何とか警備室まで持っていった。

浴槽は警備室の一番端にあり、温水も出る設備がある倉庫に設置された。

元々は別の用途で使われていた場所だったのだが、結局使わなくなり倉庫になった場所だ。そここのところの諸事情は分からなかったが。

ともかく、浴槽問題はこれにて解決した。

そして数時間後。

俺のやらなければいけない仕事を全て終え、まったりと休息を取っていた時だった。

「良祐君！ 誰かやってきた！」

その呼び声に俺が展望室から屋上へ出向くと、この時間の見張りをしていたサクラが双眼鏡を持って待っていた。

「どこだ？」

「駐車場の入り口辺り」

サクラから双眼鏡を受け取り、言われた場所を見てみる。

するとそこには、ゾンビに気付かれていないものの、ふらふらと力無く歩く銃器を持った少女がいた。両手に持たれたそれは、イングラム M10。……………湊みなとだった。

「あいつ……………！ なにやってんだ！？ 死ぬ気か！！？」

湊は身体中いたる所がボロボロで、まるで死んだ魚のような瞳を

していた。

それだけで、何かがあったことは明白だ。さらには、ランドさん、クルスさん、マーシャさんがいない。もはや全てを悟ってしまった思考を振り払い、このままじゃすぐに死ぬであろう湊を救出するために動く。

「サクラ！ 早織に連絡を！ 装備はSVD（ドラグノフ狙撃銃）！ 俺は一足先に下に降りる！」
「うん！」

俺はもしもの時の為に常に装備していたレッグホルスターからUSPを引き抜き、真上に向けて連続で3発放った。銃声でゾンビを誘き寄せるためだったのだが、遠くのゾンビにはあまり効果が無かったみたいだった。

効果が無いと見るやいなや、俺はすぐさま警備室へ降りて専用通路の扉を開けた。

「良祐、私も行くわ」
「アーティか。頼む」

専用通路の階段を駆け下りている最中、どこからとも無く現れたアーティの言葉に心強さを覚えながらも、焦る気持ち俺を駆り立てる。

1階にたどり着いた俺たちは、職員出入口から外へと飛び出した。

昨日と同様、数えるのが億劫になるゾンビの量を意に介さず、垣根が薄い左側から湊の下へ向かう。その途中で進行の邪魔になると思ったゾンビ4体をUSPの一撃で屠り、スピードを緩める事無く全力疾走で走った。

「良祐、使う？」

と、俺を追走するアーティがグロック17とマガジン3本を差し出した。

時間が惜しかったからちゃんと言葉を持ってきてなかった俺としては、それはとてもありがたい救援物資だった。アーティも気が利くじゃないか。

「ああ、ありがたく使わせてもらおう」

マガジン3本をポケットに放り込み、グロックを左手で持って2丁拳銃の形にする。早速進行の邪魔になるゾンビをUSPとグロックの併用で排除し、体力を考慮しつつも出せる限りの速さで走った。それをしばらく行い続け、ようやく湊の近くまで来た時、彼女の惨状が瞳に映った。

「……………湊」

まるで生気が無く、死んだような瞳で、傷だらけの湊がフラフラと歩いている。

ただそれだけなのに、俺の心をひしひしと締め付ける光景だった。

「……………良、良、良……………」

「……………俺はここにいる」

弱弱しく擦り寄ってきた湊を抱きとめ、しかし俺に為す術無く、立ち尽くす。

ランドさんたちに何かあったのだろう。逃げるよう言われ、俺を頼ってショッピングモールまで来た。という所だろうか。彼らにここに来ることは言っていたし、何もおかしな所は無い。が、他に頼

れる人はいなかったのだろうか？

いや、それはともかく、ランドさんたちをそこまで追い詰める相手ってなんだ？

田代さんもそうだけど、何故あんなに強い人たちが次々にやられてしまうんだ？

湊に話を聞きたいところだけど、なにぶん傷が深いみたいだな。身体も、心も。

……………ひとまず湊を警備室まで連れて行こう。

このまま居続けるわけには行かないし、何をするにしても安全な場所の方が良いだろう。

「湊……………？」

しかし、湊は動かなくなってしまった。

湊の顔を覗くと、まぶたを閉じて体から完全に力を抜いてしまっている。

どうやら眠ってしまったようだ。よほどのことを体験していたのが容易に想像できるな。

「……………よっ、と。アーティ、ゾンビを任せて良いか？」

「……………ええ」

USPとグロックをしまい、湊をお姫様だつことと呼ばれる抱き方で抱え上げた。

アーティを先導させて、俺たちはその場から退散した。

第58話 再会は必ずしも嬉しいだけではない（後書き）

いかがでしたでしょうか？

御意見御感想をお待ちしています。

第59話 自立する者と自立される者（前書き）

短いですがお楽しみください

第59話 自立する者と自立される者

単刀直入に言えば湊の状態は良くなかった。体もそうだが、心の方も酷い。

とても言い表せない惨劇に遭遇したのは容易に想像できる。

ましてや傭兵稼業の湊がそんな状態になるほどだと、俺たちはもっと酷い状態になるのは明白だった。新しいゾンビか、またはもっと別のものか。どちらにしる出会いたくは無いだ。

今は湊を別室に寝かせ、やることもなく各々で自由な時間を取っている。

湊のことは既に周知済みなので、その事についての質問その他をみんなから受けることは無かった。

「なに読んでるの〜?」

「ん?」

展望室のソファアに寝転がりながら香澄さんからUSPと共に受け取った手帳を見ていた時、階下から階段を上ってきた姉貴がいつもの口調で問いを投げ掛けてきた。

「前に話したろ? 香澄さんから貰った手帳だ」

視線を姉貴に向ける事無く、手帳に視線を向けたまま生返事のように吐き捨てる。

しばらく無言が場を支配した後、俺を見下ろす位置に姉貴が顔を出した。

「……なんだ?」

何か俺の中で引っかかり、無視することも出来そうに無いので、少し様子が変な姉貴に向けて言った。

「……ん〜ん。何でも無い」

「何でも無いことは無いだろう。少し様子が変だ」

返答にも異変を感じたがそれはこの際頭の隅に追いやり、読み終えた手帳をしまい、ちゃんと姉貴に向き直る。寝転がっていた体を起こし、ソファアに座った。

「やっぱり分かったやつだ？」

空いたソファアのスペースに腰を落とした姉貴が、何を今更なことを照れた様子で呟いた。

「当然だ。何年姉弟をやっていると思ってる」

「だよ〜」

やはりいつもとは違う。いつもの姉貴は人の目関係無しにベタベタしてくるのに、今回は珍しくしおらしいし、なんか他人行儀だ。

俺が次の言葉を待っていると、程なくして姉貴は口を開いた。

「……なんか良ちゃんが遠い存在になっちゃったなって」

「……………そうか？」

「うん、そうだよ」

それは人それぞれではあるが、俺としてはいつまでも近くに居るつもりだし、変わってはいないと思うんだがな。姉貴にとってはそういう風を感じてしまったんだろう。

「でも、良い機会なのかもね」

「……なにがだ？」

姉貴の言葉の意味が分からなくて首をかしげる。

姉貴は思いつめた表情でしばらく無言になると、突然晴れた表情になりだした。

「弟離れ」

まさか姉貴からそんな言葉が聞けるとは思っても見なかったので、言葉の意味を理解するのに数秒を要してしまう。

言葉の意味を噛み締めながら俺が口を開くと、姉貴はそれを指で制した。

「本当は分かっているの。このままじゃいけない……」

お姉さんが良ちゃんを愛したところで誰も幸せにはなれないって、良ちゃんのおかげで男の人が怖くなくなってきたし、良い機会なんじゃないかと思ったの。(まだちよつと怖いけど)「

「……そう……か」

少し、寂しく感じる自分がいる。でもそれを肯定してしまえば、何かが終わってしまう気がした。だから俺はそれを抑え付けて姉貴に向き直る。凜とした、それでいて愛くるしい顔立ちの姉貴の瞳を一身に受けながら、俺は姉貴の言葉を待った。

「これからお姉さん、1人でも生きて行けるように頑張るから！

応援しててね、良ちゃん！」

「……………ああ、ちゃんと1人立ち出来るまで支えてやるよ」

嬉しさ半分、寂しさ半分。これも1つの経験だ。

などと自分に言い聞かせながらも、気を引き締めて心を保つ。

そんなことをこんなタイミングで言われるとは思っても見なかったから、心の準備が完全じゃなかった。まあとどのつまり、姉貴がブラコンであるように、俺も少しシスコンなのだ。

気付いてなかった訳ではないのだが、姉貴から俺、俺から姉貴という風にイコールになってしまうと、とても良くない訳で……。だから言わなかったのだ。

「ええ話やねえ……」

と、下でテレビを見ていた（ミュータントの時の）生存者の1人である、40〜50代の太った男性が、階段を上りながら会話に割り込んできた。

「……何の用ですか？」

この人はあまり好きではないのが如実に現れた表情を受けても、彼は眉1つ動かさずに目の前のイスに座った。

「いや、ちょっと無くし物もんしてな。探しに来たら話しとったけえ、つい耳になあ」

それは遠回しに盗み聞きしてましたと言っている様なものだぞ。

彼は「ワイはなあ……」と、明らかに会話を続けようとしているのだが、一刻も早くどこかへ行って欲しい俺は、止めさせる事も出来なさそうなので軽く聞き流す。

「ええ話が好物やねん。ゆーのも、去年の大震災での話に感動してなあ。」

去年の大震災というと3月11日に発生した沖合地震のことだろう。

あれは地震は大したことなかったのだが、その後の津波による被害が印象に残る震災だった。家が流される映像は今でも鮮明に思い出せる。

東海林市は海辺にある町だが、地震の発生した沖とは反対側なので被害はそれほどではなかった。

震災はともかく、その後のどうでもいい彼の話を適当に聞き流して、頃合を見計らい立ち上がった。

「俺、やることあるんで」

「ほんまか！？ これからやのになぁ……………」

姉貴にアイコンタクトで「後よろしく」と残し、俺は階段を下りていった。

第59話 自立する者と自立される者（後書き）

いかがでしたでしょうか？

御意見御感想お待ちしております

第60話 傭兵である前に人間である事。そして強く弱い少女である事（前書き）

お楽しみください

第60話 傭兵である前に人間である事。そして強く弱い少女である事

「……湊が起きたって?」

「そうですね、良祐さん」

みなと
湊の目が覚めたと報を受けて急遽駆けつけた部屋の前で、湊の世話をしていた円さんから現在の状況を聞く。

「とても恐ろしい目にあつたのか起きてからずっと錯乱して……でも時々、誰かに対して謝っているんですよ」

「謝る?」

「はい。『ごめんみんな』って……」

おそらくランドさんたちにだろう。

守れなくて、守られて。何も出来ずに足手まとい同然のように守られた拳句、誰も救えずに1人で生き延びてしまえば贖罪の気持ちも生まれるだろう。

仇を討ちたい。でも自分じゃ勝てない。

その葛藤から、謝罪という形で口から吐き出されたものが『ごめんみんな』という言葉。湊から話を聞いた訳ではないが、この位ならば予想は出来てしまう。

「わかった。しばらく部屋に誰も入れないでくれ」

「……………はい、分かりました」

レッグホルスターのUSPから弾倉マガジンを抜き、遊底スライドを引いて9ミリ弾を排莢する。そして空弾倉をUSPに装着した。

これ事態に意味は無いのだが、もしもがあるとも限らない。

それに、俺がそのもしもを起こす可能性もある。

何も無ければベスト、何かがあってもベストにならなければ、到底錯乱している人間なんかと向き合えないからな。……錯乱している人間の恐ろしさは俺自身が良く知っている。

「良祐さん……」

「ん？」

「……気を付けて下さい」

俺はその言葉に何も言わなかった。

レッグホルスターにUSPを戻し、俺は円さんに一瞥いちへつもくれずドアノブに手を掛けた。

無理をしない保障は出来ない。だから、気を付ける以前の問題だった。

気を付けようとしている人間は、わざわざ危ない橋を渡ろうとはしないさ。

俺はそんなことを苦笑気味に思い浮かべ、ゆっくりと手を掛けた扉を開いた。

扉の向こうには、コンクリートの上に直に敷かれた布団が1つ。後は机やら棚やらといった家具に雑貨が少々、そのぐら이었다。その中、布団の上で頭を抱えて震えている湊がいた。俺は扉を閉めると、わざと足音を立てつつ湊の下へ歩いて行った。

「……………湊」

「ごめんみんな。ごめんみんな。ごめんみんな……………」

会話にならない。というか俺の存在を思考から弾いているのか。

認識してない訳ではない。いくら精神的に追い詰められたからと言って、湊ほどのスペシャリストが足音を聞き逃す訳が無い。つまり、敢えて無視しているような状態だ。

俺は湊の視線に合わせるように屈み、もう一度口を開く。

「湊」

「ごめん。ごめん。ごめん……」

「湊」

「助けられなくてごめん」

「……………」

いい加減イラついてきた。いつまで謝ってんだこいつ。

このままじゃ話すら出来やしねえ。……………早速だけど荒技いっか。

その前に軽く手首を捻ったり首を回したり、準備運動紛いのものをしておく。

「いつまでそうしてんだ？」

「ごめん。ごめん……」

「謝って済むのか？」

「ごめん……」

「うぜえっ……………!!」

強めの怒気をはらんだ口調で吐き捨てる、湊の襟首を乱暴に掴み上げ、無理矢理立たせた。

「ランドさんは死んだ！」

クルスさんは死んだ！

マーシャさんは死んだ！

湊、全部お前のせいだ!!」

「……………!!?」

そこまで言った所で、ようやく湊の視線が俺に向いた。これで対等な会話が出来るようになった訳だ。

「いい加減認めろよ……………！」

お前が弱いせいで3人は死んだ……………！」

お前が弱いせいで仇を討つことも出来ない……………！」

お前が弱いせいでっつー!!」

「……………違う。違う、違う……………違うっ!!」

「っ!!?」

襟首を掴んでいた手を反され、コンクリートに仰向けで叩き付けられる感触が背中に伝わってきた。勢い良く叩きつけられたせいで、肺の中の空気が全て残らず吐き出され、一瞬呼吸困難になりかけると同時に、右足のホルスターからUSPが引き抜かれる感覚も伝わってきた。

ようやく呼吸を整えて目蓋まぶたを開くと、俺の眉間にUSPの銃口マスルを向ける湊の、鬼気迫る形相が視界に映った。

流石プロフェッショナル。流石スペシャリスト。

そう言うしかない早業を体感したはずの俺は、苦しそうではあるものの精神的には驚くほど余裕の雰囲気をかもし出していた。

「……………はあ、はあ。……………ここから、俺をどうする?」

「うるさいウルサイ五月蠅ひんがしいっ!!」

お前なんか……………!! お前なんかにい!!」

「お前なんかに、なんだよ?」

ガタガタ震えるUSPの銃口が、湊の状態を克明に示しているか

のようだった。

「お前なんか……オレの気持ち分かるかあっ!!」

「分からねえよっ!!」

「っ!!?」

突然怒気を含んだ口調で叫びだした俺に、湊は驚愕のまま硬直した。

「分かるはず無いだろ! 俺は超能力者でも、ましてや神でも無いんだぞ!!」

……何があつたのか! ……お前がどんな気持ちなのか!

言ってくれなきゃ一生分かる筈ねえだろ!!」

「……………!!?」

「このままずっとそんなんで、ランドさんたちに助けてもらった命を無駄にする気かっ!!」

ハッキリ言ってしまったえば、俺が語るのは全て憶測に過ぎない。

実際は何があつたのか? 本当にランドさんたちは死んだのか?

全て知っているのは湊なのだ。俺はさも知っているかのように語ってはいるが、ただ推理しただけの不完全な論理ロジックでしかない。

だから湊の驚愕は言い当てた事に関するモノなのか、何を言っているんだこいつみたいな事に関するモノなのか。少なくとも、現時点の俺には知る由も無い。

「命を無駄にする!? どうせあいつの前じゃお前だって死ぬんだよ……」

だったら今死んだって変わらない!!」

「死なねえよ！ 俺は死なねえ！！」

俺は眉間に向けられたUSPの銃身を掴み、肌にめり込ませるかの如く押し当てた。

「撃てよ」

「な、なにを……」

「撃てよ」

「そんなこと……」

「撃てよ！」

「……っ！！！」

少量の殺気を含んだ声に傭兵の危機回避能力が発揮されたのか、反射的に湊はUSPの引き金を引いてしまった。カチンという撃鉄ハンマーが振り下ろされた金属音がやけに大きく響き、先程とは想像もつかないほどの静寂が場を支配する。

気のせいではあるが耳が痛いなど感じ始めた時、ようやく口を開く気になった。

「……ほらな。生き残ってやったぞ。俺は死ななかつ……たあ！？」

弾薬を抜いたのは俺だが、知っ^ていてもやはり恐怖は拭い切れなかった。

それを何とか払拭し、ようやく口を開いた俺に、湊は突然体を埋めて来た。

そんな唐突な出来事に、素っ頓狂な声を上げてしまう。

「湊サン！？ ちょっとなにを……！！！」

「馬鹿だろ……」

「……え？」

「お前、馬鹿じゃないの……!!」

「……」

ああ、俺は馬鹿なんだ……」

嗚咽　とは言えないかもしれないが、すすり泣くような湊の聲が耳に届き、俺は声を上げる事を止めた。

50〜60キロだろうか。湊の身長で計算した体重の割に、俺の上ですすり泣く少女は途轍もなく軽い。だけど、心に押し掛かる湊はとても　重かった。

第60話 傭兵である前に人間である事。そして強く弱い少女である事（後書き

いかがでしたでしょうか？

御意見御感想をお待ちしています。

第61話 湊の意思（前書き）

お楽しみください

第61話 湊の意思

しばらく経って落ち着いた湊は、ボソボソとだが俺と別れた後の事を語りだした。

「良と別れたオレ達は、この町にあるもう一つの研究所……ラグナロク社の山上研究所へと向かったんだ」

「山の上にあるあれか」

「そう。もしかしたら移送されているかもしれないし」

幸田さんが勤めているあの研究所か。

まあ、むやみやたらに探すよりかは妥当な判断だ。

「そこでだ。オレ達は化け物に出会った」

「化け物？」

徐々にその時の惨劇を思い出してきたのか、湊の口調も弱弱しくなっていく。

それと併発して、肩を抱くように震えだしていた。

辛い事を思い出させようとしているのは重々承知だ。だが湊にはもう少し頑張って貰わなければならない。みんなのために。

「まるで肉に包まれているかのような皮膚。

人のような四肢に膨張した頭部。

……あいつは床、天井、壁を縦横無尽に駆け回り、あらゆる方向から襲い掛かってくる。そして切り裂き、噛み砕き、押し潰す。口からは小さな蛇を高速で射出し、それに噛まれると即効性の神経毒に侵され、ハッキリとした意識を持続けたまま殺される。

対抗しようとしても銃が効かず、その上動きが素早い。

「……………奴から逃げられたのはランド達が居たからだ。
もし1人だったらオレも……………」

まさかそんなバイオのリッ　ーみたいな化け物が居るとは。しかも明らかになり　カーより高性能だ。そんな奴が大量に出てきたら確実に死ぬる。

湊たちのような傭兵ですらそんなんじゃないや、俺たちは言うまでも無いな。

「……………田代さんといい、何故こうも戦い慣れした人たちばかりが先に……………」

「……………ちょっと待て」

「なんだ？」

俺の独り言が癪に障ったのか？　と思っただが、湊は戸惑いのような不思議な表情を浮かべていた。

「今、田代さんって言ったか？」

「ああ、言った」

「その人ってもしかして、初老で白髪白髭の金色のメガネを掛けた人か？」

「……………そうだけど」

すると湊は突然、大きなため息を吐き、更に沈んだ表情で俯いてしまった。

「……………ゾンビ相手じゃ、流石の田代も形無し……………か」

その言葉に、俺は1つ、予想がついた。

「ひょっとして田代さんってヴァンガードの傭兵だったのか？」

「……ああ。第一種^{マスター}特装執行官で社内一の腕利きだった。

それこそ伝説の男として社内で語られるほどだ。

オレが入社した時には退職していたけど……」

やっぱり田代さんって凄い人だったんだな。

「……そうか。

……あの人は早織……俺の仲間の家で執事として仕えていて、物資調達のために出向いた先でゾンビに噛まれた。そして最期は俺たちを逃がすために余命僅かな主人と……な」

「そっか。そつちも大変だったんだな……」

「こんな世の中じゃ、誰だって大変だろ。まあ、ちゃんと仇は取ったしな」

「仇を取ってくれたのか。“お祖父ちゃん”達に代わって礼を言うよ」

別にそんな言われるほどの事をした訳じゃない。

俺たちが過去を乗り越えるためには必要だったって話だ。

つて、えっ？

「お祖父ちゃん……？」

「？ ああ、言ってなかったか。田代はオレの“祖父”だ」

「……なんだと？」

「だから田代は“祖父”だって」

「……………マジですか」

まさかこのタイミングでそんな事実関係が聞けるとは思っても見なかった俺としては、今までで指折りの驚愕をしても仕方が無いと思う。

「意外と驚いてないんだな」

「それは心外だ。言葉が出ないだけであつてとても驚いているぞ」

「その様子が垣間見えないんだよ」

「驚き方なんて何だつて良いだろ」

そうか。田代さんは湊の祖父で、どちらも腕利きの傭兵ってことか。

「……………でも、祖父と孫が腕利きの傭兵なんてな」

「とは言つても最近は疎遠になりがちだったし、それでか悲しみもそれほど大きくないな」

憂鬱な表情を見せる湊に声を掛けるのを躊躇ってしまつが、まだ話さなければならぬ事は沢山ある、と割り切り、口を開いた。

「……………それで湊。これからどうするん……………」

「一緒に行くよ」

まだ言い切らない内に即答した湊に驚きが隠せないがともかく頷く。

「わかった。サンプルとやらはどうする？」

「それは失敗だ。手掛かりも無いし、1人じゃ遂行できない」

「……………そうか」

ここで主人公だったら「じゃあ俺たちが手伝うぜ！」みたいなことを言っただらうけど、生憎俺はリーダーで現実主義者だ。リアリストに合わない、ましてや一般人が首を突っ込んで良い度合いの問題を理解しているからな。それに俺の独断で仲間を危険に晒す真似は出来ないし。

「オレは良の命令系統に準ずる。」

「ここまで生き抜いてきた腕を信頼してな」

俺は重みのある言葉を理解した上で、それを背負うかのように首を縦に振った。

第61話 湊の意思（後書き）

いかがでしたでしょうか？

御意見御感想をお待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3186u/>

夢も希望も絶望すらない現実（デッドエンド）

2011年12月29日16時46分発行